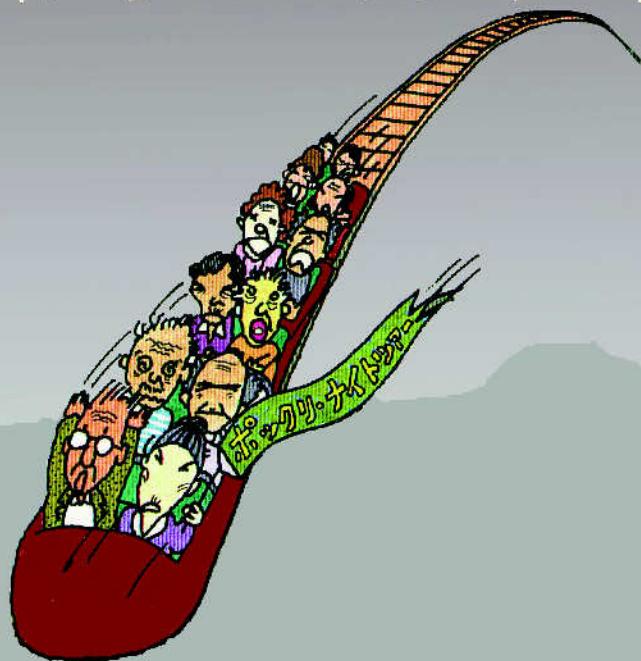


連載専門誌

# 対人援助学マガジン



Vol. 1 No. 4

March 2011



対人援助学会

別冊付録マンガ  
下巻校児の琵琶湖一周  
サイクリング(下)

## 編集長から

第4号の編集がおおかた完了するという3月11日、東北地方太平洋沖地震とそれに伴う大津波被害が起きました。これを書いている3月12日のTVは、取り残された被災者救出と被害の全容把握、原発事故の対応に働く、様々な人々の活動を繰り返し伝えています。

それを見ながら、対人援助を謳ったマガジンの編集長である私のできる援助は弱いなあと思っています。そしてこれは、阪神淡路大震災の後にも、ずっと自分が感じていた感覚であることを思い出しました。

支援や応援、助けが一色ではないことは、頭の中では分かっているのです。それでも、自分の中の直接的援助の出来にくさが弱点であることを否定できません。

救助から復興に向けて動き出した時には、又新たな息長い支援が必要なこともあります。人が様々なものから、力や勇気をもらえることも知っています。そういう何かの一員でありたいと思います。

ただ、それでも、神戸の時がそうであったように、ここから先の地域には惨状が広がっていると分かったところの手前で、いつもと変わらない日常生活が営まれ、そこに自分が居ることの後ろめたさは、むくむくと頭をもたげてしまいます。

しかし、準備して、皆さんに支えられてきたこのマガジンですから、情緒的に反応するのではなく、予定通り発行したいと思います。ご執筆いただいた方々はそれぞれ、こんな事が起きることは予想もしない時点で原稿を完成しておられます。今なら、何か一言、付け加えたいと思われるがあつただろうと思います。

当面の緊急的支援を担う方々に感謝とねぎらいを込めて、そして長期間にわたる復興プロセスでは、必ず役割を果たすことを約束して、今は、予定されていた自分の役目を果たしたいと思います。

被害を受けられた方に心からのお見舞いと、直接ではないけれども、大切な家族や、友人の被害に心を痛めている方々にも、どうぞご自分を大切にと申し上げて、編集・発行作業を再開いたします。

2011／03／12 団士郎

# 目次

|                                      |               |
|--------------------------------------|---------------|
| 執筆者@短信                               | 03-08         |
| 知的障害者の労働現場 004                       | 千葉晃央 09-14    |
| 社会臨床の視界 (4)                          | 中村 正 15-26    |
| ケアマネの出会った家族たち(4)                     | 木村 晃子 27-30   |
| 街場の就活論 vol.4 —新卒採用に今、何が起こっているのか—     | 団 遊 31-35     |
| 心理療法が始まるまで(4)                        | 藤 信子 36-38    |
| ケースのツボとそこに合わさる言葉(3)                  | 岡田 隆介 39-41   |
| 映画の中の子どもたち4                          | 川崎 二三彦 42-43  |
| 子どもと家族と学校と ④                         | 中島 弘美 44-47   |
| 蟻蟻の斧(とうろうのおの)-社会システム変化への介入-part1-第4回 | 団 士郎 48-53    |
| 学校臨床の新展開 ④                           | 浦田 雅夫 54-56   |
| (4)ポストモダンな学びのスケッチ-繋がりの中で見えてくるもの-     | 北村 真也 57-62   |
| 幼稚園の現場からIV                           | 鶴谷 主一 63-69   |
| 福祉系対人援助職養成の現場から④                     | 西川友理 70-74    |
| 我流子育て支援論(4) ~~                       | 河岸 由里子 75-80  |
| 不妊治療現場の過去・現在・未来 4                    | 荒木 晃子 81-85   |
| 対人援助学＆心理学の縦横無尽                       | サトウ タツヤ 86-87 |
| 小さな「怪獣たち」とのドラマセラピー 4. つづく「いじめ」のドラマ   | 尾上 明代 88-96   |
| 家族造形法の深度(4)                          | 早稲 一男 97-106  |
| 旅は道連れ、世は情け 研究所二十周年を迎える 前夜④~~         | 村本邦子 107-110  |
| きもちは言葉をさがしている 「紅茶の時間」とその周辺 第3話       | 水野スウ 111-116  |
| やくしまに暮らして 第三章                        | 大野 瞳 117-124  |
| お寺の社会性(式)—生臭坊主のつぶやき—                 | 竹中尚文 125-129  |



|  |                 |
|--|-----------------|
| <b>新連載</b> こころ日記 ぼちぼち                              | 脇野 千恵 130-133   |
| <b>新連載</b> これからの男性援助を考える 第一回&第二回 坊 隆史 松本健輔 134-140 |                 |
| またまた長い編集後記   | 編集長＆編集員 141-143 |
| <b>付録マンガ</b> 「こども旅 不登校児の琵琶湖一周サイクリング」⑤ 団士郎 別冊 42-72 |                 |



# 執筆者 @短信

(到着順)

## ◆岡田隆介◆

今年2月に、第20回「児童相談所とその近接領域における家族療法・家族援助研修会」が琵琶湖のほとりで開催されました。その第一日目の企画に、本マガジン編集長の団さんとのフリートークがありました。

なにせフリーですから、話が絡んでヒートアップすることはありません。そのせいか、徐々に会場の空気が緩んできます。わたしは、なんとか参加者のゴールポストの枠内におさめよう汗をかきました。隣の団さんはというと、そんなことに関係なく、次々とゴールポストの外をめがけてボールを蹴ります。

ところが、それがけっこうお客様のネットを揺するのです。ネットは枠の外に！フリートークの会場では面接室と同じことが起きていたのでした。とはいって、二人が枠を外してばかりではネットは反応しなくなります。なかなか奥の深い2時間でした。

PS ちなみに第21回大会は、23年2月4～5日に広島で開かれます。ふるってご参加ください。

## ◆竹中尚文◆

浄土真宗本願寺派専光寺住職。大学院のときに僧侶となった。特に得意なものが無い坊さんになりたいと思った。中途半端でもいいから何でもしようと思った。7年前に住職となった。住職は何でも要求される。経を誦誦して儀式をする。法話ををする。市井の仏教研修会をする。寺の修繕をする。草刈り機も、

チェーソーも、 Yunbo も使えるようになった。寺の裏に作ったクライミングウォールに登る時間が無いのが問題。

## ◆河岸由里子◆ (臨床心理士)

かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

仕事に疲れると、時々何かに熱中する癖がある。大抵は何かを作るかパズル。プラモデルが昔から好きなので、気が向くと作る。以前テレビでハーレーダビッドソンの4分の1スケールモデルの広告をしていて、つい買ってしまった。ご存知のディアゴスティニ。バラバラに部品が届くので全部買い終わるまでに何と1年半もかかった。しかし造るのにかかった時間は夜少しづつ作って1ヶ月弱。完成した瞬間は嬉しいのだが、出来上がってみると、置き場所に困った。そこで、これからは小さいものをと思い、 Nanoblock に没頭。先日はインコ。そしてモン・サン・ミッシェル。時間も余りかからないし、ブロックだからバラせば場所をとらない。老眼にはきついが、何も考えずに何かに没頭していると、楽しいし、良い気分転換になる。しかも指先を使うのでボケ防止にもなるかと。それにもしても、ディアゴスティニの商法は上手く出来ているなあと関心してしまう。今テレビでは口ボットを作るシリーズを広告している。「面白そう、作りたい！」という気持ちが又湧いてきて、抑えるのに一苦労。初回 790 円にはまってしまう人がきっと全国に何人も居るのだろう。

## ◆村本邦子◆

今年になって、何を考えたのか、朝のジョギングを始めました。夜が明け、日が昇り、新しい朝が始まるという壮大な自然のドラマの中で走りながら、同じように早起きして、走ったり、歩いたり、太極拳をしたりしている人々と、言葉を交わすこともないままに、つながりの感覚を持つことができます。だいたい1時間10キロですが、家に戻ると、ちょうど仕掛けといったパンが焼き上がり、いいにおいに包まれます。何ともゴージャスな朝ではありませんか。

その一方で、私って、突然の思いつきで新しいことを始めては、やりだすとおもしろくな

なって意外に長く続けてしまうので、気づいてみれば、あまりにたくさんのものを身につけてしまいました。人生後半は、抱え込んできたものを少しづつ整理し、手放し、生まれてきたときのように身ひとつになっていかなければならぬとも思い始めています。まだしばらく間があるはずですが、これから課題だと思っています。

## ◆北村真也◆

私塾「アウラ学びの森」代表。立命館大学大学院応用人間科学研究科所属。(アウラ学びの森 <http://tiseikan.com>)

2000 年、京都府亀岡市に自らの研究フィールドとして「グローバル教育研究所」を設立、同年、学びの共同体としての私塾「アウラ学びの森」、2005 年には、京都府教育委員会認定フリースクール・サポート校として「知誠館」を開校し、自らの理論研究と実践を通して〈ポストモダンな学び〉の実現をめざす。また、2005 年より京都府教育委員会、2009 年より京都府庁青少年課の研究委託事業を受託し、教育に関わるプロジェクトを行政と共に企画実行している。

1 月末によく修士論文を書き上げ、2 月に無事口頭試問を終えることができました。あとは 3 月の卒業式を迎えるだけです。振り返ればアッという間の学生生活でした。25 年ぶりに訪れた大学は、私が通っていた頃とは、随分趣を変えていました。まず学生の数が多くなったこと、キャンパスを歩いていると新京極（京都の繁華街）にいるような感じになる時がありました。そしてそれに運動するかのように、様々なシステムが整備され、私たち学生がそのシステムによって完全に管理されているような錯覚に陥りました。これらの感覚は私の学部時代にはなかったもので、私にとって新鮮もあり、また戸惑いを感じさせるものもありました。ただそんな日々の学生生活の中で、昔と変わらないものがありました。それが人との出会いです。先生方をはじめ、仲間たちとの出会い。これは時代が移り変わっても変わるものではありませんでした。人は、出会いの中に学び、出会いの中に自らを変容させていくのだと思います。私はこの 2 年間を振り返り、そん

な〈出会い〉を実感してきたのです。卒業を前に、少しセンチメンタルな気分でこの原稿を書きました。50歳を前に、青春の断片を味わっているのかもしれません。

## ◆早稲一男◆

3月末までは児童相談所長ですが、4月からの身分は大学教員です。児童相談所から始まり、知的障害者更生相談所、身体障害者更生相談所を経て、児童相談所長に戻りましたが、その後、一年間は児童自立支援施設（旧教護院）長でした。そして、再び、児童相談所に戻って、一区切りとなります。

「この間、長かったですか？それとも短かったですか？」と問われたことがあります。

「そんな風に考えたことがなかったので、何とも言えない」という、そっけない返事をしました。

あえて言えば、家族を視野に入れたアプローチを身につけたことによって、どの対人援助現場に行っても、楽しく仕事ができました。いろんな方々と巡り会えたことは私にとって、貴重な財産になっています。巡り会った方々に感謝です。

4月からの所属は、同志社大学心理学部です。これまで大切にしてきた「ジェノグラム」と「家族造形法」について、磨きをかけたいと思っています。

## ◆木村晃子◆

創刊号の原稿を書いてから、一年近くの時間が流れています。一年前には、現在の状況など想像してはいませんでした。「最低一年、できれば、ずっと・・・」というような説明での連載執筆のお誘いだったことを覚えています。

締め切りの催促もゆるく、それがまた自分の中でプレッシャーになり、どうしても締め切りに間に合わせたいと思い書き続けています。一回くらい連載欠場でもいいや、などという気持ちにはならないのです。ずっと、執筆者としてエントリーし続けたいという思いが強くなっています。

そして、ケアマネとして出会った家族の物語の他にも、書きたいものが頭の中で列をして順番待ちをしています。

徒然なるままに、書き続けられるほど自己管理ができていない自分には、このマガジンの定期的な発行はとてもありがたい仕組みです。しかも、テーマを持って執筆している連載とは別に、新たな枠（この枠です）も与えられました。活用しない手はないなと思いました。今回は、決意表明です。次回からこの新しいスペースで短編小説？！を書いてみようと思います。お楽しみに！でも、決意が変わっているかもしれません。その時は、ご勘弁願います。

\* 北海道 当別町 普段はケアマネジャーとして高齢者支援をしています。小学校2年生の時に書いていた日記には、「将来の夢は小説家になること」と書いてありました。



## ◆中島弘美◆

『家族支援心理カウンセラー』です。もともとは、家族療法の専門相談機関にいましたが、1995年に独立開業し、大阪梅田で、CON（こん）カウンセリングオフィス中島をしています。

ご相談に来られる内容は、不登校など学校に関することが中心で、高校生や大学生とその家族が多く来所されています。

ここ数年は、相談内容にも幅が出てきました。不登校の他に、精神障害、知的障害の子どもさんを持つご家族の支援。高齢者を介護する家族の支援、うつ状態にある人とそのパートナーの夫婦家族面接など、病院の医師からカウンセリングを勧められてこられてくる方が多いです。

面接費用は一回約90分15000円、完全予約制です。

学校と連携しての支援、社会資源の紹介を含めての支援、医師の診察と並行してのカウンセリングなど、連携を重視するネットワー

クの中で家族支援をしています。

前回の対人援助学会に参加することで、このマガジンの他のページを書かれている著者の方々とお会いし、お話しする機会がありました。お隣さんの様子がわかつて、とてもうれしかったです。ここからさらに活動が広がるように、マガジン宣伝にも力を入れたいと思っています！

## ◆水野スウ◆ 「紅茶の時間」家主

東京生まれ。石川県津幡町の住人。1983年から毎水曜日の午後、自宅をひらいて、誰でもどうぞ、のオープンハウス「紅茶の時間」をはじめる。96年からは、コミュニケーションを練習する場「ともの時間」の水先案内人も。著書に、「雪の手みやげ」「ありがとうのパッチワーク」「想いのコンクジュース」。紅茶3部作として「まわれ、かざぐるま」「出逢いのタペストリィ」「きもちは、言葉をさがしている」、共著に「ほめ言葉のシャワー」ほか。

「紅茶なきもち」blog

<http://kimochi-tea.cocolog-nifty.com/blog/>

出前紅茶こと、お話やワークショップの出前で、なじみの町や知らない町へよく出かけます。この一年は特に、「ほめ言葉のシャワー」がご縁の出前が多かったです。娘と制作した同名の冊子が思いがけなく全国に広がり、読んだ方々からたくさん感想をいただき、感じこと気づかされたことが、これまたたくさんありました。

出前先では、「ほめてのばす本ください」という注文に違和感を持ったことから始まり、日本語の「ほめる」にまとわりつく様ざまな勘違いや、ほめ言葉の呪縛について、また、人よりすごい・できる、目に見える結果、といったdoばかりが重視されすぎていて、その人がいてくれること=beの意味が、ないがしろにされる気がすること、などについて語っています。

先の冊子だけでは伝えきれなかったそんな想いを、あらたな一冊にまとめよう、と昨秋から、娘と遠距離協働作業中。そのブックレット「贈りものの言葉」は、夏までにできあがる予定です。

## ◆尾上明代◆

国内で最初の米国ドラマセラピー学会公認ドラマセラピストとして、ドラマセラピーのセッションやトレーニングを種々の場で行い、その普及や教育にいそしむ。

ドラマセラピー教育・研究センター代表。2007年度より立命館大学大学院応用人間科学研究科教授も務める。

治療セッションとしては、現在、アルコール・薬物・ギャンブルなどの依存症者の回復にむけて力を注いでいる。

☆この2月～3月、力を入れている仕事は、「子どもの心を取り戻す！」というテーマで創った一般の方々向け連続セッションです。

子ども時代に、子どもであることを味わい、子どもの心を体感して過ごす。これができれば理想的ですが、それが叶わない場合も多々あります。

子ども時代の不全感は、状況や内容が違っても、多くの人がもっていると思いますが、「大人の自分」が「子どもだった自分」をまず見つけて、そしていたわり・慰め・癒すということは、すごく大切なことです。

また、子どもの頃の遊びと結びついた自由さ、熱心さ、開放性、想像力、創造力などを、そのまま持ち続けていれば、どれほど人生に豊かさ、深さ、恩恵が得られるか計りしえません。ここに子どもがするような「遊び」を、大人が行うことの意義や重要性が出てくるのです。

子どもになるセッションと聞いて、「子ども役」を演じなければならないのかな、と初めに思った参加者もいたようですが、子どもになる演技というより、本当に子どもでいることができるワークを創りました。これは、少しつづく多くのワークを積み重ね、プロセスを発展させることで可能になります。

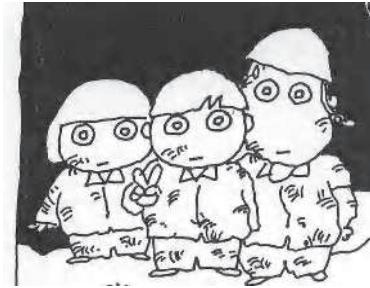
14人の「元子ども」の皆さんと、毎週楽しいセッションが進行中です！

## ◆藤信子◆

立命館大学大学院応用人間科学研究科教授、専門は臨床心理学、コミュニティ心理学、集団精神療法。この4号が出た時は済んでいたけれど、原稿を書いている今は、3月12,

13日の「集団精神療法学会第28回大会」の準備がいよいよ大詰めで大忙しです。参加される方が、良い体験をされる大会にしたいと思っています。

臨床の最初の対象は、精神病院での統合失調症（当時は、精神分裂病と呼ばれていた）の人達だった。数年前、私の講義をたまたま聴講していたPSWから「藤さんは統合失調症が本当に好きなんだな」ということがわかった」と言われた。聞き取っていてくれたその人のことばになるほど、と思った。この頃は、少しフィールドが広がり過ぎの感がある、難病、高齢者、小児脳腫瘍の治療後何年もの経過の人たち、いつの間にかこうなっていた。この広がったところのこと、人に理解してもらえるように話せるようになりたい、と思うけれど、そのためには長生きしなければならないかしら、と考えているこの頃である。



## ◆浦田雅夫◆

これまで、高校社会科講師（常勤・非常勤）、スクールカウンセラー、心理療育施設セラピスト、児童相談所嘱託（虐待対応協力員）、児童養護施設指導員など子どもにかかわる場で勤めてきました。2007年からは、保育士養成にかかわり、奈良佐保短期大学幼児教育科を経て、現在は京都造形芸術大学芸術学部こども芸術学科専任講師として、アートを感じながら児童福祉や保育実習指導などを担当しています。また、現在は他にスクールソーシャルワーカーとして中学校現場へ入り、子ども家庭への福祉的な支援を行なっています。

高校教員時代に、「底辺校」といわれる学校の子どもたちと出会ったことが、今の私の原動力のベースにあります。そして、一番、勉強をさせてもらったのが、児童相談所です。個性豊かな大先輩から受けた教えが今もここに残っています。児童養護施設では、あ

らためて「家族」について日々考えさせられました。人との出会いによって人はものの見方、考え方、生き方が大きく変わるものだと思っています。不運の連続のなかにいる子どもたちに、よき出会いがあることを願っています。

現在、京都弁護士会子どもの権利委員会の安保千秋弁護士、吉田雄大弁護士を中心に、京都に関西初の子どもシェルターを作る活動が始まっています。私も微力ながらかかわっています。みなさまも、ぜひ、協力をお願ひいたします。

<http://blog.livedoor.jp/childshelter/>

## ◆西川友理◆

いくつかの学校で、社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士などの、福祉系対人援助職養成に携わっている者です。学生達と過ごす日々の中で見えてくるものを書いています。

さて、なんとか1巻分、計4回書かせていただきました。目次を見れば凄い執筆陣、読ませていただいても面白い記事がたくさん。一読者としてはともかく、ライターとしては激しく場違いじゃないかと思いつつ、イヤイヤ身の丈よりも高い場に身を置いてこそ研鑽出来るのだ、周りが凄いから一人くらいこんな奴がいてもいいのだ、と呪文を唱え、締め切りが近づくと、毎度毎度頭を抱えウンウン唸りながらも、実は結構楽しんで書かせていただきました。

これを書いている時期、職場ではちょうど、卒業式の準備をしているところです。なんだかんだ言いながら、みんなそれなりにキリっと引き締まった顔になって、無事卒立っていけそうです。えらいもんです。私もこの一年、成長できたかな？

この文章を提出したら、また新たな気持ちで、第2巻目に突入させていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

## ◆川崎二三彦◆

（子どもの虹情報研修センター）

対人援助ということから考えると、「ちょっと違うかな」と思うかも知れませんが、ここしばらく＜嬰児殺＞に関する先行研究を

ひたすら読み、それをまとめる作業に追われていました。初めて知ったこともたくさんあって、一つ紹介すると。

戦前には、死産（率）を「嫡出子」「私生子」などの身分別に集計していたんですね。でも、すごいですよ。たとえば昭和 15 年の「嫡出子」の死産率は約 4 ‰。ところが「私生子」は 28 ‰にのぼるんです。この関係、明治からほとんど変わらない。こういう歴史を背負っているからでしょうか、戦後もかなりの数の新生児に対する殺害が続いているました。

驚かされたのは、連続して殺害するような事例。9 人産んで 9 人（9 人ですよ！）殺害している人もいるんです。逆に、妊娠を隠して自宅で出産し、数時間は母乳を与えるなどの世話をしていたのに、家族が帰宅する時間が迫ってついに…、というような 10 代少女の袁しい事件も、文献検索中に見つけました。

こういう事件をどうしたら防ぐことができるのか、考えていかねばなりません。

なおこの報告は、厚生労働科学研究「我が国におけるチャイルド・デス・レビューに関する研究」の一部となる予定です。

さて、最近もう一つ書いたエッセイを紹介します。「ことはじめ、児童虐待防止事業」。百年前、日本で初めて児童虐待防止事業に取り組んだ原胤昭の活動を報告しました。当センター紀要に載せましたが、以下のホームページで閲覧できます。関心のある方、どうぞ。

[http://www.crc-japan.net/contents/guidance/pdf\\_data/kiyou\\_no8.pdf](http://www.crc-japan.net/contents/guidance/pdf_data/kiyou_no8.pdf)

## ◆団士郎◆

Facebook とツイッターを始めた。その前に、個人トレーナーについて週一回、加圧トレーニングを始めた。アメリカ育ちの日本人女性に週一回会って話を始めた。（むこうは英語で私は日本語の対話）これと少し絡んでいくが、英語版の「木陰の物語」数編が大学の論文集に掲載になる。一昨年は、ソウルでのマンガ展出品のためハングル版の木陰の物語を一編作ったことがある。今年は、中国語版を作れたら面白いなと思っている。知人の絵本「赤いキリン」作りのプロデュースをし

たり、いろいろ動いている企画がある。

とにかく新しいことを始めようと思ったのが昨年の 11 月。1 年間が同じスケジュールの繰り返しが多くなったなあと思ったからだ。順に開始して今のところどれも継続中。元々手を出していることが多いから、ますます忙しくなるが、楽しいと思えないことはやらない！と決めているので、面白いことだけで多忙な毎日である。3 月末には、マガジン執筆者の一人、中村正さんと、イギリスに視察調査に出かける。ロンドンは 30 年ぶりだ。

## ◆千葉晃央◆

（京都国際社会福祉センター、横大路学園）

「国際社会福祉情報 第 34 号」の編集をずっとしていました。今号の特集は「韓国の社会福祉士」です。アジアで日本だけが福祉先進国と思うことなけれ！ 福祉は、制度の充実や機器の充実具合だけではない！ I T を駆使したシステムも是非学ぶべきだわ。■団士郎先生、早稲田一男先生が担当してくださっている京都国際社会福祉センターの家族療法課程プログラムがリニューアル。告知後すぐに受講申し込みがあり、私もたのしみにしています。■子どもの頃やりたくてもできなかつた野球を、昨年 38 歳から始めました。こないだは元広島カープの方にアドバイスを頂きました。ピッチャーに挑戦中。投球時、指が縫い目にかかる感覚をやっと実感！ ■ツイッターでは、マスコミが避けているニュースがたくさん入ってきて、「ツイッター革命」という側面の機能を体感中！

## ◆大野睦◆

大阪生まれ。幼稚園時代、朝のご挨拶が出来ず自閉症児として扱われる。自然や動物が好きな子供は自然豊かなところで生きていきたいと大学卒業後に屋久島に移住。エコツアーガイドに就き、ネイティブビジョン設立。1998 年独立、2001 年法人化。2008 年屋久島観光協会ガイド部会長就任。満月の光と 2000 本のキャンドル、僅かな電力、そしてアーティストはじめ総スタッフ全員ボランティアで開催するコンサート「やくしま森祭り」発起人。

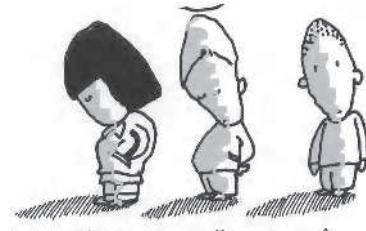
## ◆脇野千恵◆

小学校・中学校の講師としての教員生活は 25 年以上。その間、人権学習・性教育の研究に取り組み、実践を積んできた。

子どもに寄り添った教育を目指すために、京都社会福祉センター主催の援助講座にて色々なカウンセリング手法や家族療法についても学ぶ。10 年前、地域で家族療法研究会を立ち上げ、教員・スクールカウンセラー・福祉施設従事者などを対象にした研修会を開催中。

近年、子どもだけでなく親への対応の難しさが問題になるが、家族理解という点に焦点をあて、家族療法がもつ知恵を学校で使えないかと実践中である。

思春期相談士の資格を持ち、思春期の子ども達への対応などに生かしている。現在、滋賀県大津市立中学校に勤務。教科は国語科。



## ◆松本健輔◆他己紹介 坊隆史より

松本くんは「Humming Bird」というカウンセリングオフィスを主宰しています。カップルカウンセリングという心理相談の盲点をついた業界進出で、さすがはシャチョーさんです。HP も素晴らしい、カウンセリングよりもそちらの業界で頑張ったら？とも思います。ぜひご覧下さい

[\(http://www.hummingbird-cr.com/\)](http://www.hummingbird-cr.com/)

私たちにとっても一寸先は闇のリレー連載ですが、よろしくお願ひいたします。  
近況

最近ある小説家の本を読みました。主人公が不倫相手を本気で愛しながら死んでいくという内容の話でした。それを読んで「男ってあほなんだなあ」と思いながら不倫している男性の切ない思いに涙がでそうになりました。そしてそれを女友達に紹介して感想を聞いたら、「主人公が嫌い。あんな自分勝手な男なんて最低」と。

これを男女の違いというのかはわかりま

せんが、ほんと人って受け取り方が違うなと実感した瞬間でした。そして、それは絶えず夫婦の中で繰り広げられる葛藤と重なるのだなあと。

## ◆中村 正◆

京都にある立命館大学というところで教員をしています。大学は法学部でした。大学院で社会学（社会病理学）を専攻し、現在は応用人間科学研究科という臨床心理や対人援助に関する専門職を養成する大学院で教えています。文字通り、「あいだ」にいます。さらに、逸脱行動に関わる臨床だけではなくて、ボランティアやNPOなど社会のなかでの仕事もたくさんしています。この連載でも述べていますが、社会臨床という点では、1995年の阪神淡路大震災とオウム真理教事件のインパクトが強く、ある種の「災害ユートピア」のような社会の空気があり、社会連帯のエネルギーが湧き上がってきました。そこで組織したのが「きょうとNPOセンター」でした。その開設に携わり、その後、多様なNPOの創出に関与してきました。とくにNPO法人では本邦初のFMラジオ局を実現しました。現在、「NPO法人・京都三条ラジオカフェ」は三条寺町に放送局があります。3年程そこでパーソナリティをしていました。末尾にあるサイトからそのデジタル版が視聴できます。私の写真と声が登場します。途中、著作権の関係で数秒ほど音が途切れますがそのままにして聴いてください。もちろんこれは自己紹介なので顔と声の紹介に都合がよいと思った壳名的動機ですが、ここでいいたいことはそうしたことではなく、この仕組みを活用して「声の対人援助学マガジン」として利用できないものかということです。まあとりあえず以下をご覧下さい。

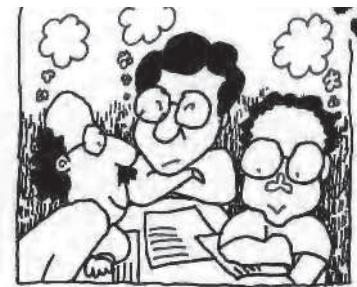
<http://happynpo.seesaa.net/article/149021216.html>

## ◆荒木晃子◆

生殖医療施設と精神科診療所の心理士を兼務。立命館グローバル・イノベーション研究機構客員研究員。研究テーマは「不妊臨床と家族援助」。昨年より、島根県生殖医療施設（内田クリニック）と、県庁及び県内児童

相談所・乳児院と連携し、「不妊当事者カップルが家族をつくる」地域支援ネットワークの構築を目指す。同時に、彼らと、児童養護施設や乳児院等で暮らす子どもたちとの出会いを願い、冊子「ファミリー・aim・サポート」を作成。冊子は現在、島根県里親研修会、聖路加看護大学生殖看護認定看護師養成講座で採用された。島根家族援助研究会主宰。

多忙で単身故に在宅看護＆介護がかなわず、認知症で脳性まひの母の入院を昨年末に決断。「自分の好きなことをやって生きて行きなさい」と、いまは亡き父の口癖を、いつも隣で笑いながら聞いていた母だった。今年のお正月には、母の大好きな手作り「九州おせち」をつくり、自宅で一緒に正月を過ごした。おそらく、母が自分の口から、自らお箸を使い食す最後のおせちとなるだろう。私の手作りおせちは、母からの伝承の味。ふるさと九州の味覚満載である。これまで、母は私に、何とたくさんの贈り物を残してくれたのだろうと思う。現在も、私にとって、母の笑顔がなによりの贈り物となっている。



## ◆団 遊◆

立命館アジア太平洋大学非常勤教師（キャリア教育）、アソブロック株式会社、有現会社ea代表、“家族と子どもを想う出版社”ホンブロック発行人。“環境に変化と刺激を起こすものづくり”をモットーに、地域活性から企業プランディングまで幅広くプロデュース活動をしている。東京を会場に「団士郎家族理解ワークショップ」を隔月主宰（偶数月第二土曜日）。ぜひぜひ来てね。

<http://danasobu.com>

セキユリヲというデザイナーたちとともに手がける「salvia」というブランドが年末以来、いつも以上にメディアに取り上げられ、

その影響か、先日台湾国際ブックフェアに招待されて行きました。salviaでは靴下や手ぬぐい、文房具、雨具などの生活雑貨を作っています。次は6月末にパリで開催されるJAPAN FESTAからの招待がありそうです。

3月1日から私にインターン生が二人、一ヶ月の約束でついています。下手に事務作業をやらせて「社会人気分」を味わって満足させても…と思い、自らテーマを決めて1ヶ月、その研究に取り組むということをやらせています。卒業論文みたいなものですが、こちらは、そのテーマが受け入れ先の会社にとってもメリットがなければなりません。そのためには企業研究が必要で、ビジネスの理解が不可欠です。今はテーマ検討段階ということで、数日の就業体験を経て「自分がここで取り組みたいテーマ」を私にプレゼンしている状況です。主体的に動かないと何の情報も得られない環境の中で、いかに実のあるインターンシップに仕上げていくか。この試みにフィットする人は、きっとベンチャー気質といわれる人だろうと思っています。

とある豆腐屋さんから新商品のプロデュースを頼まれて取り組んでいます。高級豆腐メーカーとして知られるクライアントが求めているのは、新たな顧客接点。商品は高級スーパーや駅直結型の店舗で売れる小さ目サイズのお豆腐です。そこで、チームメンバーと一緒に検討を重ね、今までリーチできなかった30~40代男性にターゲットを絞ることを決め、ビールのお供においしいお豆腐を味わってほしいという気持ちを込めて「ビア奴」と名付けましたが、あえなく却下されました。この名が日の目を見ることはなくなりましたが、とても気に入った名前だったので、ここで小さくお披露目します。

## ◆鶴谷主一◆

1960年12月11日生 50歳 射手座 血液B型 私の父は九州の宮崎県で教会の牧師兼、付属幼稚園園長をしており、幼稚園は保育者である母が実質運営しておりました。そんなこともあり、実家で園の手伝いをしておりました。実家を継ぐものと思いきや上京し、東京で縁もゆかりもない幼稚園に5年勤務し、そこで出会った妻と結婚。ただし、結

婚直前に日名子太郎先生という恩師について香港の日本語幼稚園に2年間勤務。その後帰国し、妻の実家である原町幼稚園に勤務したのが30歳。合計4つの幼稚園に勤務し、もうすぐ園長9年目になります。ちなみに妻は隣接する原町保育園の副園長、母が園長をやっています。私立幼稚園は、建学の理念に基づいて教育を行う、というのが建前ですが、それは、園長が好き勝手出来るということです。私は幼稚園の仕事が趣味のようなもので、園の活動は楽しさをベースにして行わなければならぬ！というポリシーの持ち主です。基本楽天家です。

近況です。趣味のスノボで跳んでしまい年末に肋骨を骨折してしまいました。でも肋骨って手足ほどダメージはなく、痛いのを我慢して翌日も滑りました。咳をするのもメチャ痛い日々が2週間ほど続きましたが、約1ヶ月でほぼ完治！再び週末は滑りに出かけています！



## ◆サトウタツヤ◆

2011年の1月末にイタリア・レッチエに行ってきました。長靴のカカトの部分。良く言えばヒルトリカルな街、悪く言えば田舎、でした。

話は変わり、最近、学生さんの就活のエントリーシートを見させてもらったのだが、まあびっくり。たとえば、志望理由を書く欄が400字しかないのに

私はいくつかの企業の説明会に参加させていただきました。その中でも御社の説明会で得たことがとても印象に残っており、是非御社で働かせていただきたいと感じました。このように思った具体的な理由は、御社

の経営理念である、「＊＊＊＊＊＊＊」という理念が私の考えと一致しているからです。

などと冒頭部分だけで170字も使ってしまっている例があったのである。これじゃダメでしょ。以上のようなことは誰でも書けることだし、理念そのものは「御社」なる相手こそよく知っているんだし、とダメ出しだった。

さらに話は変わるが、かくいう私も、英語論文を書いているときは似たようなものだなあと思い直した。2011年の2月末にはアメリカ・ウースターのクラーク大学に滞在したのだが、その時、クラーク大学のJaan Valsiner教授が、私の書いた原稿を読んでコメントしてくれるのである。いま、それらのコメントを見返してみると、以下のようにだつたりする。

DO NOT START A SENTENCE WITH "And" . . . IT IS OK IN COLLOQUIAL ENGLISH BUT NOT IN TEXT.

おやおや、COLLOQUIALって何よ、と辞書を引くと、口語。Andは口語で使うモノ、というご指摘でした。さらに

In figure in now METACODE is labeled  
METADODE!

などというものもある。CODEと書くべとこころがDODEとなってしまっていたのだ。一方でヤーンは、良い展開になるとVery good！と返してくれる。それをみてまたやる気ができるわけだ。それを何度も繰り返して英語論文ができるが。すると。学生のエントリーシートの添削もダメだしだけではだめなわけだ。良くなったところは「良くなっただ！」と指摘することこそが重要だ。さっそく、良くなった部分を探して返信し、さらなる飛躍を期待することにしよう。

## ◆坊 隆史◆他己紹介 松本健輔より

坊さんは、産業領域で活躍されている臨床心理士です。学部の先輩でもあり、大学院の先輩でもあり、心理士の先輩でもある大先輩です。グループでの参加者への伝わりやすいフィードバックを聞いて毎回勉強させて頂いております。このリレー連載を通してさらに勉強させてもらえたと思います。それから、最近休みの日は昼間から飲んでいると

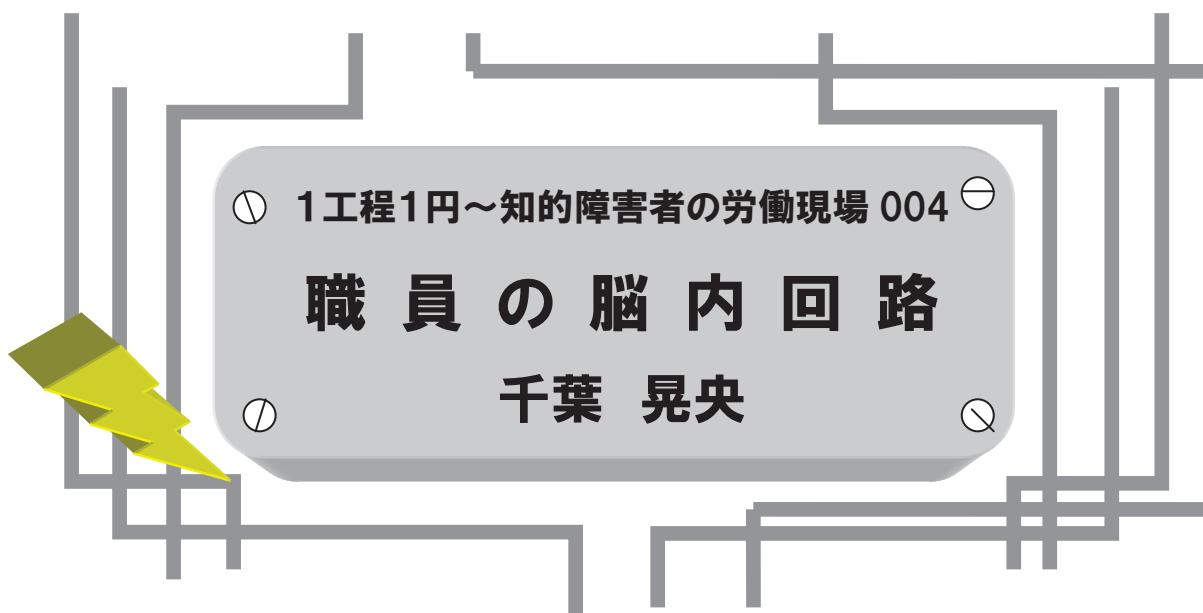
いうお話を聞きました。飲みすぐには注意してくださいね。

### 近況

様々な男性の対人援助に関わらせてもらっていますが、企業内のメンタルヘルスケアをメインの仕事としています。そのため全国の支社支店に出張をしています。落ち着きのない私にとって全国出張は楽しみのひとつでもあります。楽しみながら仕事ができるなんて幸せ者です。ところが出張中に本欄の執筆依頼があり、編集長の団先生に連絡がとれない事態になりました。どうやら私のこの文章が4号マガジンの最終原稿らしいです。新入りなのにこのルーズさ。この場をお借りしてお詫び申し上げます。こんな私の連載なので一寸先は闇が予想されますが、どうぞよろしくお願ひいたします。（ぼうたかし）

- ★ 今回、この欄の充実が私にとっての課題でした。前号で、使い回しのプロフィールや、第二号と同じという方を登場させてしまったのです。だから今回から、もう一本の連載のつもりで、執筆者@短信の欄も独立して楽しんでいただけるものにする所存です。
- ★ 本文は、それぞれの分野のたっぷりの書き込みです。どうぞ、関心のあるところをダウンロードしたり、読書会のテキスト等にも、ご利用下さい。
- ★ 私は雑誌を買うと、編集後記を先に読みます。編集長日録とか、編集子からなんてタイトルが大好きです。一冊丸ごと編集日記でも構わないくらいです。
- ★ それにしても6頁は多すぎでしょう！そう思います。だから文字は小さめで、遠慮してるでしょ。通常のフォント・サイズだったら10ページ超えてまっせ、って、何それ、開き直り、逆ギレ？それに、執筆者短信の編集記って、ああ、スペースが余っただけのこと…、なるほど。

（編集長）



### ■「のりづけ」と「リボン結び」

先日、私たちの施設に仕事の依頼を考えてくださっている業者の方に「どのくらいのレベルの仕事ができるのですか?」と聞かれた。このような質問をされることも結構多い。どのくらいといわれても、なかなか簡単に断言できることではない。

「できない」とまではいわないが、今まで苦労した仕事ですぐ思いつくのは、のりやボンドを使う仕事だ。この接着剤系は、はみ出るし、引っ付くし、乾くまで時間もかかるし、接着ができてもその強度が問題になったりもする。そして、作業をすると、手はもちろん、服、机、床、壁などにこびりついて、作業中、作業後も苦しむことが多い。



もうひとつ頭に浮かぶのは、リボン結びの作業だ。クリスマス関連商品や和食品の包装で関わったが、かなりの難敵だ。紐の長さ、左右のバランス、結びの強さ、リボンのしわとデリケートだ。

### ■「超」分業制

とはいって、策がないわけではない。「超分業制」といえるような作業ごとの分担制だ。作業の工程を細かくわけて、一人で1工程ぐらいまで工程を分解できれば、できる仕事がないということは起こらない。つまり、リボンを結べる人はできるだけその工程だけをしてもらう。それ以外の人が、結ぶ人の目の前に商品を置く。そして、結んだ後を片付けることをまた別の人とする、といった具合だ。そのリボン結びができる人はヒモだけ触っていればいい状態の流れ作業をつくっていく。こうすれば、難しい工程ができるのが少数であったり、やむを得ず職員しかできなかったりというようなものも、流れ作業にして、利用者みんながどこかに関わって作業ができる。物を運ぶ担当、ゴミを集め担当の人もいたりする。能力がどうなので、仕事がないというわけではないのだ。

## ■ゴミとの格闘

作業で出るごみは結構大量だ。ゴミの扱いも結構ポイントとなる。作業の前後の掃除も少ないほど、作業時間が捻出できる。ゴミ箱を置くだけでは、ゴミ箱の高さが低くて、捨てたつもりでもうまく入らないで、ゴミ箱のまわりに散乱してしまう場合には下に台を置いてゴミ箱を高くしたりもする。そうすれば、ゴミを離す手からゴミ箱の口の部分までが近く、入りやすい。作業場が狭く、ゴミ箱が邪魔な時は、机にゴミ袋をガムテープで貼りつけたりもします。そして、場合によっては、ゴミを全て床に落として、作業中にかたづけ専属の人にきれいにしてもらいつながら作業を進める。

ゴミの代表的なものがシールをはがした後の台紙だ。そのシールのはがし方にもコツがある。台紙の一方を、途中まではがして、折り返しておく。(※図1参照) そうすることで、めくり始めて格闘する時間が省けるのです。

## ■よく流れる「流れ作業」

流れ作業をいかに組むかもポイント。作業がいつも同じとは限らないことが多いので、机の配置は作業に合わせてどんどんかえます。でき上がりから、仕上がりまで、一方向で扱う商品が流れる方が、仕上がりが同じ所にたまっていくので、作業前の物と作業後の物が混ざらなくて、ミスも少なくなる。(※図2参照)

また、作業をする机は表面がある程度滑り、机の端に出っ張りがない方が物を動かしやすく、作業がはやくなります。(事務机などは×) 人はものを取る時、体の方に持

ってきて持つので、そのたびに机の端に引っ掛からないことが大事です。そして、作業の前に机の上をふきんで拭いておくのは大前提です。特に扱うものが白色の物は注意が必要です。

そして、流れ作業を複数同時に行う時は、一本はスムーズに流れるようにします。その流れのなかでの場所は適性もあります。人によって、次の人に待たれている方がペースが上がる人、次の人があると緊張して苦手な人、あくまでマイペースな人など、それぞれの個性に合わせて配置を考えます。

もちろん、作業内容はご本人の希望がベースで作業は進めていますが、それだけでは納期に間に合わない時はその利用者の人にお願いして、相談して、協力もしてもらっています。

作業のスピードがはやい人の近くに行くと影響を受けてはやくなる人もいます。また、その作業が少し苦手な人は職員の近くで作業をしていただいて、不良の発生時にすぐ発見し対応できるようにします。そのためには、職員が入る位置や向きも重要なってきます。壁向きは避けるべきで、全体を把握できる位置で、内側を向いて作業をします。

## ■職員の脳内回路では

ライン作業で一本を確実に流れるようにするのは、仕上がる数がわかるようにするためです。

作業の段取り、仕上がりの目途を考える時は1日を4分割で考えます。(※図3参照)朝から、午前中の休憩までの1コマ目、休憩から昼休みまでの2コマ目、昼休みから午後の休憩までの3コマ目、そして終了

までの4コマ目です。作業の注文数が決まると、作業日数で、日産のノルマを割り出します。それを4で割ります。するとヒトコマごとのノルマが出ます。その作業体制を組めるかどうかがその作業の目途です。慣れてくるとこの人が1時間にできる作業の数というのがわかりますので、利用者ごとのその数字の合計数がヒトコマの生産となります。

ですので、新しい仕事は大変です。依頼があっても、安請け合いせずに、一旦見本で作業をさせてもらって、どのくらいの時間、難易度があるかを職員が試して、わかつてから、依頼に対する判断ができるようになれば業者の方にはお願いしています。

### ■不良品に関する責任感

そして、できた商品は職員が全数検品を行なうのが基本です。不良品の大量発生は大問題ですので、ある程度の工程ごとに検品をしています。不良品を出してしまい、納品先の他府県まで、泊りがけで、謝罪ということもありました。福祉だからと甘えていては、業者は相手をしてくれませんから。

紙類では作業をしている間に指が切れて、その血がついたりすることがよくありますので、検品は慎重に行っています。検品では、目視だけでなく、ハカリが大活躍です。目視とハカリの二重検品がスタンダードです。紙1枚でも2グラムはあります。

### ■下請け作業の現状

このようなことに注意をしながら、作業は流れています。障害者自立支援法で、ひとつの施設が二つの事業に分かれることも起こっています。するとさらに少人数で

の作業です。これまで、一つの仕事がダメになったら、全員が明日からすることがなくなるというような状況が起らぬないように（リスクマネジメントを目的に）複数の作業をしてきました。事業が二つに分かれると、更に大口の仕事は扱えません。ですので、自主製品を…となる傾向が強いです。それでも、作業をしている施設の約半分が現在も下請け作業というデータもあります。

### ■達成感と「作業屋」

すごい先輩がたくさんいます。同じメンバーで、同じ作業で、同じ道具を使って、同じ場所で作業をしても、後輩とは明らかに違う作業の量と援助の質、充実感、達成感を導き出します。生産増→収入増という報酬による喜びも、もちろん大きいかと思います。しかし、それだけとはいえません。お金の感覚が苦手な人もいるからです。

そして、そこで働く職員は、注文を受ける、納期に間に合うか判断する、そして間に合うように作業の段取りをして、作業をする、という日々を繰り返しています。

時には、注文の変更、部材の一部の納入遅れ、台風や雪による施設の休園、風邪がはやって複数の利用者が休む、他の急ぎの仕事が入る、というよう事情を調整しながら、すすめています。納期通り、できた時の達成感はたまらないものがあります。

みんなで力を合わせてひとつの仕事をやりきる。この達成感は中毒性があるぐらいの喜びです。これから作業をする材料を山積みにして、わざと見えるようにして、置く。そして、作業をして、目に見えて減らしていくことで、利用者とともに喜びを感じ

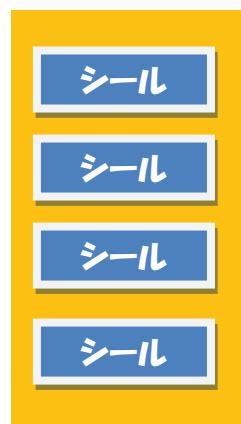
じ、なくなることで一緒に達成感を得るのです。その繰り返しの日々に、充実感が一定あるのです。

そのため、逆にそこから援助者側が深まらないというのが援助者側の特徴としてあるように自戒をこめて思います。下手するとただの「作業屋」です。ですので、この連載に書くことで、自分たちがしていることが何なのか?という問い合わせも多いに含まれています。そして、それが援助として、どのような意味のある行いであるかということを実証していきたいと思います。

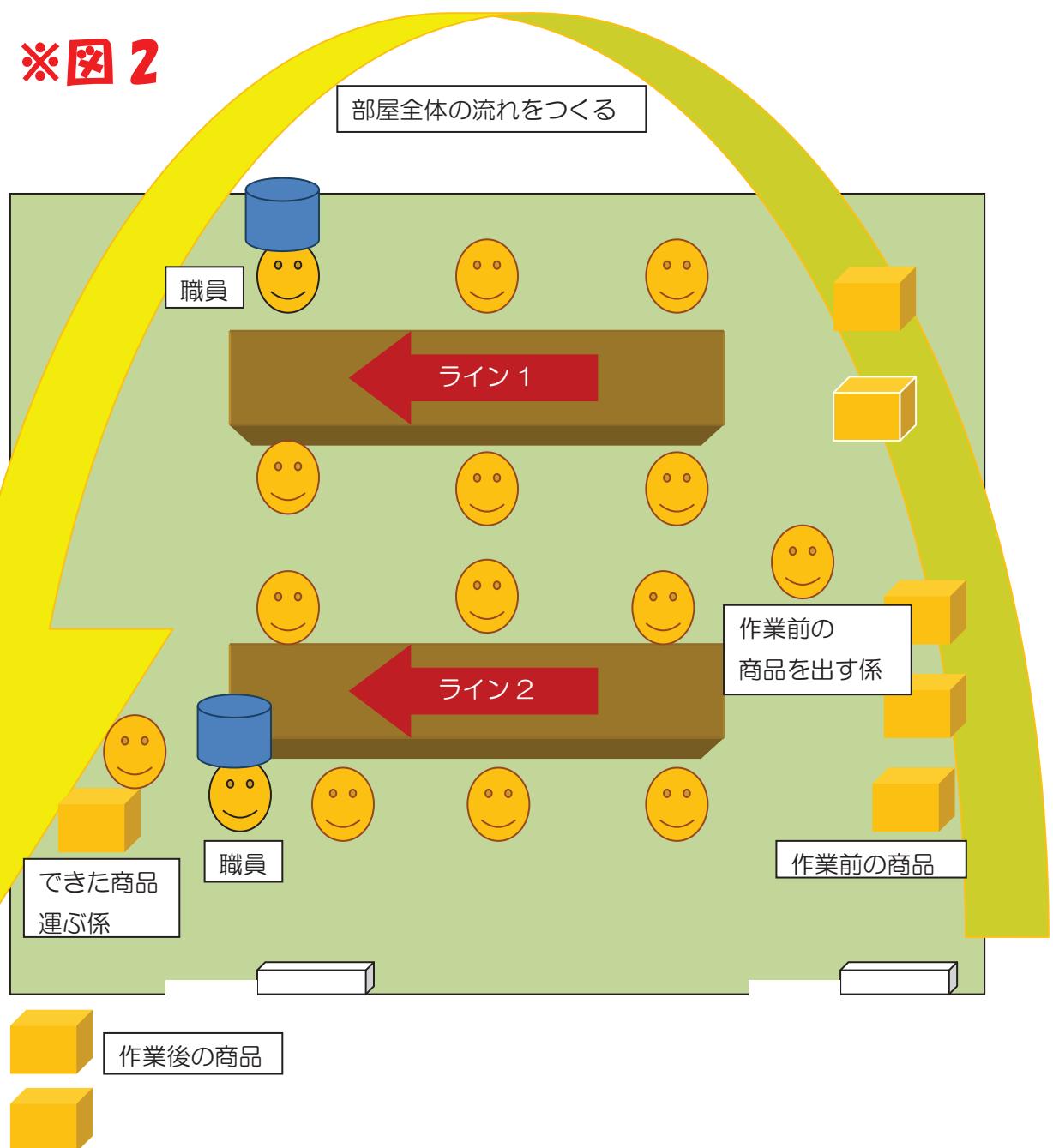
## ※図 1

### シールの台紙の折り方

※折り方、結構コツいるよ



2



※ライン2がよく流れるライン。入り口、出口に近く、職員も最終検品とライン上流のペースを見ながら、追いついていないところに入る。なので、スタート時は、上流でどんどん作り、ライン下流の最終作業者の仕事をつくる。ライン2職員はフリーに動く。ライン1は職員が作業に入って、ちょうどのペース。確実な作業を目指す。職員相互は常に全体を見ながら、最終検品作業をしながら進める。

### ※図3

| 月        | 火          | 水   | 木                    | 金        |
|----------|------------|-----|----------------------|----------|
| 作業A      | 作業B<br>作業C | 作業C | 作業C<br>作業A           | 作業D      |
| 作業B      |            |     |                      |          |
| 作業A 最終出荷 | 作業B 最終出荷   |     | 作業A 午前出荷<br>作業C 最終出荷 | 作業D 最終出荷 |

※作業場によくあるホワイトボードの内容。1週間の表を2週間分ぐらいホワイトボードに作っておく。注文が入ると一番下の欄に出荷予定を記入。それに基づいて逆算をして、作業にかかる日数と人員を四角で囲っていく。何時に何種類の作業が流れているかがわかる。

上図では、金曜日の半分の人数分がまだ作業の余裕があることになる。

# 社会臨床の視界

(4)

-社会の詩的言語としての臨床と表象-

中村 正 (立命館大学大学院応用人間科学研究科)

1. 悪魔化（悪の劇化）とヘイト・フォビア、そして感情共同体
  2. 「社会」の名のもとにーその両義性
  3. 社会詩学が紡ぐことー非対称で二人称的な関係性からたちあがる臨床と表象
  4. 「共生」の成り立つところ
1. 悪魔化（悪の劇化）とヘイト・  
フォビア、そして感情共同体

底冷えのする京都の冬は寒い。教室のヒーターは頭寒足熱とはならず、どうしても頭に熱がこもる。そんな12月末の社会病理学・臨床社会学ゼミ。ある女子学生が「イルカと人の関わりー生き物を食べ、生き物と暮らすことー」と題して研究発表した。「虐待、非行、犯罪などの社会病理現象だけではなく、少しひねったようなテーマを取り上げてみること」をかねてより指示してきたこともあり、学生たちの想像力は自由に跳ねる。個性的な発表だったので知的興奮が加わり、さらに頭に熱がこもる。

イルカ漁をする和歌山県太地町の人々を隠し撮りし、小さな入り江がイルカの血に染まる場面を誇張するなど一種のプロパガンダ的表現で、ラディカルな環境保護団体の価値観をもとに描いた映画『THE COVE (ザ・コーブ)』(2009年)のアカデミー賞長

編ドキュメンタリー賞を受賞しているが、評価は別れている)を手がかりにした社会病理学の理論的な報告であった。犬を食べる習慣、豚を食べない信仰、鯨を食する歴史などそれぞれ等価であるはずだ。「何を食べるか、何を食べないか、何を食べてはいけないか」という食行為は文化拘束的であるなどという具体に議論はもりあがる。ではどうしてこの報告は社会病理学の理論的なテーマになりうるのかと問いかけた。

このドキュメントの手法は「悪魔化」である。政治心理学の分野では「悪魔化」は古典的な手法として多用されてきた。「悪の枢軸」が記憶に新しい。これはJ・W・ブッシュ大統領が反テロ対策の標的に北朝鮮、イラン、イラクの3か国をあげ、その際に使用した言葉である。さらにこの手法は広がり、もっと身近にも確認できる。イルカを追い込む湾が血に染まることの過剰な強調は、「屠殺の場」として枠付けすれば理解できることとは別の異なる効果を持つ。また、「悪魔化」はそれが浸透していく前段階こそが重要で、小さな火種がたくさんある。領土をめぐる争い、宗教的な対立や敵対、経済制裁、不況で表面化する移民問題や人種問題にまみれた日常生活がある。こうしたこととをおして守るべき何かが構成されていくが、その際に、社会は感情共同体であるという側面が最大に活用される。社会

病理現象を素材として不安を喚起しつつ活性化されていく共通の感情の存在に気づく。他にも社会病理学の類似の概念に「道徳十字軍 moral crusader」、「悪の劇化 the dramatization of evil」「モラルパニック moral panic」がある。たとえば非行少年の素行調査で悪行の数々に焦点が当てられていく。これを「選択的注視」「選択的選別」もしくは「ラベリング」という。また、「道徳十字軍」は最近のマンガにおける性描写の規制が典型的である。東京都は「非実在青少年」なる言葉をつくりだし、18歳未満に見えるキャラクターが描かれたコミックを「不健全図書」に指定して表現の自主規制をもとめる条例改正案を提出した。漫画家、出版社、ジャーナリストらの反対が巻き起こった（詳しくは鏡裕之『非実在青少年論—オタクと資本主義』愛育社、2010年）。

さらに、虐待が増えていると報じることも同じである。一種の「モラルパニック」をひきおこし、虐待対応に関心が集まるが、現実には、児童相談所バッシングに墮していくか、無責任な通報が増えるか、単に児童相談所が制度や人員が不充分ななかで忙しくなるだけで終わる。また別の例として、青少年が関与する事件や家族をめぐる問題のたびに「心の闇」が喧伝されたことを思い出す。「育ちの過程」も問題だと専門家に評されることもある。こうして問題行動を「闇」と言い切り、自らではどうしようもない「過去」が取り沙汰されると行き場所のない不安となっていく。

煽られた不安を解消するために「嫌悪／恐怖 hate-phobia」も生起する（これは伊藤公雄氏の指摘である（『インパクション』2004年9月号）。「14歳がキレル」「17歳が危ない」などとされ、ユースフォビア（若

者恐怖）へと転化していく。同じようにして、ひきこもり、フリーター、ニート、オタクというアイテムが重なり、彼ら／彼女の現実とは正反対の「負の記号」と化して「嫌悪／恐怖」の構図にまきこまれていく。殺人が最も多い年齢は50歳代だが、若者が特別に危険視される。これには「地位違反」が作用していると社会病理学は考える。無垢であって欲しい、そんなことはすべきでないという青少年（=地位）への社会的期待が背景にあり、そこから逸脱した行動に対してラベルが恣意的に貼られる事態となっていく。

内閣府は「社会病理研究－安全・安心な社会を目指して－」と題する研究会を組織し、「嫌悪／恐怖」を煽りかねない社会病理の把握を進め、「安全・安心に関する特別世論調査」（概要は平成16年7月に公表された）を実施し、社会病理対策を軸にした「社会統治」を唱道した。実際に、それ以降、各地で「生活安全条例」が制定され、監視カメラが街頭に設置されていくことになる。その結果、以前にも紹介したように筆者の身近で冤罪事件が発生した（奈良で子どもに声をかけた世話好きの男性が誘拐犯と間違われ「声かけ防止条例」に違反したとして逮捕された事件）。

この「嫌悪／恐怖」は、社会の側の不安の投影であり、抑圧、否認、排除を体現した集合心性である。不安を煽る中軸に社会病理現象が名指しされ、表象される。社会病理現象はそうした宿命を背負って存在しているといえる。その典型は、主に本稿で扱っている逸脱行動現象である。たとえば非行・犯罪、虐待（子ども、老人＝親）、ドメスティック・バイオレンス、ストーキング行為、多様な形態のハラスメント、教師

の体罰、校内暴力、いじめ（学校ゼロトランス政策ともいわれている）という社会問題群である。

虐待殺人のたびに「鬼のように極悪非道な母親」と責められ、学校に文句をいうモンスター・ペアレントが喧伝され、心に闇をかかえた少年が犯罪に走り、DV 夫は何をしても更正するはずないと罵られ、悪魔化の対象となっていく。一定の事実はあるにせよそこで構築されて守られていく感情共同体としての社会の姿には敏感でありたいと思う。家族の人間関係から国家間関係にいたるまで、暴力・虐待を基軸にして不安、恐怖が造形され、ある方向性の渦へと駆動されていく。その趨勢をこうした社会病理学の言葉で照らしだせるとすると、すこしばかり冷静になって事態の実相を客観視することに社会臨床の視界は効果があるかもしれない。

## 2. 「社会」の名のもとに —その両義性

こうした問題群になんらかの対応が必要だということになり、この 10 年程の間に、矢継ぎ早に、各種の法律、制度や政策が構築されてきた。ここで進行している事態は、たとえば家庭内暴力を契機として「私的領域」「親密圏」に公共的関心が向かうことである。また、ハラスメント問題の拡大も被害者の「主觀」を主たる判断基準（審級）していく傾向もあり、感情的心理的な被害の斟酌が課題となっている。あるいは過労の結果、うつ病で自殺する事例（過労自殺）の責任と補償の課題も類似性をもつテーマである。一般的にいえば PTSD を伴う心理的被害の法的扱い方の問題である。本

稿の関心からいえば、非対称な二人称的な関係性において生起し、感情・心理を軸にした「主觀的被害」とされる不利益の内実を社会制度はいかにして捕捉していくのか、そのことから脱する方策はいかにして可能なのかという困難な課題としてこれは存在している。

また、悪魔化は捕捉の対象を拡大させている。先述した東京都の「非実在青少年」の仮定は性描写（エロ表現）を対象とするだけではなく、幼く見えるキャラクターの表現（ロリ表現）が対象とされておりその外延は広い。こうした表現に曝されることが性犯罪助長のおそれへと結び付けられていく。

これらは「内面」をめぐる「社会統治」として作用する。進行している事態は不安や危険とともに外延の広い、主觀にねざした、ステロタイプな社会病理観による「ネットワيدニング net-widening」現象である。捕捉されるのは何気ない「日常性」である。そこに公共的な関心が向かい、「社会問題」となる可能性のある部分が「おそれ」として定義されていく。さらに対策と解決のための「社会政策」が練られる。必要なならば「社会制度」が創出され、そこで作用する「社会技術」も開発され（その一部に心理臨床技法や対人関係技術も含まれる）、これらは合流して「社会統治」という文脈を成していく。さらに「社会安全」や「社会防衛」という言葉が流通する。こうして「社会」は生をデザインする。「造形力」があり、意識や行動を縁取る。「悪の劇化」は「声なき多数派 silent majority」に根ざして感情共同体である社会の輪郭をはっきりさせていく。

ここで留意しなければならないのは「社

会」の名の冠し方が両義的な点である。なぜならば、ネットワiddnigで捕捉されていく過程について、それをただ単に管理対象が拡大されていく事態として批判したいのではなく、そこで進行している「関係性の病み」を無視できないと考えるからである。母子臨床、学校・教育臨床、被害者ケア、地域臨床、加害者臨床、ジェンダー問題への対応などその対象には関係性と相互作用の「歪み」や「偏り」があり、非対称な関係性であるがゆえにそこには社会の矛盾、利益、権力、歪みなどが反映されていく。その結果、そこに何らかの要援助性が生成する点は見逃せない。こうした「関係性の病み」を支援の対象にすることで、個人へと責任を帰すだけの治療や臨床ではない方向性が志向されていくことを表現したくて社会臨床という言い方をしている。言葉を換えると、「介入と支援」、「治療と自立」などの相克する事項の組み込みがこの「あいだ」に求められており、その両極の均衡をとおして社会臨床が具体像を結ぶ。

この連載で「あいだ」「メビウスの輪」「不連続な連続」などとして述べてきたことは、臨床的な課題について、それを人と人の関わり方として押さえ、そこから見えてくる集団性、制度性、共同性、日常性などを把握したいと思ってのことである。出生から死亡までに渡って、そして遺伝子治療や脳死時代の生死にあっては出生以前・死亡以後までも含めて、家族関係はこうした諸点の出発点(アルファ $\alpha$ )であり、到達点(オメガ $\Omega$ )であるといえる。

この点に関わる話としてそのゼミの日、もう一人の女子学生が報告した。「命は誰のものか—高齢者の安楽死問題から」と題したものだった。葬儀屋からみた死の多様な

かたちを描いた『おくりびと』(滝田洋二郎監督、2008年、第81回アカデミー賞外国語映画賞)が関心を集めたことがある。それも紹介しながら、死がさかんに登場している現代社会の風景を切り取っていた。その中心は安らかな死と嘱託殺人の「あいだ」を見つめる話しだった。「スペゲティ状態はいやだ」「安らかな死を望む」「寝たきりになってしまう」「ぼっくりいきたい」などの巷の言葉は「健康な者の視点」であり、「非人間的な死」を想定していることになる。その対極にもしも「人間的な死」が想定されているとしたらどうなるのかと問題提起していた。長寿化・高齢化し、医療が高度化し、いのちの大切さ意識も高まり、高齢者福祉も整備されていく一方で、家族のあり方が変わり、格差社会が進行し、関係性が貧しくなっていく他方の現実があるとすると、こうした生と死の意識には現代社会そのものが投影される。悲惨ではない死のための「人間的な死」という特定しにくいものが前景化していくと、それは「人間的な死」への強迫にもなっていく。自己決定や家族の同意という名のもとに「社会」の意志や権力性が入り込む。それらは見えない轍のようにして機能し、思考、感性、意識、行動を造形していく。

また別の形のネットワiddnigが死をめぐる言説にある。亡くなった後も生きていたことになっていたお年寄りのことが話題になった。それらは「年金目当て」の単なる拝金主義でしかないのだが、その後も、意味づけとしては、「孤立・孤独」とともに悲惨さが強調されていく。「尊厳死、安楽死、平穏死、在宅死、孤独死」などという具合に拡大された表現が現代の死の様相として語られていく。「餓死」という言葉も散見さ

れる。ひとりであることが問題であるかのように拡大されていく過剰な意味づけは排除されるべきだが、他方で考えなければならないこともある。それは現代型貧困であり、「関係性の病理」である。相対的貧困という言葉も使われている。まとめていえば、現代日本社会の「関係性の貧困」が浮かび上がる。絶対的貧困がはびこる時代ではないからこそその点が注視される。

数年前に東大阪市で起こった母親嘱託殺人事件も関係性の貧しさが示唆される。長期にひきこもる男性と老いた母のぬきさしならない二者の共生体的な関係が事件の背景にある。名付ければ老人虐待死事例ではあるが、現代社会の関係性の貧困が示唆される。

社会臨床の視界からすると、こうした事項に埋め込まれている多義性や両義性こそ生の複雑さを表現しており意味がある。たとえば、終末期を過ごすためのホスピス、歓待の心を意味するホスピタリティ、敵意をあらわすホスティリティ、そしてホスピタル（病院）などの言葉はその語源を等しくするという（鷲田清一『<弱さ>のちから』講談社、2001年）。同様にして、家族をめぐる諸関係にも両義性がつきまとう。家族という親密な関係性は、愛情と憎悪の振幅をもつ場である。抜き差しならない二人称的な関係があり、赤裸々な生の営みがあり、感情共同体として存在し、ひとつのミクロなコスモスを成している。絶え間ない相互作用から生成する葛藤、紛争、暴力、逸脱もあり、法化しにくい自生的な秩序がある。生態学的になりたつ共同体がその幅を成り立たせている。

こうした家族関係を念頭において彼女の報告を聞いていた。生と死をめぐって家族

に負荷された質感あふれる主題がいくつもみえてくる。生と死の有り様に現在の「社会」の水準が投影されていく。親密圏や私的領域に関心をもつ公共的なまなざしとしての「社会」が対象を広げ、その作動場面を拡大しつつあることもみえる。臨床の社会性を問うということはその両義性を理解することを意味する。一方では、「社会」の冠し方が「社会統治」「社会管理」に傾斜する方向への文脈を成す事態がある。他方では、個人に生き苦しさの責任を帰属させていかないためにも「社会」という名付けをしておくべきだともいえる。社会臨床の視界はこうした両義性のなかにある。

### 3. 社会詩学が紡ぐこと —非対称で二人称的な関係性から たちあがる臨床と表象

社会臨床の視界には、対人関係や家族関係、コミュニケーションのスタイル、人生における重要な決定と選択などを造形していく見えない轍としての関係性、共同性、日常性、文化性、制度性が映る。一人ひとりの主体的な欲望であるともいえるように意識できる面とそのように強いる面の双方から「自由な選択」のようにしてあらわれる「社会」の欲望がみえてくる。それはまた他者の欲望の反映という側面もある。最も身近な他者は親密な関係性のなかにある。その他者たちとの共在する安定した日常生活となるために、家族という暮らしの場には生態学的なシステム安定性が不可欠である。一定の均衡を保つためには、そこには多様な非対称性が存在し、はまりのよい組み合わせのようにその関係性があり、共生体ができていく。この共生体は支えあう契

機、つまりケア行為に満ちている。誰しも現実である「生ー老ー病ー貧ー苦」があるからだ。しかし、あるが故に葛藤も大きくなる。

こうして臨床に「社会」が映る。「社会」が臨床を造形する。そして臨床に応えることで「社会」の人間関係のあり様が変化する。臨床は支配的な「社会の物語」との関係において、つまり、それとの相克、反抗、同調、不調への対応という衣装をまとって浮かび上がる。「社会」とその個人の折り合いの善し悪しは、反社会的、非社会的、脱社会的、向社会的、親社会的、過社会的という特性をもつ行動と心身のあり方としてあらわれる。「社会」のもつ支配的な物語は抑圧的というよりも同調を強いる傾向がある。さらに過剰な適応、つまり過社会的という面ももつ。「社会」のなかでの呻吟、軋み、軋轢として生き辛さが構成される。共同態の存立の仕方を重視するということは、ひとつのシステムとして関係性をみると意味する。システムとして安定する生態学的な共生体といえる。たとえば親子、夫婦、男女、きょうだいなどである。上下関係のような権力作用もあり、関係が安定する。社会的には、親の監護権や懲罰権、夫婦間の協力・扶助の義務、三親等内親族扶養義務、温情主義（パターナリズム）、保護責任などがあり、特別な関係特性が親密な関係性には埋め込まれている。つまりその安定性は、非対称性、権力作用、温情主義（パターナリズム）、相互扶助などで担保されている。

しかし、高齢者や障害者などの権利擁護に関する成年後見制度、家庭内暴力問題にかかる親子分離や保護命令制度、虐待事例の親権制限のあり方論議、共同親権制度問

題（単独親権制度の修正が必要なハーグ条約にかかるテーマで家庭内暴力事例の場合はどうするべきなのが争点となっている）、男女共同をはじめとしたジェンダー問題の浮上などの現代の課題は、その生態学的なシステムの不安定さが増大してきたということである。そもそも非対称な関係性において自由、公正、正義、権利などの社会規範はいかにして成立するのかという問題の具体像がこれらのテーマに含まれている。たとえば大学教授と学生という非対称な関係において自由な恋愛は成立するかということでもある。暴力や虐待という権利侵害が意識され、抑圧的に作用する共同体のある一面が浮上してきたともいえる。私的な関係性のなかにいかにして公共的な関心を引き入れるのかという新しい問題群である。

筆者の所属する大学院のミッションは「権利擁護を志向する対人援助専門職の養成 advocacy-oriented professionals」である。これは述べてきたような規範と権利という公共的な関心の実現こそが対人社会サービスの眼目であることを強調した表現である。臨床の倫理として共有すべきミッションとしておいている。その核心は「社会の支配的な物語」を多様な物語へと変容させていく手法、権利擁護を実現する対人社会サービスの用意と手立て、脱暴力の関係にむかう加害者臨床の技法、親密な関係性における公共的価値の実現への支援、こうしたことを可能にする制度の創出などが重要となる。臨床の実践はもちろんいかなる意味で効果があるのかという証拠にもとづく科学的な実践であるべきだと思うが、それとともにアート arts という側面もあり、対人援助技術としての技法・技巧も大事で

ある。つまり、サイエンスとアートを統合していくための臨床理論が要ると考える。本マガジン第3号で紹介した加害者臨床はその試みのひとつである。それをささえる認知行動療法、日常活動理論による変容モデル、関係性変容に寄与する家族療法、修復をめざす司法と心理の連携、臨床ジェンダー論、家族システム論などこれからも紹介していきたい統合すべきアプローチの諸相がある。

臨床の場でおこっていることを伝える言葉は多面的であった方がいい。研究者の語る観察言語、記述言語、分析言語だけではなく、当事者が表現する詩的言語がある。そこには身体や表情を伝える非言語的なものも含まれる。そうしたことの総体を理解するためにはやはり多様な媒体があるといい。芸術的とまで限定しなくてもよいと思うが、臨床にはこうした詩的表現がよく似合う。そこには関係性が表象される。関係性であるがゆえにしたがって表象には社会と他者の欲望も映しだされる。詩的言語を感受するスクリーンのようにして臨床家は転移、逆転移、トラウマ症状、行動化・身体言語などを把握する。いったん臨床家は自らの心のスクリーンにそれを映す。その照らし出す作業の感度を高め、幅を広げるために多様な表象の力を借りることが臨床家には必要だと思う。その感受能力は臨床家の倫理と教養の相関でもあり、臨床家自身の生きる場の関係性が影響する。筆者はそのための想像力を加害者臨床で出会う逸脱行動それ自体が宿す事項はいうまでもなく、映画、パワースポット、小説などからも得ることが多い。

たとえば『落下の王国』(原題: The Fall。印英米合作、2006年。監督はターセム・シ

ン) という映画がある。これは共に紡いでいく物語そのものである。無声映画のスターントマンをしていた若いロイは、撮影中の大怪我で半身が不隨となる。弱り目に祟り目で主演俳優に恋人も奪われた。自暴自棄になり自殺を考えている。落胆激しい最中に彼の病室に突然現れたアレクサンドリアは東欧からの移民少女である。彼女はオレンジの収穫中に木から落ちて腕を骨折し入院していた。ロイはベッドの上で釘付けになっているので、少女に劇薬を薬剤保管室から盗ませ、自殺を企てている。ロイは信頼関係をつくるためにアレクサンドリアに自作の物語を話すこととした。極悪非道な悪者のために、愛や誇りを失い、共に失意の極みのなかを生きていた6人の勇者達が力を合わせその悪者を成敗するために果敢に挑戦する物語である。その少女を操るための話しさは少女の生きようとする力で徐々に変化していく。物語を聴きつつ、その物語の筋を変更させ、ロイも生きる希望を得る物語へと筋書きが変容し、自分自身をも救う美しい物語となっていく。共に紡いだ話しさは美しい映像とともに感動的なものへと変容していく。



さらに『チーズとうじ虫』(加藤治代監督、2006年)もこうした文脈でみると面白い。「私が考え信じているのは、すべてはカオスである、すなわち、土、空気、水、火などこれらの全体はカオスである。この全体は次第に塊になっていった。ちょうど牛乳のなかからチーズの塊ができ、そこからうじ虫があらわれてくるように、このうじ虫のように出現してくるものが天使たちなのだ。—メノッキオ』(『チーズとうじ虫』カルロ・ギンズブルグ著、杉山光信訳、みず書房。イタリア出身の歴史家、カルロ・ギンズブルグが著した歴史書)。メノッキオは、16世紀のイタリア・フリウリ地方に住む粉挽き屋である。粉挽き屋の物語に託して伝承されてきたミクロコスモスを復元したのがこの本である。そこでは農民のラディカリズムの伝統の中に息づく古くかつ新しい世界と生き方が描写されている。チーズからうじ虫が湧くという農民の生活実感はローマ教会の教義に背く。「無からの創造」に対置された農民の世界は異端のコスモロジーとしてカトリックから抑圧された。

この書物に刺激され、映画製作には素人である加藤治代が監督を務め、ガンに侵された母親の闘病生活と死を追った。病を抱えつつも笑顔を絶やさない母親と、高齢の祖母との何気ない日常生活が田舎の自然とともに表現されている。闘病の壮絶さや感傷に陥ることなく、家族との時間を静かに見つめるだけの映像であり、何気ない日常性があるだけだ。過剰なドラマ化は施されていない。ガンのための保険をかけ、その保険金をどう使うかなどのたんたんとした話もある。母の発病から3年後に撮影を始めたという。畠仕事に精を出したり油絵を描いたり、限られた命を精一杯生きる母と、高齢の祖母との何気ない日常風景である。母の死後、加藤の撮った映像を繰り返し観ながら娘の思い出をたどる祖母と自身の心情が記録されていく。祖母、母、娘、孫の4代にわたる関係も映し出される。亡骸のまわりで孫が騒ぎまわる光景がほほえましい。その周りをはね回る、死を理解できない孫は天使のように無邪気である。世代が重なり、時間が死の場面に凝縮されていくが、そこではまた幼い生命である孫の存在をとおして連綿と続く何かを感じることができる。ある小さな家族の物語のなかからミクロなコスモスそのものが浮かび上がる。こうして微細なこと、私的なこと、日々のことの質量感が見事に描写されている。

映画はあくまでもアート／表象でしかないが、先に指摘したようにアートは臨床と重なってくる。物語ること、記述すること、描写することが意味づけのためには重要である。「事実は小説より奇なり」というがごとく、事実をよりよく認識し、感受するためにも小説を読むような感情的知性

emotional intelligence が要る。臨床という実践を共にし、変容への養分となることをとおして、その過程は共に紡ぐ物語を生成させる。とりわけ関係性の複雑さが顕著な親密な関係性では、「家族は小説より奇なり」といえる程である。芸術であれ臨床であれ、そのアートは「つながりの異なるかたち」を浮上させる。しかし臨床の課題が生成する関係性は両義的である。たとえば愛情と憎悪は同居する。逆向きにいえば、「関係性の病理」もみえてくる。それらは本マガジン第3号でも言及した「歪められたきずな」である。再掲しておくと、「トラウマ的な絆形成 traumatic bonding」、歪んだ愛着が母子関係に沈着し「共生体」が宿す「(代理) ミュンヒハウゼン症候群」、アルコール依存症の夫とその世話を支えている妻という関係を表現した「共依存 co-dependency」、それを一般化した「被虐的世話役 masochistic caretaker」「道徳的マゾヒズム moral masochism」である。「ストックホルム症候群」もある(スウェーデンの銀行に強盗に入って籠城した犯人とそこに人質となって監禁されていた女子行員が後に結婚したという事例)。これは「攻撃者との同一化」の事例である。こうしてみるときずなとしての関係性には一筋縄ではいかない「メビウスの輪」的な事態があることがわかる。

親密な関係性にはケア行為をとおして共生する側面と、そこにある非対称性に根ざして暴力や虐待が生成する側面の双方がある。感情の揺れも大きく陽性感情と陰性感情の双方の振幅が含まれる。しかし同時にその関係性には個人としての人権をもった者同士が関わり合っている。私的で親密な関係性とはいえ、社会的に要請される権利

(正義) の課題がある。そこにある暴力や虐待を加える者への脱暴力に向かう「介入と支援」を根拠づけることはいかなる論理で可能となるのか、私的関係における公共的な価値の実現の論拠立てというテーマとしてこれは存在しており、親密な関係性に賭けられた公共性をめぐる争点として一般化できる。「法は家庭に入らず」ではすまなくなってきたということである。ここで対象としている家庭内暴力への介入の法的根拠づけはもとより、ネグレクト系の問題への対応(無視や無関心を対象にしてケアへの動機づけを行う課題の困難さ)、親子関係の新動向(離婚後の親権のあり方問題や虐待事例における親権の制限)、子どもへの臓器移植に同意する家族の権限の根拠等、枚挙に暇がないほどの争点が現代社会ではこのラインにおいて数多く生じている。

まさにミクロで私的で相対する二人称関係のなかに、現代社会の人間の存立にかかる主題が生成している事態である。そして今後も継続して考えていきたいことはこの関係性における事項が「一回性」であることだ。ともにアートとしての臨床と表象はこの点にかかる特性がある。対人援助は「助けることの科学」でありたいと思いつつ、それが実践の科学であることにかかる「一回性」を視野に入れた臨床性と科学性の統合が目指されるべきだということになる。

#### 4. 「共生」の成り立つところ

ここで述べていることは心理臨床においても反省されている。たとえば、「臨床心理学では、実践活動を行うことで、心と社会、あるいは個性と社会性の矛盾に対処してき

た。“治療構造”はこのような社会的枠組みのひとつである。・・・『心』と社会を一旦切り離し、その構造内で個性的な『心』を対象とした心理療法を行うことになる、治療構造は社会に閉じた閉鎖的枠組みである・・。治療構造によって『心』を社会から切り離し、そのなかで『心』の深層を扱うといった、日本の臨床心理学が採用してきた従来の方法では対応できない問題が多くなってきた」という。心理臨床の成り立ちの根幹でもある治療構造化への反省を提起している。社会臨床の視界と重なる。閉鎖空間を開きつつ、社会の臨床の方へと実践をどのように劈開しうるのかが課題となることを示唆した指摘である(下山晴彦「社会臨床心理学の発想」、『講座臨床心理学6－社会臨床心理学－』、東大出版、2001年)。

そこで、その開き方が課題となる。手がかりは共同性の存在の仕方を把握することだと考えている。たとえば「甘えの理論」(土居健郎)、「述語的世界」「共通感覚論」(中村雄二郎)、「あいだの病」(木村敏)、「日本語臨床」(北山修)、「臨床哲学」(鷲田清一)の仕事であり、医療・病気や障害の人類学である。人間学的な精神病理の把握は、社会と文化に拘束され、抗い、翻弄され、躊躇する心的、言語的、精神的な事態を把握しようとしたものであり、共同性と関係性の実相を示すものとして社会臨床の視界に収めたいと思っている。

膨大な彼らの研究の一部だけの引用では失礼であるが、例え木村敏氏は語る。「たしかに、個人の異常をその根源にまで達するようなしかたで問おうとするならば、個人がそこから、そこへ向かって生い立ち、その中で生きて行かなければならぬ社会全体、時代全体、あるいは人類全体の体制の

問題を避けて通ることは許されない。ただここで、個人の異常とは社会がそうみなしているだけのものであるから、社会のほうを改革すれば異常が異常でなくなる、という議論のもって行きかたは、あまりにも近視眼的である。また、社会が狂っているから個人も異常になるのだというごとき安易な断定にも、この異常な現代にあって正常な精神を持っていること自体が異常なのだという式の機知に富んだ逆説にも、充分に警戒してからなくてはならない。社会の異常と個人の異常との関係は、ふつうに考えられているほど単純なものではない。」

精神の病に即して木村敏氏は「外的不承認」と「内的不承認」という言葉で指摘する。「外的不承認」とは、相互作用において常識や合理性を持たない人に対して社会の側がその相互作用者としての能力を認めない事態を指す。精神の病において相互作用のなかで時に示される「非常識な行動や非現実的で不可解な妄想」それ自体が問題なのではなくて、そういう行為を選択せざるを得ない事情が問題になる。当人にとって「常識や合理性がもはや有効な拘束力をもちえなくなった危機的な事態」である。それが「内的不承認」である。

『生きて行くのに絶対必要な感覚』が、『だれもがもっている基本的な筋道』が、『確かな生命感情のようなもの』が、『生活の勘のようなもの』が自分には欠けているという絶望的な苦痛が表現される。精神病者に対する社会の側からの排除と差別にもまして病者を逃げ道のない窮地に追い込むのは、自分がみずからの存在の根拠を確認しえないことについての、この徹底的な自己不承認なのである。・・・個人がみずからの根底における常識と合理性の欠如をみずから告

発するこの姿勢は、そもそも何なのか。この姿勢は、その個人が人類の一員として、人類がその長い歴史を通じてなしつけてきた自然からの離脱、存在の個別化、常識と合理性を軸とする文明の形成などという過程に、みずから実存において参加しようとする努力を示すものではないだろうか。・・・彼の属する社会の文明の程度が高く、合理化が進んでいればいるほど、彼に課せられる合理的個別化の課題はいつそう酷いものとなり、彼はそれだけ容易に自己自身に対して絶望しなくてはならなくなるだろう。」(木村敏『人と人の間－精神病理学的日本論』弘文堂、1973年)。

このくだりは反精神医学について言及した箇所である。個人化する社会が歴然と進展しており、自己責任の飽和する現代ではあるが、その臨床性に社会の課題を組み込むということは慎重でなければならないという指摘であり、社会臨床の視界にも収めるべき点である。

また、共同体のことにつかわり、そこにある関係性の様態を把握する中村雄二郎氏の「述語的同一性」論も参考になる。主語がなくても話が通じるという日本語的特性を考えると理解しやすい。主語的同一性による認識ではなく、「一つの主語に同時にいわば無数の述語が見つけられる」、「述語的同一性による思考は、主語的同一性にもとづく通常の論理によって統一されている現実を問い合わせ直し、惰性的に統一された総体に亀裂を与え、それをばらばらに分解する力をもっている」、「私が述語的世界というとき、それはなによりも、この世のさまざまな拘束、束縛、約束事、制度、法則などによって支配されず、そこから解き放たれた世界、カオス的でもあれば欲動的でもある

ような世界を指している。しかしそれは、まったく無垢の世界ではなく、とくに言語とのつかわりのうちで、その原初性があらわれる」のような、「場所のなかでの具体的な思考」だという。別途、本稿でも隨時紹介していきたい臨床の人間学である。もちろんこれだけではわかりにくいが、共同性の存在感の大きい日本文化の様態を把握することができる(中村雄二郎『臨床の知とは何か』岩波新書、1992年、『述語的世界と制度』岩波書店、1998年など)。女性たちの世代をつなぐ家族のケアという日常性がそうした述語的世界となっている映画『チーズとうじ虫』はわかりやすい。非対称性という弱さが関係性のつよさに展開する述語的世界だと思えてくる。

まとめいえば、これらは共同性を把握する仕事である。「社会」の両義性をとらえるということと重なるものであり、ミクロな臨床的課題から生成する世界の記述がそこに係留されていくべき対象である。冒頭に紹介したような感情に傾斜していく「悪魔化、悪の劇化、道徳十字軍、モラルパニック」という「流されや巻き込み」をとおして構築されるリスクも背負いつつ存在している共同性は、しかし「生きる場」としてのミクロな世界を成している。そのミクロな世界は非対称性に満ちているが、そうであるがゆえに暴力・虐待・支配ではなく、共生する方へと切り替えていく潜在力もまたこの非対称な世界からしか生成しない。本マガジン第2号で記した加害者臨床も同じ主題であり、逸脱行動問題をかかえる人々の社会再統合や社会的包摂もむかうところはこの共同性への帰着でしかなく、そうして広がる振幅が寛容さ、和解そして共生を可能にする(「共生」という言葉はさら

に検討されるべき論点がある。たとえば、多文化共生という言葉はマジョリティの使う言葉であり、マイノリティからみた共生の内実は「同化」とみえるので、「異化」の視点が不可欠なことに配慮する必要性、そもそも共生という生態学的な言葉を社会や人間を語る際にいかに展開しうるのかなどである。別の機会に吟味することとしたい)。

「社会」はそうした意味での可変性をもつ。非対称さのなかに規範と権利と正義を根付かせることはこうした作業を経ることとなる。非対称性を帯びた他者たちとの関係性を豊かにするためにもこれから連載において大事にしていきたい人間学的な臨床論である。

臨床／表象／研究は筆者にとっては「メビウスの輪」のようにつながっている。何を自由に書いてもいいというこのマガジンは、カオスのようになって多事錯綜している筆者の頭を整理するのに極めて役立っている。今回も随所に挿入してきた映画の表象であるが、筆者にとっては唐突ではなく、社会臨床を考える上では不可欠なのがこうした非言語的な表象である。他にもたとえば、日常性に焦点をあててみるとさらに社会臨床の視界にはいろんなことが飛び込んでくる。ミヒヤエル・ハネケの『白いリボン』を最近観たが、彼の他の作品、『ファニーゲーム』『隠された記憶』『ピアニスト』なども社会病理の諸相にあわせて記していくべきだと思う。日常性に潜む恐怖と暴力と悪性が浮かび上がる。同じようにして、暴力、虐待、虚偽などにまみれた日常性をむき出しに描いたラース・フォン・トリアの『マンダレイ』『ドッグヴィル』はアメリカ民主主義の虚構性をも射程に入れた面白いものである。もちろんこうした映画の表象

は臨床に表現されることになる関係性をめぐる社会的事実の見方それ自体の感度を高めてくれる。また、こうした表象は常に具体的な描写となり、臨床の「一回性」と重なる点がある。述べたようにこれは観察言語・分析言語だけではなく詩的言語として表現されることの重なりのなかで活きてくる。社会性をまとう臨床をとらえるので「社会詩学」とでもいえるかもしれない。だからこそ臨床と表象の交錯をみていくことは筆者にとっては有意義である。非言語的な世界のもつ共感や共生が生成する感情共同体のもつ豊かさともいえる。冒頭に記した悪魔化だけではない肯定的な側面もあるので、ここにも感情共同体の両義性がある。ひきつづきこうしたことも組みこみながら、非対称で二人称的な関係に発生する臨床を対象にする際の、こうした意味での複数の言語の重なりをとおして、質的研究か量的研究かという二元論ではない科学的なアプローチやエビデンスとの関連もまた考えていきたいことである。4回の連載をしてみてますますこうしたイマジネーションは広がるばかりである。このマガジンの編集に努力していただいている方々への感謝の言葉である。

なかむら ただし  
(社会臨床学・社会病理学・臨床社会学  
／2011年2月25日脱稿)

# ケアマネの出会った 家族たち

4

## 木村晃子

居宅介護支援事業所 あつたかプランとうべつ

### ～真剣勝負～

私には、この春中学を卒業する息子がいます。息子が保育所に通っている頃、将棋を覚えてきました。覚えたての将棋がしたくてたまらない息子は主人に相手をしてもらって勝負をしていました。まだ、初心者、しかも保育所児童。主人は、「飛車」「角」抜きで、などとハンディをつけて勝負をしていました。それでも、息子は負けてしまいます。勝負が決まりそうになると、悔しくて泣いたりぐずったりする息子を励ましたり、叱ったりした記憶があります。ハンディがついているにも関わらず負けてしまうことに、悔しさ倍増だったのかもしれません。ある時、私の父と息子が将棋の勝負をしていました。何気なく見ていると、父は「飛車」も「角」も抜いていません。しかも、その指し手はとても保育所児童を相手にしているようではなく、言ってみれば

大人げない真剣勝負です。案の定、すぐに勝負は決まります。息子の負けです。ところが、息子は泣いたりぐずったりはしません。「もう一回」と催促して、何度も挑戦します。決して勝つことはできないのですが、真剣に相手をしてくれる父に、息子も泣くことも忘れ勝負に挑んでいたのでしょう。それもまた、懐かしい思い出です。今、父は病気で寝たきりになってしまったので、将棋を指すことはできませんが、息子は父の指し手を覚えているようです。今、息子と主人が勝負をする時には、ハンディなど付けていたら、主人の方が負けてしましますから、ハンディなしの真剣勝負です。勿論、負けても泣くことはなくなりました。

人は、自分の力をディスカウントされずに、ちゃんと認めてもらうことで自分の力を出し切ることができるのかもしれません。

### ～夫婦の二人三脚～

子供のころ、仲の良い友達と二人三脚をした記憶があります。二人のリズムが合うと、弾むような歩調で顔もほころびながら進み、タイミングがずれると歩調も怪しくなって、前進しなくなります。どちらかが転んでしまうと、立ち上がる方も、立って支えている方も身動きがとりにくいものです。

二人の足を結んでいるからこそその制約がある、うまく進めると楽しいし、バランスを崩すとやりにくい、なんだか夫婦で歩む人生のようです。夫婦はやがて、その紐をほどき（別れが訪れ）一人で残りの人生を歩むことになります。その時に感じるのは、自由になった歩きやすさでしょうか。軽いけれども、もう片方の足がバランスを失って次の一步を踏み出すため戸惑いかもしれません。せめて、二人三脚をしている間だけは、悪戦苦闘しながらも、時にこぼれる笑いを堪能しながら進んでいけるのがいいなと思います。

88歳の礼子さんは、85歳の夫トメ吉さんとの二人暮らしです。10年ほど前から、徘徊や昼夜逆転などの認知症状がみられるようになりました。トメ吉さんは妻の変化を認知症ではなく、老いとして受け入れました。また、礼子さんが出来なくなつたことを自然にカバーする形で、家事全般がトメ吉さんの役割となっていました。そんな夫婦を近隣に住む、娘や息子たちは付かず離れずの距離感で手助けしていました。礼子さんの認知症はゆっくりでしたが確かに進んでいました。最近は、昼夜逆転、夜中の徘徊が毎日のように続くようになり、起きている間は常に幻視が伴うようになっていました。トメ吉さんも妻の状態を、もはや老いとして受け入れることが困難なままでに疲弊していました。

老親の生活の助けになれば、と娘は介護保険サービスの手続きを始めました。認定の申請、ケアマネとの調整、あつという間に礼子さんのディサービス利用が決定されました。ところが、礼子さんがディサービスに通うことはありませんでした。

娘は、母がディサービスに参加している間、父の介護負担を減らせるのではと考えていました。けれども実際には、礼子さんだけでなく、トメ吉さんも娘の提案には同意しませんでした。それどころか、娘が良かれと思って、老親の元へ頻繁に訪問し家事などの手助けをすればするほど、トメ吉さんは娘の協力を固辞するようになりました。

トメ吉さんは、前夫と死別し子供二人を抱えた礼子さんと20代の前半に結婚しています。まだ若いトメ吉さんと礼子さんに実子が授かっても不思議はない時期でした。けれども、二人に実子はありません。トメ吉さんは「自分は貧乏に生まれ、早い時期から奉公に出されていた。学校にも通えなかった。だから、子供たちにはきちんと教育を受けさせたかった。自分が頑張ることで、妻と子供たちが幸せになればいいと思っていたから、自分たちの子供が欲しいとは考えもしなかった。」と語ります。妻子のために必死に頑張ってきたトメ吉さんの人生が見えました。そして、「自分はどんなに苦しくてもいい。子供たちに少しの財産を残して、妻は自分ができるだけみてやりたいと思っている。」と続けます。

娘が良かれと思って手配した介護保険制度は、「他人に迷惑をかけるな。」という時代を生きてきたトメ吉さんにとっては、訳のわからない制度です。これまで、必死に妻を支えてきたトメ吉さんは、急に自分の役割を失ってしまったのでしょうか。二人三脚で転んでしまったのは、礼子さんではな

くトメ吉さんでした。礼子さんは、トメ吉さんの立ち上がりを待っていたのです。

ケアマネは、いずれ二人が紐をほどく日のことも想像しながら、少しづつ紐を緩めて歩く練習が必要だと思いました。そこで、トメ吉さんができること、娘に協力してもらいたことを話し合いました。また、老いと捉えていた認知症について、トメ吉さんにも理解できるように少しづつ情報と対応のコツを伝えました。間もなく、娘の協力や介護保険サービスを取り入れて、トメ吉さんは礼子さんとの新たな二人三脚を再開しました。「皆が勧めてくれるうちに（ディサービスに）行ってみた方が良いよ。」というトメ吉さんの言葉が後押しになって、礼子さんはディサービスに通うことになりました。今では、週4回もディサービスに楽しく通う事ができ、BPSD も落ち着いています。トメ吉さんも、一人の時間を、新たな気持で礼子さんを迎える時間に変化させることができました。

### ～山あり谷あり～

礼子さんとトメ吉さんの穏やかな生活が続いていました。けれども、人生は山あり谷あります。トメ吉さんが体調を崩して入院してしまいます。近隣に住む娘や息子の協力のもと、礼子さんは自宅で生活を続けることができました。

体の不自由さが残りながらも、療養を終え自宅に戻ったトメ吉さんは、なんとなく以前よりも頑固になってしまいました。思うようにならない自分の体になのか、イライラした態度が妻の礼子さんや娘たちに向かられます。

心配した娘が頻繁に手伝いにやってきますが、トメ吉さんのイライラは落ち着かず、その怒りはいつも娘に向けられていました。そんな矢先、今度は娘も体調を崩してしま

います。娘の手助けも受けられない状況になってしまいました。

自分の思うような協力が、娘や息子から受けられないと感じたトメ吉さんは、子供を頼らず自分たちだけで生活していきたい、と考えました。不自由な体を駆使して家事をし、妻の介護を始めます。食事の支度、妻をディサービスに送りだす、帰宅後の妻の介護、一人で悪戦苦闘します。退院後は、トメ吉さん自身の身の回りの事にも手助け必要だった状態にも関わらず、今では、ほとんど自分の力で日常を送ることができるようになりました。時間がかかるても、負担があっても思った事をやり遂げる力がトメ吉さんにはあるのです。

体調を崩した娘が、夫婦の元へくることも少なくなりました。トメ吉さんに、今後どんな生活がしたいか、聴いてみました。すると、「母さん（妻礼子さん）の世話は自分がやっていく。時々変なことも言うけれど、母さんがディサービスに行ってしまって一人になるとさみしい。ずっと、二人と一緒にやっていきたいと思っています。」そんな言葉が出ます。トメ吉さんの言葉に、礼子さんは「父さんが今まで一生懸命子供を育ててくれたことは本当に感謝している。子供たちも少し勝手気ままに自分たちの生活をしているところもあるから、父さんが怒ってしまうのも、私は理解できます。子供たちと行き来ができなくなるのは、さみしいです。でも、私は父さんと一緒にいたいから我慢します。」と話します。その口調はとても認知症の礼子さんとは思えないのです。礼子さんの認知症は進行していて、幻視があったり、今、話しをしている内容も忘れてしまう、そんな状況でした。けれども、トメ吉さんは、自分たちの生活についてケアマネに相談する時には、礼子さんのディサービスを欠席させ、自分の隣に礼

子さんを座らせ、「これからのこと話をすから、一緒にちゃんと聞いていなさい。」と説明します。礼子さんことをこれまでと変わりなく「母さん、母さん」と声をかけ自分の思いを話している時に、対応している礼子さんの言葉は至極道理が通っているのです。トメ吉さんも、礼子さんが認知症であることは忘れてしまっているかのように、夫婦としてふるまっています。

「母さん、お客様なのだから、お茶を入れてきなさい。」そんな言葉もかけます。礼子さんは、お茶の入れ方などすっかり忘れていました。けれども、最近は電気ポットに水を

入れそのスイッチを押すところまでできるようになっています。その後はお湯を沸かしていることは忘れ、お茶が出されることはありませんが、台所で考えながら動作している礼子さんは、トメ吉さんや娘に頼り切っていた以前の姿とは違います。

今、トメ吉さんのやや頑固な考えが、子供たちとの関係を疎遠にさせていますが、その事が礼子さんに妻としての姿を呼び戻しているようにさえ映ります。勿論、礼子さんの認知症が改善されているわけでもなく、日常生活動作が自立に向かっているというわけでもありません。ただ、トメ吉さんが、礼子さんを「認知症」というフィルターなしに、接しているほんの短い時間、礼子さんはトメ吉さんにとって欠け外のない「妻」の姿になっているのです。

認知症ケアのあれこれが色々なところで説かれます。勿論、ケアのポイントは否定しません。けれども、このご夫婦をみると、「認知症の妻」ではなく、「長く連れ添った妻」という気持ちで接することが、礼子さんに対する尊厳であり、礼子さんの力を最大限に發揮させているように感じます。

そして、同様に、体が思うようにならない父親の譲らない頑固さに、「父さんが、自分の力でやっていける、子供に頼りたくない、と思っているうちは、頑張りがきくのだと思います。父さんからのSOSが出るまでは、好きなようにさせます。」と言って遠くから様子をみている娘の対応も、トメ吉さんの力を引きだしているのでしょうか。

ディスカウントされずに認められること、それがエンパワメントになるのだと感じます。

「きみに読む物語」という映画を観たことがあります。その映画の場面が、礼子さんとトメ吉さんと重なることがあります。

人生は山あり谷あり、それでも、少しずつ前に進んでいっている。愛する人と一緒に・・・

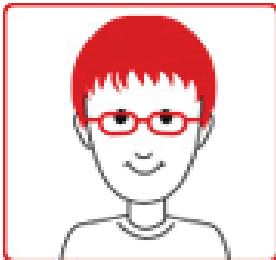
\*プライバシー保護の観点から、事例は事実情報を加工しています。

# 街場の就活論

Vol. 4

—新卒採用に今、何が起こっているのか—

団 遊 (だん あそぶ)



アソブロックという私が代表をする会社でも、2012年春入社の新卒採用を始めました。今回のテーマは総選挙。学生自身が投票で選考通過者を決めるという、たぶん日本初の試みです。

## 社会の役に立ちたいという名の呪縛

この間「オープンキャンパススタッフへの応募が多くて、足切りをしました」という大学職員の声を聞きました。オーキャンスタッフとは、高校生が受験前にキャンパス見学に来る際に色々とお手伝いをする在学学生スタッフのことですが、僕が学生の頃は、応募が殺到するようなものではなかった気がします。

類似ケースとして、高大連携を目的とするサークルやボランティア活動も増えていると聞きます。こちらは、大学進学を控えた高校生に先輩が何かとレクチャーする活動体です。実際に高校に行って授業をしたり、イベントを開催したりします。

「社会の役に立ちたい」「人のために何かをしたい」というのは、就職活動の志望動機で近ごろや

たらと良く聞くフレーズです。しかし、オープンキャンパスやボランティア活動の話を聞くと、これは就職活動生に限った話ではないのかもしれません。大学入学時から、もしかするとそれ以前から、「誰かの役立ちたい病」の種は根をはっているのかもしれません。

ちなみに、就職活動の選考面で言うと、企業はこの動機をはっきり嫌います。経年で見渡して活躍できる若手になる確率が低いからです。全員というわけではありませんが、このタイプの学生は「利益を上げる」ことに罪悪感を持っている傾向があると言います。稼ぐことよりも役立つこと、非営利活動に魅力を感じるので、飯を食うための本業よりも、CSR活動などに興味を示したりします。それは、入社後の配属希望にも表れます。そういえば先日、日本航空の立て直しに向け舵を取る稻盛さんが「自分が来た当初は稼ぐことは悪だ」という雰囲気があって困った」と回顧をされてい

ました。

「役に立ちたい」ならば、まず「役に立つ自分」になるのが先決です。行動力はあるけれど、具体的なスキルも知恵もない集団が寄り集まても、できる援助はあまりに小さいと思います。それどころか、ときに、迷惑な場合もあります。「誰かの役立ちたい病」が蔓延しても、相変わらず献血への協力者は少ないこの国の病巣は、いったい何を栄養分に肥大しているのかと不思議でなりません。

## 山口百恵ちゃんのはなし

その対極ともいえる、私の中では至極まっとうな学生が、大学卒業後、仕事人になりゆく様を、少しご紹介します。主人公は、山口百恵ちゃん（仮名）と言います。この実話物語は、新卒学生が就職活動で使う「リクナビ」に連載されています。連載開始に当たり、リクナビに私が書いた序文の抜粋がこちらです。

---

みなさんこんにちは。団遊です。さて、今回からは短期集中連載をします。連載を担当するのは、ある女の子。名前を仮に、山口百恵さんとしましょう。この連載は、山口さんの社会人デビューから1年間の成長の軌跡です。

執筆者である山口さん、実は2010年3月まで僕のインターンをしていた女の子です。彼女は、美術系の大学に通っていて、2年以上、僕のインターンをしていました。そんな彼女も、ご多分に漏れず、就職を目の前に悩んでいました。「やりたいことが特がない」のです。

相談を受けても、僕は別に何のアドバイスもしませんでしたが、彼女は考えた末に、先生になることにしました。運よく試験を通り、春からある私立小学校で美術の先生を始めました。

別に、すごく教師になりたかった、わけでもないんです。ただ「動かなきゃ」という気持ちはあ

った。それで、教師になった。そんな人って、実は多いし、それでいいと思うんですね。

世の中の就職活動でよく「自己分析」という言葉がありますが、あれって「やるだけ無駄だ」と言う人も結構います。何事も「やり過ぎては意味がない」というのが僕は正解だと思いますが、分析したところで、自分の持っている仕事観に出会える可能性は、それほど高くないというのも、また真なりです。彼女もそんな葛藤の中で、教師になった。

そんな彼女と、僕は文通をすることにしました。僕のインターンをした子は、すべからく卒業後1年間、僕に通信を送ること、ガルールになっていくのですが、その毎月の通信を、彼女の許可を得て、ここで連載しようという、そういう試みです。

果たして彼女が仕事とどう向き合い、どんな風に心が変化していくのか。それでは早速第一回の原稿を、と思ったら、今号もすでに相当長文なので、次回請うご期待！

文責／団遊

---

連載開始当初は、誰に見向きもされない、私の趣味のような連載（転載）でした。しかし、彼女はこの連載の中で、人は自らの意思で仕事人になるのではなく、仕事が人を仕事人にさせてくれるのだ、というキャリア教育においてもっとも重要な事実を語ってくれます。連載が進むにつれ、アクセスも飛躍的に伸び、今では更新待ち多数の人気コンテンツになっています。ある読者からこんなメールをもらいました。





そんなこんなで今のところは元気にやらせていただいている。

かなりざっくりな報告になってしましましたが、よろしくお願ひいたします。

まだ4月ですから戸惑いが見られますね。それ やそうですよ。皆さんが社会人になっても、絶対 そうですって。いきなりエンジン全開できるほど、浅い世界じゃないですから。社会って。

大学デビューのときもそうだったでしょ。シラ バス？ なに？ みたいな。そこから徐々にまわりを見て、リズムを掴んで行って、自分のポジシ ョンを探していく。居心地を見つけていく。この 一連を、企業は「主体性」と呼ぶのですね。主体 的な人材が欲しいって、実はそんな難しいこと ではないんです。要するに、そういうことです。

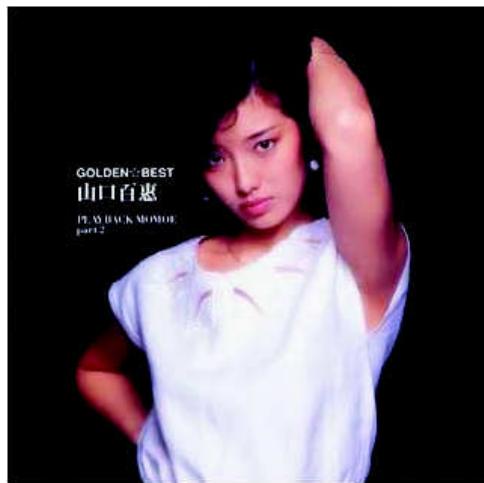
文責／団遊

こんなノリで連載は進みます。そして、4月は こんな中途半端だった彼女が、この後、驚くべき スピードで職業人としての心構えを身につけて いきます。もちろん彼女の資質、根の真面目さも あるのでしょう。でも、それだけではありません。 やはり、仕事が人を作るのだと思います。誰かの 役に立てる「自分」に仕上げていくのだと思いま す。ここに「自分探し」はありません。私は、社会 人初年次向け教育の肝は、こういうことだと思 えてなりません。

本当は10回目までここに掲載したいくらいな のですが、編集長に怒られそうです。最後に第2 回目をお届けして本原稿は終わりますので、続き が気になる方は、リクナビ2012をPCでひらい てもらい、フリーワード検索に「アソブロック」 と入力して、「ブログ」ボタンを押してください。 登録などは特に必要なく、誰でも見られます。本

当におもしろいです。

～こっちの百恵はすーごいが、



先生の百恵もすーごいぞ♪～  
「GOLDEN☆BEST」より ©ソニーミュージッ ク

街場の就活論～リクナビ版～

さて、山口百恵ちゃんの連載第二回目です。 戸惑いの中4月を過ごした百恵ちゃん。GWを越 えて、いよいよ5月病と鬪う時期に突入しました。 それでは5月号をご覧ください。

団さん

お久しぶりです、山口です。  
社会人2ヶ月目の報告をさせていただきます。  
2ヶ月目ということで学校には徐々に慣れて来 ました。  
授業は「これでいいわけないだろ」と思うことが 多々ありますが、何せ団工の専科教員は自分一人 しかいないので誰に突っ込まれることもなく、毎 日が流れています。  
ホントに少しずつ、可能のことから改善していく しかないです。

毎日自分なりに気をつかいながら過ごしていたのですが、やっぱり自分の頭のおかしさというか世間とのズレは隠せていないらしいです。

“こいつなんか様子がおかしい”というのは先生方にも子どもにもバレているようです。

同期の子が見事なまでに女子なので自分の雑さやおかしさが余計に目立ちます。

でもおかげさまで求められるもののハードルが低いのでよいです。

私立の小学校ということで裕福な家の子どもが多いです。

なのに給食で出たフルーツポンチの汁（要は缶詰のシロップ）の量で「誰々が多いから減らせ、とか具と比べて多い、少ない」などと本気で延々ともめていたのはおもしろかったです。

そんなことどうでもいいじゃないかと思いました。

子どもってアホでおもしろいですね。

困ったことに先週の半ば辺りから黄砂に喉をやられて声が出ません。

教師が声を出せないのは致命的ですね。

授業もやりづらいです。

でもそれ以外はとくにストレスもなく毎日ゆるゆると過ごさせて頂いています。

自分の適応力の高さには引きますね。

大学の時の友だちと久しぶりに会って話していく、「人生が劇的に変わるなんてことはない」という話になりました。

自分は今年から環境がガラリと変わったのに、どこにいても自分はあまりにも自分のままなので環境の変化なんて大した問題ではなく、人生が変わるなんてこともないのです。

ということで自分はこれから先も善くも悪くも自分のままなんだな、なんてことを思ったりした社会人2ヶ月目です。

すみません、なんか無駄な話が多く長くなりましたがよろしくお願ひいたします。

まずそう長くもないのに「長い」と感じてしまうその心境が、わかりますね。否応なしに社会人になっていく自分に、なんかちょっとガッカリするところもあるんでしょう。この間、僕の元にある営業マンがやってきました、30歳の新人さんでした。

30歳で新人？ 前は何を……、と聞くと、複雑な顔をしながら「ロック・ミュージシャンを……」と答えました。

ちょっと音楽を、と言わないところが大変気に入りました。その生き方も、またロックです。人生は、いろいろです。その色々な分岐点のひとつに、今みなさんはいます。

文責／団遊

---

続きを読むでひ読んでいただきたいので、お時間のある時に、リクナビ2012を検索してください。次号では、冒頭に書いた、アソブロックの新卒採用「ASB総選挙」のレビューをお届けします。

---

# 心理療法が始まるまで

(4)

—コミュニティと病院で—

藤 信子

この連載の（1）に、保健師さんが難病の患者さんに、「病気で辛い気持をカウンセラーに聞いてもらいませんか」と、カウンセリングを進めたところ「私は精神的な病気ではないのだから、カウンセリングはいらない」と断られたということを書いた。先回に書いた「強い人」でなければならないから、他人に相談できない場合もあるけれど、このように「精神的な病気」ではない、と言う背後には精神病に対する偏見、そして恐れがあると思われる場合も多い。「病気」に対する偏見は、案外皆いろいろなものを持っているかもしれないけれど、「精神的な病気」に対する社会の偏見は、かなり強い。強いというのは、言い方を変えると人が「精神病になりたくない」

という言う時と、「癌になりたくない」と言うときは、聞く側の反応もちょっと違うような感じだからである。「癌になりたくない」と聞くとき、「そうよね、できるだけ食べ物とかにも気をつけたいけれど」と共感的なニュアンスで、それは自分もなるかも知れない可能性を感じながらの会話のようになっているような気がする。しかし、「精神病になりたくない」と聞いた時には、聞き手はどうだろう。「そうよね、できるだけストレスを避けたいよね」ということになるだろうか。そうではなく、どちらかというと、自分が精神病になるという可能性はあまり考えずに、肯いていることが多くはないだろうか。精神病の中で、統合失調症は100人に8人という有病率であるに

も関わらず、自分とは遠い病気のように考えているように見える。

このような「精神病は自己とは関係ない病気」と考えたい気持はどこからくるのだろうか、ということを日々考えてみたいと思う。精神病への「偏見」「差別」とか言われることに対して、私たちの心の中で起きていることとして考えを進めないと、初めに書いた保健師さんに、カウンセリングの勧め方のアドバイスが十分できないような気がする。マスメディアが精神病に対する偏見を助長している、という批判がされたことがある。事件が起きた時に、精神病院への入院歴や通院歴が書かれたりした。これは批判されて今は少なくなっているが、批判されるまでは社会的にはおかしいと思われなかつたようだ。事件を起こしたからといって、心臓病や糖尿病の通院歴は問われない。精神病だけがこのような扱いを受けるのは、どこかに社会に精神病に対して「何をするのかわからない」という不安を抱いている部分があるから、そのようなことが受け入れられるのではないだろうか。

ストレスと精神病の発病の関連に関して、例えば日本の社会ではどのくらいの人が、関連があると考えているのだろうか。精神医療従事者にしても、その関連を考えない人が結構多いのではないか、と思う時がある。患者さんに何が起きたか、それについてどのように考えているのかを十分に聞かずに、薬物療

法に頼りすぎているような話を聞くと、そうか・・精神病は脳の病気だから、対人関係など関係なく自生的に病気が起こる、という考え方なんだろうな、と思ってしまう（私は身体とか脳が無関係と思っているのではない、「ストレス脆弱性仮説」については、またいずれ触れることになるだろう）。そのように、人が日常の中で、疲れたり悩んだり苦しむことと統合失調症になることが関連している、症状もまわりの環境と無関係とは言えないと思えず、精神病は私とは遠い無関係な病気と思うのは、何がそうさせているのだろうか。

たとえば統合失調症になることへの不安や恐れは、短期では治癒しないことも少なくないので、経済的な問題が生じること等の不安はもちろんあるが、これは他の病気でも同様だろう。それより多いのは、「自分の思考、行動のコントロールができる」という気持を持てなくなる怖れということも関係しているのではないだろうか。でもよく考えてみると、私たちはそんなにいつも自分の思考や行動をコントロールできているのだろうか。精神病への認知行動療法を構成する理論の中に、妄想を持つ患者は「結論への性急な飛躍」という推論バイアスがあることが示されている（ガレティ・ヘムズレイ、丹野監訳 2006）。これは辻（1980）の精神的な主だった病態は、自分の手にあまる状態に陥ると、合理的、主体的で自由な思考を失い、直線的になり複数の視点を持ちえなくなる、という治療精神医

学の視点に近い。ガレティ達は心理学者なので、実験的にこの推論を確かめていて、その実験（ビーズ玉課題）が、ほーと驚くような簡単だけど説得力のあるものなので、魅力的である。ここでの観点は、妄想とそうでない思考はそれほど違わない、妄想でない思考は慎重にいくつもの可能性を考えてみるが、妄想の場合はすばやく結論に飛びつく、ということである。なぜすぐ結論に飛びつくのかは、不安な状態にある時は十分に考えている時間がないような気分で、結論を急ぐ状態になっているからである。私はこの「結論への性急な飛躍」について話す時に、幽霊の正体見たり枯れ尾花や、蛇嫌いの人が道で小枝や紐を見るとはっとするという話をするが、分かつてもらいやすいようだ。

このような、妄想など精神病の思考が「健常な」場合の思考と、同じようなメカニズムで考えられるということは、今までではあまり日本では、受け入れられてはいなかつたようだ。このこともあって、心理療法（カウンセリング）という対話療法が精神医療の世界で広がらなかつたのだろうと思う。そのあたりが、精神病の人は何を考えているのかわからない、話がわからないということになっていき、心理療法が十分広がらなかつたことについて、もう少し次回も考えてみたい。

#### —文献—

- P. ガレティ・D. ヘムズレイ共著 丹野義彦  
監訳 2006 妄想はどのようにたちあが  
るか ミネルヴァ書房
- 辻 悟 (1980) 治療精神医学—ケースカンフ  
アレンスと理論— 医学書院
- \*最近、辻先生の新しい本がでているよう  
です。辻 悟 2008 治療精神医学の実践  
こころのホームとアウェイ 創元社

# ケースのツボとそこに 合わさる言葉（3）

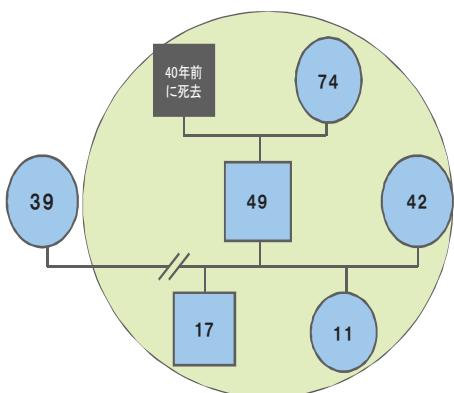
岡田 隆介

広島市子ども療育センター精神科

## （1）家族関係図から

いつものようにインテイクされた初診情報をもとに家族関係図を作成し（図1）、それを眺めながら家族への思いを巡らす。

X-23 清掃会社を興す  
X-19 結婚  
X-17 長男出産  
X-12 離婚 親権は実父。同居の祖母が養育。  
X-11 再婚 長女出産



「祖母は34歳の時、9歳の息子をかかえて寡婦となり、再婚せず子どもを育てている。苦労したぶん、祖母と実父のつながりは強いだろう（少なくとも祖母の思い入れは深い）」

「実父は26歳で会社を興し身を粉にして働いたと思うが、多忙で疲れた夫と10歳年下の妻の関係はどうだっただろう。そのときの実父の体験は、再婚した家庭に生かさ

れているだろうか」

「実父が親権をとったということは、実母の養育が離婚の原因となったのではないか。あるいは、祖母との折り合いが悪かったのか。後者なら、再婚後も同じことを繰り返す可能性がある」

「再婚によって祖母は孫を奪われたのか、それとも子育てから解放されたのか。長男は誰と暮らしたかったか。どんな家族構成でスタートするかは、どういった話し合いで決まったのか」

「再婚した女性は、長男と養子縁組をしたのか（養母か繼母か）」

「仕事がら厳しくて体罰も辞さない一方で、家のことは女性にまかせっきりという父親ではないだろうか。そうなると青年になった長男との衝突が考えられるが、そのことは今回の問題の背景にありそうな気がする」

「三世代家族の軋みはどの関係の揺らぎで吸収されていか、実権はだれにあるか」

家族への関心を高め、これらの疑問への自分なりの回答を用意する。いずれ面接で明らかになることばかりだが、前段階だからこそ自由にイメージが膨らむ。それは、この家族への臨床的興味と援助意欲の高まりへとつながっていく。

## （2）こんな家族だった

実父は工業高校を卒業し、土建会社や産業廃棄物処理会社で働いた。高校時代に他校生徒と暴力事件を起こして停学になったことがあるなど気性は激しいが、まじ

めで会社での評価は高かった。当時、食事など身の周りのことは同居の祖母が行っていた。

26歳で独立し、清掃会社を興す。その後、仕事仲間から紹介されて10歳年下の実母と結婚。(祖母とは別居)。ところが、二十歳をすぎたばかりの実母は子どもを車に残してパチンコに興じたり、何社もの消費者金融から借金して無断で外泊するなど、養育のネグレクトを続けた。そんな妻に夫は暴力をふるうようになり、二人は本児が5歳の時に離婚した。

引き取って育てた父方祖母は、実母を憎むあまり、繰り返し「母親の借金と浮気のせいで両親が別れた」と本児に言って聞かせた。一方父親は、借金返済と仕事に忙しく、ほとんど子どもの顔を見ない状態であった。

やがて建設関係の仕事が軌道にのり、父親は会社で経理をしていた女性と再婚。二人の間に生まれた子どもが3歳になったとき、実父の強い希望で祖母と本児を引き取った。そのとき、本児は小学校3年であった。

繼母は、二人の子どもの世話と経理の仕事を黙々とこなした。しかし、注意されても自分のやり方を変えない本児と強迫的に頑張る繼母との間には徐々に緊張感が増していった。

中学生になると本児は学校をさぼってゲームセンターに入り浸り、2年からは金銭持ちだし・万引き・原付の無免許運転が始まった(補導歴はない)。ふだんほとんど接しない父親は、問題が起きたときだけ繼母の制止を振り切って殴った。そして中3の秋、彼は家を飛び出し友人宅に転がり込む。その家族とは長い付き合いがあり、礼を尽くして好意に甘えることになった。

このような状況で、繼母との相談面接が始まった。その後、本児は頑張って卒業し、自分の意志で県外の全寮制の高校にすすんだ。このときの相談はここで終わつた。

それから2年以上たったある日、繼母が以前と同じように一人で来談しその後の経過を語った。高校に入学して半年くらいは、学校でも寮でも目立たない生徒だった。1年生の後半から急に身長が伸び、所属していたバスケットボール部で頭角を現し、2年では中心選手となつた。そして県大会で大活躍し、3年になってバスケ部のキャプテンとなり、学校でも注目される存在となつた。

身長と同じテンポで態度も大きくなり、寮での規則違反が目立つようになった。寮長は、それに体罰で応えた。

そしてついにつかみ合いとなり、寮長にケガを負わせ、自宅謹慎の処分を受けるに至つた。

母親との面接が3回続いたのち、家族合同面接が実現した。

### (3) 診察室で

緊張気味の父親は、本児を前にして「息子はおだてられて調子に乗ったアホウだ」と吐き捨てるように言う。たちまち、部屋の空気は凍りつく。すかさず繼母が、夫(実父)の一方的な言い方をたしなめつつ、寮の生活が息苦しかったのではないかと取りなす。それをうけて、本児は退学になつても別にかまわないとうそぶく。それを聞いた父親がいきり立つ、といった具合で面接がすすむ。

まるでストリートバスケット3on3のように3人でボールを回す様子には、息苦しい緊張の中でも決して致命的な決裂に至らないわきまえがあるように見えた。ただいつまでも続きそうだったので、タイミングを見計らつて外から本児にボールを投げてみた。

「県のリバウンド王なんだってね?」。「(本児)まあ」。「リバウンド王ってみんなそうなん?」。「(本児)??」。「キミも、デニス・ロッドマンや桜木花道みたいなタイプ?」。「(本児)誰っすか、それ」。「うそお、知らんの? 態度でのかい超有名なスターを」。「(本児)さあ、どのチームっすか?」。

すかさず、「おまえ、スラムダンク、知らんのか」と、父親が入ってくる。先ほどまでとは違つて、いい表情である。といえば、花道のチームメートでセンターバックのゴリに似てなくもない。父親と私は、ひとしきり、ひと昔からふた昔前のNBAやスラムダンクの話で盛り上がつた。実際、楽しいやりとりだった。横の本児は「わけがわからん」といった表情だが、不快感はない。繼母は本児をそっちのけに弾む話にイラつとしたようで、軽く夫を諫める。かまわず私は、3on3に戻らぬように話を続けた。

すると、本児が「自分は、本当はダンカンみたいになりたい」と割り込んできた。「ダンカン?」、父親が尋ねる。「たけし軍団の?」と私(予想外にウケた)。そこからは、彼のリードでバスケの話が続く。繼母は動かない。ダンカン Tim Duncan とは、サンアントニオ・スパーズのパワー・フォワードだそうで、わたしたちはしばらく現役のNBAスター選手の話に耳を傾けた。

いい感じにこなれたところで、父親に話を振る。「自分のことを必要としている人がいる、その種の気持ちの大切さは会社を経営しておられるとおわかりですよね。お父さんなんか、頼りにされたら何だってしてあげたくなるタイプと違いますか？」。ちょっと驚きながらも、父親は力強く頷く。次いで継母に、「お継母さんだって、みんなから頼りにされているからこそ、こうやって孤軍奮闘しておられるわけでしょ？」と振る。わが意を得たり、と微笑む。

「リバウンド王はどう？」とむけると、彼はボソボソと部活での様子を話す。「そうか、やっぱりキミもそうか。頼りにされ、必要とされ、任されている感じ、そういうの、今までに経験したことあった？」「(本児)ない」ときっぱり。「そうか、生まれてはじめて、生きるってこういうことか、みたいな感じを味わったんや。ねえ、どんな努力をしたの？そんなふうに、あてにされるプレイヤーになるために」。彼はクラブでのキャプテンの仕事とかクラスでのけんかの仲裁などを身振り手振りで生き生きと語り、両親はじっと耳を傾ける。

「(両親に)きっと生まれてこの方、家で頼りにされたことなんかなかったから、でしょう？だから、クラブや教室での感触を寮という生活の場でも確かめてみたくなつたんじゃないかな。仲間と同じように、大人に対してもこれでイケるのかどうかを。(彼に)どう？」「(本児)う~ん」。「もしかして、少々ルールを破っても自分を必要とする空気はみじんも揺るがない、そんな手応えが欲しかったのかなあ」。「(本児)そうかもしけん」。「ただ、身体がでかいぶんだけ揺さぶり過ぎたみたいだけど(笑)」。彼よりも先に、両親が頷いた。

「(本児に)ねらいはいいと思う。すごくいい。全然間違っていない。方法はうまくないけどね。不思議に思うのは、せっかくそこまでやったのに結果を確かめていないこと。どうして？」「(本児)？？」「いま、キミのいないバスケ部はどんな成績をおさめているか、キミがいない寮やクラスはどんな雰囲気になってるか。バスケ部員、クラスメイト、寮長、先生たちは、キミが抜けた穴をどんなふうに実感しているか。知りたくない？自分の値うちを」。「(本児)知りたい！」。「そうよね、その目で確かめるには、どうしたらいいかな」。「(本児)やっぱ、寮の先生にあって…謝る…」。「うん、そこからだよね。やる？」。頷く。「これで、今回のことばキミの値うちを確かめる絶

好のチャンスになったわけや」

#### (4) ツボ

父親の「軽薄なお調子乗り説」、学校や寮長の「テングになった説」を受けて、本児は「自分は取るに足らない男説」に傾きかけていた。わたしがどれかにくみすると、それで決まりという雰囲気だった。そんな状況のもと、彼を「リバウンド王」と呼んだ。そして、普通にデニス・ロッドマン(80～90年代に活躍、狂気のリバウンダーと称された)と桜木花道(90年代に一世を風靡したマンガ、スラムダンクの主人公)を連想し、そう口にした。

彼自身は、字義通りリバウンドの名人と受け取った。それは「取るに足らない男」の対局にあり、受け入れやすいものだったと思う。父親は、リバウンド王→デニス・ロッドマン・桜木花道→「やんちゃ」と連想し、その先に若かりし頃の自分自分がいたのではないだろうか。

父子ともどもリバウンド王が腑に落ちた流れの中で、スラムダンクのストーリーと重ねながら、わたしは彼にプレイヤーの値うち、人間の値うちを語った。そして、いまの自宅謹慎は自分の値うちを確認する絶好のチャンスという方向に話を進めた。父は息子のなかに自分を見、息子は父親の体温を感じ、バスケは父子をつなぐ血脉となりつつあった。

振り返ってみて、ツボは一番の弱点を強みに変えた「リバウンド王」だった。周囲から「役に立たぬやっかいもの」という評価を集めた彼の弱点が、ヒーローになる強みに変わったのだ。まるで桜木花道のような変身は、それまで気付きもしなかった「仲間から頼りにされ、必要とされ、任された体験」に思い至り、自分の役割を考えることによって可能になったのだと思う。それは、かつて自分の気持ちとは関係なく突き放されたり哀れまれたりした生活にはないものだった。

寮長のリバウンドを取り損ねたことは、この家族に一本の斜交いを入れるいい機会になったと思うが、最後まで見届けることはせず、後は父親に任せた。そのことを通じて、父親自身のストーリーも変わっていくことを期待して。



## 第4回「その街のこども（劇場版）」

—悲しみの中から生まれる希望—

川崎 二三彦

この連載を始める前後から、映画を見る機会がめっきり少なくなってきたような気がしてしまう。現場にいた頃は、多忙なさなかに月間5本、年間50本を目標にして足繁く映画館に通っていたというのに、今はせいいせい月1~2本。単身赴任の身だから、誰に気兼ねするすることもなければ、突然予定を変えなければならぬような業務でもない。ちなみに前回紹介した「冬の小鳥」以後に見た映画は、「小さな村の小さなダンサー」「ふたたび」「ドン・パスクワーレ」「シチリア・シチリア」「愛する人」ぐらいかな。ウム、これでは連載も風前のともし灯…。

“こんな変な体験、あまりしたことないよな”

通勤客でぎゅう詰めの満員電車内。映画を見終えた帰途、窮屈を承知でパンフレットを広げているうちに、上映中はこらえていた涙がいつのまにかじわりと滲んできたのである。主人公美夏の親友ゆっつの父親役を演じた白木利周さんへのインタビューを読んでいたときのことだ。

「私より百倍もええ子やったのに、なんで死ぬんや。震災て、わけわからへん」「ええおっちゃんが、なんであんなにボロボロになるまで苦しまなあかんねん!」



「おっちゃんはな、むっちゃ恐かったから、話しかけられへんかったんや」

などと回想するシーンが続いたあと、マンションで一人暮らすおっちゃんを深夜に訪ねるシーンとなるのだが、「美夏です」と聞かされ、インターホンを通じて応答するその声に、正直言うと、拍子抜けした。“普通すぎるやん”と思ってしまったからだ。が、パンフを見てわかつた。この人は俳優じゃなくて市井の人。実人生では、当時神戸大学の学生だった息子を震災で亡くしていたのである。

「もし、おっちゃんの立場だったらどんな想いになるのかなと……。役者でもないし、なんでもないんだけれども、震災のことを想うと、瞬間的に、すっと役に入り込んでいけました」

ここで話されているのは、おそらく演技のことではなく、おっちゃんの心情のことだろう。

「震災の傷だけを抱えていたら、おっちゃんと同じような振る舞いをするだろうなとは想います。でもね、美夏が来ることで、『自分のことを想ってくれる人がいるんだ』ということに気がつくじゃないですか。それまでは誰も来てくれな

かったという寂しさもあったでしょう。でもあの日、子どもの友人が来てくれた。それだけで感激しているはずなんです。私だってあの立場だったら、夜中でも迎え入れますね」

と、ここまで書いてきて思うのは、この映画、あくまでも映画であり、フィクションではあっても、そのように割り切って観ることは難しいということだ。美夏と勇治、主人公の二人が被災した時の年齢は、中1と小4に設定されていたけれど、私も思わず計算した。そうだ、うちの息子も震災の時は勇治と同じ小4だった……。

“京都もすごく揺れたよな。前夜は小6の娘の誕生日だったから、ケーキを買って祝ってたんだ”

“震災当日は京都府の児童福祉司会議だった。セッションが終わって皆でテレビの前に駆けつける度に、被害が広がつていったよな”

震災15年目の前夜、新幹線・新神戸駅で偶然出会った二人が神戸の街を歩いて行くうちに、次第に心を通わせていくロードムービー。なんだけれども勇治の語り口調が、また語彙不足としか思えぬような言葉の選び方が、やたら息子のしゃべりと似ているので苦笑してしまう。

それにしても、人が自分に対して、あるいは自分が心にとどめていることに対して素直になり、それを聞くためには、

“時”が必要であり、また“場”が必要なんだと、改めて思う。子ども時代の震災体験を、彼らはたぶん忘れようとし、どこかに閉じ込めていたはずだ。ところが、二人が出会った時と場所が、少しずつそれを溶かしていく。そして最後のシ

ーン。“追悼のつどい”が行われる東遊園地にたどり着き、別れが迫って勇治が握手を求め、美夏がそれをさえぎって抱き合う場面は、何ということはないけれどジーンときましたね。

\*

私はテレビドラマを殆ど見ないので、この映画が、震災15周年となる2010年1月17日、NHKで放映されたドラマだったことも、それが絶賛され、今回劇場版として再編集されたということも全く知らなかった。それに主役の森山未來、佐藤江梨子、二人ともが震災を体験していたこと、脚本の渡辺あやも西宮出身で、書き上げるまでに強い葛藤を抱えていたことも、もちろん知らなかった。

とはいえたこの作品、震災という体験を別にしても、すごく上質な映画だと私は思う。特に前半部分では、いたるところで思わず噴き出したくなるようなシーンが顔を出して楽しませてくれたし、たった一夜、それも神戸の街を二人で歩いただけだというのに、ラストまでくると、知らず知らずのうちに彼らが何かを得、何かを感じ、そして確かに成長したということが、ひしひしと伝わってくる。そして、おそらくは映画を観た誰もが、そこに生きる希望を見出す……。決して泣けるだけの映画ではないのである。とはいえた帰宅後、ネットでドラマ版の予告編を見ていたら、またしても目頭が……。

\*鑑賞データ：2011/02/08 東京都写真美術館

\*公式ホームページ <http://sonomachi.com/>

\*Twitterへの投稿 <http://coco.to/movie/2225>

# 子どもと家族と学校と

(4)

## 『息苦しくて教室に入れない』

CON カウンセリングオフィス中島

中島 弘美



「大学っていいですね。講義内容が面白い！通学時間は二時間もかかるけれど、俺、休まず通っています！」  
大学入学後、しばらくして、アラタがカウンセリングにやってきた。

・・・大学に休まずに通っている？講義内容が面白いってどういうこと？息苦しさはどうなっているの？？以前はこんなに早口で話していた？・・・

私の頭は？マークがいっぱいだが、とにかく、大学の様子を話すアラタは見違えるほど元気で、目を輝かして近況を話し始めた。



### 早くすませて家に帰りたい

アラタがはじめて家族面接に来たのは、彼が高校一年生のときだった。登校して授業を受けようとしても息苦しくて教室に長くいられない状態が続いた。医師から不安神経症と診断を受け、カウンセリングを紹介された。

初対面のアラタは無口で、懐疑的な目を向けてきた。

面接室の出入口付近に腰かけ、「早くすませて家に帰りたい」



という姿勢だった。

「ここは、高校とは関係のない場所で、アラタ君のことをお説教するのではなく、どんなことを望んでいるのか、きかせてもらい、そのことが実現するように応援する場所です」

と、カウンセリングのことを伝えた。

怒られない(?)と、わかったのか、少しずつこちらの語りかけに応じていった。

高校生の男の子にとって女性相談員は、ときにわざわざしいだろう。カウンセリングに興味をもっている場合もあるが、多くはウザイと思っている。そのため、大げさな共感はせず、心や精神などのヤワな単語はできるだけ少なくして、さらりと接するようにしている。



この髪型はどうしてだめなのか

「高校に入って、こんなはずじゃなかつた想定外だったことは、たとえば、どんなことがある？」

しばらく考えてから、

「高校ってもっと生徒に任せてくれると思っていたら、義務教育じゃないのに、もう、いちいちうるさい。髪の毛や持ち物チェックをするなんて考えられない！」

学校の話をしているうちに、だんだん声が大きくなり、興奮してきた。

高校教師の言動は間違っている！とアラタは力説する。

彼が入学した高校は、いわゆる難関大学への進学を目指す学校だった。

第一希望がかなって入学をしたもの、生徒指導の先生に入学後三日目に呼びだしを受けた。

ひっかかったのは、頭髪だった。

彼は、髪を染めて、毛をピンピンに立てさせていたので、注意を受けた。

他の生徒は、受験勉強中心の生活をしてきた様子で髪型や服装などに关心が薄かった。背の高いアラタは外見が目立ち、ひときわ浮いて映っていたようだ。また、新しく進んだ高校には、同じ公立中学からともに進学した人はなく、支えてくれる友人もいなかつたけれど、クラスメイトとぶつかるようなこともなかつた。アラタのいうことには、陰ながら賛成している友達もいたようだ。

どうしてアラタの髪型がだめなのか、うやむやのまま、朝、校門指導の教師に呼び止められることが続くと、うつとうしくなっていった。

母は、

「人に迷惑をかけたりする子ではあり

ませんが、先生から注意されて、自分のことを曲げられなかつた。ひっこみがつかなくなつた。そんな印象があります」と話す。

母もこの子の髪型は好みではないけれど、そのことでここまでこじれてしまうとは、考えていなかつた。

アラタのような態度は、ひとむかし前だと、威勢が良い生徒と受け止められたのかもしれない。単に髪型のことで、そんなにむきにならなくてもと周囲はみていた。

遅刻や早退もしなかつた中学生活は、成績も上位で、クラブ活動も活発、クラス委員も引き受けていた。どちらかというとリーダー役だったアラタが、高校に入り、いきなりルール違反の生徒になつてしまつた。



### カウンセラーの学校訪問

彼と家族の希望もあって、カウンセラーは、学校訪問することになった。

学校訪問の目的はいくつもあるが、支援には、多方面からの家族理解が必要と考え、面接に来られているときの子どもさんやご両親の様子だけで、わかった気になってはいけない、そう面接を続けながら、いつも感じている。目の前のご家族のことは、他の角度からつまり、学校の先生からの見方をあわせて全体像を把握してから、総合的に考えていきたいと考えるからだ。そのため学校の先生方からの情報はとても重要だ。

もちろん、学校訪問時、教育現場で悪者さがしをするつもりもなく、抗議をして行くという意図も持ち合わせていない。

おもに、協力体制を築くのが大きな目的となる。

さらに、学校訪問をすると、副産物がある。それは、学校に出かけていくことによって、地域の環境に触れることができる。たとえば通学途中の発見や地元情報なども含めてそうだったのかと実感できることあり大きな意義をもっている。

アラタの学校は、最寄り駅から徒歩20分かかり、坂道を上がったところにある。周囲は、一戸建ての家が多い静かな住宅街にあった。この坂道は、新一年生だったら疲れるはずと、通学の実感ができ、校庭の生徒さんたちの様子や校舎から受ける印象もじかに味わうことができる。それは、アラタの気持ちに近づくことになる。



### 授業が中断しました

事前に連絡をして、担任の先生にお会いした。五十代女性の数学の先生が担任だった。担任教師は、

「アラタ君は、いつも大きな声で話します。どうしてだめなのですかとか、それはおかしいとか、すぐに口にする生徒で、そのことで授業を何度も中断しました」

先生は正直困り果てている様子だった。生徒間でのトラブルなどは全くないが、いつもイライラして、落ち着かない様子だという。

医師の診断書を提出したにもかかわらず、担任の先生には話が通じないとアラタが言っていたことを思い出していた。



### 外出の難しさ

高校二年生になり新担任は男性の若い体育の先生になった。座席もアラタの望む、一番後ろの席を用意してもらったが、教室に再び入ることはできなかった。

そのころから、人が大勢いるショッピングモールや、電車、地下鉄なども利用しづらくなり、息苦しさや胸の圧迫感をさらに感じるようになった。

欠席日数が重なっていった。

これからのことについて話し合ってみると、

「高校で授業を受けるのは、体が拒否してそうだよね。今後、これだけはしておきたいと思っていることは何？」

「高校二年生になってから一日も学校に行ってないので、留年することは決定的。落第は仕方ないけれど、でも大学には行ってみたい」

大学進学を希望してはいるが、将来のことを考えていると気が重く、とても沈んでいた。



### 大学生の兄は自由！

アラタには、兄がいた。

四歳上の兄は、大学生になってから自由に暮らしていた。朝ゆっくりと起きて、昼から大学に行き、家で勉強する姿もない、飲み会に参加しては友人の下宿に泊まり、適当にバイトをして小遣いを稼いでいる。親も大学生の兄に、口かましくいわず、思いのままに楽に過ごしていると、アラタは考えていた。

大学に行きたいというよりも、大学生の生活にあこがれているようだった。

このままでは困るので、なんとか大学

に行って、大学生になりたい、どんな方法でもよい、と思うようになっていた。アラタに情報を伝えた。

長期欠席をしていても、大学入学にはいろいろなルートがあり、通信制高校や、単位制高校への転校、あるいは高校卒業認定試験の利用、そのための予備校やサポート塾などがあることを説明すると、アラタ自身も資料を集めてみることになった。

### ◇ 高校認定試験を受けてみる

アラタは、単身赴任中の父に何度も電話をして相談し、留年するのは避けたいので単位制高校に籍を移して、高卒認定試験にチャレンジするという目標を立てた。

一方で、外出も自由にできるようにしたいとすすんで自律訓練法を受けた。

少しづつ、アラタは高校のことは口にしなくなり、認定試験に焦点をあてていった。

受験当日、教室に長い時間座り続いていることができるのか心配はあったものの、記入したら、すぐに退室することでなんとか乗り切れた。あっという間に認定試験は合格した。

ことのほか時間がかかったのは、そのあとの大失敗で、志望校に届くまでにかなり苦労をしていた。

予備校の大教室での講義は負担が大きいのでとりやめて、ビデオ学習や通信添削で入試に備えることになった。

通信制の大学も候補に挙がったけれど、兄のような生活モデルがあったので、通学部を選び、やっと大学生になることが

できた。



### 充分ですと母

アラタの傍で、母親は、「この子は、不器用な子だと思います。たとえば、自分は好き勝手にピアノを弾いて大きな音を出しているのに、隣の家のドライバーの音がうるさくて勉強できないから引越ししてほしいと、無理難題をいうのです。そんなことをいうのは、ただのわがままだと周りは思いますよね。本人はやかましくてしかたなくて、文句ばかりいっています。文句は言いますが、やりたいことはしっかりもっているので、それはこの子の良いところだと思います。同級生より一年余分に時間はかかったけれど、浪人して入学したと思ったらそれで充分です」と、ふりかえる。

今、大学では、彼を理解してくれる友人も多く、仲間も増えている。もちろん、息苦しさはなくなったし、学ぶことの楽しさもわかってきた。

このところ、気になっているのは自由になるお金が足りないこと、そのためには長期休みに、牧場で住み込みのアルバイトをする予定だという。

動物好きなアラタには、ぴったりだ。人の多い都会よりも、自然に囲まれていることがアラタには向いているのかもしれない。

次はどんな話題を持って、報告に来るのか、楽しみにしている。

# 蟻の斧 (とうろうのおの)

## 社会システム変化への介入 part 1

### 1990年 京都児童相談所 内外事情 第四回

団 士郎

仕事場D・A・N／立命館大学大学院

1年なんて、あっという間だとも言える。64歳になる今年、年々、一年があっと言う間だ感は強くなる。しかし、1年365日は決してあっという間ではない。日々、充実させる努力をしていれば、ずいぶんいろいろなことが出来ると思う。この日誌レビューは当初、大きな出来事、事業をピックアップして二十年前的一年を概括しようと思っていた。

たまたま一月は「児童福祉施設職員向けの中堅職員研修」プログラム、二月は児童相談所再編整備に関わる「業務検討会議」、三月は「療育事業・不登校児のための琵琶湖一周サイクリング」があった。しかし四月になって、新年度早々そんなに大きなイベントはない。そこで、この辺りはさっと進める予定だった。ところが最近、あることに強く印象づけられる出来事に遭遇した。

研修の場だったのだが、そこの参加者が一様に、「三日間、楽しかった。仕事の話をしているのに…」と語った。また、私と早稲さんがプログラムのことを、ああだこうだと夢中で話しているのを脇で見ていて、「とても楽しそうに話している！」と、そのことに反応した。私の頭の中に「?」マークが生まれた。仕事の話をああだこうだと、いい大人が懸命に話しているのだから楽しいに決まっている。そんなことは自明のことだと思って今日まで来た。

ところが、それは必ずしもそう言えることではないらしい。仕事は苦しかったり、辛かったり、ストレスだったりするという。私とて、全くストレスがないなどとは言わないが、一日も早くこんなところから逃れて、悠々自適で暮らしたいなんて思ったことはない。面白いのだから止める理由がない。むろん、「不本意でも、そこに引っ張ってゆかねばならない。立場というものがあるから…」なんて業務をしていたらきっとそうだろう。しかしそんな仕事っぷりをしたことがない。これは恵まれているだけでも、運が良いだけの事ではないと思ってきた。

では何なのか。その答えが一九九〇年一年の仕事ぶりにも含まれている気がした。読み返しながら改めて、ずいぶんいろんな事をしているなあと思う。しかし多分どれ一つとっても、しなければならないことではない。面白そうで、したいからしている。しかも自分一人ではなく同僚や部下と一緒にである。

彼らにすれば、強引な課長に付き合わされていただけかもしれないが、意外にあの児相時代のことを良い記憶として、現在を生きている退職組、定年間近組が多いらしい。新たな場で活躍する後輩もどんどん増えている。

これは社会システムの最小単位、職場システムへの良い介入になっていたところが、期待以上に大きかったのかもしれないと思った。当時からこの点はある程度自覚していて、効果も手にしていたので、「蟻の斧」だとは思っていなかったので、この角度からの記述は想定外だった。しかし、職場システム論としてこれも書いておく価値があると思い始めたので、四月からの日々を大事だけではなく、小事も振り返ることにした。

# 1990

## 四月

4/1

図書館にいって、池澤夏樹の本を探す。書店でよく見かける「スタイル・ライフ」の他に、「夏の朝の成層圏」を見つけた。その奥付の筆者の略歴に福永武彦の遺児とあるのを見て驚く。福永の著書は二十代の後半に、数冊読んだ記憶がある。中でも「草の花」が真っ先に浮かぶ。話はうろ覚えだが、ひどく印象的だったことを覚えている。

私にとって読書習慣は20代半ばからの事である。結核で半年の自宅療養を強いられるまで、本など読んだことがなかった。だからどの作家の何を読めばいいのか（そもそも、どれを読めばいいかなんて、読書習慣のない人間の教養主義的発想だ。今は、読みたいものを読めばいいのだと思っている。）

その初期に出会った作家の一人が福永武彦。その息子なんだ…と思った。そして池澤夏樹は作家としてだけではなく、映画字幕に名前を発見して驚いた記憶のある人でもある。テオ・アンゲロプロス監督のギリシア映画。エキップ・ド・シネマの作品の一つとして（岩波ホールなどで上映される作家群）「旅芸人の記録」、「こうのとりたちづさんで」等を観たとき、その字幕監修に池澤夏樹の名を見つけた。氏はギリシアに住んでいたこともある理科系の文学学者だ。近作では世界の博物館を巡って書いた「パレオマニ」がお気に入りである。

4/2

遊びの場所を少し拡げようと、塾に通うこととした。京都インターナショナル・アカデミーというところで、今月から毎週金曜の夜「編集者講座」（全41回）を受ける。そこそこ高額の受講料だが、たいした目的はない。

この当時、よく考えていたことの一つに、すぐに役立つことばかりしてはいけないという自分への戒めがあった。

大学生が資格が欲しくて専門学校にダブルスクール入学したりするのを、鼻のきく行動だと思っている浅薄さが好きではない。

そういうと、「先生は実力があるから…」などと、分かったようなことを返してくれる者もあるが、そんな思い込みにもうんざりである。世界を安易に了解して、その対策に時間を浪費するものではない。なにかにつけて、ハウツーはおおむねこの作業で、報われることは少ないものだ。

4/3

'90 京都児相レポートの原稿締め切りをむかえている。だいたい出揃ったものを読むと、読み物風で面白い。50ページぐらいに薄く仕上げて、読みやすくしたい。発行は5月20日の予定。

舞鶴児相以来ずっと、自分の所属する児相では業務レポートを年に一冊発行してきた。職員全員に執筆してもらう。

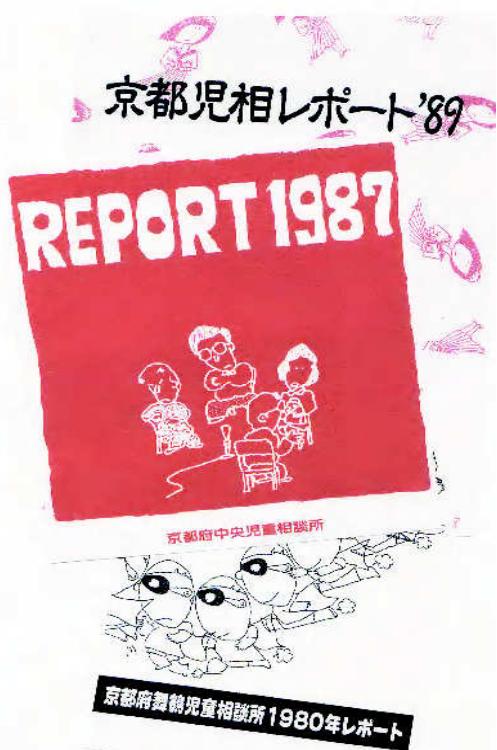
1980年代、やる気のある心理職はおおむね研究的で、学会発表したり、論文を書いたりしていた。しかし他職種は一般行政職員で、そんなことは関係ないといった感じだった。この心理職公務員だけ特別という風潮が気に入らなかった。

みんな臨床業務に就いているのだから、業務のまとめや振り返りをしておくのは大切だ。そこで、年一冊のレポートを出し続けることを職場に提案し、ケース担当した者全員には半ば強要していた。

直接関係はないが、私の中の整理では、この毎年の営みは20年後、このメンバーが筆者となった書籍が何冊も書店に並ぶことに繋がったと思っている。川崎二三彦、川畑隆、早稲田一男、柴田長生、それぞれが筆頭著者名の本が存在する。

みんな、公務員試験を受けて採用された京都府職員で、長期勤続の者ばかりだ。けっして数年の腰掛け公務員期間を過ごして、

大学や研究機関に行った者達ではない。こんな現象は世間にそうそう起きていることではない。起こったことの背景にある必然サイクルを見定めて、上手くいっていることは繰り返す、真似る。上手くいかないことは中止する。これはシステム論的発想の原点だと思うが、なかなかこれが出来ない。人とはとかく、だめなことだけ繰り返してしまう生き物である。



#### 4/4

京都の出版社ミネルヴァ書房の編集者が会いに来て、家族療法で何か本を書かないかという。面白そうなものが作れるかどうか、何人か一緒に考えてみるつもりだ。“むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく。ふかいことをゆかいに”井上ひさしのこの言葉がまた頭をかすめた。そんなものなら作ってみたい。

20年後の2010年春、井上ひさしさんは亡くなつた。この言葉が引用であちこちの記事で目に付いた。そして今、私はこの対人援助学マガジンを編集している。

私は今まで、単著・共著合わせると十

数冊の本を出している。その最初の巡り合わせが、20年前に起きていたことを、この記述で思い出した。

さて更に20年後、現在のどんな巡り合わせが思い出されることになるだろう。世の中に向けて今私のしている事が、未来の日にとての、企画編集になっていると良いなと思う。

#### 4/6

登校拒否をしている小5の男の子の新学期直前の面接。別室で見ていたのだが、途中から面接室に入って、「学校の椅子」という課題をやることになった。3時間近い面接で、両親は自分達自身の手で掴んだものを子供に伝えた。後は新学期初日の朝だ。

学校の椅子は実際に面接室内で、学校に見立てた椅子を一脚、ちょっと離れた場所に置いて、両親にそこまで子どもを連れて行ってもらうエクササイズだ。室内の数メートルしか離れていない場所に、息子を連れて行くのは、バカらしいほど簡単な話に思える。

ところが実際は、この数メートルを移動させるために両親は一時間以上も苦労することになった。

ここで発見できたことは、学校における出来事と不登校の息子との関係とは別のことだ。

両親や本人が訴えるように、学校で何かがあるのかもしれない。しかし今、この面接ではっきりしたのは、この両親は小学生の息子を数メールも動かすことが出来ない。そして、「息子さんのために、ご両親としてこんな事すら出来ないのは問題だとは思いませんか?」という問いに、「こんな事をして息子が、余計に悪くなったら…」などと

案する。

室内を数メートル、無理に移動させることで悪化する息子の症状って何だ！と私は思っている。この時から現在に至るまで、同じような事を言っているクライエントやセラピストにたくさん会った。の人達は本気でこんなことを信じているのだろうか？

結果に責任の持てていない共犯事象を、専門家と保護者が「不間に伏しあう」ことによって、世の中にたくさんの「ひきこもり」青年達という結果になったと私は考えている。人には今できることがたくさんある。

4/7

第16回全国児童相談所問題研究セミナーの第一回拡大現地実行委員会。京都府のほか、神戸市、大阪府、京都市と、花園大学のN田さんの12名。予定通り私が実行委員長を引受けた。思い切った企画を考えようということになり、いろいろアイデアが出た。

土曜日の午後、今は児童問題研究セミナーと改称して継続されている研究会の現地実行委員会を開催した。こういった業務関係の自主的企画を次々に引き受けて実行していた。けっして暇だったからというわけではないが結果として、こんな活動で職場の団結や、業務能力の向上を計っていることになった。そして、職員、スタッフの地力は蓄積されていった。

このとき、外部から来ていた野田正人さんは今、立命館の大学院で同僚だ。

4/9

今春のサイクリングに参加した子供達7人中6人が新学期から学校に行き始めているという電話が入る。驚きと共に嬉しい。でも無理することはないと。

第3号に続いて、「不登校児の琵琶湖一週サイクリング⑦」が別冊付録でアップされています。ご覧ください。

なお、申し上げる必要もないことですが、この物語は、複数回の事業を編集して、一回のサイクリングに構成した漫画家・団士郎作のフィクションです。ですから、この4月9日の報告（春のサイクリング）の中に、含まれている子も、含まれていない子もいます。ご承知おきください。

4/10

K本弁護士を招いて児相職員研修会。法律の組立と人間ドラマの情緒性の間に、どんな橋が架かるのか。架けられるのか。なかなか面白い一日だった。また続きをやれるといい。

近年、児相では児童虐待問題を通じて、弁護士と協働する機会もずいぶん多くなっているようだ。しかしこの時点で、弁護士は縁遠い専門職だった。たまに、児童問題に関心のある弁護士を招いて、法律家の立場から見た児童福祉を聞かせてもらっていた。

この繋がりから、新しく始めた弁護士事務所での児童福祉司研修。三児相のCW二名ずつが、月例で事務所に伺って、ケース検討を行っていた。数年間継続されたこの取り組みも、当時、他ではなかなか見ないものだった。

我々はここで、親権、相続などの問題だけではなく、国籍や戸籍問題など、いろんな事象のことを考えることになった。そして個人的には、私はやっぱり法律的な考え方とは根本発想が合わない体質だと思った。つまり漫画家体質は良くも悪くも、もっと杜撰で自由だった。

4/12

今月から月二回、受理判定措置会議に京大病院の小児精神科医I坂先生をスーパーヴァイザーで迎えることになった。

診察は別で、週一回お願いするT辺先生も新任。顔ぶれが一新した。

考え方はいろいろだが、これも児童相談所における外部専門家の活用方法についての一プランと言えるかもしれない。

当時、嘱託精神科医は府立大学の医局から、教授の推薦による人が配置されてきていた。当然、児童精神科医であることは少なく、中には、子どもはほとんど診たことがありませんと告白する医師もいた。

しかしそれをどうこう出来る余地はなく、小さな出先公所の所長は、きちんと医師を確保するだけでも、それなりの努力が必要だったようだ。そこでそのルートとは別に、児童精神科医の業務協力の依頼できる道を探っていた。

ある課員の尽力で、児童精神科医として信頼を得ていた1坂医師からやっても良いと返事をもらった。しかしこれまでから派遣されてきている大学系列とは別のルートだったため、そちらと交代するようなことは組織的には叶わなかった。

二人の精神科医を、それほど受診児童が多いわけでもなかった児相で、どう対処するかという事になってしまった。

結果的に、嘱託精神科医ではなく、受理判定処遇会議のSVとして、会議に参加してもらうことにした。この後、京都児相の会議には隔週、児童精神科医が同席し、更にある時期には、児童精神医学を研修中の後輩女医も同席する事になった。(この女医は後年、K市児童福祉センターの医師として働くことになった。また、1坂医師とは、この10数年後に、立命館大学の教員同士として再会することになった。もっとも、氏は二年あまりで又現場の医師として転身していったが)

会議出席メンバーの経験や専門性だけで

はなく、部外専門家の同席は、会議を緊張感のあるものにし、結果的に重層的な議論を促す効果があった。

4/18

家族療法ビデオカンファレンスの日。  
特別プログラムとしてアメリカ人の家族療法のVTRを観て話し合った。

家族療法家横田さんに、月一回来もらって、所内で実施された家族面接のVTRを見ながらのケース検討をしていた。その特別プログラムとして、どこかで手に入れた家族療法のVTRを見ながら話し合った。

家族療法に関しては、マジックミラーの裏の部屋で、実施中の面接を見られるようにしてあった。今風にいうなら、情報の共有化、面接の可視化だ。関心があれば職員は、現在進行中の面接展開をライブで知ることが出来た。

この時の所長は一般行政職業でずっとやってきた人だったが、よくスタッフルームで面接を見ていた。

4/24

昨年の秋から積み残し課題になっている親睦会旅行の実現リミットが迫っている。この間の糺余曲折には、親睦会役員としてはいろいろ言いたいことがあるのだが、とにかく実現する責任を果たそうと4人で頑張った。そして静岡県・大井川鉄道の終着・井川と寸又峡温泉に決まって、5月に二班に分れて行くことになった。

職場のメンバーで旅行なんて今時、流行らない。その通りだと思う。当時だってもう十分、時代遅れだった。しかし、それにも関わらず私の職場では、親睦旅行は重要な行事だった。

この背景には、旧来型の宴会延長の親睦旅行があり、それに女性職員はほとんど仕

事の延長感覚で同行させられていた。直前に、家庭の急な事情でキャンセルする人が必ずあったのは、これを示している。

しかし私は、前の職場（舞鶴児童相談所）で、女性職員が「家事を離れて、業務も離れて、楽しめる旅行なら行きたい」。「子育てをしていると、なかなか勝手に旅行なんて出来ないしねー」、「一家で出かけようものなら、お金がかかって仕方ない…」と語るのも聞かされていた。

そこで近場の温泉への、一泊の宴会旅行ではなく、希望も募りながら、二班に分けて、年次休暇も一日含めた二泊三日のちょっとしたツアーを提案した。

舞鶴児相時代、「石垣島＆西表島ツアー」、「函館＆二股ラジウム温泉ツアー」、「東北のランプの秘湯と東北自動車道縦断ドライブ」など、女性職員がほぼ全員出席になる親睦会企画を実現していた。

京都児相に来て、職員の気質も違うし、時代も変わりつつだったので、同じ事は出来ないが、それでも楽しくなければ職場はストレスと、勤務評定の結果、病巣になると考えていたので、何か企画したいと思っていた。そして賛否ある中、やっとたどり着いたのがこのプランだった。

寸又峡温泉は年配の人なら名前に記憶があるかもしれない。ライフル魔といわれた金喜老が立てこもって、全国ニュースに国民が釘付けになった場所である。それまで地元の人以外誰も知らなかったと思う。ここを選んだのは、それが面白かったからだ。

この後、京都児相の親睦旅行企画はニュース性がテーマになり、現場を見に行くツアーになっていった。雲仙普賢岳が大噴火

した時には、当時の村山首相より一日早く、火山灰と土石流で大変な、天草鉄道にも乗った。伊豆大島が噴火したときも、時間が経ってもまだ暖かい溶岩流の上に、東京都が復旧作業で付けた道路を走って、三原山見物に行った。

親睦会については次に異動したところで面白い経験をした。そこは所長と職員が全くそりの合わない組織だった。少人数なのにそれだから、日常がぎくしゃくしていた。

管理職も職員も大人げないと言えばそうなのだが、そのため、親睦会費というのを給料天引きで集めていたことが頭痛の種だった。昨今は、こんな金の扱い方はしないが、当時はまだこういうところも多かった。

何が困ったかというと、集めた会費は貯まっていくのに、みんな所長と親睦旅行なんか、行きたくないのだ。歓送迎会と忘年会は嫌々出席するのだが、他は御免ということになり、何十万円という積立金が貯まっていたのだ。前に働いていた人など、積み立てただけで使わずに異動になっているなんて馬鹿なことがあった。

そこで大奮発の贅沢宴会を、京都の奥座敷・美山荘で実施した。関東の趣味人あこがれの一軒宿だが、それでも宴席終了後、夜中にタクシーで帰宅した人があった。

ここで生まれて初めて、松茸でお腹がいっぱいになる経験をした。いったい、いくら払ったのだろう？

# 学校臨床の新展開

## —④学校と児童虐待Ⅲ—

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

### タイガーマスク旋風

2010 年末から 2011 年にかけて、全国各地の児童相談所や児童養護施設では、伊達男「タイガーマスク」が旋風を巻き起こしました。そこで、伊達直人があらわれた 2010 年 12 月 25 日から 2011 年 1 月 25 日までの 1 ヶ月間の記事を「朝日新聞記事データベース」検索（「児童養護施設」でキーワード検索）してみると 243 件ものヒット数でした。過去数年間さかのぼり、同じ時期、同じ「児童養護施設」のキーワードで検索してみると、毎年約 20 件前後の記事ですので、約 10 倍の扱い。マスコミの注目具合がよくわかります。243 件の「児童養護施設」記事のなかには、厚労省から発表された、児童養護施設の職員増（よくなればよいのですが・・・）の記事や、親権問題の記事などもあり、これらもタイガーマスクの活躍とともに大きなニュースとなりました。

ちなみに、元プロボクサーの坂本博之さ

んや女子プロレスラーのコマンド・ボリショイ選手、女子プロボクサーの風神ライカ選手などは、まさに施設出身者でありリング上の自らのファイトマナーで施設への支援を続けておられます。ほかにもさまざまなスポーツ選手や芸能人などもボランティアや寄付をされていますね。先日、休養宣言をした宇多田ヒカルさんは、NHK のインタビューのなかで「人間活動に専念したい。施設でボランティアしたい」などとも発言しています。

企業の社会貢献活動（CSR）では、児童の奨学金や自立支援などの資金援助をさまざまな会社や団体が行っています。また、「二トリ」は 2005 年から 3 回、全国の児童養護施設へ「ランドセル」などを寄贈しています。

マンガ「タイガーマスク」ではリングとともに「ちびっこハウス」と呼ばれる「孤児院」がもうひとつの舞台ですが、今、児童養護施設には両親ともにいない、まったく身寄りのない児童は全体の 1 割もいませ

ん。また、何らかの虐待により入所している児童が増加し約6割となっています。今回のタイガーマスク旋風にかかるる、いろいろなニュースを見聞きしますと、タイガーマスクの話とともに、少なからずこのような施設の現状が取り上げられたことはよかったですのではないかと思います。

## 教員養成課程と施設理解

私は元児童養護施設職員で、現在は保育士養成にかかわっていますが、入ってくる学生の多くは保育士といえば乳幼児だけが支援の対象であると思っていることも少なくありません。保育士は「児童福祉法」上の「児童」つまり18歳までの学童や中高生も支援の対象であり、児童養護施設などの入所型の児童福祉施設への実習にも行くことになります。(幼保一元化による養成課程の見直しに、施設保育士の観点がどのように盛り込まれるのか、あるいは盛り込まれないのかという問題もあります。また機会があれば述べさせていただきたいと思います。)

さて、保育士養成課程では幼児教育や社会福祉、そして児童養護施設等での実習があるわけですが、教員免許養成課程では介護等体験で福祉現場（これとて、ほぼ現場に「体験」を丸投げで、批判が多いのですが）へ行く以外には、特に施設のことやシステムについて学ぶ機会がありません。心理学やカウンセリングについて学ぶ機会は増えたかと思いますが、今後は、児童福祉の制度やソーシャルワークなどについて学

ぶことが、いっそう求められるのではないでしょか。

たとえば、児童養護施設には、児童相談所を通した行政処分としての措置以外に、子育て短期支援事業として、各市町村と契約して行っているショートステイやトワイライトステイなどのサービスもあります。また、児童家庭支援センター機能を付加し相談支援を行っているところもあります。これらを利用するということも地域での子ども家庭支援の選択肢のひとつだと思います。

### 地域で支えるということ

これまでの拙稿のなかでも述べてきましたが、学校と関係機関との間で、同じ「子ども」や「家族」を支援していくうえで、見立て、捉える視点が、それぞれの専門職で異なったり（これは当然ですが）、その支援の方向性やゴールを共有しにくかったり、話し合いそのものがうまくいかないことが少なくありません。そのひとつは「説明」が足りないということも述べてきました。たとえば、子どもの保護の緊急性などに関して、学校側には関係機関の説明が十分ではなく「なぜ保護してくれないのか理解できない」ということになることがよくあります。

2010年末NHK「クローズアップ現代」では、いったん児童相談所で子どもを保護した後に、再び虐待される「再虐待」が増えていることに注目し、全国の児童相談所にアンケート調査を行っています。その結果、2009年1年間で8000人を越す子どもが「再虐待」にあっていると報告しています。児童相談所の一時保護だけではなく、児童養

護施設を退所（措置解除）し、子どもたちが地域へ再び帰ってくるということもめずらしくはありません。児童養護施設の平均入所期間は約5年（厚生労働省2008年3月調査）ですが、ケースにより長短の差があります。主訴である入所理由が解消されたとしたら、児童相談所は子どもを措置する理由がなくなり措置解除となります。今日では「要保護児童対策地域協議会」で家庭復帰やその後の支援にむけた実務者での協議が行われることになっていますが、その運営は地域間格差が大きいのが現状です。

また、児童養護施設退所後、子どもが元の地域に帰らずに、転居したり、児童相談所や施設と連絡が取れなくなったりするような場合もあります。家庭復帰にむけて、どのように地域で子ども家庭を支援するのか具体的な手立ての共有と実施が十分であるとはいえない。欧米ではドリフトと呼ばれる複数の里親の変更（子の養育主体の変更）が問題とされることがあります、日本では、施設措置解除後の児童相談所の再受理、再一時保護、施設への再入所が少なくありません。その際、元いた施設とは別の施設や別の種別の施設に措置変更される場合もあります。子どもにとって、頻繁に養育環境や教育環境が変わることは当人の利益になることはありません。そればかりか、そのことの原因は自分にあると自己肯定感をさらに低下させたり、社会や大人に対する不信感を増幅させます。

さて、子ども家庭支援については学校の抱え込みが指摘されますが、多くの教員は昼夜問わず、今も困難な家庭問題を含め実際に懸命に支援を行っています。だからよけいに児童相談所の動きに歯がゆさを感じら

れるのも当然かと思います。

今後は学校だけではなく、関係機関だけでもなく、地域で、地域の子どもと親をどう支えるかということを考えていかないといけない時代になってきたようです。児童相談所でとりあえず保護してもらうということから（もちろん、緊急度の高いケースはまず保護優先であるのは当然です）、親子分離、家庭復帰、そして、その先を見据えた子ども家庭支援が求められます。

# ポストモダンな 学びのスケッチ (4)

## 繋がりの中で見えてくるもの

北村真也+中村正

これは、筆者である北村がたまたま大学院に学び、そこでたまたま指導教員であった中村先生に出会ってしまったことで描き始められた終わることのない学びのスケッチである。論文課題を抱えていた筆者は、毎週のように中村先生と2時間の対話の時間を重ねていた。それはいつの時もほぼ正確なリズムをそれぞれの生活世界の中に刻むかたちで行われた。金曜日の夜、場所は衣笠キャンパスの研究室もしくは朱雀キャンパスのカフェ。そしてこの対話の時間は、いつしかそれぞれの生活世界全体にある特有の意味を構成することになっていった。

この感覚は、実に不思議な感覚だった。そもそもこの対話は、論文指導の一環であるオフィスアワーという名目で始まった。それは学生である筆者が、指導教員である中村先生から何らかのアドバイスを受けるためのものであった。しかしこの対話が〈指導〉というフレームを超えるのに時間はかかるなかった。筆者のための指導が、二人にとっての学びの時間にとって代わったのである。ここでの学びは、ライブである。W.ベンヤミン流に言えばまさに〈アウラ〉なのである。出会い頭に何かが生まれ続けていくような世界。この場のこの瞬間にしか生まれ得ない気づき、変容、そして学び。私の学びと中村先生の学びの輪郭が解け始め、共有された学びになり、その学びがこの対話の場を超えてそれぞれの生活世界に溶けだし、そこに変容を生じさせていく。そんな過程が、特有の意味世界を構築するのだ。そんなわけで、今日もまた二人の学びの時間が重ねられていく。それは決して答えの出ない学びであり、予定調和でない学びの世界。しかし、決して閉じることのない開かれた学びの世界。そんな世界を少しでも感じていただければ幸いである。

エピソード「省察的な視野の中で」

前回の中村先生との対談で、この対談そのものを番外編としてエピソードに登場させることが提案されました。これまでにボイスレコーダーで対談を記録したファイルが6個あったので、私はそれをエピソード番外編として、ピンクの紙にプリントして今回に臨みました。

「今日は、わりと忠実にテープおこしをしましたよ」

「ちょっと、こんなこと言っていたかなあと思って少し恥ずかしくなりました」

「いろいろ、いいキーワードをだしていましたね。あらためて感心しましたよ」

「これやってみてどうでした？私は、読んでみてなかなかおもしろいなって思ったんだけど…」

「おもしろかったです。でも、こんな風に話されていたんだと、あらためて発見したこと多かったです。自分がいかに聞けていないことに気づかされました」

「私も、こんなこと言ったっけて、忘れているんですからね」

「味付けになっていいですよね。この番外編が…」

「こういうことでしょ？」

「そうそうそう、だから多元的ストリーが重なり合って物語ができるということがよくわかりますよね。そして、この話を題材にしてさらに誰かが、塾長に話していく場面が書いてありましたね。“塾長は、いつもこんな風に中村先生に突っ込んでいくのか”って…、これが、何と言うのか…、さらに二重のらせん構造になっていく」

「実は、その続きもあるんです。この番外編を私の連れ合いが読んで、さらに対話が始まっていく。つまり私と中村先生との対話の上位に位置するメタ対話です」

「それは、おもしろい。いつもそんな話をするの？」

「そうですね。よく話をしますよ。だいたい、大学に行くことを強く勧めたのは、私の連れ合い

ですから…」

「そうだったの、で、どうして大学院に行けということになったの？」

「もっと、外の世界へ出でていってほしかったんでしょうね」

「北村さんに、出でていってもらいたいということ？」

「いやそうじゃなくて、今ままではアウラの教育は、亀岡という地域にしか還元されない。そうではなくて、もっとこの教育を多くの人たちに理解してほしいというのが、きっと連れ合いの考え方だと思います。中村先生が、前回言われたでしょ、“私は、いつも縁が好き”だって、“縁にいると自分を異化してくれる出会いがある”って…。私は、その縁になかなか行かないんですよ。触手は絶えず伸ばすんですけど、決して自分は動かない。そんな頑固なところがあるんです」

「だから、大学院、行けって…、おもしろいなあ」

「この前の先生との対談を読んで、そこが先生と私の違いだって言うんですよ。動きが違うって…」

「そう言われば、私はよく動くよな…」

「“多動”なんですよ」

「そう、“多動”なんですよ」

エピソード番外編、これを書いたおかげで、私の連れ合いまでが私と先生との対談の内容に登場することになりました。このエピソードは、果たしてどこまで広がっていくのでしょうか。でもよく考えれば、それは私の生きる世界の広がりであり、それを文章化していくことで、あらためて私

自分がその広がりに気づいていったのかもしれません。

「あと、“コトバの厚みが違う”って言ってましたね。先生のコトバは、とにかく厚い。だから“もつともっと本を読め”って言うんですよ」

「それどういうこと？」

「たぶん、私のコトバは、まだまだ直接的だつていうことだと思いますよ。まだ十分に内面化されていない。コトバが浮ついている。そんな感じだと思います」

「でも、教育のことを語ってる北村さんのコトバは、十分厚いと思いますけどね」

「そうですかね」

「私には、見えないものが見えるわけですから、北村さんには、それだけの語彙があるんでしょうね」

「あとね、先生との出会いは、“何か『運ばれてきた出会い』のように感じる”って、言ってましたね。どこか、天の采配みたいだって…」

「なるほどね…、じゃあ、奥さんとの対話もこのエピソードに番外編として入れません？今度は、青の紙でね。カラフルでいいんじゃない」

「いや、私も書こうかなって、一瞬思ったんですけど、それを書いてしまうと、ますます広がってしまうかなって…」

「もうでも、ここまで聞いたら、北村さんがここにいることに奥さんが深く関係していることがわかったんですから、登場人物としてはいりますよ」

「書くんですか？」

「ぜひ書いた方がいいと思いますよ。北村さんのリアリティーとしては、抜かせないんじゃないの。親密で重要な他者からストロークがあって、何か必然性があるわけだから…。これ前言いましたかね『偶然なる出会い』とか『計画化された偶然』とかいう話…」

「知りません」

「『計画化された偶然』というコトバがあるんですよ。“Planned Happens”って言うんですがね。これはまさに、『計画化された偶然』なんですよ。偶然のように見えるけど、それは出会うべくして出会ってるんですね。だからそれは、あらかじめ出会うように仕組まれている。当然、近い関心の中で動いているんですね…」

「でもそんなの、私の周りにいっぱいありますよ。みんなつながってるんです。バラバラな出会いなんてない。みんな必要な出会い。ほとんど分断できない」

「だから奥さんを登場させてくださいよ。青い紙でね」

分断できないつながり。確かに偶然の出会いなんて本来ないのかもしれない。すべては関係性の中に存在する。大切なことは、その関係性そのものに自覚的になること。関係性に気づかないと、それは分断され、ただバラバラにコトがおこっているだけになってしまふ。

「エピソードの中に、銀行にいったS君の話をありましたね」

「あれは、生徒じゃないんです。ただ外回りで、定期的にアウラに来てくれている担当者です」

「卒業生じゃないの？」

「違いますよ。ただの銀行の人…」

「業者なの、そんな人にも、いろいろ話しているの。大変優秀な国公立大学の…、これ卒業生じゃないのね。それは、触手伸ばし過ぎだわ…」

「ついつい話してしまうんです。いや、なんかしんどそうにしてたから…」

「これ、おもしろかったなあ…、卒業生へのサービスをしてるんじやないんだ」

「違うんです」

「ここおもしろいですよね。こういう言い方…」

「どういう言い方？」

「“どんな意味があるのかなって思うんですが、銀行協会の試験を受けさせられるんです” そう思った段階で受けなくていい理由を探し出しているんですよ、こういう人ってね…。使ってる側からすると、今を一生懸命生きていくってほしいんですよね。今を一生懸命生きれない人間が、未来を一生懸命生きれるはずがない。だから幹部候補生になんてなれないんですよね。もうこの段階で投げてますよね。有能な管理職なら、すぐわかりますよね」

「格好いいですね」

「ということを北村さんは言いたかったんですね。北村さんは、このS君の様子からどこか直観的に感じるものがあったんでしょうね。だから、話し始めるんでしょうね」

「でも、それは生徒たちも同じなんです。何かといえば文句ばかり言う子がいるじゃないですか」

「いるね」

「教え方が悪いとか、教材が悪いとか、自分ができない言い訳ばかり考えている。こんな子は、なにやってもあかん気がしますね。与えられたものをどう使うのかとか、目の前に置かれたものはどう処理するのかとか、そんなことが大切なんですよ。だから一緒なんですよ、生徒たちもS君も…」

「たぶんよく似てるでしょうね。そういうところにパッと目がいくんでしょうね。だから出入りの業者であっても捕まえるんでしょうね。言いたくなるでしょ、なんかいろいろなことを…」

「北村さんにとって、巻き込みたくなる人とそうでない人がいるんでしょ？」

「そうですね」

「その判断基準は、何なの？誰でも巻き込むわけじゃないでしょ」

「私にとってのプライオリティーは、“純粹さ”かもしれない…」

「“純粹さ”ってどこで判断するの？目つき、話し方、コトバ使い、仕事ぶり…？」

「何を感じているんだろう…」

「何かあるんでしょう？」

「私は、テレビなんかを見ていて、涙が出てくる場面があるんです。それは、ひたむきに一生懸命何かに取り組んでいる人たち…。特に、長い間一生懸命に何かに取り組んでいるんだけれども陽の目を見なかつた人が、ようやく陽の目を見るようになつたその瞬間に感動するんですよ」

「なるほどね」

「“一生懸命さ”、“純粹さ”これって私自身にとっても、とても大切なことなんです。人間そのものが好きなんでしょうね…」

「このS君は、“不思議な森”に迷い込んできたんでしょうね…」

私がS君に見たもの、それは以前私がK先生に見たものと重なり、さらには生徒たちにも重なっています。いやあるいは私自身にも重なっていくのかもしれません。次から次へとモノが与えられる消費文化の時代、それはいつも簡単に目の前のことを行き出したり、諦めたりすることによって成り立っている社会がそこにあるのかもしれません。そんな社会に生きる私たちにとっての精一杯の抵抗は、そのつながりを自覚することかもしれません。そしてそのつながりは、今この瞬間の私たちの目の前にあるのです。アウラという不思議な森において、私は様々な人たちと出会い、そのつながりをあらためて確認する。そんなことが、私の日常の中に起こっているのかもしれません。

「この番外編を書いてみて、どんな印象を持ちました？」

「そうですね。あらためて中村先生ってすごい

なあと思いました。次から次へと切り返していく」

「それは、北村さんが引き出してくれてるんですから…。私からすれば、私からいろんなものを引き出す北村さんってすごいなあと思ってしまうんです」

「対話ですね」

「そう対話です」

「私は、よくアウラの生徒にも話をするんです。大学の先生から1のことを要求されれば、私は3返してみようと思うって。例えば、1冊の本を読むように言われれば、必ずその周辺の本を2,3冊は読む。1の要求に対して1返すのでは、それは先生の想定内でしかない。私は3返すところで、先生の想定外の反応を見てみたいんです。ギリギリのところで、生まれてくるもの。予定調和の中では決して生まれないもの。それが、おもしろい」

「教師は、いつだっていい生徒によって鍛えられるんですよ」

「そう思いますよ。その通り。だから私は子どもたちによって鍛えられてきたんです。私は、いつだって“学習者”としてアウラに関わってきたように思うんです。生徒たちやスタッフの先頭に立つ学習者、それが私の私自身に対するイメージなんです」

「なるほど」

「最近、“塾長は大学の先生みたい”って生徒から言われるようになりました。もちろん、彼らは大学の先生を知っているわけではないのですが、結構何人かの生徒はそう言いますね」

「それは、北村さんがいろんな関係を再現しているから、大学の教師らしく見えるんですよ。それは、見えますよ」

「だんだん中村先生みたいに思考が立体的になってきているように思います」

「“多動”なんですよ」

「私の中で“知性”というのは、固定化された情報ではないんですよ。常に新しく生まれくるも

の。それが“知性”なんです。だからいくら有名な先生であっても、私との対話の中で、その瞬間に新しい“知性”を生じさせられる人でないと魅力を感じないです。動きがないと化石みたいに感じるんです」

「だから大学でも、私はよく質問するんです。こう言ってみたら、どう返してくれるんだろう？あるいはここまで言ってみたら、どういう答えが返ってくるんだろう？って、いつもそう思いながら質問するんです」

「だから、そこで問い合わせているんですよ。いい学生、いい学習者だから…。問い合わせがやっぱりうまいんですね」

「先生にも、動きがほしいんですよね。何か新しい動きが…」

「でも、嫌な学生かもしれないなって一方では思っていますよ」

「そんなことはないですよ」

「でも、中村先生はおもしろい。何かが必ず返ってくる。新しいものに出会わせてくれる。だからおもしろいんです」

「北村さんが、どんどん突っ込んでくるもん」

「“先生の奥にあるもの”っていったい何なのだろうって、思うんです。前に山岳部の話があつたでしょ。これは、私の中村先生への興味から生まれた問い合わせの中で出てきた話でした。“先生の中に何があるんだろう”っていう…」

「それは、子どもたちのことにもよく現れていますよね。北村さんの思考がね…。その子どもの中に何があるんだろうって…。だからどんどん巻き込んでいくんでしょうね。それは、通常の塾や学校の先生と生徒の関係を超えてますよね。前回もらったアウラのチラシの中にもよく出てましたね。装丁も大変きれいなんですが、そういうメッセージがよく出てましたよ。生徒たちのレディネスがそこで育っていく。何か森の力があるんでしょうね。よく伝わってきましたよ」

「あのチラシで生徒は集まつくるんですが、今年の生徒募集は今までとは違うような感じがするんです」

「何が変わったんですか？」

「アウラの入会には、面談と体験というプロセスがあるんですが、その初回の面談で必ず言つてることがあるんです。それは、“あなたには選択の権利がある”ということ。学校ならそこに行かなければならないけれど、塾はそうじやない。アウラの他にも選択肢がいっぱいある。“来たかったら来ればいいし、来たくなければ来なくていい”このことはとても大切なことなんです。子どもや親に選択の権利が保障されているから、私たちは自由に自分たちの教育をおこなうことができる。最初に合意が必要なんです。そのことをずいぶんはつきり伝えられるようになったかもしれません。それから大学の話もよくしますね。たいていの親は、学校に入学するまでのことしか考えていない。でも大切なのは、入学してから。子どもがその学校でどう学び、どう生きていくかということ。そんな話もよくしますね。入会の前から、啓蒙してのかもしれません」

「そうでしょうね」

「それから、体験をしてもらうんですが、たいていの子どもは、“楽しかった”とか、“集中できた”とか、“時間が短かった”とか、そんなことを言いますね。ただ一人で学んでいただけなのに…」

「違うんでしょうね。何かが…」

今日の対話がここで終了となりました。こんな風に対話を続けていくほどに、私はより中村先生に出会っていっているように思います。そしてそのことは同時に私がより私に出会っていくことなのかもしれません。先生との対話の場面で、私は私なりの学びを表現し、そこで表現された学びは、アウラの実践に影響をもたらし、それを記述したエピソードが再び先生との対話の媒介となります。この循環が、まるでらせん階段のように進行しているのかもしれません。

「学びのモードというか、森の中は、違う世界なんです。だから、学びのモードが変わってしまう」

「なるほど…」

「アウラの色をはっきり伝えられるようになつたかもしれませんね」

「核心を深めますね」

「言語化するということは、そういうことだと思います。言語化することでより深みが生まれていいくんです」

番外編の記述は、私にとってこのエピソード記述している私自身にさらなる省察的な視野を与えることになったのだと思います。アウラの日常を、森の中で日々繰り広げられるそこに関わる人たち、もちろん私も含めてですが、その変容を言語化することで様々な新しい発見が生まれます。そしてそれを先生との対談というかたちで相対化し、それを番外編として記述していくことで、さらなる変容が私自身の中に起こっていくような気がします。もちろん、こうした私の中で生じた変容もまた、森の中へと返っていくのですが…。

# 幼稚園の現場から

## IV

鶴谷主一

原町幼稚園(静岡県沼津市) 園長

### ◆あるショックな出来事

昨年12月に幼稚園の音楽会を行いました。市民文化センターを借りて大舞台での歌と合奏の発表です。それぞれのクラスの発表も上手くできて、私たちスタッフも、保護者も満足してニコニコで幕を下ろしたのでありました。

その日にその事件は起こりました。事件といっても、何か表立って大きなことが起こったわけではありません。しかし、当事者と私をはじめ幼稚園スタッフにとって、心理的に大きな出来事でした。

それは休憩時間、あるお父さんがロビーに出たときには聞こえてきました。「Aちゃんとは、来年同じクラスになりたくないね」。誰が言ったかわかりません、雑然とした人混みの中で聞こえてきたといいます。Aちゃんは障害を持っています。そしてお父さんはAちゃんの父親でした。

音楽会の数日後、お父さんから話があるとの連絡があり、面談しました。そこで音楽会のときの話と「幼稚園に迷惑をかけるなら退園してもいい」という話を聞かされました。大変なショックを受けました。園長として自責の念と、音楽会の会場で皆が浮かれた気分の中、ひとりその家族だけは傷つき、孤立感を強めていたことを思うと、悲しくて仕方あり

ませんでした。なにも知らないで浮かれていた自分もバカみたいに思えました。



♪音楽会オープニングで歌う園長(中央)

※写真と本文は関係ありません



♪年長組が2クラス合同で歌っています

## ◆ Aちゃんのこと

Aちゃんは年少児です。入園するとき障害の有無はわかりませんでした。入園してしばらくたってから言葉が出ないことと行動がおかしいことに気付き、しばらく観察し、親御さんに話をするタイミングを見計らった上で受診を勧め、やっと5月下旬頃発達が遅れていることが診断されました。

園では、これまでにも障害児の受け入れは行っており、年中組にも軽度の自閉症児が2名おりましたので、教員を加配するなどの対策をとり、そのまま在園してもらうことになりました。

現実は思ったより大変でした。Aちゃんは言語障害と発達遅延からクラスの子どもとのコミュニケーションはまだまだです。ことばでコミュニケーションがとれないぶん、ボディーアタックで友だちを驚かせたり、たまに手が出て友だちを傷つけたりすることもありました。クラスの子どもたちもだんだん恐がるようになり、その頃から保護者から園の対応について意見が寄せられるようになってきました。

そこで、6月の父親参観日にはクラスの父親が全員集まるので、Aちゃんのお父さんに皆の前でひと言挨拶をしてもらったり、担当教員を固定して対応をはっきりさせました。園の対応としては通常の対応でした。そして、12月の音楽会までには、担当教員の努力もあり、クラスメイトに比べれば10分の1程度ですが言葉も出始め、部屋の中で落ち着いていられる時間も長くなってきていました。彼なりに発達はしていたのです。

## ◆ 思い出したこと

この出来事のあと思い出したことがあります。数年前の3月、年長組卒園間近の出来事でした。

年長組に在籍していた自閉症の男の子のこと。それまで順調に来ていたのですが、ある日から気に入った女の子につきまとい、囁みつきを繰り返してだんだんエスカレートしてきました。囁みつかれた子の父親が訴えに来園したのを思い出します。



♪年少さんのカスタム遊びで歌・楽しもう！

「どうして園はそういう子どもを受け入れるんだ、他の子どもの安全や教育のことをどうかんがえているんだ！園としての姿勢をきちんとしてほしい！」という意見だったと記憶していますが、そのとき、私は怪我をさせたことへの謝罪はきちんとしたが、「どうして、障害のある子どもとの共存を温かく見守ってやらないんだ、この人は？！」と逆に腹を立てて「所詮、考え方の違いだな」と掃き捨て、父親の訴えと私の考えはついに交わらなかつたこと。今となっては、このときに気付いていれば…と思うのです。

## ◆ 新しい視点で

Aちゃんの父親との話し合いが終わって、私は今まで障害児を受け入れるということを、幼稚園のスタッフと当事者の親御さんとの狭い関係しか視野に入れていませんでした。クラスメイトには迷惑をかけないように最善の努力をしながらも、これだけ

やってるんだから、あとは我慢して！というところでしょうか。

それだけでは足りないことに気付きました。実は、園にいる全員を視野に入れた“受け入れ体制作り”という視点が欠けていたのです。

これは、小学校で特別支援学級などが整備されてきた今の時代だから出てきた視点かもしれません。ひと昔前は、障害を持っていても認めない親、公にすることを嫌った親が多かったように思うからです。実際、子どもの発達の遅れを親御さんに話したところ、「そういう目で見ていたのか！」と信頼を失って退園されたこともあります。なので非常にデリケートな問題として扱うことが多い問題でした。



♪年長組・発表が終わってホッとおしゃらけ退場のひょうきん二ト

(^\_~;)

さて、事前説明が長くなりましたが、12月の出来事から1ヶ月後、私なりに方針を決め、3学期の保護者会で「障害児を受け入れることについて」の説明を行いました。

●以下が、保護者会で配った資料です。（ほぼ原文のまま掲載します）

専門家に相談したわけでもなく、わたしの経験と経営的側面から考えてみた結果です。

マガジン読者の皆様がこれをお読みになって、もっとよいアドバイスを頂けたら有難いです。

\*\*\*\*\*

### 原町幼稚園 保護者の皆様

これまで、原町幼稚園ではしうがいを持ったお子さんを受け入れてきました。しかし、そのことについて保護者の皆さんに、周知と理解を求めてこなかったこと、そのため、園内に誤解や不協和音が生じてしまうこともあります。私は園長として大変反省いたしました。

今後は方針をはっきりさせることで、原町幼稚園の中では、お互いに理解し合って受け入れ合う姿勢が作られるように私共も努力して参ります。皆様も方針をご理解下さいご協力をお願いしたいと思います。

(マガジンには添付はしていませんが、発達障害児の一般的な解説書（イラスト入りでわかりやすいもの）のコピーを資料として付けました。)

しうがいを持ったお子さんを受け入れることでの良いこと、困ったこと、そのほか今までの経験から感じたことをお伝えしよう思います。私見に近いものも含まれていますが、皆さんにご理解いただきたいと願っています。

### 1 大きなメリットは、一緒に生活する子ども達の精神的な育ちです。

誰でも我が子に「思いやりのある人になってほしい」と願います。

思いやりや優しさは「思いやりを持ちなさい」や「やさしくしなさい」といくら言っても身につくものではなく、何回もその行為を行ったり、身近な人がそうする様子を見て身に付けていくものです。

「しょうがい」を持った人が世の中にいること、ちょっと違う感覚の人がいても、こう付きあえば大丈夫、手伝ってあげよう、受け入れようという気持ちが生活を共にすることで育つてきます。人を受け入れる心の器が大きく、言い換えれば思いやりの心が育つのです。ノーマライゼイション（障害者と健常者とは、お互いが特別に区別されることなく、社会生活を共にするのが正常なことであり、本来の望ましい姿であるとする考え方。）を肌感覚で身に付けられるのです。これは、頭で学習して身に付けられるものではありません。

## 2 困ったことは、しょうがいのある子どもとのつき合い方を模索している段階(まだ付き合い方が周囲の大人も子どもも分からぬとき)で生じやすいと考えます。

大声を出したり、座っていられない様子を見て、その理由がなぜだか分からぬ場合、ふざけているんだと思った周囲の子どもがつられてクラスが落ち着かなくなることがあります。また、言葉での表現が出来ない場合、ボディーアタックしたり、ときには周囲の子どもに怪我をさせたりします。しょうがいを理解していない健常児の対応がパニックを引き起こす原因になることもあります。逆に、大好き！という表現に勢いがつき過ぎたり噛みついたりする場合もありました。

その子の持つしがいの特徴を把握し、周りとの協調を促す対応がとれれば、徐々に本人も、周りの大ぬや子どもも付き合い方を学習していく、ほぼ防ぐことができるようになります。ただし注意と配慮は怠らないようにします。

もう一つ、健常児が群れになってしまい児をバカにしたりする現象が現れると健常児にとっても健全な精神の発達を促すとは言えなくなってしまいます。（自分達と違う者を排除するという「いじめ」につながる行為なので気をつけなくてはなりません）。

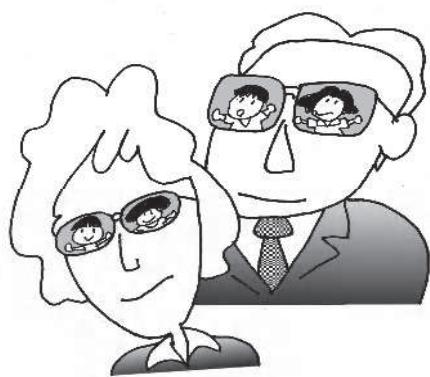
## 3 「許す」行為について。

これは、子ども同士のトラブルを容認する意味でも、トラブルを未然に防げなかつた私共の対応を弁護するつもりでは決してありませんが、誤解を恐れずにあげておきます。

故意ではなく起こったトラブルは、「許す」という行為を引き出しやすいものです。しょうがいのことが理解されなければ、許すしかない、という状況になります。（たとえ友だち同士のケンカでも最終的に謝り、許すしかないのです）。許せる人は精神的に強くなります。嫌なことが身に降りかかってもそれを許して気持ちを切り替えることができるからです。子ども同士のケンカでも「ごめんね」「いいよ」という関係が成立したとき、両者ともにホッとした「よかったです」という顔つきになります。いつまでも問題としてそれを抱えて生きる人より精神を良い状態に保つことができるのではないかでしょうか。

直接トラブルが生じた場合でなくても、「僕はしっかり座っているのに○ちゃんはどうして

歩き回っても許されるの？僕だって一緒にやりたいよ」・・・最初はこんな気持ちでしょう。それが次第に動じなくなってきます。忍耐力と許せる気持ちが育っている。喜ばしいことだとみてはどうでしょう。



#### 4 「障害のある子どもだけ特別扱い？」という疑問はつきまとうかもしれません。

このことについては、こう考えています。

クラスの子ども全員に平等に愛情を注ぎ、一人ひとりの育ちを保障しなければならないのは教師の義務です。ただ、10のサポートを必要とする子どももいれば、5のサポートで目的とするレベルまで育つ子どももいます。

たとえば、「ブランコを楽しくこげる」ということを考えてみて下さい。ブランコのこぎ方を1回教えただけで自分で楽しくこげる子もいれば、何回もブランコを押してあげないと、なかなかこげない子どももいます。幼稚園や学校という公教育では、「みんなの幸せ」を大前提に教育を行います。なので「ブランコを楽しくこげる」という目標をみんなが達成するためには、一人ひとりへ行う教師のサポートは違ったものになってきます。生活面や精神面での教師

の関わり方も同様です。みんなが一緒に生きていく社会では、お互いに影響し合い、一人だけが良くなっても幸せにはなれないからです。

#### 5 職員の加配(必要に応じて増員すること)について。

経営的な問題にもふれなければならないでしょう。しうがいのあるお子さんを受け入れるということは、サポートする職員が必要になります。人件費等の経費がかかるということはあきらかです。

家庭や子どもの事情で園への納付金に増減はありません、全員同じです。しかし、静岡県私立幼稚園振興協会、静岡県、沼津市で実施している障害児受け入れ園への補助金制度のいずれかを利用することで、条件によっては加配された教員の人件費をまかなうことができます。そのためには、それでなくとも精神的な負担の大きい親御さんに診断書等の書類を用意して頂いたり、相談の時間を持って頂いたりという協力によって、書類を作成することができます。

今年度は、9月に提出した県への補助金申請が審査を通ったという内示が、先般1月4日に担当者より届きましたので、園からの費用持ち出しはありません。この補助制度が廃止されない限り、同様だと考えます。

以上、私の考えをふまえた上で下の受け入れ案をお読み下さい。

この方針案を理事会に提出して承認されれば、来年度の入園案内から記載いたします。

私も本気で考え、建前でなく本音で文章を綴ってきました。保護者の皆さんもご意見があれば理事会提出前に私にお寄せ頂けるとありがとうございます。「あ、そういう考え方もあったのか」と気付くことを大切にていきたいと考えています。

### 心身にしうがいを持ったお子さんの

#### 受け入れについての方針(案)

- 1 一トマ、あるいは教員もしくは保護者の付き添いにより集団生活ができる、発達が見込める認められたお子さんについては、しうがいがあつても入園を受け入れます。  
(園長、主任教員と保護者、児の面談・観察により判断します。)
- 2 お子さんのしうがいについては公表します。  
医師の診断があれば、その内容について全園児の保護者にお知らせし、理解を求めます。
- 3 お子さんの発達に最善を尽くして頂きます。  
そのため、専門機関での治療を幼稚園登園と並行して行って頂きます。
- 4 園が行政等の支援を受けるため、診断書や同意書の提出等、協力して頂きます。  
(専門家によるアドバイス、教員加配目的の補助金申請)
- 5 受け入れ人数はしうがいの程度にもよりますが、学年に1名。軽度の場合2名まで。
- 6 年度の途中でも、発達が見込めない場合、集団生活が困難な場合は退園になります。

○現在、原町幼稚園に通うしうがいをお持ちのお子さんは2名。（ここでは具体的に名前と診断名、現在の様子が記載されていますが、マガジンでは省きます。）

二人とも原町幼稚園の大切な仲間です！過剰に意識せず、二人のしうがいを理解した上で付きあって頂けることを願っています。大人の姿勢が子どもに影響を与えます。

\*\*\*\*\*

以上、保護者会ではこの事について意見が出ることもなく、おおむね好意的に聞いて下さるお母さん方も多かったように思います。（その場で異論は出しにくいということもあります。）

その後、Aちゃんも少しづつ発達を見せ、クラスの子どもの理解も進み、クラス自体は良い状態になります。 （まだまだ手はかかるし、行事などでは目立ちます。）



♪フィナーレ・全園児での歌「せかいがひとつになるまで」

#### ◆ちょっととした変化

その後、こんな変化がきました。

まず、在園児の下のお子さんが障害を持っているお母さんが相談に来られて、「再来年ですが、入園させてほしい」というご相談です。方針については保護者会で聞いたので理解しているというのです。そのときに、「私はこの子の障害について、会う人会う人にいちいち説明して歩かなければならないんです。だから、園で発表してくれるというのは有難い。」という話でした。

もう一つは、在園中の年中児で障害を持つお子さんのお母さんから手紙を頂いたことです。

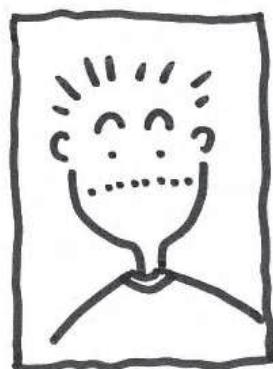
そこには、「発達障害を公表したこと、不思議な動きをするのはそのせいだ、と周りの保護者の方々が理解し、温かい目を向けて下さってありがとうございます。全ての方々への理解は難しいですが、親しくして下さるクラスの皆さんには本当に感謝しています。（中略）今は園全体に公表して夫婦ともに清々しい気分です…。」

いいことばかりとは思いません。今後も受け入れることでのメリットやダメージ、悩むことも多いと思いますが、一步前にふみ出せたかな、と思うのです。



♪顔を見合わせながら歌ってます(^o^)

学校法人松濤学園 原町幼稚園  
園児約200名 6クラス  
幼稚園歴27年（内園長歴8年）  
<http://www.haramachi-ki.jp>



ツルヤシュイチ

# 福祉系 対人援助職養成の 現場から

④

## 西川 友理

2011年1月5日から11回にわたり、読売新聞の『教育ルネサンス』というコーナーに『国語力を鍛える』という特集が組まれていました。これには、小学校から大学に至るまで、さまざまな文章表現力や文章の作法、国語表現のきまりについての指導がなされていると記載されています。裏を返せばそれほどまでに国語力が低下しており、特別な指導を必要とする状況があるという事なのでしょう。

養成校においても、学生の国語力、特に文章作成力の低さを痛感します。

「書きたい事とか、言いたい事はなんとかあるねんけど、それを文章にするとなると、なんやよう解らへんのです」と、それでもなんとか試行錯誤しながら、文書を仕上げて持ってくる学生達です。

「…どうですか、先生？」

実習先に実習前に提出する履歴書のようなものである『実習生調書』を書いてきた学生が、恐る恐る尋ねます。

「うん、言いたい事が…なんとなくしか解らへん。」

「あああもうっ、なんとなく解りや、それでいいでしょう！向こうさんも解るって！」

「いや、なんとなくやつたらあかんからね。ちゃんと伝わるように…」

「それが苦手なんですって！」

「苦手やからやるんやないの、ハイ、頑張ろう！」

### 学生に求められる文章

幸田露伴は、著書『普通文章論』において、文章を、記録・解説・報告書等である実用的文章と、詩・小説等の美術的文章とに分けて解説していますが、私は、養成校において教員が学生に課す文章を、ビジネスコミュニケーションの基本と言われる「報告・連絡・相談」に分けて捉えています。

goo辞書によると、

報告とは、「告げ知らせること。特に、ある任務を与えられた者が、その経過や結果などを述べること。また、その内容」

連絡とは「気持ちや考えなどを知らせること。情報などを互いに知らせること。また、その通知」

相談とは、「問題の解決のために話し合ったり、他人の意見を聞いたりすること。また、その話し合い」

となっています。

この定義に基づいて学生達が記述する文章を分類すると、教員が学生に課すレポートや実習日誌などは「報告書」、実習先や就職先に提出する履歴書などは「連絡票」、授業の際のコミュニケーションペーパーやメールなど、相手とのやり取りがあるものが「相談文」になります。

「相談文」は不十分な知識や情報、まとまっていない考え方や質問が記述されるものですが、「報告書」や「連絡票」では、読み手に事実が明瞭に伝わる必要があります。

この“読み手に事実を明瞭に伝える”文章を書けるようになることは、一般職はもちろん、福祉系専門職にとっても重要な技術であります。

## 不明瞭な文章表現

ところが学生達の文章は、非常に不明瞭です。

例えば、実習日誌。これは実習期間中、日々の記録を書きとめ、それに対する考察と、職員に対する質問などを書き入れて、学生が毎日作成する報告書です。

今まで何人か、聴覚障害を持つ学生の実習担当をしたことがあるのですが、彼らの実習日誌には、特に助詞の間違いが多くありました。どうしてだろうかと思っていた

のですが、実習指導でろうあ児施設を行った際、全ての掲示物の“てにをは”に、サインペンで印がされているのを見て、やっと気付きました。

その施設の会話方法は、主に手話でした。私がそれまでに担当した聴覚障害を持つ学生との主な会話方法も手話でした。手話は助詞の直接表現を省略し、手の方向や位置で物事の関係性を表現することが出来るのです。つまり、手話の言語表現は日本語のそれとは文法が違うと言えます<sup>注1)</sup>。普段の会話で経験しない日本語の助詞は、文章を記述する際にも書き表し難いでしょう。

また、あるイベントで、ひとつの企画を実行する学生グループに係わったことがあります。毎週決まった曜日・時間に会議をし、どのように実施するか決めていました。この期間中、グループのメンバーが個々に、こっそりと私に愚痴をこぼしに来ていたのです。

「A君はちっとも協力してくれない」  
「Bさんが何でも自分勝手に決めてしまつて困る」

「私は本当は〇〇がしたかったのに、違うものに決まってしまった」

——自分が不満だってこと、相手に言ったの？

こうと聞くと、大抵がゴニョゴニョと黙ってしまいます。

「いや、もうあきらめますし…」  
「今更言ってもね…」  
——言えばいいのに！

そう言うと皆一様にこう言います。  
「だってそんな雰囲気やないでしょ！」

と、その場の雰囲気を大切にする学生達ですが、その雰囲気を文章に書き表すのは、

難しいと言います。見聞きした情報ですら文章化しづらいのに、雰囲気という茫洋としたものを文章に書き表すことはなおさら難しい。そこで学生達が使う手段の一つが、(-\_-)や(^0^)などの顔文字や絵文字です。書き手は、自分の気持ちに合う顔文字や絵文字を選び、読み手に発信します。しかし、その意味の解釈は様々で、(^0^)に対して「喜んでいる」「嬉しい」「馬鹿にしている」等、読み手はその前後の文章の流れや、書き手と読み手の関係性、いつも共有している雰囲気から察して意味を判断する、という非常にあいまいな伝達表記なのです。事実を明瞭に表すための文章には、使えるものではありません。

先ほどの聴覚障害を持つ学生は、普段の会話で省略出来る助詞を、文章に書き表すことが苦手でした。文章記述が苦手な健聴の学生にも、普段のコミュニケーションの中に書き表し難い何かがあるのではないかでしょうか。

学生の対人関係の志向パターンとして、相手と話し合うのではなく、その場の雰囲気を読み取り、それに合わせた対応をする。

雰囲気が共有できない人とは、係わらない。

少しでも自分と適合しない相手だと感じれば、黙って、離れて、係わらない。

相手を理解する必要もないし、相手に理解してもらう必要もない。

自分も相手も傷つかない。

学生達は、社会には様々な人がいるということは認知しています。しかし、その人々と共に社会を作り上げて生きているという自覚が足りないように感じます。だから、一緒に何かを作り上げる際に必要な、明瞭に情報を伝え合う事が、これまでの人生に

少なかったのではないでしょうか。

つまり、学生の文章表現力の低さは、希薄な人間関係が招いた問題点として現れたものだと思います。

幸田は、先述した著書の中で、報告書や連絡票といった実用的文章について「記すべき事柄、説くべき理屈、伝えるべき意思、訴えるべき情といった内容がまず存在して、そして後に文章が作られるわけであるから（中略）おのずから文章は容易に書かれる」と述べています、要は伝えるべきことをただ伝えるだけなのだから簡単なこと、難しいという思い込みをなくせば大丈夫…などと書いています。

この本が発行された明治時代末期は、子どもといえども地域の一員として様々な人々と共に行動し、自分の役割を果たし、社会を形成している状態が常にあったのではないでしょうか。その日々の中で、口頭において相手に事実を明瞭に伝えることは、日常的に行われていたでしょう。だから幸田は、報告書等の記述は比較的簡単だと述べることが出来たのです。

私は、学生達が世代などの立場が違う人達と話をする機会が日常生活に少なくなったため、事実を明瞭に伝える手法を身につけられず、雰囲気の共有を偏重しすぎているため、事実の情報のやり取りに不慣れなのではないかと思うのです。

時代の流れと共に社会は変化し、そうして失われてしまった地域社会から学び受け、いわゆる地域教育は、今では小中高校での学校教育に背負わされてしまっているという状況です。それは、冒頭でも挙げた『教育ルネサンス』の記事を見ても明らかです。しかし実感として、小中高校だけで

は国語力は十分に培われてきておらず、結果として、大学や短大、専門学校等の高等教育機関にまでその皺寄せが及んでいます。だから、私はなぜか学生達に『てにをは』とは…」「主語述語とは…」といった授業をしなければならない、というような現状があるのです。

### 文章校正の指導ポイント

私が普段から学生が報告書や連絡票を書く度に指導している事は、

- ① 誤字脱字がないこと。
- ② 基本的な情報である 5 W 1 H が伝わること。
- ③ 主語と述語が整合性をもって対応していること。
- ④ 適切な助詞が使われていること。
- ⑤ 主観と客観を明確に分け、何が事実で、何が書き手の意見や考察なのかをはっきりさせること。

以上の 5 点になります。

本来なら小中高校で教えられているべき内容ばかりです。

学生が書いた文章に対して、私はこのような質問を投げかけます。

「これはこの漢字でよかったです？ 辞書で調べてごらん。」

「それはいつのことなのかな？」(When)

「どこであったことなの？」(Where)

「誰がやってたの？」(Who)

「それは一体何だったの？」(What)

「どうしてそんなことやってたんだろうね？」(Why)

「どんなふうだった？」(How)

「〇〇ちゃんはお菓子をもらったのが嬉しくて、にこにこしていた』って書いてあるけど、〇〇ちゃんが嬉しかったろう

な、と思ったのは、あなたが思っている事で、目で見た事実ではないよね？」

### 利用者支援は明瞭な記録の上に成る

授業中に時折、

「自分が働く施設で、訴訟問題だって起きるかもしれないんだよ。施設内の職員みんなにも、施設外の関係者にも読まれるんだよ。そのためにも、日々の記録は、ちゃんと残しておかなければいけないんだよ」と、明瞭に伝える文章の重要性を強調しています。

施設職員だった時の経験から、社会福祉の現場においては、多職種連携が求められる事案があり、情報の共有が欠かせないという実感があります。

情報の共有の多くは、文書での合意形成という形で行われます。共有された情報に基づき、各々が支援の方向性を考え、またその考えについて摺り合わせをします。この際、事実に基づく明瞭な情報があって初めて、適切な判断が可能になります。明瞭な記録は、あらゆる利用者支援方法を考える際の基礎になる大切なものです。

目の前にある事実を、どのように収集しどのように記述すれば、誰が読んでも同じ情報が得られる形になるのか。さらに福祉系対人援助職には、その場の雰囲気を察する感性も重要であり、見聞きした情報に加え、雰囲気さえも察し、誰が読んでも解る情報として表現するドキュメンテーション・スキル(文書化技術)が求められます。

社会福祉の現場においては、日常の報告書を作成する際、基本情報である 5 W 1 H に、プラスアルファの情報を加えることが、有効なのだと思います。

Whose(誰のもの)「そもそもこのサービスは誰のために行われ、責任者は誰なのだろうか」

Wants(要望)「このサービスはこの人のやりたいことに沿ったものになっているのだろうか」

Which(どちら)「サービスの実施前と比べて、また別のサービスと比べて、どのようにになっているのだろうか」

How much(いくら)「どれほどの時間的・精神的・金銭的コストが必要なのだろうか」等々…。

この、 $5W1H + \alpha^{注2)}$  は、文章を書く時だけではなく、物事を考え、読み、聞き、伝えるといったあらゆる場面で応用できるものです。

…本当は学生達にも上記の $+ \alpha$  の部分を重点的に教えたいところなのですが、とにかく $5W1H$ を習得させることに時間がかかるってしまっているのが現実です。

しかし、この基礎となる文書化という事務手続きが出来なければ、どんな支援も始まらない、進まないのだという事を、今後も学生達に対し、繰り返し繰り返し伝えていきます。

## もうすぐ桜の季節

「利用者さんの笑顔を見ると充実感がある、一緒にいると何か嬉しい」と言っていた学生達が、もうすぐ新人職員として入職していきます。

福祉施設の施設長とお話をしていると、「最近の新人職員は、きちんとした文章が書けない」とおっしゃられます。施設内の新人教育における文書作成指導の一環として、 $5W1H + \alpha$  の問い合わせを実践されではいかがでしょうか。きっと、良い文章

が書けるようになると思います(\*^ ^ \*)。

あ、顔文字。この(\*^ ^ \*)の意味は照れです。日本語表記は進化していますね。的確に使えれば、便利なものなのです。

対人援助マガジン1周年、おめでとうございます！ ☆＼(\*^▽^\*)／☆

### 注1)

もちろん全ての聴覚障害者が、助詞を間違えやすいわけではありません。

また、日本語対応手話では、原則的に助詞は1つひとつ指文字で表現するようです。しかし、この学生と周囲の人々との日常コミュニケーションは、私が知る限りおおむね日本手話を使用しており、よほどの事でない限り、助詞を省略した表現をしていました。

### 注2)

その他にも Whom、Worth、How long、to Whom、with Whom 等々、各分野で様々に使われています。呼び方も 5W3H、6W1H、8W2H と様々です。また 5W1H を日本式に、六何（ろっか）の原則という呼び方もあります。「何時、何処で、何人が、何を、何故に、如何にして」で、六つの“何”というわけです。

### 参考文献：

- ・読売新聞『教育ルネサンス 国語力を鍛える』 2011年1月5日、6日、7日、12日、13日、14日、15日、19日、20日、21日、22日
- ・幸田露伴『普通文章論』 1908年

# 我流子育て支援論 ～幼児期～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子

子どもと言うものは、気がつくと大きくなっている。特に乳児期は大変なので、毎日があつという間に過ぎていくし、成長スピードも卵子から胎児への成長の次に速い。こうして乳児期を無事に過ごすと、厄介な幼児期に突入する。幼児期は言葉と精神の発達が著しい。言葉で指示が通る反面、言うことを聞かなくなる時期もある。この時期、母親はかなりイライラしたり、不安になったりする。

まず相談を受けるのが、公園等の小集団へのデビューである。

既に出来ているグループの中に入れないと訴える母親たち、まるで女子生徒の問題と同じである。そういう母親は小学校や中学校、或いは高校でいじめにあったり、仲間はずれの経験があって、人間関係が苦手と言うことが多い。

母親の苦手さは受け止めつつも、「子どもは遊ばせたいが・・・」と言うところを軸にして、まずは砂場のあたりで子どもを遊ばせていれば、きっかけが出来るからと伝え、公園など子どもが集まる場所に行かせて見る。それで上手く行くケースも多々あるが、仲間には入れたものの、今度は付き合いに疲れて公園等に行かなくなる母親もいる。そういう母親には、公園ではなく、支援者が介在できる児童館や子育て支援センター、子育てサロンの活用を勧める。連携が取れれば前もって「こういう母子が行くからよろしく」と指導員等に伝えておく。連携が取れなくても行っていればそこで誰かの目に留まり、声をかけてもらえる可能性は高い。人間関係が苦手な母親は百貨店の遊び場を好んで活用しているようで、それはそれで支持している。家に閉じこ

もっていては、子どもも欲求不満でエネルギーをもてあまし、余計に母子を煮詰めることになる。どういう場所であれ、子どもがのびのびと遊べる場を活用することができれば、母親としては頑張っていると言えよう。とにかく、閉じこもらないように、誰かの目に触れるようにしていくことが大切である。

地域の子育て支援の場は増加傾向にあるので、我々支援者はどのようなものがあって、どういう人がやっているのかもきちんと把握し、連携がとれるようにしておくと良いだろう。

次に多い相談で、子どもや親同士のトラブルがある。例えば玩具の取り合い。2歳くらいであれば、玩具の貸し借りは難しく、取った、取られた、噛み付いた、引っ搔かれたなど、日常茶飯事。このようなことに、母親は何処まで出て行くべきか？酷い話では、「噛み付くなんて凶暴な子とは遊ばせられない！」と怒鳴りつけられたことで対人恐怖になり、以来二度と公園に行けなくなってしまった母親も居る。

こうした問題は幼稚園や保育所等、集団に入っても起こる。子ども同士の喧嘩が親同士の喧嘩になり、大騒ぎになることもあり、先生方も間に入って大変である。そのせいか、最近子ども達の喧嘩の経験が全般的に減ってきたように思う。

「仲良く」と言う言葉が前面に出すぎて、喧嘩をさせなくなっているのだ。

喧嘩をすることや、仲直りをすることも成長の過程では必要な経験である。人間関係がこじれても、やり直せると知る最初の段階が、幼児期の喧嘩ではないかと思っているのだが、その喧嘩自体をしないのでは何処で学べば良いのか？

喧嘩をさせない一つの大きな理由に怪我の問題がある。「大事なわが子に怪我をさせるなどとんでもない！」と言う親の気持ちはわからないではないが、集団に居ても居なくても怪我はするものだし、集団に居ればぶつかったり、引っかいたりなどは当たり前に起こるものだという認識を持てないことに問題があるといわざるを得ない。しかも、我が国の欧米化の波は、訴訟を起こすことへの抵抗感をなくし、損害賠償の問題が集団の場で大きくなっている。昔は訴訟を起こすことは極めて特殊で、一般市民に馴染みの深いものではなかったため、父母が訴訟に巻き込まれることなど殆どなかったが、この訴訟の問題は、子育ての場面では幾度となく出てくるようになった。ボランティア活動や、様々な事業でも、怪我や事故の問題があって、保険に入るようになった。集団の場であれば、保険が適用されるが、公園などではそれも叶わない。喧嘩をさせないように、怪我をさせないように気をつけてしまう親の気持ちも、そう考えると無理からぬことかもしれないが、子どもは何かしらフラストレーションを溜めるのではないだろうか。

勿論今でも、口喧嘩や仲間はずれ、噛み付いた、叩いた、押したといった問題を起こす子が一部いるが、親の躾が悪いと批難されたり、子どもが発達障害ではないかと疑われていたりする。乱暴な子はみんな発達障害なのか、そんな訳が無い。

保護者の幼稚園や保育所に対する思いと、子育てに向かう姿勢については、昔と今で大きく違っているように感じる。

もう20年以上前のことだが、東京の

某幼稚園での話。「最近の保護者はミシンを持っていないし、園のバザーなどで協力してもらおうと思っても、出来ないといわれてしまう。」と園長先生が嘆いていました。まな板や包丁を持っていない保護者のことが話題になったこともある。スーパーマーケットでは、少人数用にカットし、パックされた野菜や肉があるため、包丁やまな板がなくても困らない。キッチンバサミで済むことが多いのだ。

幼稚園や学校では、大抵バザーがある。食品はO157の問題などもあって、手作りは減ったが、小物を手作りして売るのは一般的だ。今はやりのシュシュや袋物、小学校で使う給食袋など、手縫いの物もあれば、ミシンを使うものもある。勿論ボンドを使って作る工作品もある。筆者も、写真立て、ピアニカ用バッグ、布製の花などあれこれ協力した。

使い捨ての現代では、何かを手作りすることや修理をすることが減っているが、家庭で子ども達に見せていくことは、とても大事だと思う。作る手間ひまを考えれば、買った方が早い。物によっては安く済む。しかし、簡単に買って、壊れたら捨ててしまうのではなく、自分の好みにあったものを、自分なりに工夫したり、変えたりして作ることはとても楽しいし、修理して使うことは、物を大切に扱うことへ繋がる。作ることや直すことの楽しみを教えていくことも保護者の務めだろう。

子育てには保護者を巻き込まねばならないと考え、園がバザー等で協力を仰いだり、あれこれ言うと、「迷惑」とか「忙しいから」とか言われて逃げられるばかりか、そういう噂が口伝えで伝わって、

幼稚園自体が敬遠されてしまうことさえある。

子どもが少なくなってくると、幼稚園は園児獲得に四苦八苦する。保護者にとっては、バスでの送り迎えは当然、弁当よりは給食、英語教育や音楽教室、体操教室などのあるなしも園選びの指標になっている。延長保育も多くなつて、幼稚園が幼児教育だけではなく、生活全般を見ていく保育園化しているのは否めない。保護者の給料が高いと、保育園は割高になる。幼稚園が延長保育をしてくれると、保育園より安くて便利と言うこともあるだろう。子どもの争奪戦の中では仕方のない現象なのかもしれないが、何でも保護者の希望に添ってばかりで良いのだろうか？

幼稚園に対する保護者の思いは様々だ。身体を使って泥だらけになるような園を好む保護者と、白いタイツや靴下が汚れず、大人しく、きちんと躊躇する園を好む保護者との二極化が進んでいるように思う。服を汚すと保護者から文句を言われると先生や保育士は言う。

子どもとは無限に近いエネルギーを持った生き物だと思う。子どもが元気に遊んできた証の汚れを叱られるのでは、子どもはじっと部屋に居て、ゲーム、お絵描き、テレビやビデオ、PCで遊ぶしかないだろう。有り余るエネルギーを発散させられないとしたら、鬱積した物を残しはしないか？最近の子ども達のエネルギーの低さは、小さいときから良い子を演じてきたツケではと思えてしまう。

子どもはペットではない。人格を持った一人の人間で、親とは別の個体である。しかし親はともすると考え違いをして、

子どもは自分の思い通りになると思ってる。そして育てられる子は、いつも親の機嫌を気にして、良い子を演じる。良い子の何と多いことか。幼児がじっと座っていられる、はきはきとおしゃべりが出来るなど、余り良い子で居ると余計不安になってしまう。

もちろん、誘拐や幼児への悪戯、殺傷事件など、社会状況も子どもたちを外に出さなくなった原因の一つであろう。子どもたちを安心して出せる環境作りについても訴えていかねばならないが、出せる環境があっても出さないとすればそれは保護者の問題になる。

加えて、幼稚園でも家庭でも、遊ぶ玩具が多くすぎる。知育玩具なるものも増え、子どもの創造性や工夫を引き出すと言う玩具をあちこちで見かける。しかし、そういう玩具を与えることより、何も無い自然の中で、遊び方法を探す、考える、工夫することの方が、子どもの創造性やコミュニケーション能力を発達させるにはずっと良い。何も無いからこそ、誰かと遊ぶことが楽しくなるのではないか？

ところで、以前、三歳児から幼稚園で受け入れることへの賛否両論があったが、今は、プレ幼稚園として、二歳児から受け入れているところも増えた。父母が働いていて保育所を活用せざるを得ない場合はともかく、母親が家にいるのに、集団に入る準備もないまま、そんなに早くから、無理やり母親から引き離されるとが、子どもの精神発達にとって本当に良いことなのだろうか？子ども達の発達も個人差があるのだから、それに応じて、一年保育でも、二年保育でも構わないだろう。右へ倣えの三年保育には賛同でき

ない。「古い」と言われるかもしれないが、愛着形成のためにも、3-4歳までは家庭でゆっくり育てても良いのではないだろうか？

最近、小学校低学年の母子分離不安による不登校が増えているように感じるが、その遠因に早期の母子分離の問題があるのではないかと思う。

地域で子ども達が群がって遊ぶような時代ではないので、速く集団に入れたいと思う気持ちは分らないでもない。また、早く子育てから開放され、「働きたい」「自分の好きなことをする時間を持ちたい」と誰でも思うだろう。しかし、「子どもが大きくなるまでもう少し我慢しよう」と思うことも大切ではないか？

我慢の出来ない親から、我慢できる子が育つんだろうか？

何でもローンで買う時代である。現金での生活は分相応になるが、ローンはつい背伸びしやすい。最近では「お金ないよ」と親が言うと「借りてくれれば？アコムとかで」と言う幼稚園児がいるくらいだ。お金が幾らでも降って湧いてくると思っている。そんな風にしたのは大人たちであろう。もっと我慢することを意識して伝えていくべきではないか。子どもの口から貸し金業者の名前が出るような時代はおかしい。

「子どもは子どもらしく」あるべきで、そのために我々支援者は、親を親らしく育てねばならない。

「子どもとは手のかかる生き物で、面倒くさいことが沢山あり、喧嘩も怪我も成長に必要なことであり、喧嘩をして初めて身の守り方、喧嘩の仕方を学べるのだ」と、保護者向けの講座で話している。

痛い思いをしなければ人の痛みはわからない。喧嘩すること自体を止め、子どもらしく接することを制限していくは、育つべき物も育たない。ましてゲームが一般的な時代である。Wii や DS ゲームの中の怪我は誰も痛くないし、死んでも生き返ってしまう。その様なバーチャルな世界を幼児期から見ていれば、しかも、ゲーム機の進化と共に、それがどんどんリアルな物になってきたら、現実と非現実の世界の線引きが難しくなってしまうだろう。こんな時代だからこそ、生身の人間同士で喧嘩をし、痛い思いをすることがあえて必要になると思うのである。

ゲームの影響については、又改めて語りたいと思っているが、保護者の関り方にも「生身感」がなくなっていると感じる。

以前、三歳児健診の場に居た時、「お名前は？」と言う質問に指を三本立てて出す子を度々見かけたが、これは健診前の母親の特訓の成果であろう。質問と答えが一致しないのは、「いくつ？」ばかりに拘った結果と思われる。子どもの発達を気にするのは健診の前だけなのか？普段から保護者との外出を通じ、他の大人と会話をしていれば「いくつ？」「お名前は？」といった質問に触れるることは多く、一般的には自然に獲得できる内容である。しかし、保護者自身が生身の人間と付き合うことを避けているために、自然に学べることも、今はあえて声掛けしなければならないのである。

更に、健診で発語が遅めの子どもに対して、「言葉掛けを増やしてください。」と言うと、「どんな風に掛ければよいのか？」と聞かれることもある。そんな時

は、実際にボール遊びの場面を再現し、「行くよー。」「コロコロ」「転がったねえ。」「捕まえてー。」「上手上手（パチパチ）」「はい、ちょうどいい、こっちだよ～。」などと言葉掛けの例を示す。育児書は沢山あっても、ここまで具体的に示している本はないのである。ではこうした言葉掛けを、筆者はどこかで学んだかと言うと、そんな覚えは無い。小さい頃から、目にしてきた風景が、教えてくれたのだと思う。

現代の一番の問題がそこにある。そういう風景を目につくことだ。我々支援者は具体的に子育ての風景を見せていかねばならない。

子どもたちを取り巻く環境は、科学や文化の進歩とは逆に、悪化しているように思う。

大人になりきれない親の元で、子どもになりきれないまま育っていくことの無理が、未来に暗雲をもたらしているようを感じる。幼児期の環境は、子どもの精神的発達に大きな影響を与える。二言目には「疲れた～。めんどい。」しか言わない幼児を目の当たりにして、笑って済ませていて良いのだろうか？

都心部ではまだ公共交通を使うだろうが、地方では自家用車を使うことが多い。その分、子どもたちは歩くことが減った。風雨や雪の中を親子で頑張って歩けば、子どもの忍耐力が少しは育つのではないだろうか？

食事も子どもの好きなものばかり並べるのではなく、何でも文句言わずに食べさせるべきではないか？これがだめならこっちと言うように、直ぐに代わりの物を与えるのでは、好き嫌いはなくならな

い。そして、例え多少不味くても、人に作ってもらったら、感謝して食べるようにはすべきではないか？我慢はここでも大事だろう。飽食の時代だからこそ、感謝や我慢をあえて言わねばならない。

こうしたことは、まずは保護者がお手本として家庭で実践し、躾として教えるべきことで、保育所や幼稚園で学ばせねばならない内容ではない。幼稚園や保育所が担うべき部分と、家庭で担うべき所の境目は、多少の重なりがあるにしろ、きちんと線を引く必要があると思う。

子育て支援では、支援をすればするほど、支援が増え、支援者は大変になる。その分、保護者は楽になり甘える。

我々支援者は、保護者に対し、「今は支援がたくさんあるから、子育ては大変ではないよ」と言うのではなく、むしろ、「子育ては大変だが楽しい」と伝えるべきだろう。社会は今、少子高齢化ゆえに、子どもを生ませようと虚像を伝えすぎていなか。子ども手当てをばら撒けば、子どもが金づるになってしまい、育てることはそっちのけで次々と子を産む家も見かける。子育て支援も今一度見直し、子育てにほどほどに手をかけることの重要性を訴えていかねばならないと思う。

ほどほどとは、過多でも過少でもない、丁度良いところ、程よいところと言う意味である。何でも誰かにお願いし、お金で済ませられる子育てでは、生身感もなく、親子の愛着形成の意味では、過少になるだろう。生真面目で、細かい親の場合は、過多になる。我々支援者は、その保護者個別の「ほどほど」を査定し、親子の愛着形成がなされていくことを目的として支援すべきであろう。

そして、物を大切にし我慢する、我慢できる大人、許容量のある大人を育て、子どもを子どもらしく育てる支援をすることが、我々の仕事でもあるのだ。

次回は学童期について書いてみたい。



## 不妊治療現場の過去・現在・未来

連載4

# ～ 不妊のお家事情 ～

荒木 晃子

### 最近のトピックス

2011年2月9日、妊娠に関する国際意識調査の結果、日本人は「子供を持ちたい」という要求や必要性が際立って低く、「妊娠はしたいが、『充実した人生には子どもが必要』と考える日本人カップルの割合は、世界18カ国中最下位」という報告があった。これは、英国カードィ夫大学と製薬会社「メルクセローノ社」の共同研究「スターティング・ファミリーズ(妊娠を希望しているカップル 18カ国の男女 10,000人、内日本人 481人を対象にしたインターネットによる国際意識調査)」の調査結果として報告されたもので、妊娠に対する大規模な国別意識調査は過去に例がなかったという。また、同調査によると、「不妊をパートナー、家族、友人に打ち明けることの容易さ」もまた、日本人カップルは18カ国中最下位であったという。

### 不妊に国境はない？

驚きの報告であった。自身の当事者経験に加え、生殖医療の心理士として、不妊に悩む当事者の語りを聞き続ける体験からは、とうてい想像もつかない結果である。私が出会う当事者たちは、子どもを必要と考え、子どもを持ちたいと切望しても、妊娠～出産できないことに苦しんでいる人たちなのである。

日本では、「妊娠を希望している」カップルが「子どもを持ちたいと望んでいる」とは限らない—うえの調査結果からは、そう推測できる。さらには、日本人カップルは、「妊娠したいが、子どもが必要と考えているわけではない。でも、不妊(症もしくは現象)のことは、友人、知人、パートナーにさえも打ち明けられないと 18 カ国の中で一番強く思っている国民」らしい。

国内での意識調査といえば、5年ほど前、筆者が提携する生殖医療施設(島根県内田クリニック)の協力を得て、不妊治療を受診した男女別、カップル毎、個人別の不妊治療初期患者を対象に実施し分析した意識調査(2006年度立命館大学応用人間科学研究科修士論文)がある。偶然にも、先に記述した国際意識調査の質問項目は、筆者の質問

項目と一部酷似していた。そのひとつに、「不妊治療を受けることを誰(パートナー・家族・職場・知人・他人)に知られたくないですか?」という質問項目がある。男女それぞれ複数回答から、結果、ほぼ同数に「知られたくない」という回答があった。特徴として、女性:2対男性:1の割合で、もっとも「他人には知られたくない」との回答が最も多かった。二つの調査の類似した質問項目に対する回答を統合し、以下に考察を試みた。

18カ国中、もっとも不妊を身近な人に打ち明けることは容易ではないと思っている日本人カップルが、不妊を治療することを、もっとも他人に知られないとおもいながら通院することは、治療環境上理想的とは言いがたい。また、国内の不妊当事者カップルは、不妊を容易に相談できる対人関係を持たず、不妊治療を開始することや受診することをもっとも他人に知られたくないという、ストレスフルな環境下で生殖医療施設に通院している実際がある。以上から、日本では、不妊は医療者に相談する医学的な問題であり、当事者は、生殖医療にその解決手段を求めやすい傾向にあるといえるかもしれない。しかし、それは、決して当事者意識に限定した認識ではないだろう。たとえば、就活や婚活などの、人生のある時期に通過する課題に個人の「選択と決断」が迫られた場合、社会にはさまざまな支援体制が整備されている。同じ課題でも、不妊とは、大きく異なる社会認識があるようだ。

過去に、不妊問題の解決を日本の社会が整備してこなかったという事実は、連載①～③のエピソードで、その時代を生きた不妊当事者が語り、それを証言してくれた。生殖革命を経た現在、生殖医療のほかに、不妊問題の解決に向けた支援のない日本で、不妊

を治療する以外の手立てを知るすべのない当事者たちに向けた支援がないことは、社会の果たすべき重要課題とはならないだろうか。

## 日本のコールドケース

生殖医療に端を発する諸々の社会問題への指摘やバッシング、当事者カップルの海外渡航禁止を推奨し、問題が生じやすいといわれる生殖医療技術への規制を求めるジャーナリストや研究者の声明など、時代は変われば、進化する生殖医療技術に対する社会的批判がなくならない現状に、不妊当事者は昔と変わらぬ現実を今もなおみているだろう。それは、おそらく、「病を診て人をみない医師」や「起きた問題に焦点を合わせ、本来担うべき役割から逸脱する援助者」たちがあとを絶たないことと同様に映るだろう。通常、マスコミ等で大きくクローズアップされた問題を取り上げて批判し、その原因や因果関係を探る言動は、センセーショナルで一躍脚光を浴びる要因となり得る。対して、問題の起きたその人を支援し、起きた問題が二度と繰り返されないように改善点を探し、そこに必要な支援とシステムを構築しようとする働きに、スポットライトはあたりにくく、社会的評価を得ることは容易ではない。しかし、後者なしには、問題の再発は防ぎようがなく、次に問題が起きないようにする手段は見えてこないと思う。他の誰かが、さらには次の世代に同様の問題を繰り返さないために、なすべきこと・必要なことを、当事者とともに援助者が模索することから問題の解決手段が明らかになると思う。いつの世も、常に、ことを起こすのは人なのだ。問題の起

きた人を「問題のある人」とし、問題を「個人の体験」に終わらせることのないように、また、「問題が起きることはやらない」ではなく、問題が起きないためにはどうすればいいか、どう支援できるかを考えなければならないと思う。結果として、援助手段の見つからない問題や、支援があっても改善できない問題は、容認でないと審判が下るのかもしれない。その前提で考えると、問題が起きやすい生殖医療にセーブをかける以前に、いや、それ以上に、生殖医療に関わる社会的支援の充実をはからないことを問題にせず、社会に緊急課題として提示されていない現状に、今も憤りを隠せない。

## 再び問う

日々飛び込んでくる国内外の不妊関連の情報に時折こころをうばわれながら、再び当事者の足跡をたどる道程にもどることにした。連載②から語り始めたB子さんは、生殖革命の福音を聞いた女性である。20年よりも前の不妊体験を、まるで昨日の出来事のような鮮明な記憶のまま、軽快に語り続ける彼女の語りには、ダブル・メッセージがあった。“福音に子どもを産む希望を感じた”と語る一方で“失敗を繰り返すなか少しずつ自分を見失っていた”、さらに、“頑張っていた自分”的な対象に“自分であって自分でなかった”と彼女は語っていた。私は、「不妊治療は私たち夫婦にとって福音だった」と明快に答えたB子さんに、「あなたにとっては、どうだったのですか？」と勇気を出してたずねたのだった。その際B子さんは、「夫婦の福音は、私にとって福音に決まっているでしょ？」と軽く受け流す

ように答えていた。

では、なぜ、彼女は現在独身なのか。共に福音を聞いた夫婦がなぜ、今も夫婦ではないのか。私の疑念は全く払拭できなかったのだ。私の頭から溢れだそうとする“なぜ？”を理性で抑え込みつつ、再び、「だれの福音か」を聞いてみた。

「う～ん…そういうわけでもねえ…（しばし沈黙）、不妊は結婚していたから問題になっていたんだって、いまの私にとっては、問題でも悩むことでもないよね」

問うた私をじっと見つめたあとうつむき、目を閉じ腕を組んだまま、しばらく微動だにしないB子さんを見て、一瞬眠ってしまったかと思った。同時に、「もしかして、私は聞いてはいけないことを聞いてしまったのかもしれない」という後悔の念が、一瞬脳裏をかすめた。

「そう！結婚していたから悩みになっていたんだと思うわ！」

突然、答えがひらめいたかのようにB子さんは語り始めた。

「私たちは恋愛結婚だったの。今でいう、大恋愛ってやつね。同級生でまだ20代前半、しかも、社会に出てお互い自立し始めたころだったし、一人暮らしあさうじたって考えてた。そんな時好きな人が現れて、“ずっと一緒にいたい”って思った。となると、当たり前のように結婚話が出るわよね？私にとって、結婚するってことは、好きな人の子どもを産み、ふたりでその子どもを育てるってことだと思っていたから、“この人の子どもなら産んでもいい”と実感できた時点で、結婚することに躊躇はなかった。母からは、“娘がどんなすばらしい男性を連れて来ても、父親は気に入らないものよ”って、ずっと前に聞いていたから、ある程度の

抵抗は覚悟した。結局、ご多分にもれず、それなりのゴタゴタはあったけれど、そこは若い二人だけに、反対があればある程互いの思いは強くなるっていうか‥ま、最後にはふたりで勝手に結婚式をあげちゃったんだけどね！」いつもの軽快な口調にもどっていた。私の眼を見ながら、感情豊かに語るB子さんの表情には、その頃に幸せな生活をおくっていたであろう様子が見て取れた。

「とても充実した結婚生活だったと思う。時にはケンカをし、“朝までテレビ”を一晩じゅう見ながら、政治や経済、その頃話題になっていた事件について、時間がたつとも忘れて話をする夫婦だった。おまけに、夫婦そろって友人が多く、私が料理好きなこともあって、休日には互いの友達を呼び、一緒に友人たちと過ごすことが多かったの。中には、我が家で知り合った事がきっかけでなん組かのカップルは結婚したな‥」

少し首を右にかしげ、遠い記憶をたどりながら目を細め、口元に笑みを浮かべながら小さなため息をついた。

「でもね、そのうち、次々と妊娠報告が入るようになって‥いつしか、生まれた子どもと一緒に来客が増えてきたの。あまりの可愛さに、つい抱き上げてしまう私に、“B子さんのところはまだ？”って、何回聞かれたかな‥。回数なんか覚えてないけど、そのうち、聞かれるたびにそれを苦痛に感じることが多くなっていった」

これが、当事者女性の多くが語る「子どもはまだ？」と聞かれることへの苦痛だ。たずねる人には他意のない言葉だが、不妊に悩む当事者にとっては、もっとも聞かれたくない質問といわれている。

「そのうち、友人たちを家へ招く機会も減り、

代わりに夫婦ふたりで旅行に行く機会が増えた。特に、海外旅行や海へ波乗りに行ったり、冬にはスキーに行ったり。ゴルフも覚えて、ふたりに共通の趣味を楽しむ時間がふえてきた。あの頃は、何をするにも一緒だった。それは、私が不妊治療に通院するようになってからますます増えた。きっと、頑張る自分たちへのご褒美だったのかもしれない。だって、その時期は、不妊治療していることを、互いの家族のだれにも言えなかったから。通院する日も、“ゴルフに行く”と言い訳したこと也有ったくらい。そのうち、「あのふたりは、友達づきあいも止め、子どもがいないことをいいことに、遊び歩いている。いい身分だ」と言っている人がいる、という雑音が聞こえてきて、結局人づきあいが面倒になり、孤立してしまった。私は、子どものいない友人と時間を使ふことに限定し、趣味の時間をもつ代わりに不妊治療に専念することにした。ある晩、パートナーがお酒を飲んで遅くに帰宅し、珍しく私に絡んだことがあった。「今日、久しぶりに会ったHに酒の席で言われた。『いくらお金があって、贅沢でいても、子どももつくれないとは情けない。男なら、悔しかったら、子どもの一人ぐらいつくつてみろ！』と。」苦惱に顔をゆがませ、「くそっ！くそっ！」悔し涙を流し、繰り返しそう叫びながら、いつしか彼は泥酔していた。その晩、私は一睡もできなかつた。あの日から、私たちの関係は少しづつ変わっていったと思う」

「ちょっと待ってね」そういうって、B子さんは言葉を休めた。その頃、正直、私は投げかけた質問を撤回したい気分になっていた。時に、絞り出すように「う～ん‥」と唸りながら、苦しそうに顔をゆがめるB子さんを眺めながら、「やはり、聞くべきではなかつた」とも思った。B

子さんの話はあまりにリアルで、私自身、まるで夫婦の実態を暴く三面記事の特ダネ記者になったかのような錯覚を覚えた。何か、とてもなく残酷な質問をしたかのように感じていたのだ。B 子さんにとって、不妊の話をすることは、すでに終わりを告げた結婚生活の日常を語る事であった。不妊は、夫婦の日常に起こっていたのだ。私は、B 子さんの言葉を待たず、次に質問を口にしていた。

「もし、話しにくいことならば、無理をしないでくださいね。話すことが辛いと感じるならば、この辺で終わりにしましょうか？」

B 子さんは即答した。

「確かに、その頃の私にとっては辛かった。言葉にできないくらいに、苦しかったわ。でも、今のは、もう苦しくはない。もし、あなたからみて、私がつらそうに見えるならば、それは、その頃の私の姿だと思って頂戴ね。私は、今、あなたに聞いてほしいと思っているの。だれも、聞こうしてくれなかつた話を。それは、私が、一生懸命、母になろうとしていた頃の話だから。どんなふうに聞こえるのか、私には、まだわからないけれど、悲しいとか、つらいとか、そんな思いは、今の私にはないの。確実に言えることは、その頃の私があるから、今の自分でいられるってことかな？ 不妊の話なんか、聞きたいと思う人はそんなにいないものね！ 不妊って、確かに辛いけど、悪いことばかりじゃなかったと思う」

B 子さんの語りは、どこにでもある夫婦のドラマではない。不妊という経験をした、夫婦の物語である。逆に、B 子さんに励まされ、聞き続けることにした。

(次号に続く)

# 対人援助学＆心理学の縦横無尽（1）

## 顔文字とエモティコン



### サトウタツヤ@立命館大学

対人援助学の里程碑から、タイトルを変更しました。タイトルを変えたら縦横無尽に書けるようになるかといえば、もちろん、そんな夢のようなことはありませんでした。苦しい時のビネ頼み（知能検査のアルフレッド・ビネのこと）とも思いましたが、それでは何のために、里程碑という歴史がらみのタイトルから変えたのか分からないので、少し歴史を離れてみることにします。

文化心理学という領域があります。文化と人の相互影響過程を研究する領域です。北海道大学の結城雅樹先生が面白い実験をしています。下の図を見てください。



顔文字と呼ばれるものです。私の使っているワープロ・フロントエンドプロセッサ ATOK では「かおもじ」と入れると、<(\_ )>だったり(^^)/だったりが、登録されているほど、日本でも定着しています。英語圏ではエモティコン（Emoticon）と呼びます。感情＋アイコンということだと思います。

左と右で何が違うでしょうか？顔の向き？もちろんそれもありますが、それよりも、顔の表情を何で作っているか、に注目してみてください。私たちが日頃見慣れている左の顔文字は目が笑っている。右側のエモティコンは口が笑っている。つまり、日本のものは目が笑い、英語圏のものは口が笑っているのです。先の結城先生たちは、いろいろな顔文字を日米の大学生に見せて、表情を評定してもらいました。左側の顔文字についての評定を見てみると、日本の大学生はうれしそうだと評定したのに対し、アメリカの大学生は、ニュートラル（中性）と評定したといいます。つまり、顔から何を読み取るかが文化によって異なると示唆されるのです。

次に一つ実際の写真を見てみましょう。この写真は 2010 年に慶應義塾大学で行われた日本パーソナリティ心理学会において、筆者の恩師である詫摩武俊先生とそのかつての門下生たちです。教え子といっても、それぞれ年をとっています。中央が詫摩先生です。こちらから見て右の男性は堀正先生（群馬大学）、手前左の男性は中村真先生（川村学園女子大

学)。堀先生は口元を見ると一文字に結んでいますが、ピースサインをしてお茶目です。日本ではピースサインが笑顔の代わりなのかもしれません。中村先生は口を閉じ、しかし目を最大限の大きさで開けてこやかな表情を演出しています。詫摩先生は穏やかに微笑んでいますが、やはり口を開けてはいません。一人だけ歯を見せてるのが不肖の弟子たる私です。この年になつても歯を見せて「不肖ぶり」を発揮しています。中学の野球部で、「笑ってるんじゃない！」といって先輩からビンタされたことを思い出しましたが、それもこういう理由だったのでしょう。

もう一つ。次の写真はイタリアのコスプレイヤーです。今やコスプレは世界の文化。「ストリート・ファイター・2」から、チュン・リー。



可愛らしいけど、何かぎこちない。それはピースサイン。この方は、日本人が写真を撮る時に、口を開けていないこと、指を二本出すこと、について知識を持っているのでしょう。だから、そうした方が「日本人らしくなる」と分かっているのだと思います。しかし、指を二本出せばいいってものではないし、目が笑っていない。だから、私たちが見ると不思議な感じに見えてしまうのではないか。文化は空気のようなモノだ、と言います。私たちは空気の存在に気づかないように、文化の存在には気づかない。しかし、今回のような比較をしてみると、確かに存在していることがわかります。比較文化心理学の研究はこうしたことを私たちに気づかせてくれます。ただし、比較文化心理学は二つの文化の差異をことさらに大きく見せてしまうという副作用があります。あまりに大きな差があるとその違いに絶望してしまうかもしれません。そもそも、私たちは最初からこうした文化を身につけていたわけではなく、成長過程で身につけてきたはずです。ですから、文化 A と文化 B がこう違う、というような研究だけではなく、その獲得を時間にそったプロセスとして描く研究が求められ始めています。こうした研究のことを「文化心理学」と呼ぶことがあります。ロシアの心理学者・ヴィゴツキーに遡るもので、コール、ワーチ、エンゲストローム、ヴァルシナーといった人たちが作っている流れです。比較に基づかない文化心理学の可能性は今後広がっていくでしょう。拙著『TEMで始める質的研究』も文化やプロセスを重視する流れの中で具体的な方法論を構築していくとしている、と理解することが可能なのかもしれません。



#### 文献

サトウタツヤ（編著） 2009 TEMで始める質的研究 誠信書房

Yuki et. al. 2007 Are the windows to the soul the same in the East and West? Cultural differences in using the eyes and mouth as cues to recognize emotions in Japan and the United States, Journal of Experimental Social Psychology, 43(2): 303-311.

HP <http://www.francescadani.com/cosplay/chunli/imagepages/image4.html>

# 小さな「怪獣たち」とのドラマセラピー

尾上 明代

## 4. 大きな一歩

このマガジンでは、被虐待児たちへのドラマセラピー治療について、A 児童養護施設で継続的に行った事例を連載している。主に具体的なストーリーを読むことを通して、ドラマセラピーという「対人援助」法について知っていただければと考え、プロセスを詳述してきた。

イチゴちゃん、リンゴちゃん、アンズちゃん、マツオ君、スギオ君、という5人の小さな「怪獣たち」と開始した連続セッション。前号では、私が酷くいじめられる設定のドラマが続く中で、イチゴちゃんが私の味方に転じた変化、そしてそれまで通りの楽しい家族ドラマの模様について書いた。

今号では、子どもたちの個別の変化とグループ全体の成長という点で、大きな前進があった5回目のセッションについて記述する。

\* \* \*

リンゴが体調不調で欠席したため、きょうは4人と行う。まず前回から始めたダン

スをする。やはりお互いの動きを真似して踊るミラーリングはあまりできず、それぞれがバラバラ、めちゃくちゃに踊っていた。このバラバラの踊りは、このグループの特徴を象徴している。自分の感覚を優先して、自己解放をしているかのようだ。ほとんどが、ダンスとさえ呼べないような、ただ動いたり走り回ったりしているだけだったが、それでも音楽がかかりみんなで動くことを楽しんだ様子だった。

このような決まって行う同じ導入は、儀式的な役割を果たすので、その後は「いつものドラマをするんだ」という心身の準備になる。さっそく、私とのドラマ（ミラーリングと受容の即興ドラマ）を始める。やりたい子どもにやりたい設定・配役を提案させ、私が相手役を行う。

### イチゴと私（親友同士の役）

学校のお昼の時間、イチゴはおいしい給食、私は「ウンコ」を食べる。イチゴの設定通り素直にいっぱい食べていると、「臭い」と言って私をいじめる。いつものパタ

ーンだ。イチゴに「いじめ甲斐」を感じてもらえるように、私はわーんわんと泣く。すると、本当にいい気味だという感情たっぷりに「泣け、泣けーっ！もっと泣けーっ！」と大きな声で言うので私はもっと泣く。とてもたくさん泣いたあと、少しは彼女の気が済んだかなと思い、「仲良くして！一緒に給食、食べよう。だって親友でしょ？」と言ってみたが許してくれない。

見ている観客たちからできえ、「親友じゃないの？」と声がかかるが(のこと自体、興味深い。今まで、このような「ドラマの設定をきちんと把握して見ながら、それに基づいたコメント」が観客から出ることはなかったからだ。)それでもイチゴはドラマを修正しなかった。私が、「いっぱいウンコ食べて、いっぱい泣いて、もう死にそうだ」と言うと、当然の結果のように、イチゴは「死ね！」と言うので、私は死に、ドラマは終了した。

前回までのような、真に迫る殺氣だった雰囲気や残虐ないじめの感情は感じられなかつたが、友だちをやり込めたい気分は、強く伝わってきた。セッション後、施設職員の浩二さんは、「イチゴは、実際は学校では友だちがいないんです」と言った。詳しい状況はわからないが、親友とのドラマをやってみたいと思って初めて設定したイチゴの気持ちが理解できた。

イチゴのような生活環境で生きてきた子どもたちは、結果として学校でも、楽しい日々を送れることは少ないようだ。施設から通っているというだけで、いじめや差別がある可能性もあるし、本人のセルフエスティームも低いので、満足な友人関係が築けない。しかも勉強ができる、など良い意味で目立つことも難しい。イチゴは頭

の良い子どもなので、きちんと勉強ができない環境にあることは、本当に残念に思う。

### アンズと私のドラマ

次にアンズを誘ってみると、何と客席から出てきた。5回目にして初めてのことだ。今まで、みんなで行うドラマには参加しても、私と二人でやるドラマは毎回嫌がり、他の子どもも全員が何度も私と行っても、いつも見るだけで、絶対に応じなかつた。

アンズに役の設定を聞いてみると、初めは「普通の人」「知らない人」などと言っていたが、結局「隣の家に住んでいる人」ということになつた。机をベッドに見立ててそこに横になり、アンズは寝ている。この隣人は、寝ながら時々ふざけてクスクス笑っているだけで、私が訪ねて玄関の呼び鈴を鳴らしても起きてこない。仕方なく私は自宅に戻り、寝ている隣人を窓越しに眺めながらドラマを展開させようと、大声で楽しそうに独り言を言ってみた。

「隣の家の人が、寝てるのが見える。あ、笑ってる。楽しい夢見てるのかな？」しかし隣人には何の変化もなく、そのままドラマは終わりにした。少し照れているのと、素直に私とコミュニケーションをとりたくない気分なのと、まだ創造性や即興力が育っていないのと・・・理由はいくつかあったが、これでもりっぱな「笑いながら寝ている隣人とのドラマ」ができたと思う。私とのドラマに出てきただけでも、彼女としては大きな一歩であった。

### スギオとマツオ

スギオとは、スターウォーズの戦いのドラマで混沌として終わり、次のマツオとも映画の決闘シーンになった。「真似だけよ」

と言ってもこの日は本当のけんかのようになつていったので、すぐに終わりにした。

### 浩二さん（鳥のチュッチュ役）と私（人間の子ども役）

そこで気分を変えるために、ちょっとした流れと展開のあるドラマを浩二さんと私が見せることにした。始まりは浩二さんに任せ、即興で演じる。場のお守りのように、毎回私が持参してグランドピアノの上に置いてある、カラフルなオウムのパペット「チュッチュ」（マツオが命名）を使い、その鳥役に浩二さん、私は人間の子どもだ。ちょっとだけ登場する怖い母を、マツオに頼むとすぐにやってくれた。子どもが怖い母親に怒られて、森に薪を拾いに行くストーリーで始まった。

子どもが森で出会ったその鳥は、「あなたみたいに、いろんな色で派手な男は嫌い！」と彼女にふられたのだと言って、落ち込んでいた。子どもは持っていたパンを鳥にあげて、「カラフルなあなたって素敵！」という女の子がきっと現れるから、と励ますと、鳥は元気を取り戻した。そのお礼ということで、鳥に薪拾いを手伝つてもらい、子どもは帰宅する。母親は、まだ怒っていたが、子どもは「いいや。今日は鳥さんと友だちになって、薪拾いも協力してもらったんだから。どうせお母さんはいつもあんなふうに怒っているんだから、気にしないんだ」と独り言を言ったところで終了。

### イチゴ（母親、鳥のチュッチュ、北海道の女の3役）と私（子ども役）

イチゴはプロットを創りつつ私に指さしながら、自分は3役をこなしてドラマを進めていった。この創作は、ドラマのストー

リーとしても、長さとしても今までで一番大がかりであった。強い意志のもと不退転の勢いで突っ走つて行くイチゴを、私が伴走したようなイメージだった。

子どもは母親の命令で、飼っている鳥にえさをあげていたところ、鳥は籠から逃げて飛んで行ってしまった。

子ども：帰つて来て——！

鳥：いやだねーっ！ 家はつまんないからな。(部屋中、大きく動いて飛び回った後)

もう追つかけてこない。北海道だから。

イチゴ：<私への指示>ハーハーして、○○市（A児童養護施設がある地名）から北海道まで追いかけてくるの。いっぱい時間かけて。(間)疲れて倒れて！それからいろいろ探してやつと見つける。いろんな家をトントンって探して。

子ども：(すべて指示通りに演じたあと、ドアをたたく真似) トントン。

ここで、誰からも何も言われないのに、即座に観客が一人ずつ、北海道の民家の人たちになって協力する！ こういうところは、みんな即興ドラマに随分慣れてきたものだと感心した。

子ども：トントン。ウチの鳥、見ませんでしたか？

民家人1：見てませんね。

子ども：トントン。ウチの鳥、見ませんでしたか？

民家人2：見てませんね。

子ども：トントン。ウチの鳥、見ませんでしたか？

民家人3：見てませんね。

子ども：トントン。ウチの鳥、見ませんで (4人目がドアを開ける)

あーーっ！！ いたーーっ！！

北海道の女：(ここから、とても「お芝居チ

ック」に、つまり、いかにもドラマのセリフを言っています、という感じで大声ではっきりと) 私の子よーっ！ さっき拾ったの！

子ども：(やはり大声で、お芝居っぽく) 私の子よーっ！ 本来はウチの鳥よ！

北海道：捨てたでしょ！ そう言ってるわよ！

子ども：ううん。この子が勝手に逃げたの。

北海道：あんたが投げ捨てたって言ってるでしょ。かわいそうに。

子ども：ショック。勝手に逃げたのに、「投げ捨てた」なんてーー。

もう少し、話だけでも・・・ウチの鳥とせめてもう一回、話をさせて下さい。

北海道：でも、この子は悲しがってるわよ。

子ども：ねえ、チュッチュちゃん。私がえさをあげたとき、自分から逃げて行ったのにさ、何であんなひどいこと言うの？ (優しい言い方で聞く)

鳥：何言ってるの一ーっ！！

子ども：こんなに遠くから探しに来たじゃない。家に戻ってきて！

鳥：やだー。あんな狭いせまーいところに閉じ込められて、もうイヤ。(ドアを閉める)

子ども：閉められちゃったから、ドア越しに話すけど・・そつか。その気持ちわかるよ。狭いもんね。

鳥：もう聞こえないの。閉めちゃったから。

子ども：でも言いたいことがあるの。ここで一生暮らせる？ 仲良くできそう？

鳥：聞こえないもん。

子ども：(独り言) じゃあ、あの女の人がかわいがってくれるなんならいいかなー。

鳥：でも、私を連れて帰らないと、お母さん、家に入ってくれないでしょ。

子ども：でも狭いとこに帰るのイヤだって言う、その気持ちわかるから。家に入れてもらえなくても、チュッチュのこと考えたらしようがないや。

イチゴ：<私の指示>ねえ、帰って。

子ども：(○○市の家に帰る) お母さん。

母親：(玄関で怒っている) チュッチュは探したの？ 捕まえたの！？

子ども：お母さん、聞いて聞いて。北海道にいたの。一生懸命追っかけて行って、そしたらー。

母親：(子どもが説明しようとしているのを遮り、セリフをかぶせて) 捕まえたのか聞いてるのッ！ 捕まえたのか聞いてんのッ！！

子ども：ううん。でも、聞いて。どうしてかと言うとー。

母親：捕まえるまで帰るんじゃないと、言っただろ！！

子ども：でもチュッチュがね、ウチだと狭くて辛いって言ったから、チュッチュのために諦めたの！

母親：・・・。(無視)

子ども：もういい。お母さんが私を家に入ってくれなくともチュッチュのためだから、しょうがない。

母親：(ドラマチックに芝居気たっぷりに) じゃあ、入んなさい！ 入りたければ、今！

子ども：(嬉しそうに驚いて) 入ってくれるの！？

母親：(ふざけ笑い) 入れないよ。

子ども：ん・・・？

母親：間違えたの、ことば！！ (観客一同爆笑)

子ども：(少し笑いを含みながら)

何だよ、ウチのお母さんは・・・。

母親：バチン！ バチバチ！ (いきなり子

どもをぶつ。もちろん真似だけ。)

**子ども**：痛い、いたーい。

**母親**：出て行きなさい！！

**子ども**：ごめんなさい、お母さんごめんなさい。(泣く)

**母親**：バタッ！(ドアを閉める)あなたは外にいなさい。(独り言)やつといなくなつた。実は北海道の女は、このお母さんとグルだった。双子で離ればなれだったの。で、電話で「やつたね、お母さん」って。

**私**：(素に戻つて)じゃあ、ハッピーエンドだね。

**イチゴ**：お母さんとイチゴだけがハッピーエンドで、あんただけが、「イヤ～～ン！！(ここだけ大声で怒鳴る)」って、なつてんの！

**私**：イヤ～～ン！じゃあ、ハッピーエンドだね。

(観客の拍手で終わり)

イチゴが創つたこのドラマにはどんな意味があるのか。これまで、母親や子どもの役などを演じている「私」がいじめられたり殺される、というテーマと単純な場面設定で、ドラマの長さも短かつた。それらに比べると、このドラマは單なるいじめではなく、筋や場面設定が複雑で、時間も長い。何より、これを創つて演じきる！という意気込みが大変強く感じられ、他の観客は、そのエネルギーに飲み込まれるように見入り、ドラマのエキストラとして協力こそれ、邪魔は誰一人一度もしなかつた。このようなことは初めてであった。ストーリーを進めていく推進力も大きく、即興とは思えないほど、次々に私に指示をしながら、自分でも3役をこなし、迷うことなく

筋書きを進めて行ったことにも驚かされた。

(このドラマには、ストーリーと登場人物が、少しあわざとづらい部分がある。イチゴの即興なので、一貫性がないように思えるところもあるが、その点はあまり重要ではない。)

このドラマの中で意味深いことが起きた、という確かな感覚を私は強く受け取つたのだが、その具体的な内容は、すぐには解明できなかつた。ドラマの中身を分析して解釈することがいつも必要とは思はないし、解釈を試みても、それが正しいかどうかを証明することはできないことが多い。意味付けすることが、単なるセラピスト側の曲解や自己満足である場合もあるかもしれない。しかし、そのような可能性があることも十分わかつた上で、セッションの詳しいプロセスの記述をしている今、あえて試みてみたい。もちろんその目的は、いかにクライエントが「ドラマ」という枠組に守られながら、眞実の感情を投影して表現・解放し、シンボリック、メタフォリックに問題を乗り越え成長するのかを伝えたいためである。

このドラマの逐語セリフという生のデータに向き合つて何度も繰り返し読み、ドラマ時の感覚を思い起こしながら、現時点の私が考察した結果が以下である。(よつて立つ基盤は、何度かのドラマを介して知るイチゴの様子、彼女がこれまで演じてきた内容と今回示した変化の観察、そして相手役をした私の感覚である。)

### 一人三役の意味

イチゴにとって非常に大事ないいくつかの感情と立場が、3人の登場人物(鳥、母親、北海道の女)を借りて表現された。

## ① ケアされたい、捨てられた鳥

鳥は、現在のイチゴ本人を象徴している。鳥が狭い世界（施設）から飛び立ちたかったことは、一つの事実だろうが、それ以上に大切なことは、安心できる優しい人に保護されたい、また行方不明になった自分をどんなに遠くてもハーハー走り回り苦労して探し出してほしいと願う感情だ。

自分から家を飛び出した鳥であったが、話が途中から捨てられた鳥に変化している。イチゴが狭い世界から飛び出したかったという気持ちより、「捨てられた」という感情の方が前面に出てきて反映していると思われる。

こここの局面での私（子ども役）の対応は、迷うところだった。ストーリーの一貫性がなくても、イチゴに合わせて捨てられたことにすればよかったです、または一貫性を優先させ、イチゴに合わせないで、自分で飛び出したことにするか。私は後者を選択し、狭い世界から飛び出たかった鳥の気持ちを理解するスタンスをとった。イチゴの話に合わせて、鳥を捨てたことを認めて謝る役でも良かったかもしれないが、いずれにしても、鳥に対するケアと愛情を示す飼い主の子どもを演じたので、その点では大きな違いはなかったかもしれない。

しかし、後から何度もセリフを読み返して、捨てたことを謝ってもらった方が、イチゴにとって良かったのではないかとも思い直した。現実のイチゴは、もちろん自分が出たくて家を出て施設に来たわけではないのだ。しかし、ここが難しいところで、捨てたことを謝ることが、「ドラマだから」可能だという考え方と、このような彼女の現実を「ドラマなんかで」安易に創り変えて

はいけないという考えの間で悩むのである。過去のできごとであれば、「ドラマで塗り替える」選択もあり得るが、現在のイチゴの状況なので、易々と「捨ててごめんね」とは私は言えなかつた。結局、謝るかどうかよりも、飼い主の子どもが「母親に家から閉め出されるという罰を受けてでも、鳥の気持ちを優先するという愛情を示した」こと自体が良かったのではないかとも思える。この子どもが感情表明をしたことで、実は陰ながら深く自分をケアしてくれているのだということが、鳥にわかつたからだ。

なにぶん、ドラマが始まってしまうと、その時々で、瞬時に選択・対応しなければならないので、そのときにゆっくり判断している暇はない。この種の仕事は、そのときの自分の直感を信じて行うしかなく、それで良かったのか、他の選択肢があったのか、などは後の自身の振り返りで、その都度考察していくしかない。

## ② 傷ついた自分をいたわる役の出現

このドラマで最も重要なできごとは、相反する感情を持った二つの役にイチゴが同一化したことであり、その後それらが統合されたのではないかと推測できる点である。

一つは、捨てられた鳥を可愛うだと言って味方をし、保護する役（北海道の女）であり、もう一つは、自分の子どもを叱つて外に閉め出す怖い母親である。後者は、今までの多くのドラマで何度も登場した、攻撃者・虐待者に同一化する役だ。（「私」をいじめたり殺したりした役）しかし、前回のセッションで初めて、いじめられている「私」を助ける教師の役が登場し、とうとう今回、被虐待者を慰め助ける役が、もっとはつきりと強い形で現れたのである。

しかも、今回イチゴが保護し助けた「鳥」は、イチゴ自身を象徴している役だ。被虐待児が、虐待者と同一化した感情のまま大人になると、次なる虐待者になるという、いわゆる虐待の連鎖が起こることがよく言われているが、そうならないために、上記のような「被害者を慰める」(つまり、弱い自分を認め、自分自身をいたわる)感情を被虐待児の中に育てることが大変重要である。米国のドラマセラピストたちによる、被虐待児とのセッションの報告にもあるが、そのような子どもたちとの治療の初期には、必ずセラピストをいじめ、やっつける役、誰にも絶対に負けない強い役が繰り返し演じられ、長い治療が進むにつれ、弱さを認める役や弱者をケアし助ける役が出現する。

i この役こそ、傷ついた自分自身をいたわり育むもう一人の自分であり、ドラマセラピストのルネ・エムナーが「内面に存在するはぐくみの親<sup>ii</sup>」と呼ぶ役である。イチゴが北海道の女を創り出したことは、まさに、このプロセスが起きたことを示し、彼女が慰める役とも同一化できたことがわかる。

このときに大変興味深く感じたのは、その役が「私の子よ！可愛そうに」というところで、イチゴが急に芝居気たっぷりの、大袈裟なセリフ回しをしたことである。それまでの、たとえば、私に「ウンコを食べろ！」などと言うドラマには見られなかつた雰囲気だ。(前回のセッションで「あなたたち、いじめてるんでしょー。ダメーよ！」と、私の味方をしてくれた教師役のときも、まさにこの雰囲気のセリフ回しだったことに、今気づき、非常に興味深く感じている。)このいかにも「ドラマをしています！という感じ」は、自分自身の生の感情、あるいは、基盤になっている感情がその役を通して

強調され、開示されてきているように思われた。普段、自分が言えないことば、人から聞けないことばを、演技の中で表現して、良い感情の刺激を受けていたのではないだろうか。このような大袈裟な演技やセリフ回しは、実はリアルな演技よりも強く演技者自身に影響を与えることもあるようだ。このような感情の外在化をすると、その印象が強く残り、同時に内在化を深めるとと思うからである。

もう一つ、「手が混んでいて」興味深かったのは、子どもに「出ていけ」といじめる母親ではあるが、そのいじめる理由、「可愛そうな鳥を連れ戻さなかったから」というところが、今までのいじめ役よりも進化(善良化)していたことである。

さらには、子ども役が、「お母さんが私を家に入れてくれなくても、チュッチュのためだから、しようがない。」と言ったとき、母親役のイチゴは、「じゃあ、入んなさい！入りたければ今！」と叫んだことだ。あのとき、子どもが即座に家に突入していれば、きっと許してくれていたかもしれない。つまり、攻撃者としての悪役の意図、理由、態度が変化し、揺れているということがよくわかる。つい、そう言ってしまったのだ・・・！

### ③ 二つの役の統合化

そして、このドラマの「解釈」の中で一番、私自身が驚いたことは、最後の部分である。イチゴが同一化した二つの役(攻撃者と保護者)が、実は双子のグルだったと言ったところだ。「離ればなれ」だった二人が、電話で「やったね」と話し、合体して統合されたのである。初め私の考え過ぎかとも思ったが、やはりイチゴは、このドラ

マで見事に、健康的な回復に向けて大きな一步を歩んだのではないか、と感じずにはいられない。

少なくとも、私に「ウンコ」を食べさせるドラマは、この日を最後に、その後二度と起こらなかった。

#### マツオ（床屋）と私（若い男のお客）

男：こんにちは。髪、切ってほしいんですけど

床屋：1000円です。（手を出す）

男：まだ切ってないのに？ 後で払うんじやないですか？（と言いながらも支払う。）  
男らしくしてくれよ。

床屋：わかったよ～。（照れ隠しか、とても変な言い方。）びや～！（めちゃくちゃに切る動作）

男：（自分の髪を触って）この辺が乱れてますよ。男らしくしてくれって頼んだんだけどなー。これは似合ってんのかなー。  
坊主頭になってる。

床屋：思いっきり似合ってる。

男：ま、いいや。モテるかな、女の子に。

床屋：明日、学校に行ってごらん。

私：<みんなに指示>じゃあ、学校！

みんな：（即座に客席から全員立ち上がり、シーンに参加）キンコンカンコーン！

男：（教室に入っていく）お早う。

みんな：（口々に）わー、きもーい、きもーい。うえー、げー！

女の子たち：後ろにハゲって書いてあるよ。  
(キャーキャー言って、噂話をするように、固まって男の悪口を言う)

男：えっ！？ カリスマ美容師思ったのに。ひでえ、あの床屋ー！！1000円も払ったのになー！ 文句言いにいこ。  
(床屋に着く) トントン、

床屋さん。今日、学校に行ったらみんなにキモイキモイって言われたんだ。  
どうしてくれんの。金返してくれよ。1000円って俺には大変な金なんだよ。  
後ろにハゲって書いてあるって。

床屋：はい。（返す）

（スギオが急に客席から、「それ、ニセ札なんだよ。」というアイディアでマツオに助け船を出す。）

男：あ、これニセ札じゃねーか。返して、返して。じやなきや、やり直して下さい。  
女にモテるように。

床屋：(男の髪をカットする動作) これでチヨー、モテるよ。

みんな：(絶妙のタイミングで、場はすぐに学校と化す) キンコンカンコーン！

今回のように、互いに打ち合わせることなくすぐに一致団結してドラマの筋を進めるところは、このグループの凝集性や子どもたちの自発性、創造性、即興力がついてきた証拠だ。何より、彼らが大変楽しい思いとともに、行っていることも重要な点である。

男：みんなお早う。

みんな：キモーイ！（いろいろ言つていじめる）

ここで終了。マツオが、このようにドラマのストーリーの流れを創つて「まともに」演じ続けられたのも、今回が初めてだった。彼にとつても、今日は大きな一歩であった。

この床屋のドラマは、子どもたちのお気に入りになり、このあと幾度となく演じ繰り返されることとなる。

この日のシェアリング（みんなで感想を言う時間）も、特記すべき内容だった。

スギオ：マツオのが面白かった。

**イチゴ**：マツオのハグのヤツが特に面白かった。あと、アンズの楽しかった。

**スギオ** 浩二さんの、いいお話をうながす。薪とか拾って元気になって良かった。

私は、「そうだね。二人で協力したところが良かったね。」とスギオに返したが、彼がこのような素直な子どもらしい「まともな」感想を言ったのは、初めてだった。

また私は、「役が必要なときにパッと誰かの役になって協力してくれたのが、いいことだよ。みんな良かったよ。」と伝え、みんなのドラマを褒めたら、子どもたちもお互い褒めあって、初めての本気で褒め合う（おふざけではない）シェアリングになった。こんなに良い雰囲気で、なおかつ楽しいのは本当に初めてで、グループ全体の成長という点でも、やはり「大きな一歩」の日だった。

(

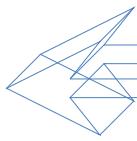
(次号に続く)

---

<sup>i</sup> James, M. Forrester, A. M. & Kim, K.C. (2005). Developmental Transformations in the Treatment of Sexually Abused Children. In Haen, C. & Weber, A. M. (Eds), Clinical Applications of Drama Therapy in Child and Adolescent Treatment (pp.67-86). Taylor & Francis Group.

<sup>ii</sup> ルネ・エムナー、尾上明代訳 (2007)、ドラマセラピーのプロセス・技法・上演、北大路書房

# 家族造形法の深度



## 家族造形法を使った事例検討

### その4

#### 早稲 一男

##### ○はじめに…。

「家族造形法を使った事例検討」のバリエーションを紹介します。

基本的な進め方は前回紹介したとおりです（必要な方は、対人援助マガジン第2号や第3号の「家族造形法の深度」を参照下さい）。

前回同様、ライブを紙面で再現することはなかなか難しいところですが、以下は、ある研究会での様子です。

##### ○提出者の思いは…。

「特徴的な場面を再現することによって改めて確かめたいことがある」「気付かなかつた面や新しい情報を手に入れることができれば」というのが、今回の事例提出者（以下、提出者）の思いです。

家族は両親（父親は40代前半 母親は30代後半）と長男（小学校高学年）、長女（小学校中学年）の4人です。父親は転勤族、長男は不登校、長女は兄に追従するようなかたちで不登校という状況です。

##### ○家族を造形していく…。

いつものように、家族役割を担うメンバーが提出者によって指名されました。

その後、家族それぞれの人柄や特徴についての補足説明（役割イメージを吹き込む）が行われました。

その後、提出者が彫刻家役となり、各メンバーを粘土に見立てて、ゆっくりと造形していきます。

提出者からは、「3つのシーン」を再現したいという要望があり、まずは、一つめのシーンを造形していくことになりました。

##### ○不登校の長男と母親を中心に…

母親が長男に向き合っています。母親の左手は下向き加減の長男の右肩に置かれています。妹は母親と兄の様子を座って眺めているという造形になりました。父親はこの3人からは遠くに置かれました。3人には背を向けて座り、まったく別のところを

見ていてます。



(写真1 解説) 長男に向かっている母親 二人を見ている妹



(写真2 解説) 長男に向かっている母親と二人を見ている妹 中央上に父親

### ○静止の時間…。

家族全員の造形が完成後、改めて、しばらく静止の時間を作ります。いつものように、この時間はそれぞれの胸の中に湧いてくる思いを確かめる貴重な時間となります。

オブザーバーには、ギャラリーとして、彫刻全体をさまざまな角度から眺めたり、各メンバーに近いところに位置し、追体験するようにという指示が与えられました。さまざまな角度から、第三者として家族を観察します。一方、追体験に近い感覚を共有にしながら家

族のことを考えていく役割も担います。

静止の後、各役割を演じているメンバーからのフィードバックです。時には、事例提出者やギャラリーのコメントが加わることにより、「here and now」で思いがけない展開となっていくこともあります。

### ○それぞれの語りに耳を傾ける…。

提出者は創った順番に合わせて、それぞれのフィードバックに耳を傾けていきました。母親「お父さんは、向こう側に座っているだけで、遠い存在という感じがします。娘もわかるのだけれど、とりあえず、息子のことを何とかしないといけないというか、するのは私しかいないので、息子をなんとかしようという気持ちが殆どです。お父さんに助けて欲しいけれど、お父さんはあまりにも遠すぎて、呼べるような距離にまったくない。私がとりあえず息子をなんとかしないと息子が可愛そうという気持ちでいっぱいです。」



(写真3 解説) 母親から見た風景の一部

進行役「お父さんへの期待は？」

母親「期待というか、呼ぶにも呼べない距離にいる。殆ど見えないというか…。父親については、気持ち的に頼れない」

父との物理的距離、さらには心理的距離が言葉として表出されました。また、息子とは心理的に近いということも、改めて伺われました。

母親「息子には緊急性があって、息子からは眼を離せないという状態。とにかく、息子のことを何とかしないといけないという使命感がある。娘は見えるけれど、娘は安定した状態にあるので、まあいいかという気持ちです。」

次は長男に確かめます。

長男「ひたすら悲しいなあという気持ちです。お母さんしか味方がいない。お父さんは全然見えない。妹はかすかに見えるけれど、存在を感じているのはお母さんだけで、お母さんだけが味方で…。どうしよう、悲しいなという感じ。」

進行役「この場所や姿勢はどんな感じですか？」

長男「姿勢は窮屈といえば窮屈です。からだは固まった感じがあって、リラックスできている状態ではない。」

進行役「少しでも楽になるポーズや場所などはイメージできますか？」

長男「それはよくわからない。椅子に座っている方が楽かもしれないが…。」

進行役「お母さんが正面にきて、面と向かい合っているというのはどうですか？」

長男「安心感がある。窮屈ではない。肩に置かれている手も温かい感じがして。」



(写真4 解説) 長男から見た風景の一部

進行役「息子の話をきいて、どう思いますか？」

母親「私を頼ってくれるのはうれしい。余計に、私がしてあげないといけないという気持ちが強くなる。」

再度、母子二人のつながりの強さが明らかになりました。

次は、長女（妹）に確認です。



(写真5 解説) 妹から見た風景の一部

長女「お兄ちゃんが可愛そうと一瞬思ったが、段々腹が立ってきて、蹴っ飛ばしたくなるような感じ。ズるいという感じ。」

お母さんがお兄ちゃんの方を向いているから、私としてはちょっと楽なこともあるが…。お母さんについては、あまり悪く思うような気持ちは、最初なくって、大変やなあと思っていたが、段々、お兄ちゃんはするいと思ってからは、ちょっとお母さんにもむかついた気持ちが生まられてきて、何、甘やかしているのというような感じ。最後は、お兄ちゃんするいという気持ちがはっきりしてきた。」

進行役「するいという気持ちを表現しますか？」

長女「それを出してしまうとまずいという感じがあり、本当は蹴つ飛ばしたいのだけれど、行動で表すとまずいという気持ちもあるから、我慢している。」

この後、提出者から兄妹間のエピソードが思わず語られました（省略）。

長女「不当に自分の持ち物を取られているような気がする。正々堂々と戦えよ！みたいな気持ちにもなる。」

進行役「長女の気持ちについて、お母さんはどの程度わかってくれていると感じていますか？」

長女「あんまり関心がないように感じている。」

進行役「お母さんに直接伝えたいことは？」

長女「お母さんはお兄ちゃんに全力投球という感じだから、“お母さんはもういいや”という気持ちで、むしろ、“お父さんは何をやっているのか”という気持ちがわいてきて、お父さんの方をちらっと見たくなる。」

進行役「お母さんには期待していないとい

う感じなのですか？」

長女「この二人の間で完結しているから、お兄ちゃんのことを“ちょっと、甘やかしすぎではないか”と思うけど、お母さんはいらっしゃし、あっち向いていてくれているのは楽かな…」

進行役「ここの居心地は？」

長女「悪くはない。割と気楽な感じ。」

進行役「お父さんについてはどう？」

長女「お父さんは遠い。何をやっているかわからない。お父さんは私のことをかまってくれてもいいんじゃないかなと感じている。」

最後に、お父さんです。



(写真6 解説) 父親の周辺の風景の一部

父親「とにかく、仕事が忙しい。息子はじめられて大変というのは知っているし、どうにかしたいという思いもあるが、仕事があるからいけない。妻に任せている後ろめたさはある。罪悪感もあるが、一方で、暗黙に責められていると感じている。」

進行役「責められているという感じが伝わってきてているのですか？それとも責めら

れているのではないかと感じているのですか？」

父親「そこにいないからこそ、そう思っている。」

○外から見た家族、内に入って感じた家族…。  
ギャラリーからのコメントです。

Aさん「父親の側に近づいてみたが、特に印象に残らなかった。仕事に行って、そっちに熱中している。今になって考えると、後ろめたさもあったのかなあと思うけれど、ぱっと見た感じでは、父親は仕事の方に逃げているという感じで、家庭は母親に任せっきりで、仕事オンリーやったかなあ。母と息子の二人で完結している。」

ギャラリーは、造形のプロセスを外から客観的に見ることができます。一方で、静止の時間には、各家族の横に位置し、同型の姿勢をとって感じ取ることにより、主観的、感覚的にも触発されることがあります。

### ○2つめのステージ

提出者は3つのステージを展開したいということですので、2つめのステージの造形を作ることになりました。

造形法の面白いところは、さまざまな場面を創り出せるところです。その場で感じたことをきっかけに、違った場面を創ることも可能なら、今回のように、あらかじめイメージした場面を創ってみるということもできます。

いずれにしても、造形のプロセスとその後のフィードバックが興味深いものとなります。

す。

お母さんは横になって、ビール瓶を持って、くだを巻いているところです。「おまえがしっかりしないからだ！」と一人でうなっています。子どもたちは部屋で耳をふさいで座っています。



(写真7 解説)　くだを巻いている母親と子どもたち　後ろはギャラリー



(写真8 解説)　別の部屋で耳をふさいでいる子どもたち

お父さんは、マンションのドアを開けて、帰宅したところです。惨状を嘆然として見ているという感じです。

○動きをつけることによって、気持ちの変化を確かめる。

静止した状態の造形を通して感じることをフィードバックすることによって、さまざまな発見が生まれますが、時には、動きをつけことによって触発される気持ちや身体の感覚に注意や関心を払ったり、確かめ合うということも可能です。

二つめのステージの配置が決まったところで、一つめのステージ（写真1～6）の位置から、ゆっくりと二つめのステージに動いてみることにしました。そして、その間の気持ちに集中し、その次に、二つめのステージの造形でしばらく静止し、その感じを味わうことにしました。

さらに、同じ動きをもう一度繰り返すことによって、動きを伴う中での気持ちをじっくりと味わうようにという指示が与えられました。

父親「仕事が終わり、遅い時間に帰宅。後ろめたさも抱きながらの帰宅なので、気分は重い。ドアを開けた瞬間、妻の姿が目に入ったが、自分の保身と誰かが悪いという考えが浮かんだ。」

父親の言葉を聞いて、提出者は「なるほどなあ」と一言。

長女「お母さんが暴れ出す前は、“お兄ちゃんずるい”とお兄ちゃんを蹴飛ばしたい気持ちだったが、お母さんが暴れ始めたら、“何だよこれは！”とひたすら思って、こっちに逃げてきたお兄ちゃんとひたすら目を閉じていたら、さっきより

お兄ちゃんのことは近く感じられて、一人でいるという感じは薄まった」

ここでは、兄妹二人のつながりに関する気持ちが語られました。



(写真9 解説) 耳をふさいでいる長女

進行役「兄とは、妙に連帶しているという感じ？」

長女「子ども同士が同じところに押し込められたという感じがしました。」

進行役「お父さんに対しては何か思いますか？」

長女「お父さんには期待もしていないし、お父さんが何をしてくれるかあまりよくわからない感じがする。できれば、お母さんをなだめてくれたらいいとは思った。」

進行役「この場を収めるとか、お母さんをなだめるとかといった期待は少しはある？」

長女「できれば…」

長男「お母さんだけが頼りという感じだったので、急に暴れ出るので、これは怖いと思った。逃げ出さなければと思った。

確かに、妹とは連帯感がある。お母さんに対しての仲間という感じになった。お父さんのことは何も考えていない。あえて言えば、早く帰ってきて…。」



(写真10 解説) 耳をふさいでいる長男

母親「一生懸命、息子のことに対応しているのに、一向に成果がなく、お酒を飲まずにはいられない。飲んだら、痛快な感じがして、主人が帰ってきたのはわかつたけれど、“ざまあみろ”という感じが強い。お酒を飲んだら気持ちが吹っ切れる。とりあえず、飲まないと私の精神が壊れてしまう。だから、飲まずにはいられない。」



(写真11 解説) くだを巻いている母親と耳をふさいでいる子どもも 後ろはギャラリー

Bさん「お母さんが、突然、ぐれたと思った。父親に対する、ざまあみろといった思いは意外だった。」

母親「このイライラを止めるにはアルコールしかない。アルコールがなかつたら、私の方がどうかなりそうという感じ。飲んでいる間は、子どもに暴力を振るっているという意識はなく、私の気持ちは楽。」

進行役「子どもたちのことは？」

母親「飲んでいるときは、全然、頭の中に入っていない。子どもが怖がっているといったことは全然意識がない。私にとって、アルコールは切るに切れないものです。私からアルコールを取ったらいられない。絶対、離せない。」

進行役「旦那さんは離せるの？離れているのか？」

母親「助けをよんでも、いざという時にはいつもいない。旦那に私の姿を見せつけたというような気分もある。」

#### ○提出者を交えての意見交換

提出者「それぞれが語った内容は、これま

での面接で語られたことと殆ど重なっており、細部まで伝えた訳ではないのに、不思議な感じです。一番驚いたのは、妻の夫に対する“ざまあみろ”という発言でした。確かに、よくわかるなあと思いました。直接、言語として表現した訳ではありませんが、そういう気持ちはあるのだろうなあと改めて感じました。妻の“ざまあみろ”という発言を聞いて、夫はどのように感じたのか聞いてみたくなった。」

父親「腹が立ちます。」

提出者「夫はこのような場面に出くわした後、見て見ぬふりをして、お風呂に入つて、知らん顔をして寝ます。妻のことは手がつけられないのです。」

進行役「お父さんの言った“腹が立つ”というのは、自己保身の思いとどこかでつながっていますか？」

父親「私に対するあてつけ、何も出来ないだろうというように突きつけられている感がある。子どものことについて、何かしないといけないと思っているけれど、一方で、時間のせいにしたり、仕事のためという言い訳で引き延ばしてきている。しかし、より現実的な場面に出くわすと、自分は悪くないという思いが先に出て、現実を認めきれない。」

進行役「こういった場面が、例えば1回だけとか、たまたまやったら、許せるのだろうか？」

父親「1回目の場面だったら、もともと妻はかんしゃく持ちなので、許せると思う。毎日になると、スルーしてしまう。」

### ○3つめのステージ

場面が変わります。長男の担任が家庭訪問をしている場面です（写真12）。担任は非常に若い先生です。母親の攻撃的言動に誘発されて、父親も加勢するという状況です。子どもたちは別の部屋で両親と担任とのやりとりや雰囲気は感じていますという指示が出されました。この場面には登場しません。



（写真12 解説） 担任を追求している両親

先生「うつむいていたら、つま先しか見えず、顔を上げたいのだけれど、できない。うつ向いている方が楽な感じもある。顔を上げて何か言った方がいいのか迷っている。でも、とりあえず、うつ向いていようかなあという感じですね。」

母親「指を指していると、段々腹が立ってきて、息子があれだけ苦しんでいるのに、この担任の先生は、息子をいじめている子どもに対してちゃんと指導してくれないから、いつも状態が悪い今まで、いつになんでも学校に行けない。だいたい、この先生が頼りないからと思うと、段々腹が立ってきて、息子が学校にいけない全責任はこの先生にあるのではない

かというような気持ちになってくる。この先生に言っても期待できないとか、信頼できていないので、これだけ言うてもわからんか！という感じもある。」  
父親「妻は怒っているし、同じようにやつておかないと、後で何を言われるかわからないので、同じようにやっている感じがありました。後は、悪者として、家族ではない誰かをに決めたがっていたので、『先生だ！』ということで、指が差せているところがありました。」

進行役「夫が横にいて、同じようなポーズをしていることについてはどうですか？」

母親「二人で連帯し、共同でやっているという感じがします。一緒に攻撃しているので、心強いです。」

ここでは、先生に対して、両親が連帯して向かっているというのが明らかになりました。

進行役「母親が心強く思っていると言うことは、父親にとってはねらい通りやね。」  
提出者「確かに、夫は妻が怒りますのでという言葉をよく使っています。改めて、子どもに聴いてみたい。」

長男「ホッとしたというか、先生は怒られていて当たり前だという感じがした。先生が悪いと思っているから、親が先生を怒っているのは悪くない。」

長女「先生のことはあまり考えていなくて、『いいぞ！やれやれ！』という感じ。さつき、お母さんにはむかついて、お父さんにはがっかりしていたので、やっと二人で、並んで、同じことをしているのが

うれしい。初めて、お父さんのことを見直せる感じがして、『頑張れ』って思いながら、喜んで見ている。」

進行役「子どもたちにとって、悪くない場面ということやね。ところで、親は子どもたちがこの場面を見ているとか、雰囲気を感じているとか、いったような意識はあるの？」

母親「同じ家の中だから、子どもが聴いていると思うけれど、先生に向かっているときは、半分以上、子どものことは頭から飛んでいます。私は、とにかくこの先生に言わないと気が済まない。子どもがどう聴いているかといったことへの関心はない。」

父親「私は思いっきり意識しています。」

進行役「妻と同一歩調で揃えようということを意識してるんやね」

Aさん「両親は共同作業できている。先生のお陰というか、先生がいるからできるんやなと思って見ていました。」

Bさん「お父さんは保身やというのをやっぱり思った。確かに、夫婦間の葛藤を丸く収めるにはいい方法かもしれないが、今さえよければいいという対応をしているという印象を強く受けた。」

提出者「システムとして面白かったのは、対学校、対教師という形をとって、夫婦が連合する。その中で、バーンアウトしていく教師が大変多いなあという図が典型的によく見えたのでとても面白かったです。」

進行役「先生にとってはたまらないけれど、家族にとって、それでバランスをとっている。」

(その後、提出者は事例の簡単な紹介を行い、今後に向けてのフリートーキングが続きましたが、そこは省略します。)

#### ○改めて、提出者の感想です。

3つのシーンを組み立て、それぞれのシーンの家族の気持ちを追いかけるということができるるのは、家族造形法の大きな魅力である。

まるで催眠術にでもかかったように、造形で得られたセリフと実際の面接で得られるセリフは怖いほど一致する。しかし、一致するのを驚き、喜ぶのが造形法の目的ではない。

今回の造形法で、一番のポイントは母親の夫に対する「ざまあみろ！」という気持ちであった。その後の面接で、母親に「お酒を飲んでる時に、夫に対して、“ちょっとざまあみろ！”って感じはありますか？」と尋ねると、少し考えて「確かにあるかも！」と答えていた。

さて、ここからの問題は、援助者がどのように造形法で得られたひらめきを今後のセラピーに生かして行くのかである。事実を造形法で当てるだけでは、占いと変わらない。

今回は時間の都合で、今後どうすれば良いのかまでのまとめは出来なかったが、十分な発想とひらめきは得られた。事実、この造形法の後、母親の夫に対する「ざまあみろ！」という思いを軸に面接を続け、2ヶ月後、長男は登校に至っている。

今回のケースで、あらためて造形法の奥の深さと、家族療法においてジェノグラムと造形法がいかに役に立つかを学ぶこと

ができた。

#### ○おわりに…。

今回は、いくつかの場面を造形してみるという展開を紹介しました。3つの場面、それぞれの風景と気持ちが表出されて興味深いものとなりました。

この家族は、常に、二人がつながっていないと不安定な家族なのかもしれません。

ところで、一つめの場面から二つめの場面に移る際には、動きをつけてみるというバリエーションも加えてみました。静止した状態で気持ちを確かめてみる、気持ちに集中してみるということができるのが造形法の特徴の一つであれば、動きを伴う中で気持ちに集中してみるということも可能です。その際には、何度か繰り返してみたり、動きのテンポを変えてみたりといったバリエーションを加えることがあります。

機会があれば、改めて、動きを伴った造形法の展開も紹介したいと思います。

今回の掲載について協力いただいた事例提出者を始め、研究会のメンバーにお礼申し上げます。

# 旅は道連れ、世は情け

～女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

## ④幕開け～最初の1年目

村本 邦子

走りながら考えるタイプの私である。研究所開設にあたって事業計画のようなものはほとんどなかったので、最初の1年目、どんなふうに事業を展開したのか、記憶は不確かである。何となく覚えているのは、1990年のおそらく9月だったのだろう、生後3ヶ月に満たない娘をスナグリ（抱っこバンド）に入れて、近所の不動産に行き、ワンルームマンションを借りる契約をしたこと。学生時代、不動産物件を借りることは何度か経験してきたが、私は、いつも迷わずその場で決めてきた。だいたいのあたりさえつけば、何事もご縁、住めば都思っているからだ。それではずれたことはない。

この時、ひとつだけ学んだことがある。考えてみれば当然なのかもしれないが、賃貸契約にあたって、現在無職であると言うと不動産屋は警戒し、夫の有無と職業を聞かれて、夫が大学の先生とわかると、途端に安心した様子で相手にしてくれた。離婚

してこれから新しい地で仕事を探そうとしている女性には厳しい状況だろう。「どうか、私はこの社会にあって夫の庇護下にいるのだ」と知り、なんだか軽く侮辱のような、それでいてこそばゆいような変な気分を味わった。何しろ、私は早くから自活しており、自分の健康保険証だって持っていたのだ（この時期は「扶養」だったけど）。

資本金は百万（当時はバブルで敷金も家賃も高かった）。新しく部屋を借り、カーテンや絨毯を選び、家具をコーディネートして自分の空間を創り上げていくプロセスは、いつもワクワク楽しい経験である。今もうだが、部屋はピンクを基調とした可愛くてお洒落な雰囲気。赤ちゃん連れが多いので、絨毯敷きにして、玄関で靴を脱ぐようにした。開業のカウンセリングルームとしてはちょっと変わっているが、今なおこの形で続いている。必然的にアットホームな雰囲気となる。開設パーティもしたはずだが、あまり覚えていない。

記憶は不確かなもの、手掛かりとして年報の活動記録が残されている。急な思いつきで、毎年、年報なるものを発刊することに決め、開設後1年した1991年秋に『女性ライフサイクル研究』創刊号を出版した。雑誌の発行を思いついたのも、趣味で同人誌を出したりしていたからだろう。どんな経験が後にどんな形で役立つかわからないものだ。そして、誰かが言ってくれたのだと思うが、ISSNを取り、国会図書館へも入れるようにした。創刊号の扉にはこんなふうに書いてある。

「とらわれず、こだわらず、かたよらず」  
気負わずに自然体で伸びゆく女性を目指したい。FLC研究所はそんな女性を支持します。

という言葉を掲げて、FLC研究所を始めて1年が過ぎました。「女人って大変だなあ。女人って頑張ってるなあ」と実感するようになってから、女性のために何かしたいという漠然とした思いで、思わず行動が先走りしたようないきさつでした。目に見えない力が女性を縛り、型にはめようとし、また、女性自身もそんな圧力を内に取り込んで自分を押さえ込んでいる様子は、あまり幸福そうには見えませんでした。女性が不幸だとすれば、当然男性も不幸なはずでしょう。

開設当初はとりあえず、女性のワークショップ、無料電話相談、個人カウンセリングから始めてみました。やっていくうちに、少しずつやりたいことが見えてきて、スタッフである仲間も増え、できることも拡がりました。ニュースレターの発行、グルー

プカウンセリング、講演企画、産前産後の心の訪問ケア、etc。仲間が増えて力を合わせると、できることに何倍もの広さと深みが増し、そのことに刺激されて、また新たに力が湧きおこるという喜びを知りました。それと同時に、複数でやっていくことの難しさ、傷つけあったり、すれ違ったりという苦い経験もありました。それでも、やっぱり、仲間っていいなあと感じています。…

末尾の活動報告によれば、開設した1990年10月から、「お母さんのための無料電話相談」と各種ワークショップ（女性学コース、発達心理学0歳・1歳・2歳児コース、マタニティコース）、個人カウンセリング、グループカウンセリング、トークルームを始めている。参加者数の多い企画は、近くにある北区民センターの貸し部屋を借りた。各種ワークショップの参加費は、開設当初から現在に至るまで一人千円である。収益にはならないが、これは、参加者とスタッフの垣根を低くする効果を生んできたと思うし、目に見えない守りとしての枠組みをいかに作るかというスタッフの訓練に役立ってきたと思う。

客層としては、子育て仲間に呼びかけ（前号で紹介したように、ネピア赤ちゃん学の卒業生ネットワークは大きいものだった）、各種企画を毎週のように新聞の広報欄に載せてもらい、ぽつりぽつりとさまざまな企画への参加者は増えていった。そして、趣旨に賛同した参加者から、口コミでカウンセリングにつながる人たちが出てきた。カウンセリングルームが孤立して存在するのではなく、地域へと拡がりをもつ同心円状

に設定された事業の中心にあるという構造は、今なお維持されている形である。

一番楽しかったのは、たぶん女性学のグループだったんじゃないかなと思う。前にも紹介したアドリエンヌ・リッチ『女から生まれる』(晶文社)を皆で読み合わせ、語り合うという形のグループだったが（この形式のグループは今も続いている）、ほとんどCRグループとして機能していた。CRとはConsciousness Raising（意識覚醒）の略で、定期的に女たちが集まって、毎回、テーマを決め、女として生きてきた自分たちの体験を語り共有しあうグループのことである。1960年代後半、第二波フェミニズム運動が巻き起こるが、CRグループは、この運動の重要なツールとして役割を果たした。女同士の親密で安全なグループのなかで、これまでひとりひとりが胸に秘めてきた体験を明かし、痛み、苦しみ、哀しみ、怒り、喜びを分かち合うなかで、女たちのさまざまな体験が、決して個人的な問題ではなく、社会的・政治的な問題であることに気づく。

"The personal is political."だ。

ちなみに、このCRグループのなかで、子ども時代の虐待やインセスト、夫からの暴力やレイプなどの問題が初めて明らかにされ、その結果として、ホットラインやシェルターなど女たちの救援組織が次々と立ち上がり、法律の改善を求めるアドボカシーが盛んに行われるようになったという経緯があった。

リッチの本に添う形で、女であること、産むこと、母であること、妻であること、夫との関係、性、体、セクシャリティなど、さまざまなテーマで自分たちの体験を語り

合い、分かち合い、それぞれに個性的な互いの人生に敬意を払い、女であることの誇りや力を確認し合った。まるで何かに取り憑かれでもしたように、私たちは飽きもせず、毎週、毎週、自分たちの体験を語り合ったような気がする。第二波フェミニズム運動のキーワードであるシスターフッドとエンパワメントの体験だった。もちろん、参加者にはお客様もいたのだが、現在のスタッフでもある4人のスタッフが最初の1年目にはもう揃っていたので、研究所の最初期にスタッフたちがこのプロセスを経たことは、その後の研究所の基盤づくりとして何物にも代えがたい重要な意味を持っていたのだと思う。

もうひとつ懐かしく思い出すのは、毎週土曜にやっていたスタッフ会議だ。保育所に通っている子どもも、そうでない子どももいたが、土曜はスタッフが全員子連れで集まって、ミーティングを持っていた。0歳から2歳までの子どもたちが総勢6人集まっていたのだから、それはにぎやかなものだった。電話をかけてきた人から、「そちらは保育所なんですか？」と問われたこともあったっけ。お泊りもしたし、キャンプもしたし、学会や遠方のイベントに一緒に行って、必要な時には子どもを見合いつこしながら、旅行もした。毎年クリスマスにはクリスマス会があって、子どもたちは大人全員からひとつずつプレゼントをもらえたものだ。こんなふうに育ってきたので、私たちの子どもたちは、まるで大家族のような特別な関係にある。今だってそうだ。たとえば、うちの子どもたちはヒップホップ・ラッパーだが、CDを出せばスタッフや子どもたちが買ってくれ、都合のつ

くライブがあれば、大人も子どもも応援に駆けつけてくれる。

振り返れば、意図せずも、子育てネットワークという大きな力を持っていたためだろう、とくに営業のようなことはしたことがないが、口コミで私たちの活動はちょっとした話題を集め、マスコミに取り上げられ、子育てサークルや公的機関の講師として、また、大丸梅田の赤ちゃん展のゲストとして呼ばれ、女性センターのビデオ出演まですることになった。たとえば、1991年1月3日の読売新聞家庭欄には、「子育ての悩みカウンセリング、母3人スタート」というタイトルで大きな写真入りで女性ライフサイクル研究所のことが取り上げられている。私の膝の上には、まだ半年に満たない娘がちょこんと座っている。ビデオ出演というのは、大阪市婦人対策課による『主婦の再就職』という田上時子さんによる作品だった。このビデオには、可愛い子どもたちが登場するし、私たち自身もまだ20代の可愛い盛り(!!)だった。「女性の視点で女性のサポートを」というスタンスは女性たちの共感を生み、子連れで仕事を始めることにも話題性があったのだと思う。「アグネス・チャンの赤ちゃん論争」というのがあった頃の話だ。

1991年1月に翻訳出版したユング派フェミニストの精神科医ジーン・シノダ・ボーレン『女はみんな女神』(新水社)は、私たちの活動とともに、9月に創刊された『フラウ』という講談社の女性雑誌に数頁にわたり大きく取り上げられた。この本もまた、女性学ワークショップのテキストとして取り上げられ、このグループは現在も続

いているものである。

1月からは季刊でニュースレターを発行するようになり、4月には研究所のパンフレットを作った。この頃の私の構想としては、週1日、開業のカウンセリングをして(始めた頃は開業の方には別の看板を立てていた)、そっちが仕事、子連れでやるのはサークルの延長のようなイメージだったと思う。そちらの方は人手がある方がいいから、一緒にやりたいというスタッフたちを受け入れ、他のスタッフたちも何か仕事をしたければ、この場を利用して、自分の責任の範囲でやってくれたらいいと考えていた。そもそも、私は人と一緒に仕事をするつもりではなかったのだ。一緒に子育てし、学びながら、それぞれに仕事をしたければ助け合っていけばいいんじゃないのというくらいの意識だった。そんな安易さが仇となることは誰の目にも明らかである。すぐに問題として浮かび上がってきたのが、お金と責任の問題である。「そんなことも考えずに始めたの!?」という声があちこちから飛んできそうだが、これが私の愚かしさである。が、愚かだからこそできることだったのである。この問題は、繰り返し、繰り返し、話し合うを通じて、その都度一番良いと思われる形を模索してきたのだが、この話題は次回にしよう。今、ここまで書きながら、研究所の基本的理念やスタンス、構造といったものは、最初の1年目には、ほぼすでに出来上がっていたのだなあと感心している。



# きもちは、 言葉を さがしている



第3話

水野　スウ

## ともの時間のウォーミングアップ

週いちのオープンハウス「紅茶の時間」から、ある意味、必然的に生まれたともいえる、月いちコミュニケーションの練習の場、「ともの時間」。それは、家族をはじめ、身近で大切な人と、なんとか少しでも気持ちのいいコミュニケーションのキャッチボールができるようになりたい、と切実に願い、それには何がしかの練習が必要なんだ、と思って来てくれた人たちの集まり。3つあるうちの最初のグループができてからすでに6年たったけれど、どのグループのメンバーも、私も、それぞれゆるやかに変化しながら、今もカタツムリの速度でゆっくりと歩んでいる。

前回は、ともの時間ができるまでのいきさつと、その時間が、参加している人たちにとって、安全／安心な場であると思ってもらえるための、まるでゲームのようなウォーミングアップを何度も重ねた、というあたりまでを綴って終わった。遅々たる歩みだけど、今回もまたその続きを始めようと思う。

毎月のともの時間で最初にするウォーミングアップは、その日その場に集まった人たちの緊張をほぐすために、欠かすことのできない気持ちの準備体操だ。単純な一つのキーワードを出して、その言葉でふと思いつくもの、ぱっとひらめいたことを一人一人が言ってみる、ということからはじめる場合が多い。お題となる言葉が、時には「好きなお味噌汁の具」だったり、「子どものころの懐かしい匂い」だったり、またある時は「雪の想い出」だったりする。それについて誰でも何か一言は言える、そんな簡単なお題がいい。

このやり方は、東京調布の不思議なレストランこと、「クッキングハウス」でのコミュニケーションの練習に参加して学んだことの一つだけど、心の病気のメンバーさんたちにとって答に窮しない問い合わせ大切なと同じように、ともの時間の仲間たちだって、最初はシンプルな問い合わせにただ答える、という気楽さが大事、と思ったのだった。

正解を求められるのと違って、この場合はどん

な答えもあり。思ったことをそのまま言葉にすればいいだけ。っていうか、むしろそれが重要。カッコつけずに、感じたままを言葉にしてみる練習、なんて普段はなかなかないことだから。人前で話す時、つい構えて立派そうなこと言ってしまう癖のあるひとにとっては、ちょっと新鮮な体験だったかもしれない。

このひとときは、気持ちほぐしであると同時に、参加している仲間たちの感覚や個性を知る小さな手がかりにもなる。「懐かしい匂い」の短いエピソードからその人の育った家族の原風景とか、「お味噌汁の具」から親子の関係がかいま見えたする。「一番好きなりんご」というキーワードでした時など、りんごにまつわる様々な想い出が甘酸っぱい匂いごと、仲間たちの口からいきいきと語られ、同じ品種のりんごつながりでうれしくなる人もいて、もうこの時間だけでそこにいた全員がしあわせな気持ちになってしまったほどだった。

こんな場面で、いつもは目立たないとも仲間の誰かれが、話しながらどんどんいい表情になっていくのを見る時、この何てことない短い時間も、一人一人が持ってる可能性を引き出すささやかなきっかけになってるんだ、と感じることが度たび。立派な話をしなくていい場なんだと思えて安心した時、またほんの数ミリ、仲間の間の垣根が低くなる。

## 気分調べ

クッキングハウスで一日の仕事が始まる前に、毎回しているという気分調べ。メンバーもスタッフも、今の自分の気分をみんなの前で短い言葉にする。体調のよくない人、朝からなぜかイライラしての人、今日は比較的おだやか気分の人。それぞれのこころ具合を先に言っておくことで、しない人には配慮ができるし、今日のあの人の不機嫌が、別に私に腹たてるからじゃないんだ、とわかれば妙な遠慮や、要らぬ緊張をしないですむ。心の病気ゆえの思いぐせで、つい悪い方へ、自分を責める方へと、進んでしまいがちの人には、こんな時間の有る無しで、一日のはじまりがずいぶん違ってくるかもしれないと思う。

きものは、言葉をさがしている

との時間でも、ウォーミングアップの次に、やっぱりこの気分調べをしている。はじめのからは、なんでいちいちこんなこと、と抵抗を感じる人も少なからずいたはず。気分をあえて言葉化するなんて、これもまた普通あまりないことだから。

それでも、続けているうち、みなだんだんコツがわかってきた。気分、というとらえどころのない、だけど確かに自分の中にあって、時には自分をコントロールすらしてやるものを、とりあえずは見つめてみる時間を持つということ。うまく言葉にできなくても、見つめる時間がきっと大事。これも一つの、気持ちが言葉を探す練習なんだね、と。

家でひと揉めして重たい気分をひきづったまま来た人、このところ寝不足で今も眠たい気分の人、久しぶりに来れたのがうれしい人、しなきゃいけないことだらけで焦ってるという人。ある時は、「体がしんどいので、今日は横になったまま参加します」という人もいた。

それももちろんあり。いろんな気分かかえた仲間がやってきて、今ここで一つの輪をつくっている、という場の共有感を大事にしたいと思う。また、言葉にすることで逆に、ん？なんか違う、今の気分はこれじゃないな、ってはっきりすることもよくあって、それも含めての、その日その時の気分調べ。

気分と考えと行動はリンクしてるから、むしゃくしゃしてる日やもやもや気分の時にバーゲンセールにいくのはおおいに危険！だし、いつもと比べて後ろ向きの気持ちが強かったり、追いつめられてる気分の日には、重大な決定を今日はしないでおこう、と結論先送りを選ぶこともできる。気分調べにはそんな効用もあるよね、と話す。

仲間たちにとって気分調べは、月に一度、との時間に来た時だけにする特別なこと、なのかもしれないけど、私自身はちょっと意識しながら続けてるうち、自然と「一人気分調べ」をすることが習慣化してきた。いわばミニ自分研究。近ごろなんか元気ないな～、の時期もあれば、お、煮詰まってる、もういっぱいいっぱいなんだ、という日もあれば、おや、今日は軽やかですねえ、なん

て日もある。

以前よりずっとそれを自覚できるようになったことは、私にとってよいこと。気分に凸凹、あって当然。凹な日だからって無理やりポジティブに持っていたりしない、少なくとも家族や親しい関係性の人の前では。八方美人のカラ元気はあとでどっと疲れるだけだ。なんてことも気分を見つめる練習をしてきたおかげで、自分なりに見えてきた。ヘコミ加減やイライラ度が自分の一定レベルを越えそうと予感した時は、その手前で家族に気分をとりあえず伝えておくほうが、無意味な八つ当たりだって回避しやすい——。

こんな話をともの時間でしたら、「あっ、そうか、自分から先に、今日はこんな気分なんや、って言ってもいいんだ。その方があの子は安心するかも。黙って不機嫌なままの私でいると、子どもがものすごく気を遣って無理してるのがわかるし、それ見てるこっちも疲れて、なんか余計にイライラっとする。これって無言の悪循環だったんだね」と、仲間の一人がいいことを言ってくれた。そんな日は後半の時間を使って、自分の気分をさりげなく家族に伝える練習をする、という課題につながっていくこともある。

ともの時間内で、毎回毎回ここまで考えながら気分調べしてるわけじゃないけど、今これを書いてる私には折角の機会だから、と立ち止まってみた。一体何のためにするんだろう。あらためて書き出してみるといろいろ出てきておもしろい。このページは、自分の小さな気づきをはしょらず綴っていい場ととらえているので、こまごました発見を主に自分のために書き、書いている過程でまた新しい気づきを拾っている。

## しあわせまわし

15年ぐらい前から、お話の出前先などで初めての人同士が出逢うような時、「しあわせまわし」というワークショップをすることがよくあった。最近のちょっとしたうれしいことを、二人一組になってごくみじかい時間、お互の話を聴きあう。最初はただそれだけのことから始めたのだけど、何回も何年も続けるうち、この中には意外にたく

さんの大事な要素がつまっていることに気づいて、ワークショップをする時の呼びかけの言葉も少しずつ変わって来た。たとえばこんな風に。

「ここ一週間くらいをふりかえってみて、ほんのちょっとしたうれしいこと、とるにたらない、ささいなうれしいこと、何かありましたか。ほんのささいな、が味噌です。ちっちゃなことでいいのです。夕べお月さまがきれいだったこと、でも、友人の一言がうれしかった、でも、種から芽が出た、でも何でも。ではしばしの間、考えたり思い出したりする時間をどうぞ」

話すことが決まったら、参加者全員が二人一組をつくって、自分のお相手に、話を聴いてもらう。聴く時にはいくつかの約束ごとがあって、どんなちっちゃな話でも、ああ、ちゃんと聴いてくれてるな、と話し手が思えるような聞き方をしてもらいたいこと。間違っても、へえ～、いい年してなんでそんなことがうれしいんだあ？ みたいな顔をしてほしくないこと。質問したり、相手の話を取り上げて自分の方に持って行ったりしないで、ただ、まっすぐに耳を傾けて聴いていただきたいこと。

話す時間はたいてい1分半。私の鳴らす鈴を合図に、話し手が一斉に話し始め、もう一度鈴が鳴ったら、先に話していた人たちが今度は一斉に聴く人になって、また1分半、の総当たり。限られた時間しかないので、挨拶抜き、いきなり本題の、ちいさなうれしいを語りだす。なのでその場が突然、ミツバチの羽音みたいな人のしゃべり声でいっぱいになる。

タイムキーパー役の私は、この時間がいつも大好きだ。見知らぬ同士がペアになる場合がほとんどなのにもかかわらず、うれしい話をしてる人の顔はやっぱりうれしそうだ。聴く方も、苦虫かみつぶしての顔はめったに見かけない、こんなこと初めてで戸惑ってる顔が多少はいたとしても。とりわけ、後から話すたちはもう要領がわかったこともあって、実に楽しそうに、うれしげに話す。話に夢中になりすぎて、鈴を何度も鳴らさないと話が止まらないこともしばしば。

こんなワークの経験がない人にとっては、いきなりうまく話せなくて、うまく聴けなくて、もち

ろん当たり前。それでも、決して少なくない人たちが、聴いてもらってうれしかった、と言う。しかもその中身は、ささいな、ほんのちょっとしたうれしいことに過ぎないので。

## とるにたらない、が味噌のわけ

しあわせまわしのワークショップにはいろんな要素がつまってる、と先に書いた。

まずは、ちいさなうれしいを見つけるための、感じる心が必要なこと。見つけて、その気持ちを言葉化すること。ちいさな話を心して聴くこと、共感すること。相手の聴き方次第では、しっかりと聴いてもらえるってうれしいことなんだ、こんな気持ちがするんだ、という疑似体験をちょこっとできること。また逆に、相手が自分の話を聴いてくれてる感じが伝わってこないと、話してもちっともうれしくない、楽しくない、という気持ちも味わえること。みんなが一斉に話していても、自分の今のお相手の声だけは聴き取れる、音を選びとれる耳の不思議さについても気がついていく。

ほんのわずかの時間に、人はいろんなことを感じるようだ。何を話していいかわからなくて、1分半が長かった人。逆に、短かった、もっと話していたかった人。聞いてる途中で何度も口を挟みたくなって困った、きっといつもこうなんだ、と自分のくせに気づいた人。結構集中して聴けた、忙しいを理由にしてたけど、聴く気がなかったんだな、1分半でこうなら3分あればもっと聴けそうだ、と思った人。

参加していた人たちが話していたものは、情報じゃなくて、気持ち。知りあうも何も、まだ会ったばかりの人に、気持ちを話すなんて普通はまずないこと。自分の日常のささやかなうれしい、を他人が、それがどうした、だからどうなのだ、という顔せず真剣に聴いてくれた、という経験のあとで、それなら、家庭では？ と考えてみる。家族の間で交わされている主なものは、気持ちだろうか、情報だろうか。話したちいさなうれしい気持ちちは、その人に一番近い場所で、ちゃんと聴かれ、しっかり受けとめられているだろうか。

きものは、言葉をさがしている

毎日は、ヤなこと、ムカツクこと、傷ついたり悲しかったり腹立ったりすることがいっぱい、その一方で時にはうれしいやすてきもあり、のミックスジユースみたいなもの。そんな中で、今日こんなことあってうれしかったなあ、というシンプルな話すら分かちあっていない関係性の人と——それがたとえ家族でも——いきなり深刻な話や重大問題に向き合うって、だいぶハードルが高いんじゃないだろうか。

このワークショップの場で、とるにたらないようなうれしいことに光をあてて言葉化してもらうのは、そういうことをいったん考えてほしいと思うから。

自分の見つけたちいさなうれしいを、よろこんでくれる人が身近にいると知ることは、一つの安心。その安心がふえていたら、あんまりうれしくない話だって、時に悲しみや後ろ向きの気持ちだって、その人になら話せる、という関係性が育っていくかもしれないな、と。それもまた、私のささやかな希望だ。

## 聴く／聴かない練習

ともの時間の仲間たちの共通点は、身近な人と気持ちのいいコミュニケーションをしあえるようになりたい、という願いを持っていること。子どもとの関係で悩んでいる人なら、なんとかもっと子どもの気持ちをわかることのできる親でありたい、といっそう強く願っている。

気持ちを知るためにには相手の話を聞くことが大事、それはみんなとうに知っているのだ。相談に行った専門家の人たちからも度たび言われてきたので、聞いてあげなくちゃ、しっかり聞いてやらなきゃ、と思っている。たとえば、夜遅くにきまって子どもがいつもの話をえんえんはじめると、ああ、またか、と思いながらも必死につきあい、時には睡魔と闘いながら話を何時間も聞いてあげているお母さんもおられた。

でもこれだと、話してるのはきっと満足しない。話は聴かれて=受けとめられて、初めて話になる。また始まったかと少々うんざり、その上、眠気とバトルしながらではどれだけがんばっても

そんなふうには聽けないから、話した側は、気持ちを放した、ことにならない。そんな時、お母さんが「あなたの話をもっとちゃんと聴きたいと思うから、今日はもうここまでにしておいてくれる？」と自分の聴ける限界を「私メッセージ」で伝えていけるようになったらいいなと思う。その伝え方にはもちろん、相応の練習が要るのだけど。

そんなともの時間でも、ちいさなうれしいをテーマに、二人一組の「しあわせまわし」を何度かしてみた。時間はいつも通り短い時もあれば、3分、5分の時も。回を重ねるうちに、うれしいを見つけるのにも、それを言葉にして伝えるのにも、相手のちいさな話をまっすぐの耳で聴くのにも、簡単そうに見えてそれぞれ練習が必要なんだ！ってどの人も気づいていった。

最近のちょっと聴いてもらいたい話、をテーマに聴きあったこともある。この場合はただ聴くことに集中していたらいいのだけど、つい、何か言ってあげなくちゃ、と助言モードになる人が結構いて。でもそれが相手にしっかり伝わり、私の話ちゃんと聴いてもらってる感じがしなかったよ、と相手から言われて、いつも自分がどんなふうに人の話を聞いているか、すぐに答えをあげくなってしまう自分のくせを、リアルに感じられた人もいる。

かつての私も、ここで何か言ってあげないとまずいかも、と焦れば焦るほど、気持ちを聴く耳が上の空になってたこと、よくあった。まっすぐ聴くって、本当に練習が必要なことなど今でも思う。

聴かない練習、というのもした。今さっきしたばかりのうれしい話を、もう一度話す。ただし今度の相手は、聴こうとしない人。そっぽ向いたり、あくびしたり、気のないふりをしたり、とにかく、聴いてないよ、という空気をいっぱい発散させて、そこにいてもらう。

さっきと同じ中身を話しているはずが、ええ～何これ？ と全然違う気持ちを体験する。さっきは、話しながらうれしかった場面がクリアな色つきで次つぎ思い出せたのに、そしてまだまだ続きを話したい気持ちになれたのに、今はそれが突然しほんでモノクロになっちゃった。途中で何を話

したいんだかわけわかなくなってきた。悲しかった。寂しかった、無視された感じ、聴いてもられないってこんな気持ちがするのか、などなど。

こういった聴く／聴かない練習を重ねて、私たちちは大事なことを学んでいったと思う。

——自分の話が、途中でさえぎられたり、指導されたりせず、ていねいに聴かれるってことは、自分という存在が大切にされている、と感じられることなんだね。その中で、自分が本当に話したいことが何なのか、ふっと気づいたりする。気持ちが、言葉を探しだす、探し始てる、って感覚、ちょっとわかりだした気がする。

——その逆の、聴いてもらえなかった時の気持ちもリアルに感じたよ。聞いてあげなくちゃ、聞いてやってる、みたいな態度で聞かれても、話してるのはちっともうれしくならないんだってことも。

——話すのは、必ずしも何か答えがほしいからじゃないんだね、話したいっていう気持ちになること自体に意味があるんだね。

聴く耳は、練習すれば育つもの、と仲間を見ていて確かに思う。深夜に始まる例のえんえんトークの時間が短縮されたことを知ったり、この間ね、めずらしく、娘と何気ない会話が長く続いたの！ とうれしそうに話す仲間の顔を見る度に、あ、また耳が育ってる、育ってる、って思って私もうれしくなるのだ。

## 思ったことは

ともの間に参加して半年ほどした人たちから、よく耳にする言葉がある。

「思ってることは、言おう、と思うようになった」「思ったことは言った方がいいんだ、って思い始めた」

「思ってること、言ってみようと思った。で、言ってみた」

どれもよく似ているけど、それぞれ違う人の言葉。ってことは、前は言わなかつたんだ。思つたり感じたりはしても、様ざまな理由で言わずにすまして來てたんだ。

理由を聞いてみると、言わないのがもう当たり前・その方が波風立たない・ややこしくない・呑み込むのがもうくせになつて・どうせ聞いてもらえない・言ったところでしようがない・自分さえ我慢してれば丸く収まる・言えばかえつて面倒なことになる……etc。それで、「言わない」がもうパターン化していた、と。

これまで長いこと言わないのでしたが、言うべき、と外から言われたのでなしに、自分の内から「言おう」と思うって、ましてや、言っちゃう、って私が思うに、すごい変化！だ。言ったとしてもたぶん思うようには言えなくて、気持ちもスムーズに伝わらなくて、衝突がおきる／おきたかもしれない。だけども言いたい、伝えたい。そんな風に変わってきた気持ちがまた、新しい言葉になっていく。

ともの仲間の何人かは、指導的な立場の人からよく、お母さんが変わらないとね、と言われたそうだ。そう言われること、頭ではわかるけどその度に苦しかった、今のあなたじゃだめと責められてる気がして。だって変わるものなら変わりたいけど、どうしたら変われるのか、それがわからないんだからね、と言う。

自分を変えなきゃ、と思ったらそりやしんどい。そうではなくて、変えるのは、これまでずっと繰り返してきた、自分特有のコミュニケーションのパターンのどれか一つから。

言いたい、伝えたい、っていう「～たい」の気持ちになったら、そこが練習課題の出発点だ。どんなふうに表現したら、自分の伝えたいことが相手に伝わるだろう、だけど自分一人で考えたっていつものワンパターンしか出てこない。だから仲間たちの力が必要なんだ。一緒に考えてもらう、知恵を出しあう、これまでの経験を分けあう。

いくつか出された知恵や提案の中から、課題をだした人が、これまでと違うものの見方を採用することもあれば、別の仲間の案をとりいれて短いロールプレイで実際に練習してみることもある。

きものは、言葉をさがしている

ただしその目標設定は、その人がほんのちょっと努力すれば出来うこと、だけど今まで一度もしてみたことがないこと、というのがポイント。

家族は不思議な有機体。小さなことからでもどこか一ヵ所が変わることで、ゆるやかに他の部分も変化してゆくんだと思う。何より、仲間たちは、自分や家族のちいさな変化、ちいさなうれしい、を見つけることがとても上手になった。

その変化の一つに、以前よりずっと、ありがとうを口にする回数がふえたそうだ。ほんのちょっとしたこと、テーブルの上のものをとてくれたことに、ポストから郵便物を持って来てくれたことに、宅急便のはんこを押してくれたことに、ありがとう、と家族や子どもに言ってる自分に気づいてびっくりした、という人もいる。

それくらいはして当たり前だから言う必要ない、と言わずにきた「ありがとう」。相手との固く煮詰まった関係の中で、言おうと思うだけで緊張したり、言ったら損するみたいな気がして言えなかつた「ありがとう」。そんな人がいうありがとうは、滅多にない、という意味で、有難い、ありがとうだ。ちいさく見えて、きっとそれは大きな変化のはじまりだ。

このようにちまちまと、自分の気持ちにあう言葉を懸命に探し、語りあい、伝えたいことを伝わるように、と練習していくともの時間に、この道の専門家は一人もいない。長く悩んできた人が多いだけに、つらい話、重たい話もたくさん出るけど、出た分だけそこに空間ができる、その人の中にあらたに入つてゆくものがあるんだろうと思う。案内人の私にとっては毎回が試行錯誤の真剣がちんこ。こんな場合は、一体どうしたら、と立ち往生することはしょっちゅうだけども、その度、苦しみを経験してきた仲間たちと場の力に助けられる。ともの時間は、そういう場所だ。

＊＊＊＊

続きはまた、次回。

— to be continued.

# やくしまに暮らして

ネイチャーガイド 大野 瞳

## 第三章 離島の暮らし

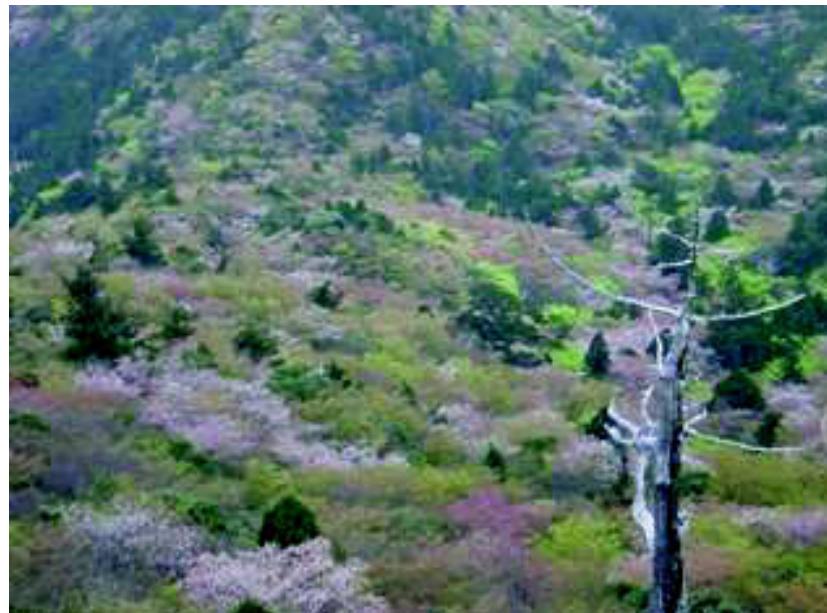
「いつも温かい南の島だから、自給自足でやっていけそう。なんと言っても屋久島は水が豊富だから、畑でお野菜とか作って、海で魚釣ったりしてのんびり暮らしていくぞう。」というイメージを持たれことが多い。また、そう期待して移住して来る人もいる。果たしてどうなのか？

### ■四季



春、屋久島は雨に包まれる。

ここでまた「え、だって屋久島っていつも雨でしょ？」と思われることでしょう。林英美子が小説「浮雲」の中で屋久島は月に35日雨が降ると表現した島である。確かに年間雨量は大阪や東京に比べて4～5倍。桁外れの雨が降る屋久島ではあるが、春の雨は日本の光景。天気予報士がニュースで伝えることがスギ花粉の話から桜前线の話に変わる。そしてどこかの公園の桜の木の下で、「こここの桜は今週末が満開で見頃となりそうですが、気になるお天気は...」などと話していることが多い。桜の時期は三寒四温、ひと雨ごとに温かくなる季節なのである。そして屋久島の桜は、ソメイヨシノは学校や役場などに植えられており、卒業式の頃に満開を迎える。山を彩る桜はヤマザクラ。



新緑とともに拡がるヤマザクラの開花。ゴザとビールではなく、カメラとおにぎり持ってトレッキングとともに楽しめます。



梅雨、もちろん雨が降り続く。山も森も海も浜も、その恵みを存分にうけて育まれる。  
屋久島がとても美しい季節ではあるが、あまりに降り続く雨はさすがに憂鬱になる。



夏、期待通りの南の島を楽しめる。海も川も泳ぐ魚が透き通る。だからと言って朝から一日中海や川で泳いでい

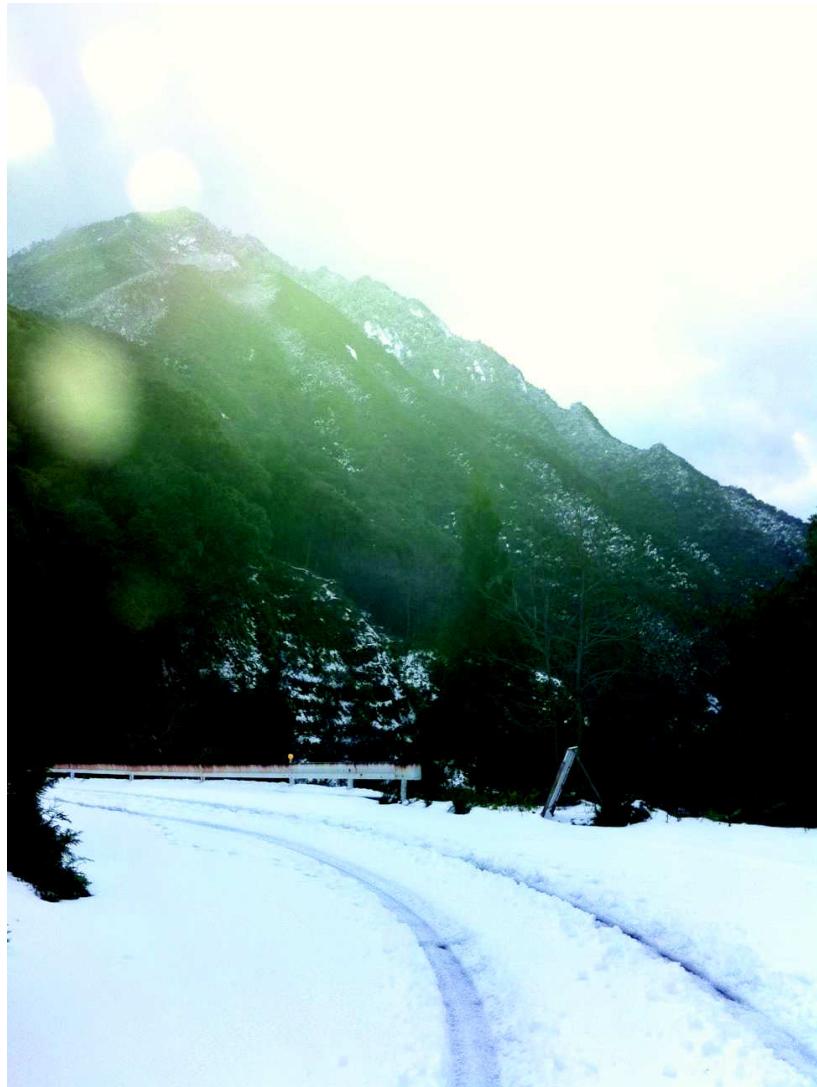
たら焦げる。島の人は夕方頃から泳ぐ。灼熱の太陽を遮るものなく浴び続ければ体力は相当消耗するし、過度な日焼けは危険なので要注意。しかし、こちらも毎日ニュースでお届けされるような猛暑や熱帯夜にはならない。日中の最高気温も32℃くらいのもので、岳降ろしと呼ばれる山からの風が心地よく、コンクリートやビルではなく本当の森に囲まれている。そして夜は満天の星空と天の川を楽しめる。

秋、あつという間に通り過ぎる。モミジがなく紅葉する樹木が少ない。秋だなあ、と感じる光景が少ないのである。

そして季節は冬へ。人々が暮らす麓は亜熱帯気候であり、滅多に雪は降らない。しかし、標高1000mを超れば、冬は雪に包まれる。



人々をさらに拒む厳しい冬がやってくる。海は荒れ、空はどんどんより暗い。亜熱帯気候とは言え山がすぐそばに聳えるため吹く風は冷たく、ストーブや炬燵も必要である。



かつては日本最南端での雪まつりも開催されていた。近年は暖冬傾向とのことではあるが屋久島は近年更に豪雪の冬を過ごしている。2月中旬には少しずつ春の兆しが見えはじめ、菜の花が咲き誇る。



そして桜を待ち焦がれる日々となり、季節は巡る。

### ■日常生活

鹿児島県の最低賃金は642円（平成22年10月28日発効）全国平均は730円。

ランキングで最下位から5県までを沖縄と九州で占めており、屋久島も鹿児島県に準じている。では、日常生活にかかる費用は全国と比べてどうなのか？

全国より安いもの：土地、家賃。

島の中でも街の中心と思われる辺りでも坪2万円くらいが相場。商業スペースの一等地でも10万円くらいとか。私が移住して最初に住んだアパートは2DKで家賃は4万円。それでも当時は高い物件として大家は島の人々から非難を受けていた記憶がある。しかし、そもそもアパートなるものが殆どなかった時代もあり、家賃の相場もあってないようなものだった。

ちなみに現在でもアパートは少なく、一人暮らし用アパ

一トで4～5万円くらいが相場。住みたいと言われても住む家は少なく、常に周りで家を探している人が多い。

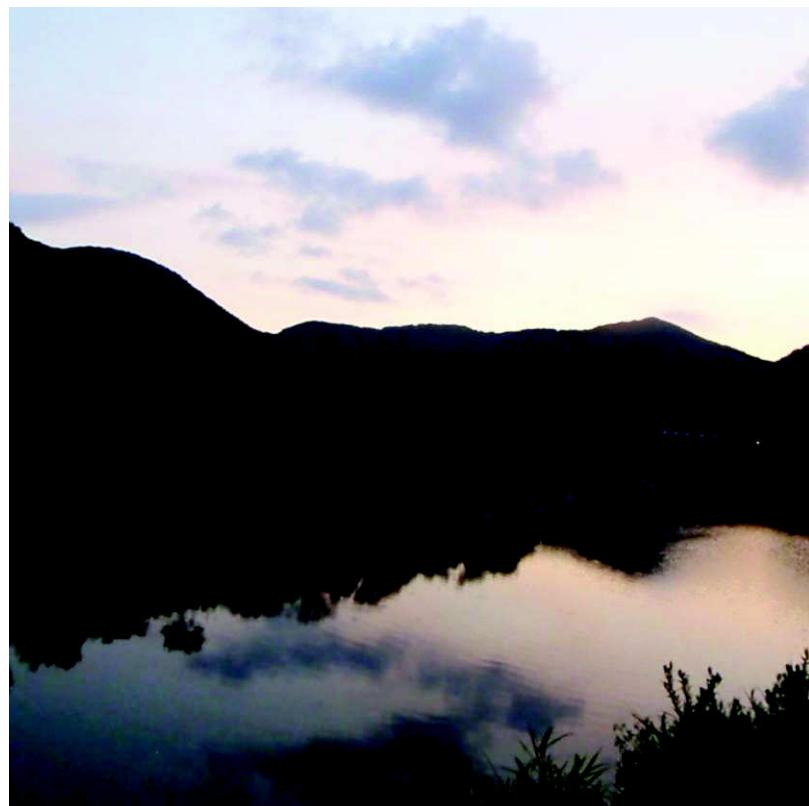


では、全国より高いもの。

残りのほぼ全てと言っても良いであろう。

生活に関わる物資、食料の殆どが船に乗って運ばれてくるため、当然運送料が加算されている。記憶に新しいのは数年前のガソリン代の急騰の際、屋久島では200円を超えており、また、台風などの天候不良で船が欠航すればたちまちスーパーには何もなくなってしまう。食糧がなんでも賄えていると思われがちではあるが、現実はそうではない。それは屋久島の人だけではなく何処でも同じことなのだが、国産のものや地元産のものはかえって価格が高くなってしまったりして輸入の安いものに手を出してしまう。本当は自分の目で舌で確認できる安全で美味しい食材も近くにあるはずなのだが...。

需要と供給のバランスが崩れると農業や漁業といった第一次産業の従事者は減り、ますます美味しいものが食べられなくなってしまい、アイデンティティの築かれない社会に向かっていくのかもしれない。



ニッポンの誇りである四季の移ろい、自然の恵みが存分に味わえる屋久島。常に自然と背中合わせの暮らしには、人間の無力さを見せつけられることが多い。それでも当たり前と思っていることの大切さや、本当に必要なものに気付くことが出来る、素晴らしい豊かな暮らしがここにある。

大野 瞳 BLOG やくしまに暮らして  
<http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>

# お寺の社会性

式

## — 生臭坊主のつぶやき —

竹中尚文

### はじめに

年が明けて、1月15日に藤原さんが亡くなった。第二回用に別の原稿を書いていたのだけれど、今回は藤原さんとの話を書きたいと思ったので差し替えることにした。

### 1. 藤原敏弘さん

藤原敏弘さんは満53歳であった。肺癌だった。職業は葬祭業だった。数年前に私の父親の葬儀を藤原さんにお願いした。30数年前に亡くなつた祖母の葬儀を引き受けてくれたのは藤原敏弘さんのお母さんだった。藤原さんはお母さんから葬儀屋さんを引き継いだのだった。

もう14年も前だろうか、藤原さんは家族経営の葬儀屋さんを元に同業者と共に会社としての葬儀会館を興した。それまでは、一般的の葬儀が自宅からセレモニーホールへ移り変わる頃であった。この変化は葬儀の場所が変わったと言うことだけでなく、葬儀の社会的変化の時代でもあった。自宅でする葬儀は近隣の人たちの協

力が不可欠であった。そこでは葬儀屋さんが必要なところだけプロの技で手を貸してくれるものであった。

この時代の変化の中、あちこちで家族経営の葬儀屋さんが消えて、会社経営の葬祭業者が登場してきた。この中で、藤原さんの仕事は生き残った。そこには、藤原さんのお母さんが「お金がない」と言った人にも、「まかしちき！ちゃんとしてあげるで！」と言う葬儀屋スタイルも生き残った。

藤原敏弘さんのお母さんは肝っ玉かあさん的な葬儀屋さんであった。一方、敏弘さんは研究熱心で、葬儀での所作の意味をよく知っていた。その上で、依頼者の希望を具現化することに工夫する人であった。それは、多くの葬儀会社がどうすれば依頼者が少しでも多く支払ってくれるかを目的として「葬儀を作り出す」のとは一線を画すものであった。根拠もなく、遺族感情におもねるような儀式を作り出すのは、一時的な儀式である。それは遺族が葬儀会社に

支払いの機会を増やすことを意味する。

藤原さんはよく「葬儀屋は人ですよ」と言った。よく、どこの葬儀社がいいとかと耳にするが、そんなものでもないと私も思う。葬儀はサービス業である。葬儀社で提供される物品にそれほど大差はない。お棺や生花や靈柩車などに違いを見いだす人がいるが、わずかな違いである。それより、どんな人が担当してくれるかである。同じ葬儀社でも、同じ料金でもどのような担当者がやって来るか解らない。私が傍目から見ていっても、この人に担当してもらいたくないとか、この人に担当してもらいたいとかはある。担当者名を前面に出さない葬儀社もあるが、それはハンバーガーショップの店員さんがいつも名乗るわけではないのと近い理由があるのかもしれない。

藤原さんが「葬儀屋は人ですよ」と言うのは、「坊主も人ですよ」に通ずる。

## 2. Gさんのお葬式

12月、藤原さんを病院に訪ねた。冬の夕暮れは太陽に力がない。二人で話し込むのに人の少ない場所を探した。私たちが話し始めると、いつしかお葬式の話になる。それも熱を帯びて話し込むようになる。病院でお葬式の話は他の患者に遠慮である。

冬の弱い日差しが消えていく中で、

私たちの話はやはりお葬式だった。

「Gさんのお葬式の時はどうしようかと思った」と藤原さんが言った。

数年前のある日、お昼前にGさんがお寺に訪ねてきた。その朝、お父さんが亡くなったと言う。お父さんは、日頃から「ウチにはお金もないのだから、自分が死んだら火葬場まで運んで焼いてくれ」と言っていたそうだ。けれども、お父さんの顔を見ていたら、そんなことは出来ないと思った。今の自分がいるのはお父さんのおかげだと思うので、ただ焼いてしまうなんでしたくないと言う。一方、両親にお金もないし、自分はシングルマザーでようやく一人息子が高校を卒業したところで、貯金もないけれどお葬式は出来るかという相談に来た。

お金はないけれど送る気持ちがあるお葬式、お金はあるが送る気持ちのないお葬式、お葬式は前者である。

まず、お葬式は場所と時間を決めるところから始まる。場所については、Gさんの自宅にそのスペースはない。お棺を置くと他に一人も入れない。また、Gさんの玄関は生きている人間は出入り出来るが、お棺の出入りはできない。今の日本の家屋でお棺の出入り以前に、ストレッチャーの出入りも出来ない住居がかなりある。

次にウチの寺の本堂を式場として使うことを提案した。自宅から遠すぎるということで、Gさんは乗り気

ではない。近所の人達にも来てもらいたいのだろう。私たちが住んでいる市には、市立の火葬場の建物の中に、小さな式場が一つある。火葬場に電話で問い合わせた。2日先なら空いているということなので、直ぐに予約をするのでと言って電話を切った。この式場は使用料3万円である。市に登録をしている葬儀業者を通じて予約をすることになっているので、藤原さんに電話をして予約を入れてもらった。葬儀も併せて頼んだ。

この式場は市立なので安価である。安価であるが、私はあまりこのことを言わない。私たちが住んでいる市では、公立の葬儀の式場は一ヵ所である。比較的経済的ゆとりのない人にこの場所をとっておきたいので、言わないでのある。

葬儀の場所と時間は決まった。後は詳細を決めるのである。Gさんと一緒に藤原さんの葬儀会社に行った。藤原さんは、お棺とドライアイスだけは必要であると言った。葬儀場までの寝台車も必要であるはずだが、藤原さんは言わない。きっと自分の会社の車を自分で運転してくれるつもりだろう。でも、翌日に葬儀会社の寝台車が空いている保証はないが、予約をしてキープすると料金がかかるてしまうので、言わないのだろう。他と重なって困ったら、手はある。プロはいろんな手を知っている。藤原さんはプロである。

葬儀の概要は決まったが、現実にはまだ何も手が着いていない。夕方に、藤原さんとGさん宅で会うことになった。藤原さんはGさんに、帰り道にホームセンターで安い浴衣を購入するように言った。会社の白の帷子(かたびら)を準備するよりずっと安価なのだろう。

日の暮れに、Gさんのお宅に行った。人手が少しでも必要だろうから家内も一緒に行った。藤原さんは先に到着していて、熱っぽい顔だった。風邪をひいているのにこの時に気がついた。二階建ての市営団地で、一棟に一、二戸しか住んでいない。他の空室である。市は取り壊すつもりだろうか、新たな入居者も入れていないようだし、充分な管理修繕ができているとは言い難い。その二階の部屋でGさんのお父さんは首を吊った。朝に検視があって、そのままだった。私は藤原さんに手伝ってもらって、その部屋で湯灌をするつもりだった。藤原さんは会社からドライアイスを届けるだけの仕事で、湯灌は料金に入っていない。

余談になるが江戸時代、湯灌は坊さんの仕事であったようだ。湯灌については研究も少なくて、私の見解で述べる。亡くなると「おかみ剃り」あるいは「おこ剃り」と言って、仏門に入ると言う意味で剃髪式をするのである。現代はカミソリを額にそっと触れるだけの剃髪のまねごとをする。私の使っているカミソリには

刃がない。江戸時代は実際に剃髪をすることもあったかもしれない。頭髪を幾分かでも剃ると、頭を洗ったりぬぐったりしたのだろう。それが、湯灌に発展したのではないかと思われる。また、江戸時代には僧侶が湯灌に立ち会わねばならなかつた。それは死亡を確認して宗門人別改帖に記載しなければならないからである。宗門人別改帖は現在の戸籍である。だから、戸籍制度というのは世界共通の制度ではなく、日本の制度なのである。

話を戻そう。藤原さんがGさん宅から出てきて、「無理、無理」と言った。Gさんのお父さんの部屋は一人が横になるスペースしかない。この部屋では湯灌どころか何もできない。とにかくお父さんの遺体をどこかに移さないと何もできない。Gさん宅にはそのスペースはない。団地の隅に集会場のような部屋があったように思ったので、Gさんにこの団地の地区長さんにこの集会室の使用を頼みに行ってくれるように頼んだ。地区長さんはGさんのお父さんだった。Gさんは直ぐに集会室の鍵を持ってくれた。

お父さんの遺体を毛布でくるめて、二階の窓から運び出すことにした。二階の部屋には一人分のスペースしかないので、藤原さんが入ると言つた。私と家内が窓の外で受け取ることにしたが、誰が見ても私たち二人では力不足である。いつの間にか、

近所の人たちが集まっていた。30代の男性が外から二階の窓によじ登つて、半身を部屋に入れるようにした。ちょうど窓の下辺部に馬乗りになるようになった。2、3人の二十歳まえの男性が塀の上に立ったり木に登ったりして窓の外の手伝いの位置についた。

毛布に包まれたお父さんの遺体は、藤原さんに抱きかかえられてゆっくりと窓から出てきた。かなり死後硬直がでているようであつすぐで、しなることがない。30代の男性の手助けもあって、お父さんの遺体は水平に窓から出て、少しづつ下向きに角度を変えた。誰かが「あかん！」と声をあげた。お父さんの遺体が毛布から滑り落ちそうになった。30代の男性がロープを持ってきて、毛布の端を縛った。ちょうど飴玉の包装のように端を絞って、中央部を緩く締めた。そうすることで、周りの人たちが手で握り易くなった。そして、お父さんの遺体は下にいる私たちの所についた。毛布にくるんだまま、集会室までお父さんを運んだ。

集会室でお父さんを包んでいた毛布をといて、そこに先に敷かれてあつた布団に遺体を移した。いつの間にか、手伝ってくれた人たちはいなくなつた。藤原さんと私だけになつた。私はGさんのお父さんの額に剃刀をあてて「おかみそり」の儀式をした。二人で湯灌をして、浴衣に着替えさせようとした。お父さんの身

体は死後硬直のために動かない。いつもなら、藤原さんはいとも簡単に関節を動かして思いの姿勢を作ってしまう。死後硬直が弛む時があるらしい。このときは、その弛む時を待つていられない。藤原さんは風邪で熱っぽい身体で、額に汗をながらしながら、関節を動かそうとしていた。

藤原さんが「よく昔、骨をボキボキ折って納棺をしたという話を聞きますが、あれは嘘だと思いますよ」と言っていたことがある。人間の力で、人の骨をボキボキ折るなんて、かなり難しい作業になる。

このときは藤原さんと私の二人で、渾身の力でもってお父さんが胸で手を組んで、静かに横たわっている姿を作った。やはり骨は折れなかった。お父さんは布団の中で横たわっていた。枕元に、坊守（住職の妻のこと）がろうそくを灯して香を焚いた。そうしてGさんたちを集会室に招き入れた。いわゆる枕経、『仏説阿弥陀経』の読経がようやく始まった。結局、ドライアイスを届けに来た藤原さんは料金に入っていない仕事を汗だくになってやり終えた。

翌日、市営の式場に遺体を運んで通夜をして、葬儀に事が運んだ。

### 3. あとがき

話は、再び12月の病院での藤原さんに戻る。藤原さんは「あの時は、やっぱり近所の人たちやGさんの息子の友達が助けてくれたからできた

お葬式だ」と言った。人のつながりによってお葬式をしてきた人の言葉である。お葬式は人のつながりによって成り立っていた。仏教的には、死を超越したつながりがそこにある。

この文章を書いている数日前のことである。ある人が亡くなった。遺族はお金がないと言うので、市役所に相談に行った。役所は15万円してくれる葬儀社を紹介すると言う返事だった。結局、藤原さんの興した会社にお願いして78,000円程を分割払いしてくれることになった。藤原さんの仕事はこの会社で受け継がれている。

アメリカの番組で訃報を伝えるときに、「stay with us」と言うことが多い。これを「ご冥福をお祈りします」と訳されることも多い。「冥福を祈る」という言葉に無責任を感じる。それは、自分は冥土に往く気もないのに他人は冥土に往くのか、と思ってしまう。

藤原さんの葬儀に駆けつけた沢山の人が「お世話になりました。ありがとうございました」という気持ちであつただろう。その中にはGさんもいた。感謝の気持ちに「藤原さん、また会いましょう。それまでは頑張るからね」という言葉を添えたい。

最後に、藤原さんがよく言っていた言葉を記しておく。「ぼくらは、人のお世話をさせてもらってるんや」

## こころ日記

# 「ぼちぼち」 自殺？

脇野 千恵

### はじめに

中学校の教員をしています。思春期の子どもたちを相手に、翻弄される毎日を送っています。教師はキツイ仕事だと言われますが、私はあまりそのように感じたことはありません。日々心身ともに成長していく子どもの姿を見ることが、何よりの楽しみでもあります。子どもたちといふと、色々な発見をします。特に思春期の子どもたちは、本当におもしろい。飽きることはできません。

そんなどこにでもある中学校の日々の暮らしを伝えていけたらと思っていました。どうぞ、よろしくお願ひします。

### 自殺？

子どもの変化を捉えるには、色々な目を持っていなければなりません。

私の学校では毎日、「ライフ」という担任との日記のやりとりをしています。30人以上いる学級の子どもたち一人ひとりとの会話はなかなかできません。この「ライフ」は、子どもと担任との大切なコミュニケーションの場となっています。

担任は、毎日の空き時間は専らその返事を書くことに当てています。子どものつぶやきは様々ですが、そこで思わぬ問題に気がつくことがあります。

1学期の6月のこと。1年生は、性教育で「生命誕生」の学習をしました。その

学習後の感想で、こんなことを書いた子がいました。

「わたしの母は、不倫をしています。夜遅くに帰ってきたりしています。私はそんなことをしている母をどうしても、許すことができません。どうしたらいいでしょうか？」

無記名での感想文なので、誰かもわからず、担任は字体から色々な生徒の顔を思い浮かべました。すぐに教育相談担当である私にうち明けてくれた担任は、

「本当にお母さんが不倫しているとしたら、とてもひどい話ですねえ。何とかしたいけれど、誰かわからないし…。でも、母親が不倫ってするんですか？」

「思い当たる子はいないの？」

「おそらくあの子だと思うけれど…」

思い当たるA子は、学級委員を務め、生徒会活動にも積極的に参加し、日頃の学校生活の中では欠点が見えない程、よくできた生徒です。担任は、そのことを気にしながらも、多忙な仕事の中でいつの間にか忘れてしていました。

やがて秋も深まったある日、いつものようにライフを見ていた担任が、何気なく、たまたまA子のライフの後ろページをめくった時、あるページ一杯に書かれた文章を発見しました。そこには、

「母親の不倫のことで、父と母のけんかがひどくなっていました。最近では離婚の話が出たりしていて。私はどうしたらいいのか、毎日死ぬことばかり考えています。私なんかもう死んでし

まえばいい。いなくなればいい。死にたい。死にたい」

といったものでした。

ちょうどその頃、新聞で小学生の自殺の記事が紙面を賑わしていました。例のごとく校長の“いじめなど無かったと認識しています。本人はとてもいい子でした”といった記事に、またか！とつぶやく私でしたが。

そのA子の「ライフ」の日記は、夏休み明けの日付でした。担任は、長い間そのことに気がついてやれなかつたと、自分を責めていました。

「やっぱりあの子でした。全然気がつかなかつた…。先生、どうしよう？」

「まっ、今、生きてるんやから大丈夫ちやう。」

このことは、私と担任だけの問題にとどめておくわけにはいきません。中学校は、何でも生徒指導担当に報告するというシステムになっています。業界用語の“ホウレンソウ”。報告・連絡・相談を徹底することで、学校の荒れを防ぐ基本になっています。

当然この「死にたい」というA子のことは、生徒指導部会でも報告され、色々議論されました。校長は子どもの自殺があっては大変と躍起になっていましたので、親にその事をいち早く伝えろと結論づけました。もしも子どもが…そんなことがあれば学校として大変な事態になる！学校の責任は？記者会見での謝罪の言葉をどうするかといったことを思い浮かべたに違いありません。

担任から相談された私は、とにかく生徒との教育相談時に、A子の口からその話題が出るように、じっくり話をしてみては？というアドバイスをしました。

中学校では、担任以外のフリーという何かの時にすぐに動ける補助役としての教員が結構います。私は現在そのフリーの役をしていますが、問題が起きた時の生徒指導や不登校対応、家庭訪問、親対応など複数で動くことが多いので、ベテラン教員が配置されています。

自殺を未然に防ぐことに全力を尽くせという管理職命令に、担任もフリーも頭を悩ませていました。

A子と担任との面談の日、職員室でその結果をきくべく待っていると、

「先生、泣きながらうち明けてくれました。でも辛くって…。やっぱり死にたいっていうのは、どうもお母さんの不倫が原因らしいんです。」

「じゃあ、その事をどうやって親に伝える？」

これはとってもデリケートな問題です。子どもが言う母親の不倫は本当なのでしょうか？

学年の教師達は、「母親の不倫」ということに大いに驚き騒ぎ、母親のふしだらさを強調して非難しました。また、校長は、「何とかやめられんのか、その不倫！」と息巻きます。しかし、婚姻関係にある者が、婚姻関係以外の人と恋愛するなど珍しいことではありません。

では、子どもが死にたいと訴えていることに、どう向き合うのか？

性教育で学習した「命を大切にしよう」という言葉は、何の助けにもならないなあと思いました。

A子は面談の中で、「死にたい」という思いを親に伝えることに初めは躊躇していましたが、担任の説得で伝えてもいいということを承諾しました。

さて、そのことをどのように親に連絡するのか？

「実はお母さんの不倫が原因で、死にたいゆうてるんです、って伝えるですか？」

「その伝え方は、まずいなあ」と学年主任。

とりあえず、担任が最近のA子の様子が気になるといった要件で電話をし、学校に来てもらってはということになりました。母親は、察したのかすぐに何も聞かずに学校に来てくれました。

母親と担任と私の面談。私は密かに、うまくいけばA子を入れての面談を試みよう計画していました。

「私達の離婚のことでしょうか？」と母親は口を開きました。

A子の父親と母親は、家庭内別居状態が続いていました。父親のギャンブルと借金に苦しめられ、何度も夫に離婚を訴えましたが応じてもらえず、今は子どもたちのために我慢するしかないとのことでした。子どもが死にたいと訴えていることも冷静に聞いてくれました。涙ながらに話す母親に、

「ところで、お母さんには好きな人がいるんですか？」とはなかなか聞けません。

「大変ですね。今、お母さんの悩みを相談する人はいるんですか？」と質問してみると、母親はいますと答えました。(やっぱり不倫だったんだ！)

一通りの母親の話のあと、A子を同席させました。母親を目の前にしてなかなか言葉が出ないA子に、

「お母さんに言いたいことはない？」と促しました。しばらくの沈黙のあと、A子は、

「お母さんとお父さんが、同じ家にいるのに話もしないし…子どもの私は一体どないしたらいいの！」

と言うのが精一杯で、そのあとは大泣きました。

その後母親は、実は父親とうまくいかない悩みを聞いてくれる人がいることをA子に打ち明けました。まだ父親とは離婚できないが、その人は苦しいお母さんを支えてくれる人なのだとも説明しました。

「あんたがよう頑張ってこと、お母さん知ってるで。生徒会もやってるし…。これから、お父さんと色々話していくけど、あんたのことは大事やと思ってるよ。死なんといてや…。」

そんな母親の言葉に、A子は泣きながら頷くばかりでした。

そのやりとりを見ていた担任は、ぼろぼろと涙を流し始めました。その担任が泣いている姿を見て、今度は私も泣いてしまったのでした。

親子が向き合えたこと。担任とA子親子が、不倫という事柄を理解し合えたこと。まさに家族の変容の瞬間でした。

このあと、親子は肩を並べて帰っていました。

次の日、A子は担任に、その日の夜に母親と一緒にお風呂に入ったことを報告しました。今A子は、何事もなかったように部活に生徒会にイキイキとした生活を送っています。

この親子面談は一回で終了しました。「親の不倫」と「子ども自殺」という言葉に湧いた職員室でしたが、その言葉に惑わされずに、子どもを理解しようと努力した担任。今後もA子からの信頼は揺るがないでしょう。

A子は、自分の家族に何が起こっているのかをちゃんと知りたかったのだと思います。もやもやとした気持ちを、死にたいと訴えることで誰かに気づいてほしかったのでしょう。時間はたっていたけれど、そのことに気づけた大人がいたことは、本当によかったです。

人はそう簡単には死なないというけれども、「死」を身近に感じられない子どもは、うっかりとそれを選んでしまうかも知れません。思春期の子どもたちは、よく死にたいと口に出して言います。本当のところはどうなのかといった判断を何で決めるのか、難しいなと思っています。

(中学校教員 脇野千恵)

# これからの男性援助を考える

## 第1回

### 男性の、男性による、男性のための対人援助試論

坊 隆史 松本 健輔

本連載はタイトルのとおり男性のための対人援助の可能性を模索していく。筆者らは行政の男性相談、男性向けDV相談、虐待加害男性のグループワーク、圧倒的に男性が多い製造業企業のメンタルヘルス、男性の結婚相談など“男たちへの対人援助”に取り組んでいる。この連載では2名の筆者がリレー連載という形式で、それぞれの援助実践および援助の背景に潜む社会構造的な問題点を指摘し、成人男性に対する対人援助モデルの構築につながる提案をしていきたい。

今回は初回ということで無理をお願いして二回同時掲載にして頂いた。本連載の方向性を位置づける回としての二話構成である。二回を通して読むと一見似て非なるものを扱っているように思われるかもしれない。しかし連載を通じて双方より共通した到着点へと接近していく予定である。これから男性援助を考えるにあたり、筆者らは「男性の」、「男性による」、「男性のための」援助が基本姿勢のひとつだと考えている。まだまだ試行錯誤の中での援助実践ではあるが、今回はその基本姿勢を紹介していきたい。

#### 1、「男性の」援助という視点

「『おちんちんが小さい』と言われるのだけれども、本当に小さいのでしょうか？」

これは筆者が行政機関の男性相談で頻繁に受ける相談である。このような相談があった時、読者

諸氏はどのように対応されるだろうか？ ダイレクトな性に関する話題をご遠慮願う方もいれば、ペニスが小さいということを主訴として傾聴や情報提供というアプローチをされる方もいるかもしれない。

一見、冷やかしの相談にも感じられるこの問には男性のための対人援助のエッセンスが凝縮されている。男性たちの相談を受けていると、「負けた」「取られた」「敵わない」「勝りたい」など他者と比較した自分に関する内容の相談が多い。そもそも男性は幼少期から遊びや教育を通して強い、大きい、逞しいことを「男らしい」とする価値観で育てられる。その価値観は成長するにつれ受験や就職活動、出世競争のように形を変えたパワーゲームとして延々と続いている。まさに終わりなき競争で、弱音を吐いたり泣くものなら「男らしくない」と男性失格の烙印を押されてしまう。実際にそのような指摘がなくても、自分で男性失格という錯覚に陥ってしまう。こうした強迫的なパワーゲームに疑問を感じたとしても、その気持ちを語ることすら「男らしくない」行為であり、その葛藤はこころの奥に抑圧してしまわざるを得なくなる。

隠語で“ムスコ”と表現するように、ペニスは男性にとって自分の分身ともいえるほど重要な部位である。ペニスについて自力で情報収集することは可能であるのに関わらず、相談をしてくる。それはなぜか。これは男性が自分自身を語るために前振りと理解するとよい。男性は自分の悩みを語り始める前に準備として「あの…つまらない話です

が…」とか「どんな人が相談にのってくれるんですか？」など本題に入る前の滑走路として前振りを用いてくる傾向がみられる（濱田、2008）。ペニスの話題に関して同様で、男性たちは語りの滑走路として自分の傷つきの象徴としてペニスの話題を語りだしていく。そのため筆者は相談場面の冒頭でいきなりペニスについて話題の話題が出た際は、「ペニスが小さい=男としての自分の小ささ（=傷つき）」があるのではないかと勘織って話を聞くようしている。こうした方略をとることで「男らしさ」の鎧を身に纏っている男たちはようやく自らの苦悩を語ることができるようになる。援助者はこうした男性の悩みを語りだすプロセスを理解しておくことが重要である。そうすることで滑走路の話題に巻き込まれることなく、主訴を明確に捉えた援助につなげることができる。

ペニスの話題に限らず男性特有の葛藤表現を理解しておくことは非常に重要である。なぜなら男性問題には暴力、薬物、性的逸脱など反社会的で刺激的な内容も多く、傾聴中心の従来の心理臨床モデルでは支援へのファーストステップを築くことが困難な場合は多い。こうした場合、男性ジェンダーの視点を心がけることで、「暴力はいけない」などシンプルな懲悪観や倫理観で来談男性を評価してしまうリスクが低下し、援助者が来談者の語りを傾聴することができるからである。

例えば典型的な厳しいタテ社会の文化で働いてきた会社員が、自分が教えられてきたことと同じ指導をして部下からパワーハラスマントと訴えられた場合、「それは駄目なことだし、懲戒を受けて当然だ」という否定的な評価ではなく、「なるほど、そういう指導を受けてきて出世してきたために、あなたは良かれと思って指導したわけですね。でもそれでうまくいかなかつたわけだから、どうすればいいか考えていきましょう」というような肯定的かつ未来志向の提案をもちかける聴き方ができるようになる。男性ジェンダーや彼を取り巻くパワー構造を意識することで、男性たちがなぜそのような問題に至ったのという理解につながり、結果的に解決へ展開していく可能性を生み出していく。

さらにもうひとつ「男性の」援助に必要な心構えとして、文化に埋め込まれた男性ジェンダーのコンテキストを読み解くことを付け加えたい。触法問題、各種アディクションなど複雑で狭義の対人援助のアプローチでは介入が困難な男性問題への援助の際には、個々の事情のみならず彼を取り巻く社会的文化的なコンテキストを見立てていくことが重要である。そうすることで多角的、多層的なアセスメントを可能とし、問題に至るコンテキストを見出すことができ、援助に一筋の光が見えてくることもある。こうした理由より「男性の」援助のためには、男性ジェンダーにセンシティブなアプローチは非常に有用である。そのため男性ジェンダーは重要なキーワードとなるが、あまりに広大なキーワードのため詳細は第2回に譲りたい。

## 2、「男性による」援助の意義

このような見出しにすると「女性は男性の対人援助ができないのか」と感じられるかもしれない。筆者は決して女性が男性の援助をすることを否定したり制限しているわけではない。ここでは援助者も男性ジェンダーを有した一個の男性として関わることで、男性クライアントとの関係性を構築していく、しいては男性問題の解決への有効な手段となり得るプロセスについて述べてく。女性が男性問題の援助者となる場合は、また別の視点に依拠した援助モデルを構築していく作業が必要だろうが、それについてはまた別の機会の課題としたい。

男性のための援助において「男性による」援助そのものが治療的な効果をもたらすことがある。それは援助者も“自分は男性である”という当事者性が関係している。当事者性の視点を意識した上で支援に関わることは援助者にとって援助の幅が広がるだけではない。男性クライエントの内的問題に参与しやすくなり、受け身的な「援助者—利用者モデル」ではなく双方が能動的に一つの問題に協力して解決を目指す「治療共同体モデル」が成立した援助として展開できる。暴力加害、ハラスマント、職場のメンタルヘルスなど男性に多くみられ

る問題の場合、クライエントが能動的に解決へ向かおうとする動機づけが重要で、それが援助の予後を左右することになる。

そのため、筆者らは援助場面において、問題や逸脱行動に焦点をあてるリスクアプローチでなく、ストレングスの形成に向かう手法(中村、2011)を採用している。こうした手法を用いるためにも“男である”ことが治療共同体を形成するひとつのきっかけとなる。例えば、性的逸脱行動がみられる男性より独特の性嗜好のファンタジーが語られる時、真摯に傾聴に努めれば援助者が疲弊してしまう。しかし援助者も一人の男性としてユーモアあふれる猥談として耳を傾けることで、援助者の負担がいくぶん低減するだけでなく、ファンタジーを共有できた“仲間”として一体感が生じる。心理臨床的に表現すればクライエントとのジョイニングの成立である。男性援助者自身も自分が“自分は男性である”ということを認識したアプローチは、「男らしさ」の鎧に縛られている男性たちの鎧を脱いだ本当の気持ちに接することができる。言い換えれば、男同士の気持ちの面での裸のつきあいができる関係が構築できる。「男性による」支援が男性の援助に活かせる価値はこの点にあるといえよう。

### 3、「男性のための」援助フィールド

日常生活において「男性のための〇〇」という社会資源は意外と少ない。例えば女子大はあっても男子大はない。婦人科はあっても歯科はない。これには人間科学の歴史を紐解いていけば、種々の学問は「男性イコール人間」ということで展開してきた(Willing, 2001)ため、そのマイナリティとしての女性のための大学や診療科が設置されてきた事情がある。

ところが現代の日本ではこうした歴史的経緯の逆転現象がみられている。例えば通称プリクラを代表とするプリントシール機で写真を撮るために、女性グループか女性同伴でないと専用機を設置しているゲームセンターに入場すらできない場所が増えている。仲の良い男たちだけで写真を

撮ることもままならない現状がある。他にも安全配慮や経営的戦略の意味合いが強いとはいえ、女性専用車両や映画館の女性 1,000 円デーなどはごく当然のものとして定着しつつあることはご存じのとおりで、男性というだけで行動が制限される状況になっている。

対人援助諸領域はどうであろうか。顕著なのは男女共同参画センターや女性自立支援施設等の行政および福祉機関である。元々前者は女性センターと呼ばれ、社会的に弱い立場であった女性への援助を目的とした公的機関であった。名称が変わった今でもその名残ゆえか女性相談は数多く開設されているのに対し、男性相談がある男女共同参画センターは都道府県市町村あわせて 33 施設(山口、2010)であった。相談開設日も月1回3時間(奈良県)や週1回各2時間(大阪市)である。唯一例外的なのがしば県民共生センターと千葉県柏市による電話相談の週2回各4時間であるが、それでも女性相談と比べずいぶん少ない回数・時間といえる。

「男性のための」援助を行うのに必要な器がない。こうした男性への社会資源の少なさは、現在の急速的な社会変容に既存の行政制度や援助システムが追いついていないことも一因であろう。その一方で男性問題は止まることなく発生し、援助を望んでいる男性たちは今ここに存在し続けている。暴力をふるう妻に日々脅かされ、避難しようにも男性のための避難先が存在せず、日々身のすぐむ思いで生活している男性もいるのである。「男性のための」援助フィールドを設けることは、男性のための対人援助の課題のひとつである。

男性たち問題に対して社会資源や制度上の支援が不備となっている状態は、ようやく支援につながろうと動機づけられた男性たちにとって改善のきっかけが閉ざされてしまう。ところが男性への対人援助に励んでいる筆者らからすると、法制度や社会制度と実際の生活場面は時間軸に沿ってますます乖離しているように感じている。配偶者暴力相談支援センターの男性からのDV相談は年々増加の一途(平成 14 年度は 146 件、平成 21

年度は706件)であるが、男性被害者を想定したシェルターが開設される動きがみられないことは一例である。DV、虐待をはじめとする関係性の病理は、女性や子どもなど一方の援助のみでは建設的な解決にはつながらない。男性のための援助観や技法といったソフトウェアだけでなく、援助を可能とする社会資源や人材といったハードウェアも必要である。こうした現状において、筆者らはボランティアで男性のための電話相談(『男』悩みのホットライン、2006)を開設し、「男性のための」援助フィールドとして自分たちの力の及ぶ範囲内ではあるけれども、男性たちの語り場を提供し、全国の男性たちに利用してもらっている。

今回は男性の対人援助への基本姿勢を述べてきた。次回は松本がこの連載のもう一つのテーマである「男性ジェンダーと現代社会」について論じ、男性への対人援助論をさらに広く深い部分へと誘ってくれる(はずである)。第3回以降は男性を取り巻く諸問題の各論へと続いていく予定である。なお筆者間の打ち合わせでこの連載は対人援助学マガジンの中では硬派なツッパリ路線を目指すことで合意した。そのため読者諸氏にとって読みにくいことも予想されるがどうかご容赦頂きたい。

さて序盤の「おちんちんが小さい」という相談。実際の援助場面での対応は次々回以降に「男性セクシュアリティ」をテーマとする回を設けて紹介しようと思う。しばしお待ちあれ。

(文責:坊 隆史)

#### 文献

濱田智崇 2008 男性がここに抱えるものをどう扱うか 上村ぐにこ(編)暴力の発生と連鎖 人文書院 p. 26-56

中村正 2011 相互作用と暴力—微視的社会学の視点一(印刷中)

内閣府 配偶者暴力相談支援センターにおける配偶者からの暴力が関係する相談件数等について 内閣府男女共同参画局ホームページ

<http://www.gender.go.jp/dv/soudan.html>

『男』悩みのホットライン(編著) 2006 男の電話

#### 相談 かもがわ出版

Willing,C 2001 Introducing Qualitative Research in Psychology : Advances in Theory and

method 上淵寿、大家まなみ、小松考至(訳)

2003 心理学のための質的研究法入門—創造的な探求にむけて 培風館

山口裕司 2010 全国自治体の男性相談調査  
非公表

# これからの男性援助を考える

## 第2回

### カップル・夫婦の援助者として男性援助を考える

坊 隆史 松本 健輔

執筆は男親塾という虐待加害男性のグループワークのスタッフである坊、松本でこれからの男性援助について考えて二人でリレーで執筆していくというところからスタートした。しかし、打ち合わせの中で、お互いの臨床現場の違いから大きなゴールである男性援助という視点こそ一緒であるが、そこへのアプローチや見方が大きく異なることが浮き彫りになった。そこで、それを無理に合わせてお互いの特徴を削るのではなく、お互いに好きなように書き、最終的に一つのゴールに向かえたらしいのではないかという結論に達した。したがって、我々二人の中でお互いに男性援助を意識しつつ、共通のテーマで書くということで同意した。個人的にはこれら二つの視点が相互作用し、何か新しいものができればと願っている。

#### 1. カップル・夫婦の臨床で感じること

私はカップル・夫婦専門のカウンセリングという看板を掲げている。毎日、問題を抱えるカップルのカウンセリングを行っているのだ。その臨床の場でいつも一つの疑問が頭をよぎる。『ジェンダーフリーという思想は、カップル・夫婦の問題をどう変化させたのだろう』と。

カウンセリング現場で出会う男性の多くは家事育児に参加している(妻側の満足に達しているかは別として)。また、共働き夫婦の場合、妻が夫に対して仕事の理解がないことを主訴として来所される方は稀である。このことは、家事労働=女性

の仕事というジェンダーから最近の夫婦が解放されている一つの証ともとれる。(もちろん、まだ不満とさえ言えないジェンダー意識に縛られている可能性も高いが)

他方で、多くの調査が妻の夫への満足度の低さを示している。カウンセリング場面で家事も育児も協力的な男性が、妻に離婚を申し込まれる場面をたびたび見かける。当然夫は困惑する。「自分は父親世代と違い必死で家庭を大切にしてきたのに」という自負があるからだ。一方、妻に暴力を振るいながらも、決して離婚を申し込まれない夫も多数存在する。そこにはジェンダーフリーという言葉では捉えきれない女性の不満、そしてニーズが隠れている。この女性のニーズを健康的に満たすことが今男性に求められているように感じる。

#### 2. 議論を進める前の整理

女性、男性という性別に焦点を当てるというこの手の議論では、明確に整理しておかなければならないことがいくつかある。まず、どの立場で物事を語るかという点である。社会をより良くするという視点に立つなら明確な方向性を語る必要がある。たとえば、女性が抑圧され働くという選択肢が持てないと嘆く者は男女平等を掲げる。彼らにとって大切なのは女性が働く環境を整え、働くという選択肢を多くの人に啓蒙することだ。一方カウンセラーなど援助者は、目の前のクライエントの問題解決を行う。つまり、家庭で家事をするという従来の

生き方をなんとかして貫きたいという人に、家事は平等にするのが正しいという現代の考え方を押し付けたりはしない。(もちろん、カウンセリングの中で彼女自身が自身の持つジェンダー意識が問題だと感じた場合は別である。そして実際は、カウンセリングではそういう気づきが起こる場合が多いのだが。)そして、本稿では私は援助者の立場として、さらに厳密に言うと、カップル・夫婦が抱える問題の解決を援助する立場をとり議論を進める。

ここで一旦、言葉の整理もしたい。まず『ジェンダー』という言葉であるが社会的・文化的・心理的な性のありようを指す。つまり生物学的性別であるセックスと対置される言葉である。そして『ジェンダーフリー』はジェンダーの束縛から自由になることを意味する。つまり、性差を無くすという意味のジェンダーレスとは異なる。つまり、何かを強いたり、方向性を示す概念ではない。

### 3. 今までの男性援助の問題点

男性の援助を考える上で男性学、女性学、ジェンダー教育、フェミニズムといったことに本来は丁寧に触れる必要がある。しかし、それらはそれが一枚岩ではなく複雑であるので、ここで整理することは一旦避ける。そこで、男性援助の流れを理解するために、単純化を図り、男性中心社会へのアンチテーゼとして一部の女性が男女平等への戦いを始めた事から考えることにする。その流れは、社会制度、研究領域、対人援助など幅広い分野に派生した。ここで大切なのは女性からの異議申し立てによってジェンダーないし、ジェンダーフリーという言葉が生まれて来た経緯だ。その中で、暴力を振るう夫など女性を虐げる男性が批判され、支配一被支配の男女の関係の変更が求められて來た。対人援助の領域もそれに応える形で女性を守るために、男性の問題をアセスメントするというリスクアプローチが取られてきた。「こことここが暴力が継続するリスクなのでもう妻や子どもには会わせられない」といった感じだ。女性を守るという視点のみであれば、男性の問題を明らか

にし、批判することだけでよかつた。しかし、男性援助を考えるとそこで終わるわけにはいかない。何もしなければ、問題を明らかにされ批判された男性の問題は永遠に解決されないので。そして男性援助はその男性の問題解決を援助するという立場をとる。

他方で、女性側からの異議申し立てに対して、過剰に男性が自身の男性性を批判したという弊害もある。つまり、男性自らの「男らしさ」そのものへの批判である。暴力が悪いことと「男らしさ」が悪いことが混同されているのだ。男性側から、男性解放運動のため1991年にメンズリブ研究会が立ち上げられた。そのメンズリブ研究会のホームページを見ると、その中に以下のような一説がある。

『従来の「男らしさ」を批判的に検討し、「自分らしく」生きることを目的とする、日本はじめての男性解放運動を続けてきました。』

彼らの主張は「男らしさ」の完全な批判ではないのかもしれない。「男らしさ」というジェンダーから自由になるという点で社会的意義のあるメッセージである。しかし、『批判的』という表現からも、「男らしさ」を肯定していないところは見て取れる。そういった考え方は、カップルや夫婦の援助という点では弱さがある。夫婦・カップル、そして家族という中では、他の成員から求められることを満たすことも大なり小なり必要になる。自分がジェンダーから自由になったからといって、妻や恋人が楽になるとは限らない。妻や恋人には、彼女達の持つジェンダーがある。それは、夫や彼氏に対しての期待にもなる。その期待に応えられない限り、カップルの持つ問題は依然として問題のままだ。(もちろんそれは女性自身の問題と突き放すこともできるのかもしれない。ただ、突き放したとしてもなにも解決されるわけではない。)現在の男性援助に欠けているのは、といった異性の視点ではないだろうか。カップル関係、夫婦関係を円滑にするという視点では、今までのジェンダーフリーという新しい社会的正義ではなく、相手が何を求めているのかを知るということが何よりも求められているように思

う。ジェンダーフリーという正義は、人を自由にする考え方であるが、人の方向性を示す考え方ではない。(むしろ相反する一面もある)。そして、ここで熟考しなければならないことは、相手のニーズ、不満を知るということは、女性の言葉や態度に表面的に現れるものだけではないということだ。

#### 4. これからの男性援助

男はこうあるべきというモデルが崩れた現代、男性は生き方の方向性を見失った。「男らしさ」の鎧が脱げて楽になった人がいれば、じゃあいつたい何を着たらいいのだと途方に暮れる人もいる。また、社会の要請に敏感に反応し「男らしさ」の鎧を脱いだら女性から「男らしくない」と否定された人もいる。夫婦や家族は共同体である。個人の自己実現というナルシスティックな行動が他の成員の利益に繋がるかというとそうではない。お互いに「こうあって欲しい」「こうあって欲しくない」という要求は意識的にも、そして無意識的にも存在する。今、カップル・夫婦の臨床の場面で、そのシンプルな相手の要求をいかに満たして行くか、そしてその前に相手が何を要求して行くのかを探ることが何よりも必要だと考えている。そして、表面的な統計データではなく、本質的に何を相手の不満、そしてニーズとするのかをより深く考えて行く必要がある。

そのヒントは時代と共に変化する夫婦の姿に隠れている気がする。従来、経済力を持つ男性と、家事能力を持つ女性の共同生活という意味合いが強かったが、今は女性の社会進出、家電による家事労働の時間の短縮によって道具的意味合いが減少したと柏原恵子は著書の『家族の心は今』で指摘している。つまり、結婚の意義が薄れているので。その中で同性の友達ではなく、異性の配偶者と一緒にいるということの新しい意味が必要とされている。

異性と共に生きるという意味において、自分の性や相手の性を認識することが求められる。そしてそれは性愛という単純なものに還元されるわけ

ではない。「なぜ夫婦なのか」、それに答える援助こそ今カップル・夫婦関係に問題を抱える男性に対して求められている援助であると思う。

次回から各論として男性が抱える『問題』を挙げ、女性の不満、ニーズから男性援助の可能性を考えて行きたいと思う。

#### おわりに(言い訳)

久々に文章らしい文章を書きました。私が言いたかったことは、ジェンダーレスとは違う、ジェンダーフリーという考え方の大切さと、援助の領域において、それだけでは解決できない現実があるということです。それにしても、今回とてもデリケートなテーマを選んでしまったものです。過度に書いてしまうと、自由であることを否定してしまう。しかし、疑問を投げかけないと、自由であることを手放しに喜び、問題解決を望む人や不満を口にする人を無視することになる。また、社会を変える人、個人の問題解決を援助する人の境界も実はとても曖昧です。それを過度に明確にすることにとても勇気がいました。

私はまだ援助者としてスタートを切ったばかりの未熟者です。これが正しいなんて確信が持てるものなどありません。是非この連載を通してみなさまからのフィードバックを頂きその相互作用のなかで成長できればと思っています。ご批判、感想なんでも結構ですのでご連絡頂けると幸いです。

(tokensuke@hotmail.com)

(文責:松本健輔)

# あいかわらず 長い編集後記

## 第4号

### 編集長(ダン シロウ)

■一年経った。初めの目標通り、季刊で4冊刊行できたのは、先ず連載執筆者諸氏の協力の賜である。有り難うございます。そして編集は私と千葉晃央君で分担、最終的にホームページにPDFでアップしてくれるのは、事務局長の川原さんだ。こういった作業は、それぞれの段階の見えないところで、思いがけない手間がかかっていたりする。誰かが上手くやってくれているのだろう…なんて、普段思っていることが、少しトラブルを抱えると、その対応に尽力してくれている人の有り難みがよくわかる。

きちんと役割を果たしてくれる諸氏を確保できていることが、定期刊行できた要因だ。

■3月5日・家族心理学会主催WSを東京で行った。私と早稲田さんの二人で6時間のプログラムを実施したのだが、その事前参考資料にマガジン連載の「家族造形法の深度」を案内しておいた。当日、何人の方がプリントアウトしたものを持ってきておられた。

こういう使い方がマガジンの利用法として、薦めていきたいもののひとつだ。

■新連載の脇野千恵さんは、中学校の現役教師。編集長は長いつきあいのある人で、お嬢さんの雅子さん（県立高校教員）も家族療法

研修で関わりがある二世代の繋がりだ。性教育に頑張ってきた脇野さんに相談されて、「ちんちんがやってきた」（学苑社）という一男の子のお母さんになったとき読む本一のプロデュースをした事もある。

松本君、坊君は大学院の卒業生で、開業と大企業内と、それぞれこの領域で、活動の場を得て活躍中だ。しかしそれだけでは十分とは言えない！というやや厳しい注文で、彼らに男性援助問題のテーマが課せられた。

自殺、犯罪、DV、ひきこもり等、男性に偏りがちな現象のメカニズムは、個人の問題に還元して終了というモノではないだろう。ニコイチでの連載という初の試みで、1、2回同時掲載になった。領域だけではなく、多世代から幅広く、対人援助学の今がマガジンに反映されるといい。

次号No.5からの新規連載も既に予定されていて、ますます様々な分野からの、レポートがお届けできると思う。どうぞ、お知り合いにも教えてあげてください。今編集長はツイッターとfacebookで、このマガジンのPR活動展開中です。フリー（無料）でこの中味は、あまり空腹でもない時に、おごってもらったり大盛りの天丼ぐらいの、ありがた迷惑さ十分だと思います。

■ご覧いただいたように、第3号で失敗した執筆者プロフィール欄が変身で、装いも新たなフロント・ページとしてデビューしました。長すぎると思う方もあるかもしれません、あそこしか読まないという読者も想定していることです。

なお、気がつかないと思いますが、執筆者@短信（到着順）とわざわざ明記していますのは、「ついた一」順という使い古しの英和駄洒落です。（「誰も気づきません」と千葉君に言われたので、書くことにしました）さすがオヤジでしょ。

■さて対人援助学会：定例会 次回は5月

## **20日（金）、19:00から21:00。京都駅前キャンパスプラザ6F 立命館大学教室で。**

演題・演者は未定ですので、学会hpをご覧下さい。そして是非ご参加ください。オープン参加、参加費無料の企画です。

■記事に対するご意見、ご感想もですが、執筆者への様々なリクエストもお寄せください。

### **マガジンに対するご意見ご感想**

[danufufu@osk.3web.ne.jp](mailto:danufufu@osk.3web.ne.jp)

学会時にも販売しましたが**印刷版対人援助学マガジン**（1号、2号、各1000円、第3号1300円）が少数ですが編集部にあります。ご希望の方はメールでお知らせください。メール便で発送します。

### **マガジン編集部**

**604-0933 京都市中京区山本町438**

**ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N**

### **編集員(チバ アキオ)**

■「自分自身が、『これがいいっ！』って思つたら、それでいいんですよ。」淡路島にある「アート山 大石可久也美術館」に行った時、大石可久也氏はそう話していた。ご自身の制作活動ももちろんされながら、その一方で自分が『これがいいっ！』って思った物も館内に置いてあった。なかには「釣りのウキ」なんかもあった。その曲線、流線形が素晴らしいということであった。

■アーティストは、自分の感性、判断だけに基づいて活動をしていく。それは自分を信じることができるかだ。援助職はどうだろう。援助職は、それだけではない側面が多くある。相手をとらえる時に自分の感性、判断は外す作業が行われる。ソーシャルワークの原則でいうと「非審判的態度」だ。私の印象として、援助職という進路選択をした人の傾向として、「対象者との関係性からの自己証明」、「援助

というよいことをしているという道徳的評価」など、他者や外部から由来するもの、もたらされるものによって、現場で仕事をしていることが多いように思う。また、「自分を信じる」ではなく、対象者という、「他者を信じる」ということは強調される。しかし、「自分を信じる」なんてことはあまり強調されない。かといって、これは援助職云々ではなく、仕事をする人として、もっといなならば、人間としての普遍的課題だろう。仕事でうまくいかない時、援助職は「制度がダメだからできない」、「労働条件がこれだからできない」、「上司があああだからできない。」というのはよく聞く。でも、自分を信じることができないという部分もどっかにあるんじゃないかなと思う。自分自身に一步踏み込む、これまでにない負荷をかけることへの不安だ。

■編集作業が2つ重なった。編集作業では、援助職者である自分がなじんだ、いつもよく使う思考回路とは少し違う、自分の感性、感覚を信じて、どんどん決断していかなくてはならない。デザイン、サイズ、レイアウト…。そんな経験から、援助職者だからこそ、得られるものも多いように思う。援助職と芸術的な活動は、相性がいいじゃないかとあらためて思った。

■朝5時半に起きて、30分かけてストレッチ、6時に家を出発。途中6時半に仲間と合流して野球場へ。7時から、2時間練習。内野ノック、アメリカンノック、ダブルプレーの練習、トスバッティング、フリーバッティング…。9時に終了して、仕事へ。そして、夜は食事会。京都国際社会福祉センターの社会福祉士養成課程同窓会、職場、大学院つながり。職種は、介護福祉士、社会福祉協議会、知的障害者施設、高齢者施設、カウンセラー、作業療法士とバラバラ。年代も20代から50代まで。対人援助学マガジン執筆陣のような多世代・多職種。

■少し前に（ずいぶん前かも）職場の後輩坂口匠君に教えてもらったのが「ネット充」（ネット上での充実した生活）、「リアル充」（リアル世界での充実した生活）というとらえ方。ネット上に公開される「対人援助学マガジン」。リアルでは先日の対人援助学会第2回大会の対人援助学マガジンワークショップ。ツイッターでも、執筆者間のフォローがどんどんできて…、こちらはネット充？…こうしていると、そんな二分論もできないぐらいに、ネット上でも、リアル世界でもつながっていく。そのつながりのありがたさは、結局すべてクライエント、社会に還元されるべきもの。その役割を私たちは負うているのだと考えたりしながら、でも、一番は「たのしいしね～」と思っての編集、編集、編集 *d a y s*（昭和 J-POP 風）…でした。

## 対人援助学マガジン

### No. 4

第一巻第四号

2011年3月15日発行

<http://humanservices.jp/>

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町 56-1  
立命館大学大学院応用人間科学研究科内  
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通 2-4-1  
リファレンス内  
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

## 表紙の言葉

十年近く前になるが、それまで二十年間、大阪梅田の現代画廊で、毎年春に「ぼむ」マンガ展を開催していた。「ぼむ」というのは私が学生時代最後の年に、産経新聞で一コマ漫画の連載をすることになり、その時一緒になった若手漫画家で結成した大阪のマンガ家グループである。それ以来四十年、今も月に一度のペースで顔を合わせる初老のオヤジ達だ。比較的早い時期に次々と同好の士が集って現在に至る、チョット他にない漫画集団である。

篠原ユキオ（今、朝日新聞の夕刊に「肉球入魂」というペット漫画を長期連載中。京都精華大学漫画学科教員）は最初からのメンバー。桂南光さんは漫画家になりたかったのに、桂枝雀さんが大好きで一番弟子になったと語るメンバー。カワキタカズヒロくんは、一番画業専念で、絵本やユーモアイラストの世界で活躍している。柳たかお君（宝塚造形芸術大学教員）と、篠原、カワキタ（二度）は、みんな読売国際漫画大賞グランプリ受賞者だ。この賞は年一回、世界規模で一万点以上の応募があった大きなコンクールだったが、数年前になくなつた。私は残念ながら優秀賞どまりだった。他に、国府、野々口、外村、坂口（経理担当）の計九人。こんなメンバーで、長々と展覧会や漫画誌「ぼむ」刊行、ユーモアエクスプレスKKの発足などを続けていた。

そんなある年の展覧会で、老人を扱った漫画をまとめて描いたのも、もう十年以上前。その一枚が高齢者御一行様の絶叫コースター体験ツアー。B2サイズの原画は、会場お買い上げの古川秀明君が今も持っているはずだ。

2011/03/15 団士郎



「琵琶湖一周サイクリング、いやあ実に面白いですね。複数人で織りなす援助は、実にいいですね…」。

「こんな反応を（上）を読んだ心理臨床従事の方から戴いた。様々な援助メニューがあるはずなのに、状況が厳しくなっているという思い」みからか、実践はどんどん硬直化している気がする。面白そうなことは何でもすればいいんだし、上手くいくかどうかなんて、誰にも保証できるものではない。

もつと自由度の高い取り組みが日本のあちこちで、展開されていいのだと思って、この別冊を連載した。

憂一は気持ちがコントロール出来ない子でしてね。  
言い出すとしつこいんです。  
それで嫌がられまして、  
友達が欲しいものだから  
お菓子を配つたりして。  
結局、学校には居場所がなくて…

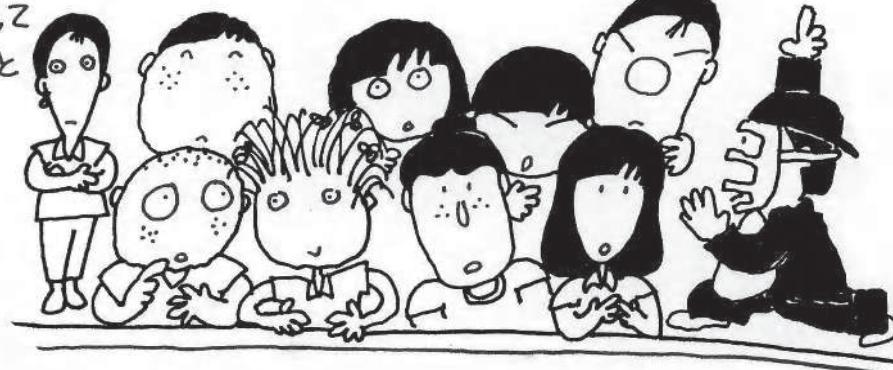




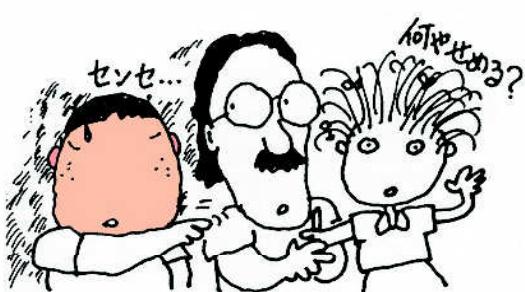
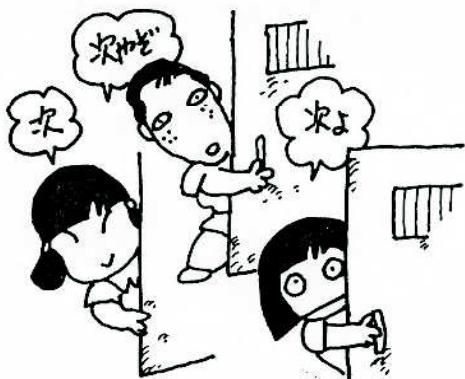
何かの間違いじゃないだろうが…  
今回の参加者に  
万引きや窃盗  
が主訴の子  
は居なかった  
はずだけど  
…



私としてはあいまいな金銭的結着  
では責任を果たすことになります。



一人ずつの面談が始まった。  
スタッフを半分に分けて半数は  
待っている子ども達と一緒にいた。  
我々にとっても、初めての経験  
だった。サイクリングはこの後、  
どうなるのだろうと思つた。



憂一は面談で事件のこと話をした。

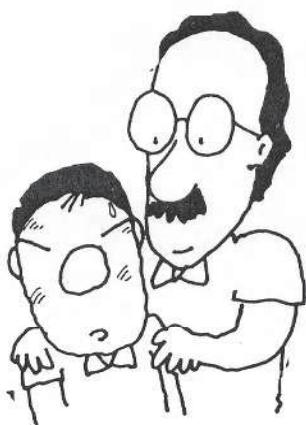
せめるも気を遣いながらも

本当のこと伝えようとした。

憂一が謝りたいというので、

他の子達の気づかないときに

YHのペアレントの所に行かせた。



戻つてくるのを待つ間に私は  
憂一が我々のメンバーの一員であることを強く  
感じているのに気づいた。



いろいろな」とがありながら  
琵琶湖一周サイクリングは  
つづいていく。

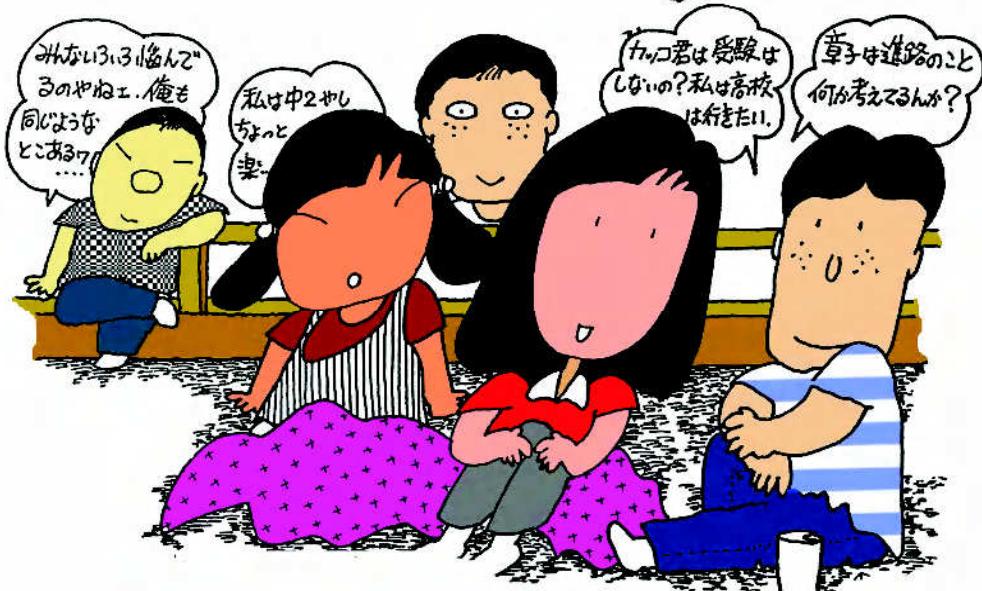


夕食が済んで、入浴も済むと  
職員の方は、一日の疲れから  
ウトウト……

YHには男女別にベッドルームがあつて、消灯時刻など、そこそこ規則は厳しい。しかし私達一行のことよく理解してくれている

ユーベアレントは

ずっと大目に見てくれている。



その結果、  
開放された部屋で、  
子ども達は夜遅くまで  
話し込むことになった。



サイクリング中のルールは出来るだけ、

ナシにしていた。睡眠も消灯も、

眠りたい人のじやまをしない」と、

それだけだった。その結果彼らは、  
参加者から友達になりつつあった。

この夜あたりから、早朝まで

話し込む者が出てきた。

おっさんの我々がこんな事に  
付き合っていては体がもたない。



船を漕ぐとは言うが、  
自転車をこぎながら  
居眠りする子が  
いるのには驚いた。

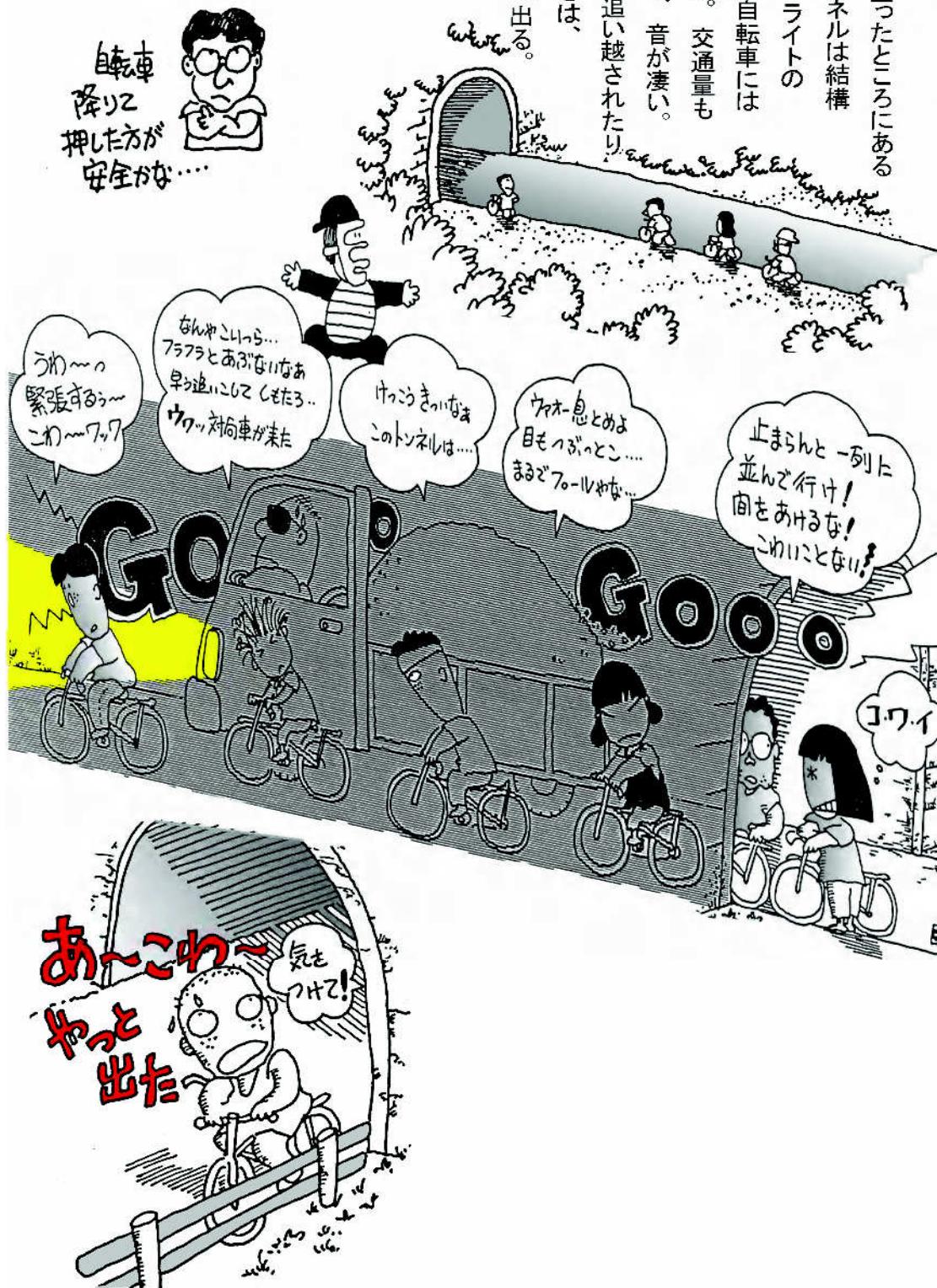
もうすぐ岩熊トンネルや  
一番の難所やから緊張して  
進めよー



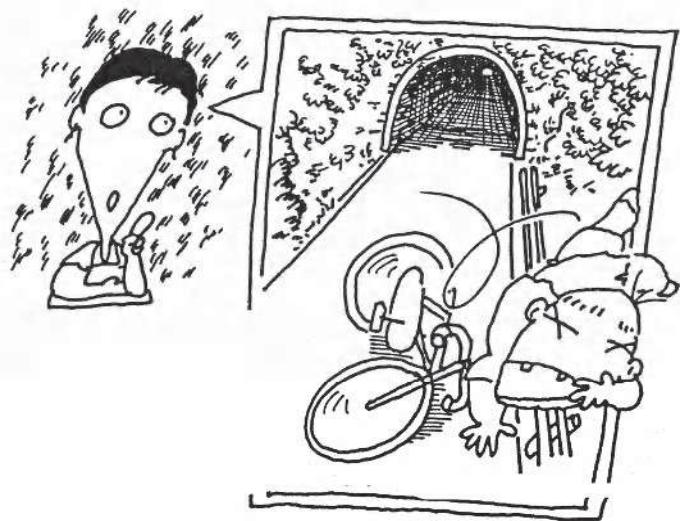
急坂を登つたところにある

岩熊トンネルは結構  
長いし、ライトの  
付かない自転車には

中は暗い。交通量も  
多いので、音が凄い。  
ダンプに追い越されたり  
するときは、  
冷や汗が出る。



今回は大丈夫だったけど、以前、  
トンネルを抜けたうれしさで  
下り坂を一気に猛スピードで  
降りて転倒して、病院に連れて  
走了」ともあったのよ。  
あの時は本当にビックリした。



その子なあ、頭に怪我してたから  
帰そうと思つたんやけど、  
「完走したいしたい」って言うてね、  
次の日一日キャンプ場で休んで、  
また、走ったんやで。



朝から快調に  
走つて来ていた。





水着になる」とで、  
こんなにイロイロあるとは、  
予想していなかつた。  
しかし他人の視線や評価が  
人一倍気になる彼らを  
思うと、分かる気がした。  
だから頑張りどころだとも  
思つていた。  
そしてゆったりしていると  
眠くなつてくるのだった。



夕食は焼き肉。パーティー。  
食後の片付けも章子は積極的。  
女子のリーダー的存在になつてきている。



夜は定番のキャンプファイアーだが、  
これくらいの人数では盛り上がらない。



それより、大うけするのがカラオケ。  
慣れた子もいるが、初めての子もいる。  
嫌がったり、独り占めしたりしながらも、  
みんな乗りにのる。  
他には誰もいなくなつた浜辺で、  
大いに盛り上がる。



でも一方、自分たちの今後の  
ことを真面目に話し始めている  
グループもある。  
不登校について各々が語り  
出しているのだ。  
その数人が、とんでもない  
ことを思いついた。



寝ぼけ頭がだんだん戻ってきて、突然、目が覚めた。



泳ぎの得意なスタッフを起して相談した。





結局、覚悟を  
決めて、ボートを  
出すことにした。  
「くれぐれも注意  
するように」  
『先生らも、クビが  
かかるてるんやから』  
と、各々の自覚を  
お願いしている  
感じだった。

沖に向かって漕ぎ出した。月夜の湖は  
想像を遙かに超えて、神秘的だった。  
波の音しかない全くの静寂。



大声で話す  
者もなく。  
みんな月の  
光の中で、  
自分の心と  
話し合って  
いるみたい  
だった。



一時間程で岸に戻った。着いてからもみんな、あまり口を開かなかった。午前二時前になっていた。それぞれテントに戻って、静に眠りについた。



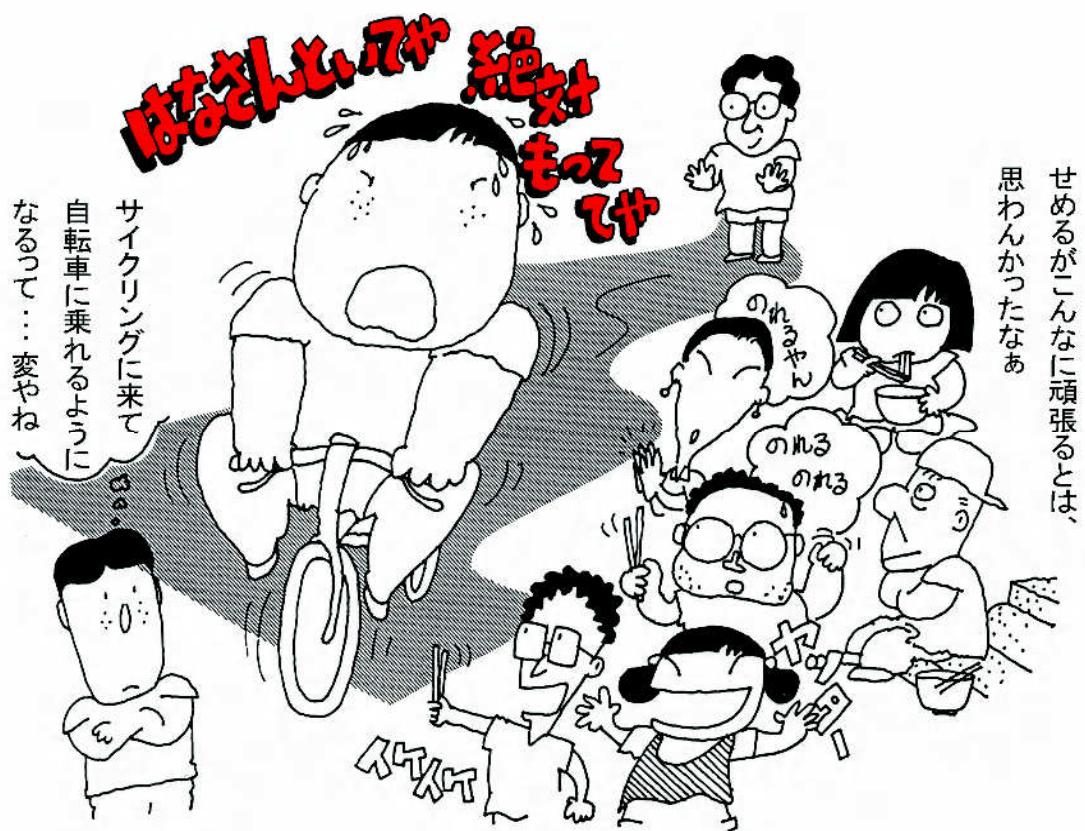
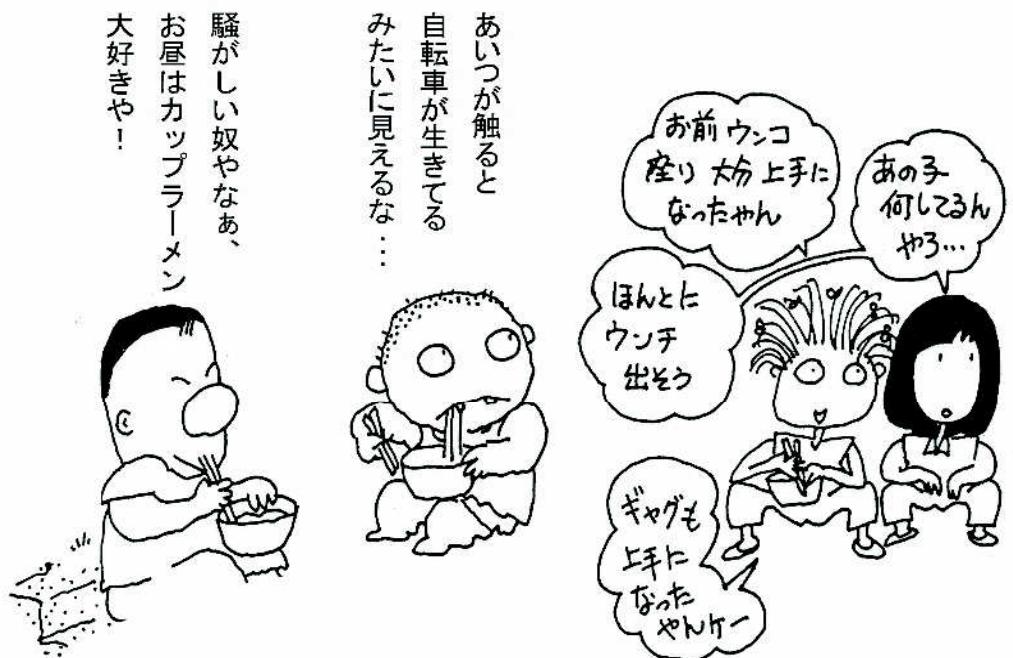
日に日に仲良くなつていつたり  
肌が小麦色になつていつたり  
みんながお喋りになつていつたりした。



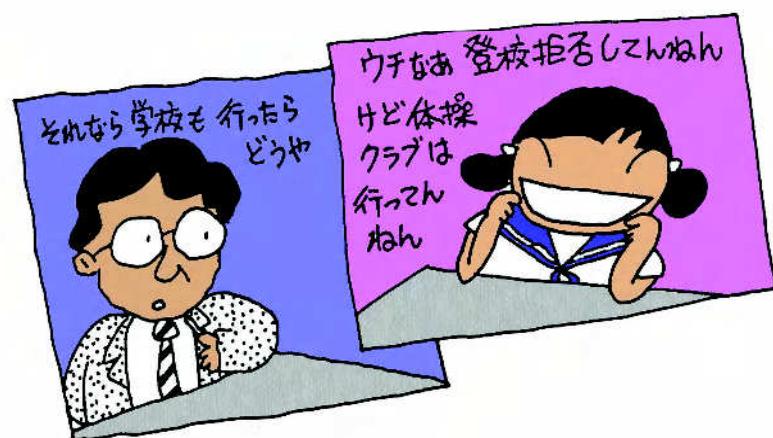
最初は通りすがりに、  
チョット自転車を  
触つたりしていた。  
そして日に日に上手になつていつたのが、  
せめる君の自転車だった



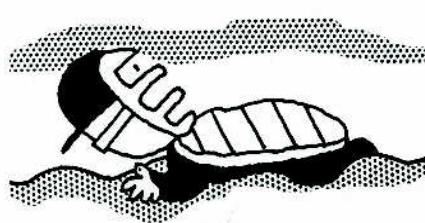
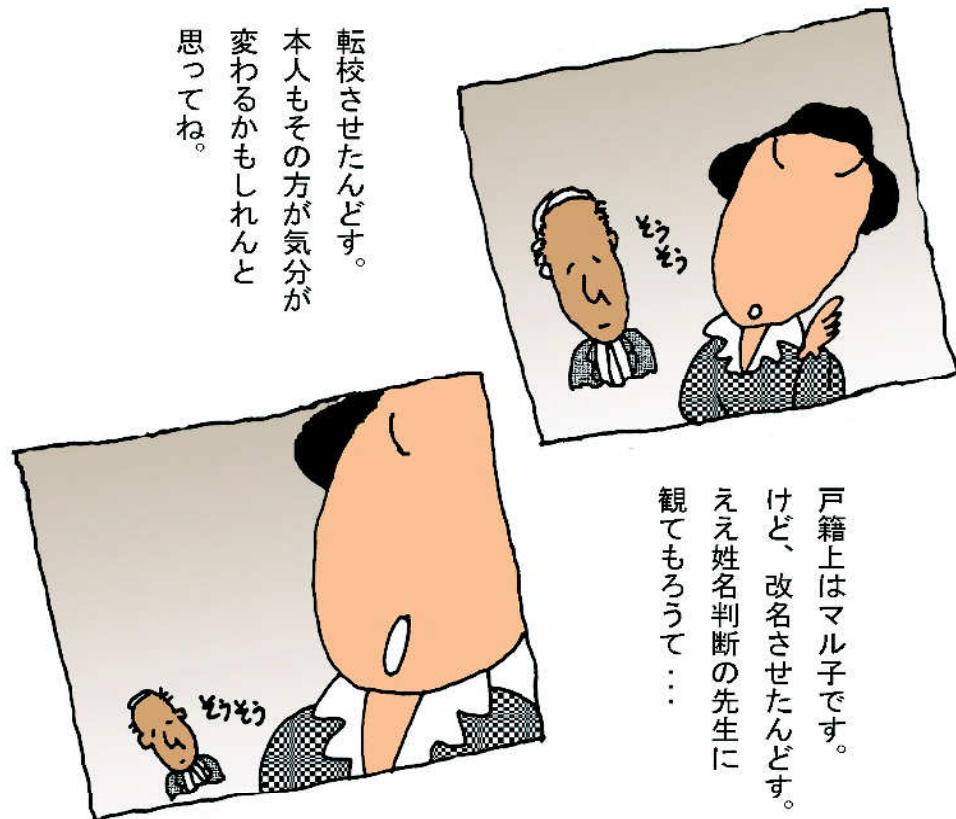
コラッ、  
進め進め  
座椅子と  
ちかうんや  
がら!!



車の助手席に乗って、樂をしているデブのこと、最初は関係ない感じやつた。  
でも、昼休みになると、飯食ってる僕らの前で  
フラフラ練習しよる。  
サークスの熊みたいで、笑ってたけど、  
応援してたんやで。せめるが一人で  
乗りよつた時、みんな凄く  
嬉しかつたと思うわ。







得手、不得手も人それぞれ。

苦手のない人はいないが、

彼女の苦手は料理。

本当に何もしたことがない。

包丁を持った経験もない。

ただただ、食べるだけ。



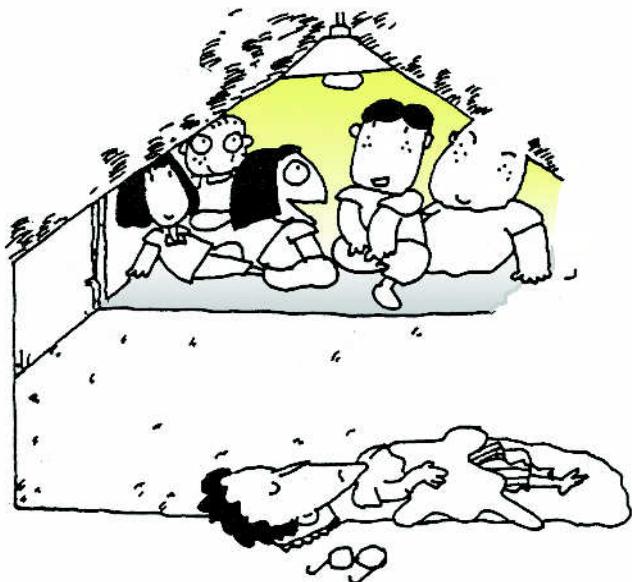
意地になっちゃって！

誰でも苦手はあるんやから、  
それなりに手伝つてたら

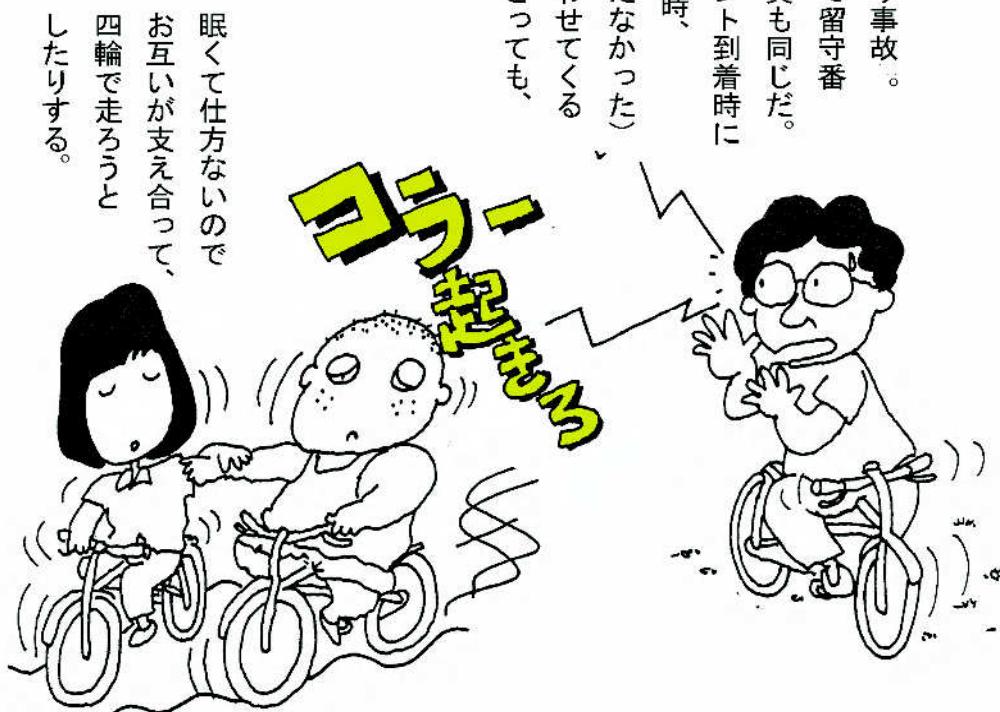
ええのよ。

そんなこと言つてたら  
他の人と上手いこと  
やってけへんよ！

夜は新しくできた仲間と、出来るだけ  
自由に遊びさせてやりたいと思う。  
でもその結果、寝不足集団が  
出来上がる。サイクリング後半は  
居眠り運転が続出だ。



一番の心配はやはり事故。  
それは児童相談所で留守番  
してくれている職員も同じだ。  
毎日出発時とポイント到着時に  
電話を入れる。(当時、  
ケータイ電話はまだなかつた)  
中には毎日問い合わせてくる  
親もあった。親にとつても、  
結構な試練なのだ。



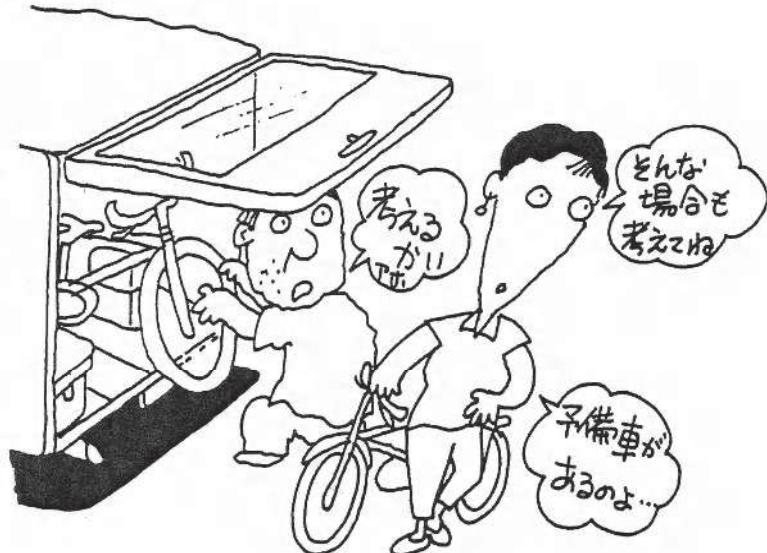
事故はスタッフにだって起っこ。  
そもそも多分ヒゲがやる  
だらうと思ついたら、  
やっぱりそうだった。  
事故多発型の人はいる。  
サイクリング中の事故は  
危険な場所より、比較的安全な  
ところで起きる。油断  
するのだろう。



走行中に、  
自転車が半分に  
折れた。  
考えられない  
ことだが、  
実際に  
あつた話だ。



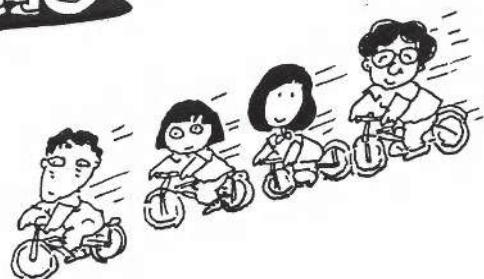
春、夏あわせると、10回以上実施したサイクリング。想定内のハプニングや小さなトラブルはある。それに加えて、チヨツト想像しがたい出来事も起きる。これが下手をすると事故になる。



最終日の朝は早い。  
ゴール地点に  
正午までに着きたい。  
出迎えのスタッフが、  
お弁当を用意して  
待ってくれて  
いるからだ。



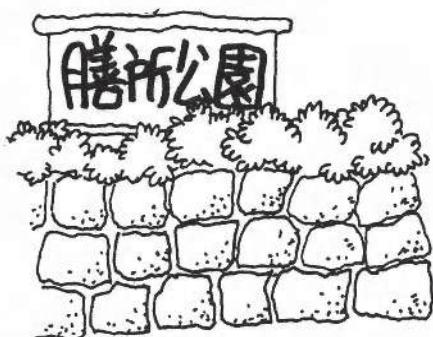
六時前に起きて、  
片付けて六時半に  
出発。  
朝食は少し  
走つてからだ。





いよいよゴールだと思うと、ピッチが上がる。  
昨日までなら、一日の行程だった距離を  
グングンとばして半日で駆け抜ける。  
大津市内に近づくと、交通量も次第に多くなる。  
しかし身のこなしはもう立派にサイクリストだ。

みんなの提案で  
せめる君は  
ゴール直前の  
一〇〇メートルを  
一緒に自転車で  
走った。



とうとう琵琶湖を一周した全員が揃って、出発点の膳所公園に「ゴールイン」である。

200km余りを走りきつた達成感はなものにも代え難い。

出発時のことを思うと、みんな随分成長したような気がした。



新学期が始まった。

それぞれが自分の家で、

九月一日を迎えた。

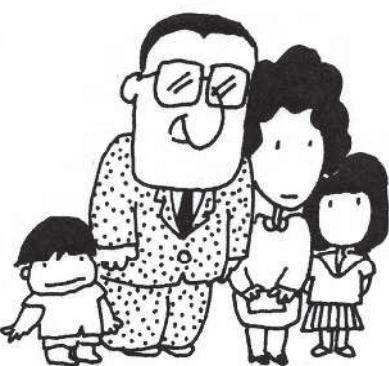
登校し始めた子もいたし、

そのままだった子もいた。

三年生の子達にとっては

いずれにしても大きな

分かれ道だった。



ランボーは家でも学校でも、  
誰彼かまわず、サイクリングの  
楽しさや、彼女のことを喋りまくった。  
みんなゲラゲラ笑いながら聞いてくれた。  
時々ツツパリツ子に電話した。  
もう暴力をふるうことはなかつた。

章子の家族は、その後も家族面接に  
来続けた。本人は同行したり、  
しなかつたりだった。

三学期になつて姉の態度に対する  
妹の不満が火を噴いた。

平和だった一家に波風が立ち、  
章子は混乱して面接中に号泣した。  
その後しばらくして、高校進学を  
強く希望し、目指す学校に入学した。





カツコ君は時々、  
学校に行きだした。  
母親にはチヨット  
距離を置き始めていた。  
『帰宅してから、  
様子がおかしいんです!』  
と母親から相談所に  
電話がかかってきたりした。



憂一は先生に勧められて  
陸上部で長距離を走り始めた。  
予想外に記録が伸びて、  
地区大会で入賞もした。  
その頃から、父親と二人で  
釣りに出かけたりする  
ようになつた。  
母親だけがその後も、  
半年余り、近況報告の面接に  
通い続けた。



せめる君は帰宅早々に自転車を買ってもらい  
街中を走り回った。その後、本人も含めて  
みんなで今後のことを相談した。  
その結果、残り半年の中学生生活を施設で  
心身を鍛えることにした。  
卒業後、ぐっとスリムになつた彼は、父親の  
仕事を手伝つて頑張つていると聞いた。



スポーツウーマンの  
彼女は、相変わらず、  
学校には行かず、  
元気にスポーツクラブに  
通いつづけた。



二代目は結局、学校には  
行かないまま、卒業を迎えた。  
そして父親と同じ  
焼き物の仕事を  
することになった。



彼女は新学期から  
登校し始めた。  
不安になると章子と  
電話で話した。  
学校に行けていない章子が  
彼女を励ました。  
そしてほとんど出席して、  
三年生になった。



ソッパリちゃんは相変わらず楽しんでいた。  
一度は遠方のランボー宅まで出かけて、  
お母さんに大歓迎してもらつたりした。  
適当にさぼりながら、中学生生活を  
楽しんでいた。

『外泊することがなくなつたのが安心です』  
と両親は語つた。

これが九人のそれからです。  
サイクリングが不登校に  
効果的なのかと聞かれても、  
何とも言えません。

ただ、人の心には元気の素が  
必要だと思います。

九人の一週間のドラマは  
彼らの元気の素には  
なれたのではないでしょうか？



「過去は一つの異国である」、こんな言葉を  
目にして、心が動きました。  
久しぶりにこのあの頃の自分と仲間達、  
そして向き合つてくれていた  
子ども達のことを思い出しました。  
琵琶湖一周サイクリングは、  
誰かがしたことではなく、  
みんなで行つた心理臨床的営みだと  
言えるように思います。

